

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第11集

大 谷 川 II

(遺構編)

昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

本文編

1987

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第11集

大 谷 川 II

(遺構編)

昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

本文編

1987

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

神明原・元宮川遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての低湿地における集落遺跡として知られ、周辺には登呂遺跡・有東遺跡・汐入遺跡などの著名な集落遺跡のほか、宮川古墳群・伊庄谷横穴群、上の山遺跡などの古墳群もみられ、この地の中心的な遺跡の一つと考えられていた。昭和55・56年度には、静岡市教育委員会による大谷川河川改修事業関連の調査が実施されて遺跡の性格の一端が明らかにされたのであった。

この調査の成果をうけて、昭和58年度～60年度の3ヶ年をかけて現地調査を実施し、昭和61年度より資料整理作業を継続している。その調査の成果はめざましく古代の大谷川の流路から人形・馬形木製品・斎串・卜骨やおびただしい数の上器などの祭祀遺物が出土し、神明原・元宮川遺跡を流れる大谷川が古代の大規模な「水辺の祭」の場であったことが解明された。この事実は、今までの静岡平野における歴史認識に大きな変更を迫るものであり、今後静岡平野の歴史を構成する上で貴重な手がかりとなるであろう。そしてまた、日本の古代祭祀形態を考える上に重要な資料をもたらすものであろう。

本報告書は、大谷川一神明原・元宮川遺跡の調査報告の「II」であり、昭和58年度に刊行した「大谷川I」に続く昭和59・60年度調査の報告である。主として、遺構のあり方に焦点をあて遺構ならびにそれに伴う遺物をとりあげた。現地調査・資料整理の期間を通じて様々な問題が提起されてきたが、その解明のため努力をつづけてきた次第である。しかし、本報告においてはまだまだ未解決の問題が多い。さらに努力していきたい。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県静岡土木事務所の方々に深い感謝の言葉をささげるものである。あわせて静岡市教育委員会の配慮に対して心から謝意を表すとともに、静岡県教育委員会の指導・助言に感謝するものである。終りに、本調査に従事し、その整理や報告書の執筆に力をあわせた所員の労苦に感謝したい。

昭和62年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は静岡市大谷地先に所在する神明原・元宮川遺跡の発掘調査報告書の第二分冊である。昭和59年・60年度に発掘調査された遺構を報告するが、遺物については遺構から出土したうちの一部のみにとどめ、次年度以降にまとめる予定である。
2. 調査は「巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査業務」として静岡県静岡土木事務所の委託を受けて静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお昭和58年度は財團法人駿府博物館付属静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、昭和59年5月1日から財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が承継したものである。
3. 昭和59年度調査は昭和59年4月1日から昭和60年3月31日まで行い、昭和60年度は昭和60年4月8日から昭和61年3月31日まで行った。
4. 発掘調査体制は次のとおりである。

昭和59年度	所長斎藤忠 常務理事（調査研究部長）池谷和三 調査研究1課長植松章八 上席調査研究員栗野克巳 調査研究員成島仁 小嶋日出一
昭和60年度	所長斎藤忠 常務理事八代龍一 調査研究部長岡田恭順 調査研究1課長植松章八 主席調査研究員栗野克巳 調査研究員森下春美 足立順司 矢田勝 鈴木基之 寺田甲子郎 成島仁 小嶋日出一
昭和61年度	所長斎藤忠 常務理事八代龍一 調査研究部長岡田恭順 調査研究1課長植松章八 調査研究員成島仁 矢田勝 寺田甲子郎
5. 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章・第Ⅲ章第1節西大谷3区・第2節水上4区・水上8～11区……寺田甲子郎
第Ⅱ章・第Ⅲ章第2節水上1～3区・水上7区・第3節宮川5・6区……矢田勝
第Ⅲ章第1節大谷1・2区・西大谷4～8区・第2節水上5・6区・第3節宮川3・4区・第Ⅳ章……成島仁
6. 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

凡 例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1. 調査区の位置は、大谷川の河口起点よりの距離を用いた。
2. 発掘区の中の一部分を限定する場合、南北・東西のグリッド座標により、それぞれ85列～87列、F列～H列のように用いた。
3. 遺物実測図には、報告書での見出番号、遺物番号を併記し、必要により造構番号を加えた。
4. 造構一覧表に示した数値の単位はmであり、小数点以下第3位を四捨五入した。
5. 捜査中等高線に付した数値の単位はmである。
6. 造構・遺物の標記は次のとおりである。

造構遺物の標記

造 構 (S)		遺 物	
A 横	G 小鍛冶造構	W 木製品	上器は番号のみで符号なし
B 穴住居跡	H 掘立柱建物	P 土製品	
C 祭祀造構	P 小穴・土坑	S 石製品	
D 溝	L 護岸造構	M 金属器	
E 井 戸	R 旧河道	B 玉 類	
F 上 墓	X その他	E その他	

7. 造構番号は各地区（大谷地区・西大谷地区・水上地区・宮川地区）毎に設定したため同一番号が重複している場合もある。遺物番号は各調査区毎に設定した。

目 次

序	
第 I 章 調査の経過	1
第 1 節 調査の計画	1
第 2 節 調査の方法	1
第 3 節 調査の経過	2
第 4 節 基本上層	6
第 II 章 環 境	10
第 1 節 大谷川流域と条里地割	10
第 2 節 大谷川水系と神明原・元宮川遺跡	10
第 III 章 遺跡の概要	21
第 1 節 大谷・西大谷地区	21
大谷 2 区	21
人谷 1 区・西大谷 4 区	25
西大谷 5 区	29
西大谷 6 区・7 区	29
西大谷 8 区	36
西大谷 3 区	43
第 2 節 水上地区	47
水上 1 区	47
水上 2 区	63
水上 3 区	66
水上 5・6 区	74
水上 7 区・水上 10 b 区	77
水上 4 区・水上 10 a 区低湿地	92
水上 10 a 区	104
水上 10 c 区	110
水上 11 区	112
水上 8 区	117
水上 9 区	125
第 3 節 宮川地区	127
宮川 3 区	127
宮川 4 区	151
宮川 5 区	164
宮川 6 区	179
第 IV 章 ま と め	203
参考文献	208

挿 図 目 次

第 1 図	調査地点位置図	5
第 2 図	大谷地区上層模式図	6
第 3 図	西大谷地区上層模式図	6
第 4 図	水上地区上層模式図	7
第 5 図	宮川地区土層模式図	7
第 6 図	旧河道模式図	9
第 7 図	大谷川周辺条里図（遺跡分布図）	13
第 8 図	大谷川周辺小字集成図（昭和10年代）	15
第 9 図	大谷川周辺空中写真（昭和21年撮影）	17
第 10 図	遺跡全体図	19
第 11 図	大谷・西大谷地区グリッド配置図	22
第 12 図	大谷 2 区等高線図	23
第 13 図	大谷 2 区土層断面図	24
第 14 図	大谷 1 区 S X 01 実測図	26
第 15 図	大谷 1 区・西大谷 4・5・6・7 区全体図	27
第 16 図	西大谷 6・7 区上層断面図	30
第 17 図	西大谷 7 区（北区）占墳時代前期面等高線図	31
第 18 図	西大谷 7 区（北区）8・9 層遺物分布模式図	32
第 19 図	西大谷 7 区（北区）7 層 J 33 グリッド遺物図	33
第 20 図	西大谷 7 区（北区）8・9 層出土土器実測図	34
第 21 図	西大谷 7 区（北区）8・9 層出土玉類実測図	35
第 22 図	西大谷 8 区・水上 5・6 区全体図	37
第 23 図	西大谷 8 区・水上 6 区上層断面図	38
第 24 図	西大谷 8 区 Z 48・49 グリッド遺構実測図	39
第 25 図	西大谷 8 区 S H 378 実測図	41
第 26 図	西大谷 8 区 S P 354 出土土器実測図	42
第 27 図	西大谷 8 区 S P 354 尖端図	43
第 28 図	水上地区グリッド配置図	48
第 29 図	水上 1・2・3 区・西大谷 3 区全体図	49
第 30 図	水上 1 区土層図	51
第 31 図	水上 1 区 S E 261 実測図	52
第 32 図	水上 1 区 S E 261 中層出土遺物実測図	54
第 33 図	水上 1 区 S X 323 遺物分布模式図	55
第 34 図	水上 1 区 S X 323 出土土器実測図	56
第 35 図	水上 1 区 紫茶色粘土直上出土土器実測図	57
第 36 図	水上 1 区 S E 192 実測図	59
第 37 図	水上 3 区土層図・実測図	68
第 38 図	「構井ノ坪」関連地籍図（大谷地区部分、明治 9 年作成）	81

第 39 図	水上 6 区 S D 228 実測図	75
第 40 図	水上 7 区・水上 10 b 区等高線図	79
第 41 図	水上 7 区土層図	81
第 42 図	水上 7 区・水上 10 b 区流路変遷図	82
第 43 図	水上 7 区・水上 10 b 区土層断面図	82
第 44 図	水上 7 区流路別出土上器実測図	83
第 45 図	水上 7 区 S R 807 実測図	84
第 46 図	水上 7 区 S R 807 出土土器実測図	85
第 47 図	水上 7 区 S X 806 実測図	85
第 48 図	水上 7 区 S X 805 実測図	85
第 49 図	水上 7 区 S R 808 出土上器実測図	86
第 50 図	水上 7 区 S X 803 実測図	87
第 51 図	水上 7 区 S X 804 実測図	87
第 52 図	水上 7 区 S X 801 実測図	87
第 53 図	水上 7 区 S X 803・S X 804 出土土器実測図	88
第 54 図	水上 7 区 S X 801 出土遺物実測図	89
第 55 図	水上 10 a 区低湿地土層断面図	94
第 56 図	水上 4 区・水上 10 a 区全体図	96
第 57 図	水上 10 a 区 S X 624 出土状況図	97
第 58 図	水上 10 a 区 S X 624 遺物分布模式図	99
第 59 図	水上 10 a 区 S X 624 a 群出土上器実測図	100
第 60 図	水上 4 区・水上 10 a 区遺構出土上器実測図	101
第 61 図	水上 10 a 区 S X 624 出土遺物実測図	102
第 62 図	水上 10 a 区 S X 624 d 群出土土器実測図	103
第 63 図	水上 10 c 区 S P 727 実測図	110
第 64 図	水上 10 c 区・水上 11 区全体図	111
第 65 図	水上 11 区 S H 576 周辺平安時代遺構図	115
第 66 図	水上 10 a 区・水上 10 c 区・水上 11 区遺構出土土器実測図	116
第 67 図	水上 8 区・水上 9 区全体図	119
第 68 図	水上 8 区低湿地土層断面図	119
第 69 図	水上 8 区古墳時代遺構平面図	121
第 70 図	水上 8 区 S X 775 出土上器実測図	122
第 71 図	水上 8 区古墳時代遺構実測図	123
第 72 図	水上 9 区 S H 570 実測図	125
第 73 図	宮川地区グリッド配置図	130
第 74 図	宮川 3・4 区全体図	131
第 75 図	宮川 3 区 S D 181 実測図	133
第 76 図	宮川 3 区 S D 145 実測図	134
第 77 図	宮川 3 区 S D 182 実測図	135
第 78 図	S X 477～S X 484 位置図	136
第 79 図	宮川 3 区 S X 484 遺物分布図	137

第 80 図	宮川 3 区 S X 483 遺物分布図	138
第 81 図	宮川 3 区 S X 482 遺物分布図	139
第 82 図	宮川 3 区 S X 480 遺物分布図	139
第 83 図	宮川 3 区 S X 477 遺物分布図	140
第 84 図	宮川 3 区 S X 478 遺物分布図	141
第 85 図	宮川 3 区 S X 481 遺物分布図	142
第 86 図	宮川 3 区 S X 479 遺物分布図	143
第 87 図	宮川 3 区 S R 485 出土上器実測図	144
第 88 図	宮川 3 区 S R 486 遺物分布模式図・上層断面図	145
第 89 図	宮川 3 区 S R 486 出土墨書き器実測図	146
第 90 図	宮川 4 区 S R 58・55・54・53出土土器実測図	155
第 91 図	宮川 4 区旧河道内遺物分布模式図	156
第 92 図	宮川 4 区旧河道内遺物分布模式図	157
第 93 図	宮川 4 区 S R 55出土鍼尖実測図	158
第 94 図	宮川 4 区 S R 56 遺物分布模式図	159
第 95 図	宮川 4 区 S R 56 出土須恵器実測図	160
第 96 図	宮川 4 区 S R 56 出土木製品実測図	161
第 97 図	宮川 5・6 区全体図	165
第 98 図	宮川 5 区掘立柱建物尖測図	168
第 99 図	宮川地区上層図	169
第 100 図	宮川 5 区旧河道内主要遺物分布図	172
第 101 図	宮川 5 区 S R 201・202 出土土器尖測図	173
第 102 図	宮川 5 区 S R 201 出土墨書き器実測図	174
第 103 図	宮川 5 区 S X 336 実測図	174
第 104 図	宮川 5 区 S X 336 出土上器実測図	175
第 105 図	宮川 6 区旧河道内主要遺物分布模式図（その 1）	181
第 106 図	宮川 6 区旧河道内主要遺物分布模式図（その 2）	183
第 107 図	宮川 6 区 S R 317・S R 316 出土土器実測図	186
第 108 図	宮川 6 区 S R 320・S R 314 出土上器実測図	187
第 109 図	宮川 6 区旧河道内出土墨書き土器実測図	188
第 110 図	宮川 6 区 S R 312 出土土器実測図	189
第 111 図	宮川 6 区 S R 313 下層木製品出土状況実測図	191
第 112 図	宮川 6 区 S R 313 断面図	192
第 113 図	宮川 6 区 S R 313 下層出土土器尖測図	193
第 114 図	宮川 6 区 S X 335 実測図	194
第 115 図	宮川 6 区 S X 335 出土主要遺物実測図	195
第 116 図	西大谷地区・水上 5 区井戸状遺構実測図	197
第 117 図	水上地区井戸状遺構実測図 1	198
第 118 図	水上地区井戸状遺構実測図 2	199
第 119 図	水上地区井戸状遺構実測図 3	200
第 120 図	宮川 3 区井戸状遺構実測図	201

挿 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表	12
第 2 表	大谷 1 区 S X 01 出土銭貨一覧	25
第 3 表	西大谷 7 区小穴一覧表	35
第 4 表	西大谷 5・7 区溝状遺構一覧表	35
第 5 表	西大谷 8 区溝状遺構一覧表	41
第 6 表	西大谷 8 区柱穴・小穴（土坑）一覧表	44
第 7 表	西大谷 3 区小穴・土坑一覧表	45
第 8 表	西大谷 3 区溝状遺構一覧表	46
第 9 表	水上 1 区 S X 323 主要遺物一覧表	55
第 10 表	水上 1 区小穴一覧表	60
第 11 表	水上 1 区溝状遺構一覧表	62
第 12 表	水上 2 区小穴一覧表	63
第 13 表	水上 2 区溝状遺構一覧表	66
第 14 表	水上 3 区小穴一覧表	69
第 15 表	水上 3 区溝状遺構一覧表	69
第 16 表	「横井ノ坪」圓錐小字一覧表	73
第 17 表	水上 5・6 区小穴一覧表	76
第 18 表	水上 7 区小穴・溝状遺構一覧表	91
第 19 表	水上 4 区溝状遺構一覧表	94
第 20 表	水上 4 区小穴・土坑一覧表	95
第 21 表	水上 10 a 区 S X 624 主要遺物一覧表	104
第 22 表	水上 10 a 区小穴・土坑一覧表	105
第 23 表	水上 10 c 区小穴・土坑一覧表	107
第 24 表	水上 10 a 区溝状遺構一覧表	108
第 25 表	水上 10 c 区溝状遺構一覧表	109
第 26 表	水上 11 区小穴・土坑一覧表	113
第 27 表	水上 11 区溝状遺構一覧表	114
第 28 表	水上 8・9 区溝状遺構一覧表	118
第 29 表	水上 8・9 区小穴・土坑一覧表	126
第 30 表	宮川 3 区主要遺物一覧表	147
第 31 表	宮川 3 区小穴一覧表	147
第 32 表	宮川 3・4 区溝状遺構一覧表	154
第 33 表	宮川 4 区主要遺物一覧表	162
第 34 表	宮川 4 区小穴一覧表	163
第 35 表	宮川 5 区小穴・柱穴一覧表	176
第 36 表	宮川 5 区溝状遺構一覧表	179
第 37 表	宮川 6 区内河道部主要遺物一覧表	180
第 38 表	宮川 6 区小穴一覧表	196
第 39 表	宮川 6 区溝状遺構一覧表	196
第 40 表	祭祀遺構分類表	208

図版目次

- 図版 1 遺跡全景——北より
図版 2 水上3・7・8・9・10・11区、宮川3・4区全景——北より
図版 3 水上10区全景——東より
図版 4 水上8・9・11区全景——東より
図版 5 宮川4区(左岸)全景——北より
図版 6 宮川3区全景——西より
図版 7 宮川6区全景——南より
図版 8 1 大谷2区全景——北より
2 大谷2区土層帶
3 大谷2区丸木舟出土状況
4 大谷2区櫂出土状況
図版 9 1 大谷1区・西大谷4区全景(旧河道)——北より
2 西大谷4区土層帶(S21グリッド旧河道内覆土)
3 西大谷4区土層帶(R22グリッド旧河道内覆土)
図版 10 1 西大谷4区旧河道跡右岸部
2 大谷1区旧河道内中洲状部分(1)
3 大谷1区旧河道内中洲状部分(2)
図版 11 1 大谷1区S X 01
2 大谷1区S X 01 銭貨出土状況
図版 12 1 西大谷5区表土除去後全景——南より
2 西大谷5区全景——南より
図版 13 1 西大谷6・7区全景——北より
2 西大谷6区(旧河道)全景——南より
図版 14 1 西大谷7区(北区)平安末～鎌倉時代面
2 西大谷7区(北区)S E 132 井戸枠
3 西大谷7区(北区)S E 132 掘り方
4 西大谷7区(北区)古墳時代前期面
図版 15 1 西大谷7区(北区)7層遺物出土状況
2 西大谷7区(北区)8層遺物出土状況
3 西大谷7区(北区)8・9層玉類出土地点
4 西大谷7区(北区)8・9層遺物出土状況
図版 16 1 西大谷8区南半部(旧河道)全景——北より
2 西大谷8区旧河道跡右岸部
3 西大谷8区土層帶(右岸部および旧河道内覆土)
図版 17 1 西大谷8区48・49列遺構
2 西大谷8区S P 353
3 西大谷8区S P 349
4 西大谷8区北半部——北より

- 5 西大谷 8 区遺構検出状況——北より
- 図版 18 1 西大谷 8 区柱穴列——南より
2 西大谷 8 区 S P 354・S P 355
3 西大谷 8 区 S E 332
- 図版 19 1 西大谷 3 区全景——北より
2 水上 1 区近世粘土探査跡
3 水上 1 区中世水路群
4 水上 1 区全景(古墳時代～平安時代)——北より
- 図版 20 1 水上 1 区 S E 261 掘り方
2 水上 1 区 S E 261 中層壺形土器出土状況
3 水上 1 区 S E 261 中層腰掛出土状況
4 水上 1 区 S E 261 下層広縁出土状況
5 水上 1 区 S E 261 蓋状植物遺存体出土状況
- 図版 21 1 水上 1 区 S E 192 掘り方
2 水上 1 区 S E 192 上層疊群出土状況
3 水上 1 区 S E 192 中層遺物出土状況
- 図版 22 1 水上 1 区 S X 323 遺物出土状況
2 水上 1 区 S X 323 北側土器群出土状況
3 水上 1 区 S X 323 西側土器群出土状況
- 図版 23 1 水上 1 区柴茶粘土層直上遺物出土状況
2 水上 2 区全景——北より
3 水上 2 区 S P 142
4 水上 2 区 S P 142 中層壺形土器出土状況
- 図版 24 1 水上 3 区中世溝状遺構
2 水上 3 区 S D 453
3 水上 3 区 S D 455
4 水上 3 区北西拡張部分
- 図版 25 1 水上 2 区 S D 81——南より
2 水上 1 区 S D 81——北より
3 水上 1 区 S D 178
4 水上 1 区 S D 160
5 水上 1 区 S R 150
- 図版 26 1 水上 1 区 S R 150 上層帶
2 水上 1 区 S R 150 五輪塔出土状況
3 水上 1 区 S R 150 五輪塔出土状況
4 水上 1 区 S R 150 五輪塔出土状況
- 図版 27 1 水上 3 区 S D 456
2 水上 3 区 S D 456 遺物出土状況——西より
3 水上 3 区古墳時代遺構
4 水上 3 区 S E 463 掘り方
5 水上 3 区 S P 464

- 図版 28 1 水上3区S D 491
2 水上3区S E 468
- 図版 29 1 水上5・6区全景——南より
2 水上6区全景——北より
- 図版 30 1 水上6区S X 217 (近世粘土探掘跡)
2 水上5区S E 208
- 図版 31 1 水上5区S E 212
2 水上6区S E 317
- 図版 32 1 水上6区S E 221
2 水上5区S E 222
- 図版 33 1 水上6区S D 228
2 水上6区S D 228 馬骨出土状況
3 水上6区S D 228 大平鉢・疊出土状況
4 水上6区S D 228 土層帶
- 図版 34 1 水上4区全景——北より
2 水上4区S P 41
3 水上4区S D 5 (右)・S D 6 (左)
4 水上4区S E 8
5 水上4区S E 13 井戸枠
6 水上4区S E 13
- 図版 35 1 水上10区65・66・67列平安木～中世面全景——南より
2 水上10区S P 598
3 水上10区S D 595
4 水上10区S D 589・S D 600
- 図版 36 1 水上10区65・66・67列低湿地S X 624 ——南より
2 水上10区65・66・67列低湿地S X 624 ——北より
- 図版 37 1 水上10区S X 624 ——東より
2 水上10区S X 624 a群土器出土状況
3 水上10区S X 624 b群土器出土状況
4 水上10区S X 624 d群土器出土状況
- 図版 38 1 水上10区S X 624 a群
2 水上10区S X 624 有孔円板出土状況
3 水上10区S X 624 有孔円板出土状況
4 水上10区S X 624 刃形模造品出土状況
5 水上10区S X 624 勾玉形模造品出土状況
- 図版 39 1 水上10区S R 673 土層断面
2 水上10区S X 624 b群高环形土器出土状況
3 水上10区S X 624 b群台付盆形土器出土状況
4 水上10区S X 624 d群壺形土器出土状況
- 図版 40 1 水上10区65・66・67列低湿地——南より
2 水上10区65・66・67列低湿地——北より

- 図版 41 1 水上10a区南半部——北より
2 水上10a区北半部——南より
- 図版 42 1 水上10a区72・73列遺構
2 水上10a区S D 690
3 水上10a区S P 694・S P 695周辺遺構
4 水上10a区S D 634
- 図版 43 1 水上10a区S E 632
2 水上10a区S E 651
3 水上10a区S E 651井戸枠
- 図版 44 1 水上10c区全景——南より
2 水上10c区全景——北より
- 図版 45 1 水上10c区S D 765
2 水上10c区S D 765縛出土状況
3 水上10c区S P 768
- 図版 46 1 水上7区全景——北より
2 水上7区全景——南より
3 水上7区S X 462連続上坑——西より
4 水上7区S X 467水田状遺構——北より
- 図版 47 1 水上7区S R 807(1)
2 水上7区S R 807(2)
3 水上7区低湿地上層断面
- 図版 48 1 水上7区S X 806遺物出土状況(1)
2 水上7区S X 806遺物出土状況(2)
3 水上7区S X 805遺物出土状況(1)
4 水上7区S X 805遺物出土状況(2)
- 図版 49 1 水上7区旧河道士層断面
2 水上7区旧河道士層断面
3 水上7区S R 810遺物出土状況(1)
- 図版 50 1 水上7区S R 810遺物出土状況(2)
2 水上7区S R 810遺物出土状況(3)
3 水上7区S R 812遺物出土状況(1)
- 図版 51 1 水上7区S R 812遺物出土状況(2)
2 水上7区S X 802土製人形出土状況
3 水上7区S X 802土製人形・土製馬形出土状況
- 図版 52 1 水上7区S X 803・S X 804遺物出土状況
2 水上7区S X 803遺物出土状況
3 水上7区S X 804遺物出土状況
4 水上7区S D 618
- 図版 53 1 水上7区S X 801——西より
2 水上7区S X 801——南より
3 水上7区S X 801上製馬形出土状況

- 図版 54 1 水上 7 区南部旧河道
2 水上 7 区 S R 813 土製馬形出土状況
3 水上 7 区 S R 813 墓寄せ器出土状況
4 水上 7 区しがらみ状遺構 S X 816
- 図版 55 1 水上 10 b 区旧河道——南より
2 水上 10 b 区旧河道——北より
3 水上 10 b 区旧河道杭列（1）
4 水上 10 b 区旧河道杭列（2）
- 図版 56 1 水上 8 区全景——南より
2 水上 8 区旧河道
3 水上 8 区旧河道遺物出土状況
- 図版 57 1 水上 8 区 S X 775（1）
2 水上 8 区 S X 775 高環形土器出土状況
3 水上 8 区 S X 775（2）
4 水上 8 区 S X 775 盆形土器出土状況
5 水上 8 区 S X 775 环形土器出土状況
- 図版 58 1 水上 8 区古墳時代遺構 S P 580 • S P 584 • S P 585
2 水上 8 区 S P 584
3 水上 8 区 S P 585
4 水上 8 区 S P 580
- 図版 59 1 水上 9 区 S D 407（左）• S D 577（右）
2 水上 9 区 S D 405（右）• S D 406（左）
3 水上 9 区 S H 570
4 水上 9 区 S H 570 柱穴 1
5 水上 9 区 S H 570 柱穴 2
- 図版 60 1 水上 9 区低湿地土層断面
2 水上 9 区 C 89 グリッド内トレンチ土層断面
3 水上 8 区旧河道土層断面
- 図版 61 1 水上 8 区低湿地土層断面
2 水上 8 区 G 80 • H 80 グリッド内トレンチ土層断面
- 図版 62 1 水上 11 区南部全景——北より
2 水上 11 区 85 • 86 列奈良・平安時代遺構面——西より
- 図版 63 1 水上 11 区 88 列奈良・平安時代遺構面——北より
2 水上 11 区 S H 576
3 水上 11 区 S D 448 土器出土状況
- 図版 64 1 水上 11 区 S E 554 検出状況
2 水上 11 区 S E 554 掘り方
3 水上 11 区 S E 554 底面
4 水上 11 区 S E 554 井戸枠内中層遺物出土状況
- 図版 65 1 宮川 3 区全景——南より
2 宮川 3 区低湿地・旧河道

- 図版 66 1 宮川3区I 94・J 94グリッド遺構
2 宮川3区南部遺構
- 図版 67 1 宮川3区低湿地地形(S R 485)
2 宮川3区旧河道S R 487
- 図版 68 1 宮川3区旧河道S R 486
2 宮川3区S R 486ミニチュア購出土状況
3 宮川3区S R 486ミニチュア作出土状況
4 宮川3区S R 486箸状縄串出土状況
- 図版 69 1 宮川3区S X 483
2 宮川3区S X 479
- 図版 70 1 宮川3区S D 181
2 宮川3区S D 181遺物出土状況
3 宮川3区S D 181遺物出土状況
4 宮川3区S D 181中央部
- 図版 71 1 宮川3区S D 145
2 宮川3区S D 145上層帶
- 図版 72 1 宮川3区S D 182
2 宮川3区S D 182部分
- 図版 73 1 宮川3区S E 103
2 宮川3区S E 103井戸枠
- 図版 74 1 宮川3区S E 170
2 宮川3区S E 170井戸枠
- 図版 75 1 宮川3区S E 424
2 宮川3区S E 424井戸枠
3 宮川3区S E 147
4 宮川3区S E 429
- 図版 76 1 宮川4区全景——南より
2 宮川4区北半部
- 図版 77 1 宮川4区S R58
2 宮川4区S R58土器出土状況
3 宮川4区S R58部分
- 図版 78 1 宮川4区S R56(ポールは「相星五十戸」木簡出土地点)
2 宮川4区S R56部分
- 図版 79 1 宮川4区S R56遺物出土状況
2 宮川4区S R56動物形土製品・土器・礫出土状況
3 宮川4区S R56土器出土状況
4 宮川4区S R56山上疊一括
- 図版 80 1 宮川4区S R55
2 宮川4区S R55鐵出土状況
- 図版 81 1 宮川4区S R54出土状況——西より
2 宮川4区S R54縄串・皿状木製品出土状況

- 3 宮川 4 区 S R 54 墨書き土器出土状況
4 宮川 4 区 S R 54 灰釉陶器出土状況
- 図版 82 1 宮川 4 区 S R 51 —— 西より
2 宮川 4 区 S R 52 —— 西より
- 図版 83 1 宮川 5 区 北半部全景 —— 北より
2 宮川 5 区 南半部全景 —— 南より
- 図版 84 1 宮川 5 区 南部水路群・柱穴群 —— 北より
2 宮川 5 区 S E 217
3 宮川 5 区 S E 217 断面
- 図版 85 1 宮川 5 区 旧河道部 —— 南より
2 宮川 5 区 S R 201 出土状況 —— 南より
3 宮川 5 区 S R 201 橋桁状遺構出土状況 —— 東より
- 図版 86 1 宮川 5 区 S R 201 儀鏡出土状況
2 宮川 5 区 S R 201 灰釉手付小瓶出土状況
3 宮川 5 区 S R 201 銭貨出土状況 (S X 340)
4 宮川 5 区 S R 202 —— 南より
5 宮川 5 区 S R 202 遺物出土状況 —— 南より
- 図版 87 1 宮川 5 区 S X 336 —— 東より
2 宮川 5 区 S X 336 錆出土状況
3 宮川 5 区 S X 336 遺物出土状況
- 図版 88 1 宮川 6 区 全景 —— 南より
2 宮川 6 区 旧河道
- 図版 89 1 宮川 6 区 S R 317
2 宮川 6 区 S R 316 墨書き土器出土状況
3 宮川 6 区 旧河道北半部
- 図版 90 1 宮川 6 区 S R 321
2 宮川 6 区 S R 320 遺物出土状況
3 宮川 6 区 S R 314 遺物出土状況
- 図版 91 1 宮川 6 区 S R 312 遺物出土状況
2 宮川 6 区 S R 312 鈴出土状況
3 宮川 6 区 S R 312 人形土製品出土状況
4 宮川 6 区 S D 322 遺物出土状況 —— 西より
- 図版 92 1 宮川 6 区 S R 319 遺物出土状況 —— 東より
2 宮川 6 区 旧河道南部
3 宮川 6 区 S R 313 上層遺物出土状況
- 図版 93 1 宮川 6 区 S R 313
2 宮川 6 区 S R 313 土層断面 —— 南より
3 宮川 6 区 S R 313 遺物出土状況 —— 南より
- 図版 94 1 宮川 6 区 S R 313 遺物出土状況 —— 東より
2 宮川 6 区 S X 335 遺物出土状況 (1)
3 宮川 6 区 S X 335 遺物出土状況 (2)

- 図版 95 1 宮川 6 区 S X 335 遺物出土状況（3）
2 宮川 6 区 S X 335 遺物出土状況（4）
3 宮川 6 区 S R 313 遺物出土状況（5）

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査の計画

静岡市の北方に位置する文殊岳を源とする巴川は静岡市北東部浅畑沼から東下し、途中長尾川・吉田川等の支川を合わせて清水市の中心市街地を流れ、清水港へと注いでいる。とくに下流部は低地部を縫うように流れているため水はけが悪く、氾濫が起こりやすく、昔から浸水被害が何度も発生してきた。さらに流域の自然遊水地まで市街化が進みわずかな雨でも災害を引き起こすようになった。静岡県（静岡土木事務所）では、昭和54年度より巴川総合治水対策特定河川事業として、河道改修、放水路および遊水地の建設をはじめとする事業をすすめている。このうち静岡市南東部の大谷川放水路の建設は巴川本川下流部の負担軽減と大谷川の浸水被害の軽減を目的としたもので、大谷川放水路建設工事に伴い下流部の神明原・元宮川遺跡で事前の発掘調査が実施された。各年度における調査は次のとおりである。

昭和55年度 静岡市教育委員会 高松地区（右岸 330 m - 610 m）、1,800 m²

昭和56年度 静岡市教育委員会 高松地区（右岸 610 m - 710 m）、1,300 m²

昭和58年度 静岡埋蔵文化財調査研究所 西大谷1・2区（左岸 660 m - 830 m）、宮川1区（右岸 1,377 m - 1,407 m）、宮川2区（左岸 1,377 m - 1,400 m）、計 3,905 m²

昭和59年度 静岡県埋蔵文化財調査研究所 大谷1・2区、西大谷4～7区（左岸 370 m - 660 m）、西大谷3区・水上1・2区（左岸 830 m - 997 m）、西大谷8区・水上4～6区（右岸 720 m - 988 m）、計 8,913 m²

昭和60年度 静岡県埋蔵文化財調査研究所 水上3区・水上7～9区、宮川4区（左岸 997 m - 1,377 m）、宮川6区（左岸 1,400 m - 1,500 m）、水上10・11区・宮川3区（右岸 988 m - 1,377 m）、宮川5区（右岸 1,407 m - 1,500 m）、計 16,550 m² なお巴川（大谷川放水路）特定河川緊急整備事業として福妻1区・2区の発掘調査が行われた。

資料整理は現地調査終了後の昭和61～63年度の3ヶ年を予定しているが、実測図・写真整理・出土遺物の水洗・注記および復元・実測の一部については現地調査と併行してすすめている。なお調査報告書の作成計画は次のとおりである。

昭和58年度 大谷川I・西大谷1・2区、宮川1・2区（既刊）

昭和61年度 大谷川II（遺構編）昭和59・60年度現地調査地区（本書）

昭和62年度 大谷川III（遺物編）

昭和63年度 大谷川IV（遺物編・考察編）

本書は巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊目にあたるもので、昭和59・60年度に調査された大谷1・2区、西大谷3～8区、水上1～11区、宮川3～6区の遺構編を収録している。

第2節 調査の方法

調査区の設定は大谷土地改良区第二工区による地区割にしたがい、河口起点より370 m 上流地点～500 m 上流地点を大谷地区とし、以下 500 m～850 m 地点を西大谷地区、850 m～1,250 m 地点を水上地区、1,250 m～1,500 m 地点を宮川地区とした。これに大谷地区は 1～2、西大谷地区は 1～8、水上地区は 1～11、宮川地区は 1～6 の番号を調査順に付し調査区名とした。

調査区全域に大谷川改修用の座標系に合わせ 10 × 10 m のグリッドを設定した。グリッド網には南から

北へ1・2・3…の数字を、西から東へA・B・C…のアルファベットを付し座標を組んだ。各グリッドはこの座標によりA1・B2のように記標した。なお南北列は遺跡全体を通じ一貫して付せられているが、東西列のアルファベットは各地区毎に与えた。人谷地区・西大谷地区は2地区で西大谷系グリッドとした。

調査の実施にあたり調査区周囲に安全柵を設置し事故防止に備えた。表土は重機により除去し、その後は人力により包含層を掘り下げ、ベルトコンベアで搬出した。

現地調査の写真は6×7版中型カメラを主に用い35mmカメラを併用した。6×7版・35mmの白黒写真と35mmのカラースライドの組合せで写真記録とした。各調査区と遺跡の全景写真については航空写真撮影を行った。

実測図の縮尺は平面図・断面図とも1:20で作成したが詳細図が必要な場合には1:10の作図も行った。現地調査にあたって作成した実測図は全てマイクロフィルム撮影を行い、アバチュアカード化した。なお遺構・遺物の標記については凡例に示したとおりである。

第3節 調査の経過

昭和59年度の発掘調査は、昭和59年4月1日から昭和60年3月31日まで行われた。調査区は大谷1・2区、西大谷3～8区、水上1・2・4～6区である。昭和60年度の発掘調査は、昭和60年4月8日から昭和61年3月31日まで行い、調査区は水上3・7～11区、宮川3～6区である。以下にその調査経過を記述する。なお一部の整理作業については現地発掘作業と併行してすすめた。

調査経過

昭和59年度

- 4月 器材運搬等発掘調査準備を行い、作業員を手配する。大谷地区は重機による表土除去を行い、測量基準点を設定する。周間に安全柵を施し、集水樹・水中ポンプを設置する。旧大谷川部分に重機によるトレッジ設定。
- 5月 大谷地区 旧大谷川内遺物包含層を精査する。砂丘下層の遺物包含層（縄文時代～弥生時代）の調査に着手する。
西大谷地区 西大谷4～7区の表土を重機により除去する。測量基準点を設定し、安全柵を設ける。
水上地区 重機による表土除去を開始し、併行して安全柵・測量基準点を設置する。水上4区の遺構検出作業に着手する。
- 6月 大谷地区 大谷1区の旧大谷川河床を検出し、全景写真を撮影した後実測作業を行う。
西大谷地区 西大谷4区旧大谷川内の中世堆積層である暗灰色粘土層を掘り下げ砂礫層を精査する。
水上地区 水上4区の遺構を精査し実測作業を行う。水上2区の遺構検出作業を行う。
- 7月 大谷地区 大谷2区は重機により表土を除去し縄文～弥生時代包含層を精査する。丸木舟を検出し土層観察および土層断面図を作成する。
西大谷地区 西大谷4区の旧大谷川河床検出作業を行い、一部写真撮影および実測作業に入る。
水上地区 水上4区の実測作業を継続する。水上2区は遺構精査と併行して写真撮影・実測作業を行う。
- 8月 大谷地区 丸木舟の全容を検出し、写真撮影・実測の後取り上げ作業を行う。
西大谷地区 西大谷3区で遺構を精査し写真撮影の後実測作業を行う。西大谷4区は河床を検出し実測作業を行う。西大谷5区の遺構精査を行う。西大谷6区は旧大谷川内中世堆積層を調査する。西大谷7区は重機による表土除去を行う。

- 9月 西大谷地区 西大谷3区の実測作業を完了する。西大谷5区の遺構を検出し実測作業を完了する。西大谷6区の旧大谷川河床を検出し実測作業を行う。西大谷7区では中世面の遺構を精査し実測作業を行う。
水上地区 水上1区の近世面遺構精査を開始する。
- 10月 西大谷地区 西大谷6区は縄文～弥生時代包含層の調査を完了する。西大谷7区の中世包含層を掘り下げ、古墳時代前期包含層を精査する。
水上地区 水上1区の近世遺構を精査する。中世の旧大谷川支流であるSR150を精査し実測する。
- 11月 西大谷地区 西大谷7区で古墳時代前期の包含層より多量の土器と菅玉・ガラス玉などが出土し実測・写真撮影を行う。
水上地区 水上1区の近世遺構の調査を終了し、全景写真を撮影した後、実測作業を行う。さらに第二面の平安時代・中世の遺構を精査する。水上5区は遺構検出作業に着手する。
- 12月 西大谷地区 西大谷8区で重機による表土除去を行う。
水上地区 水上1区の平安時代・中世の遺構を精査し、写真撮影実測作業を行う。さらに古墳時代包含層の精査を開始する。水上5区の遺構を検出し、写真撮影・実測作業を行う。水上6区は重機による表土除去を行う。
- 1月 西大谷地区 西大谷8区は清掃後先行トレッチを掘削する。
水上地区 水上1区の古墳時代包含層の精査を行うとともに平安時代の井戸状遺構SE192の精査を行う。水上6区は粘土探査跡の精査を行う。
- 2月 西大谷地区 西大谷8区の旧大谷川内堆積層を精査し、写真撮影・実測作業を行う。
水上地区 水上1区の古墳時代前期の遺構を精査し、写真撮影・実測作業を行う。水上6区の粘土探査跡を精査し、写真撮影・実測作業を行う。
- 3月 西大谷地区 西大谷8区の微高地上遺構検出作業を行う。
水上地区 水上6区の平安時代末の溝状遺構SD228を検出する。
- 昭和60年度
- 4月 器材の運搬等発掘調査の準備をすすめるとともに継続地区的調査に着手する。
西大谷地区 西大谷8区の古墳時代前期の遺構集中部を精査し、掘立柱建物跡の検討を行う。
- 水上地区 水上6区のSD228の精査および実測・写真撮影を行う。水上9区は重機による表土除去を行い、周囲に安全柵を設ける。調査区にグリッドを設定する。近世の水田状遺構を精査する。
- 5月 西大谷地区 西大谷8区の古墳時代前期の遺構の実測・写真撮影を行う。
水上地区 水上3・7区で重機による表土除去を行う。水上9区は包含層の精査を行う。水上10区の現大谷川法面の重機による表土除去を行う。水上11区は重機による表土除去を行い、遺構精査に着手する。
- 6月 水上地区 水上3区の近世遺構を精査・実測後、古墳時代遺構を検出する。水上7区は近世の遺構面を精査する。水上9区の溝状遺構井戸状遺構を精査し、実測作業を行う。水上11区奈良・平安時代遺構を検出し精査を行う。
宮川地区 宮川3区の現大谷川法面の重機による表土除去を行う。宮川4区は重機による表土除去を行い周囲に安全対策を施し、測量基準点を設置する。
- 7月 水上地区 水上3区の古墳時代遺構を精査し実測・写真撮影を行う。水上7区の近世遺構を精査し、実測写真撮影を行う。水上9区で掘立柱建物跡を検出し精査する。法面観察で水上9区から水上8区にかけて低湿地地形を検出する。水上11区の奈良平安時代の掘立柱建物跡・溝状遺構・井戸状遺構・小穴を精査する。

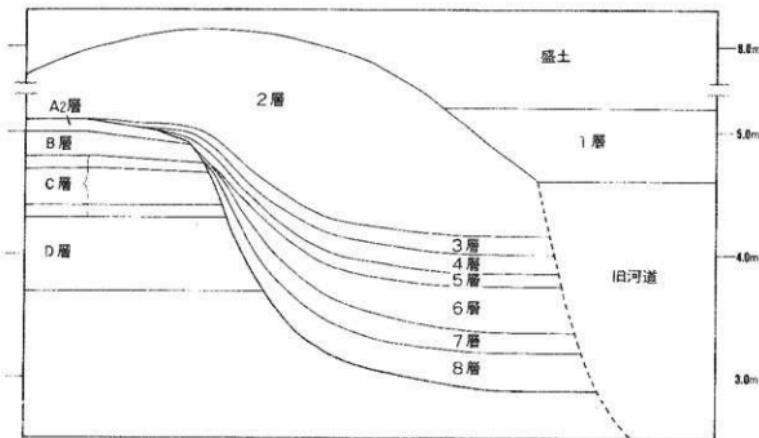
- 宮川地区・宮川4区旧大谷河道SR52～55の包含層精査を行う。一部実測・写真撮影を行う。
- 8月 水上地区 水上7区は重機による表土除去を行い、旧大谷川河道を検出する。発掘区全域に先行トレンチを入れる。周囲に安全対策を施す。水上9区は低湿地の上層調査を行い断面図を作成する。水上11区は実測作業・写真撮影を行う。水上8区中近世包含層の精査を開始する。
- 宮川地区 宮川4区SR54～56の精査を行うとともに遺物分布図を作成し、写真撮影を行う。北半部のSR57・59・60の精査を開始する。
- 9月 水上地区 水上7区は南部の奈良平安時代～中世の旧河道を精査するとともに、中央部古墳時代後期河道内遺物群を精査し一部実測作業・写真撮影を行う。水上8区中近世包含層を掘り下げ砂層上面の遺構を精査する。水上10C区の表土を重機により除去し、測量基準点・安全柵を設置する。
- 宮川地区・宮川4区は北半部のSR57・59・60の精査を継続するとともにSR51～56の連続断面の実測を行う。
- 10月 水上地区 水上7区の古墳時代後期河道の精査を継続し実測作業も併行する。水上8区はS X 75上師群を精査し、実測・写真撮影を行う。水上10b区・水上10a区の表土除去を行い先行トレンチを入れる。
- 宮川地区 宮川3区で重機による表土除去を行い測量基準点・安全柵を設置する。宮川4区の北半部SR58～60を精査し、実測作業を行う。宮川6区の重機による表土除去を行う。
- 11月 水上地区 水上7区は古墳時代後期河道の精査の後河床検出作業を行い、全景写真を撮影し、平面図・断面図を作成する。水上8区は旧大谷川河道の無遺物砂層を重機で除去し、遺物包含層の精査を行う。水上10a区低湿地土層の平安末～中世の遺構を精査する。
- 宮川地区 宮川3区の調査区全域にトレンチを設定し、包含層の精査を行う。宮川4区は清掃の後全景写真を撮影する。宮川5区で重機による表土除去を実施する。
- 12月 水上地区 水上10a区低湿地の十師器群S X 624を精査し、遺物分布図を作成する。水上10b区の近世流路を精査する。
- 宮川地区 宮川3区SR485の土器集中箇所を精査する。微高地上の遺構を検出する。宮川5区の旧大谷川河道SR201・SR202・SR203を精査し実測・写真撮影を行う。微高地上の包含層を精査する。
- 1月 水上地区 水上10a区の遺構を精査し実測・写真撮影を行う。水上10b区の旧大谷川堆積層を精査する。
- 宮川地区 宮川3区のSR485土器集中箇所の精査を継続する。微高地上の溝状遺構・小穴群・井戸状遺構を精査する。平安時代末～鎌倉時代の旧河道SR486を精査する。宮川5区の微高地上遺構を精査し実測・写真撮影を行う。宮川6区の旧大谷川河道SR311～317を精査し、実測・写真撮影を行う。
- 2月 水上地区 水上10c区の遺構を精査し、実測・写真撮影を行う。水上10b区の旧大谷川河床を検出し、実測・写真撮影を行う。
- 宮川地区 宮川3区の実測作業を行う。宮川5区の西壁上層断面図を作成する。宮川6区のSR311～316を精査し遺物分布図を作成する。
- 3月 宮川地区 宮川6区の旧大谷川内遺物を実測し、取り上げ後写真撮影を行う。
- 現地のプレハブ・資器材を撤収し現地調査を終了する。



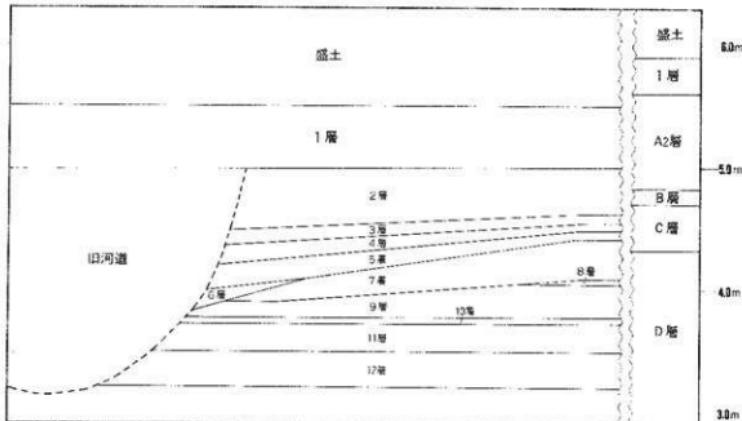
第1図 調査地点位置図

第4節 基本土層

本遺跡は1 微高地 2 低湿地 3 旧河道に分けられる。微高地においては近世以降の擾乱を受け包含層はほとんど遺存していないが、低湿地周辺には遺物包含層が良好に遺存している地区もみられる。地区毎に低湿地周辺の層位について記述する。なお旧河道内の遺物包含層については調査区により堆積状況が異なるため第Ⅲ章の各地区の上層説明にゆずることとし、ここでは河道の形成、変遷についてのみ言及する。



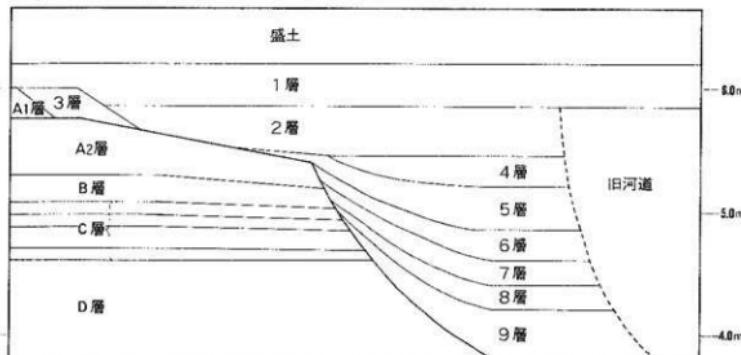
第2図 大谷地区土層模式図



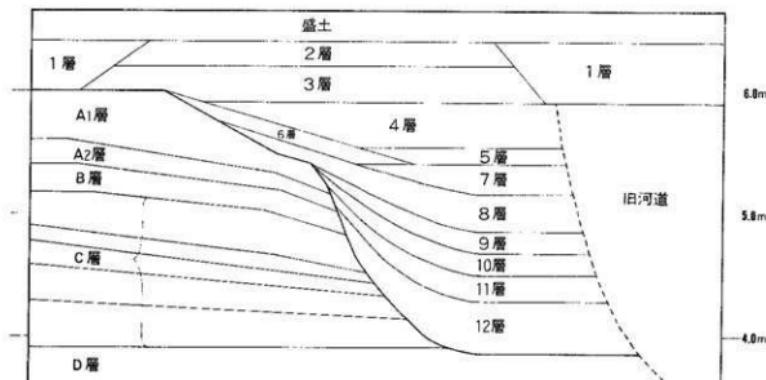
第3図 西大谷地区土層模式図

微高地の基本層序

- A1層 黄灰色砂質粘土層である。水上地区・宮川地区にみられる基盤層で、古墳時代前期～近世の遺構面である。
- A2層 白色および灰白色の粘土層である。遺跡全体にみられれば水平の堆積を示すが、低湿地縁辺では緩傾斜がみられる。西大谷地区では古墳時代初頭～近世の遺構面である。
- B層 黒色あるいは黒灰色の粘土層で腐植を含んでいる。
- C層 灰白色あるいは灰黒色を呈する粘土層で、腐植の多い箇所は灰黒色となり、灰白色粘土と灰黒色粘土が互層をなす調査区もある。
- D層 青灰色シルト層。青灰色粘土をストライプ状にはさむ海成シルト層である。
- A2～D層は遺跡全体を通してみられ、本遺跡の基本層序を形成している。



第4図 水上地区土層模式図



第5図 宮川地区土層模式図

低地内埋積土と遺物包含層

(1) 大谷地区(第2図)

- 1層 南に広がる砂丘の標高が高いためこれに合わせるための客上である。
- 2層 砂丘による堆積層であり、厚さ約4mにもおよぶ砂層である。河口より490m上流付近にまでみられる。
- 3層 砂混りの粘土層であり、弥生時代中期の遺物を包含する。
- 4層 茶褐色粘土層であり縄文時代後期の遺物包含層である。
- 5層 暗灰色粘土層。大沢スコリア(B.P.2700年)を含む。
- 6層 暗茶褐色粘土層である。腐植を含み遺物は認められない。
- 7層 黒色砂層である。縄文時代後期の遺物包含層。ヒシの実などの植物遺存体を検出する。
- 8層 黑灰色粘土層である。遺物は認められない。

(2) 西大谷地区(第3図)

南部の西大谷4～7区は低湿地および旧大谷川河道であり微高地の基本層序はみられないが、北部の西大谷3区・西大谷8区は微高地の堆積がみられる。相互の関係はその間に旧大谷川河道をはさみ判然としない。

- 1層 青灰色粘土層。近世以降の耕作土である。
- 2層 黄灰白色粘土層である。上面は平安時代末～中世の遺構面となる。
- 3層 茶褐色粘土層。古墳時代後期から奈良時代の遺物を包含する。遺構はみられない。
- 4層 暗灰色粘土層で古墳時代前期の遺物を包含する。
- 5層 暗灰色シルト層であり、4層同様古墳時代前期の遺物を包含する。
- 6層 黒色細砂層。古墳時代前期の遺物を包含する。
- 7層 暗褐色粘土層。遺物は検出されていないが、大谷地区の3層に整合する。
- 8層 茶褐色粘土層。大沢スコリア(B.P.2700年)が検出された。大谷地区4層に整合する。
- 9層 暗茶褐色粘土層である。大谷地区的5層に整合する。
- 10層 粘土混り砂層。大谷地区6層に整合する。
- 11層 灰褐色粘土と黄灰色粘土が互層をなす。
- 12層 砂混りの灰黑色シルト層である。

なお7～12層では遺物は検出されていない。

(3) 水上地区(第4図)

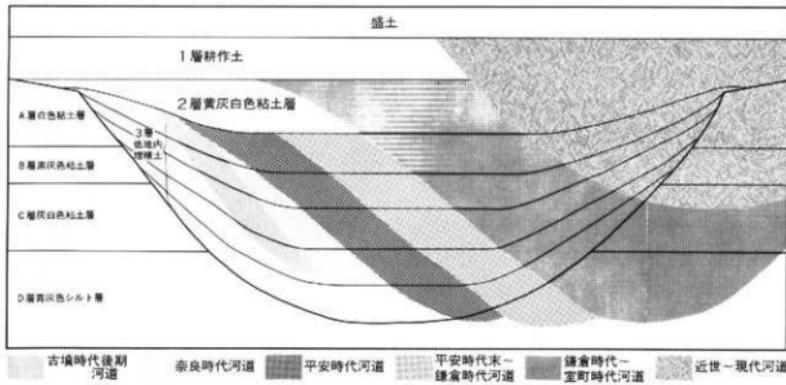
- 1層 青灰色粘土層で、近世以降の耕作土である。
- 2層 黄灰色粘土層。灰色砂が地点により含まれる。上面は平安時代～近世の遺構面である。
- 3層 茶褐色粘土層。水上11区でのみ検出された。奈良時代～平安時代の遺構面である。
- 4層 灰白色粘土層である。古墳時代中期末～後期初頭の遺構面である。2層に外見上は酷似する。
- 5層 黒茶色粘土層。古墳時代前期～中期の遺物を包含する。
- 6層 暗灰黒色粘土層。黄白色の微粒子を含み、大沢スコリア(B.P.2700年)である可能性も考えられる。
- 7層 緑茶色腐植土層。縄文時代後期の遺物を包含する。
- 8層 黑灰色粘土層である。低湿地縁辺では砂の堆積もみられる。無遺物層である。
- 9層 暗灰色砂混り粘土層。低湿地内最下層にあたり粘土成分が多い箇所と砂成分が多い箇所がみられる。なお6～9層は大谷地区4～7層に類似している。

(4) 宮川地区（第5図）

- 1層 青灰色粘土層で、近世以降の水田耕作土である。
- 2層 暗青灰色粘土層である。中世の遺物を包含する。
- 3層 茶灰色粘土層。平安時代の遺物包含層である。
- 4層 茶色粘土層で、古墳時代後期の遺物包含層である。
- 5層 灰黄色粘土層で、古墳時代後期の遺構面である。
- 6層 黄白色粘土層である。古墳時代中期の遺物を包含している。5層・6層は水上地区4層に整合する可能性がある。
- 7層 暗青灰色粘土層である。遺物は検出されていない。
- 8層 灰黒色粘土層で腐植を含む。水上地区5層に整合すると考えられる。
- 9層 茶褐色粘土層であり、腐植を含む。水上地区6層に整合すると考えられる。
- 10層 褐色腐植土層。水上地区7層と整合すると考えられる。
- 11層 灰黒色砂質土層。水上地区8層と整合する。
- 12層 暗灰色細砂土層で灰黒色砂質粘土ブロックを含む。水上地区9層と整合する。

(5) 旧大谷川の形成（第6図）

本遺跡で重要な位置を占める旧大谷川は、その形成過程において低湿地との密接な関係が認められる。古墳時代中期には帯状の低湿地内に水路的な流れが存在するが、古墳時代後期になると低湿地内埋積土を激しく浸食し河川としての形状を整える。低湿地内に形成されたこの旧大谷川は曲流・浸食をくりかえし低地内埋積土のみならず微高地の基本層序をも浸食するようになる。宮川3・4区のSR51～56・SR486・487はこの状況を顕著に表わしている。



第6図 旧河道変遷模式図

第Ⅱ章 環 境

神明原・元宮川遺跡の地理的環境と歴史的環境については、すでに刊行されている『大谷川Ⅰ』(1984) の第Ⅱ章で述べられている。そこで本章では、今回作成した「大谷川周辺条里図」(第7図) をもとに本遺跡の立地について述べたい。

第1節 大谷川流域と条里地割

本遺跡の立地する静岡平野東部に条里地割がほぼ全域にわたって存在したことは、現在静岡市役所が所蔵している旧地籍図(昭和10年代作成)や、1946(昭和21)年撮影の米軍空中写真によって確認されている。この地域の条里地割の起源が、どの時代まで遡ることができるかは不明であるが、静岡平野北東部の内荒遺跡で検出された律令期の溝状遺構・建物群が、同地域の旧地籍図に示された条里地割の方向と一致しており、大谷川周辺地域の条里地割も律令期に遡る可能性がある。そこで、古墳時代から律令期をへて中世まで連続する本遺跡の立地を検討するにあたり、大谷川周辺の条里地割の分布は重要な資料となった。具体的には、条里地割が確認できる地域とできない地域、条里地割の中で長地型地割、変形条里等の分布と旧小字名、等高線、河川・用水路・溜池、土地利用、旧村・小字界、道路網、表層地質等の分布を含めて考察していきたい。

第2節 大谷川水系と神明原・元宮川遺跡

大谷川の流域平野は、東側を有度山丘陵部の台地状緩斜面、北側と西側を安倍川扇状地末端部に形成された自然堤防、南側を浜堤・砂丘によって区画された地域である。北側の自然堤防は、駿府城付近から曲金地区狐ヶ崎坪(以下、地籍の呼称は旧小字による)北西部を通り、小鹿地区巣治屋敷を結ぶ小鹿街道がのる曲金微高地であり、西側の自然堤防は駿府城付近から八幡山と有東山の間を通って、高松地区神明原を結ぶ久能街道がのる久能街道微高地である。大谷川に流れ込む水系は主に有度山西麓に発し、北から長沢川・異龍沢川・池ヶ谷沢川・伊庄沢川・大正寺沢川の5本の小河川である。

今回、条里地割の検討にあたり、曲金微高地の北に展開する小鹿沢川水系と久能街道微高地の南西側に展開する大谷川右支川・浜川水系の一部を含めて条里図を作成した。以下に、検討結果の要点を報告したい。

①条里地割の方格軸は、今回作成した範囲では同一の規則性を有しており、施工単位・順序・時期は不明であるが、單一のプランで施工されたものと考えられる。南北軸はN-38°-Wである。

②坪内部の地割は長地型が卓越してみとめられた。

③縦長地型と横長地型の分布は、曲金地区狐ヶ崎坪・杏形坪では横長地型、曲金地区巣治屋敷・会下前坪・小久保田坪をはじめ、有東地区南東部・大谷地区北西部・高松地区全域で縦長地型が圧倒的分布を示し、小鹿地区では横長地型がやや優勢であるが、横長地型と縦長地型がモザイク形に分布している。これらの分布は等高線と重ねてみると、等高線にはば直交して長地型の長辺がくることが多い。曲金地区の軍神社付近の旧東海道微高地と曲金微高地の分岐点(標高15m)から東側で曲金微高地の北側は東に向かう斜面となっており、縦長地型が卓越する。曲金微高地の南側と有東山南側では南に向かう斜面となっており横長地型が卓越している。長地型の長辺が等高線にはば直交するように施工された理由は水田用水の取水が坪内のどの地型にも均等に行渡り、かつ排水もとどこおりなくできるような工夫のためと考えられる。小鹿地区的横長地型と縦長地型の混在は、この地区的北西部が曲金微高地の末端斜面となり、南西部と南部がそれぞれ小鹿沢川と長沢川がつくった小規模な押出状扇状地の末端斜面となる

ことにより、複雑な用排水系を必要としたためと考えられる。

⑤以上のように、用水系の効率的な配置を考えて縦長地型と横長地型を施工したと仮定すると、同様に一連の問題として条里の阡陌線の設定基準点と阡陌線座標軸の傾斜角度の設定も考えることができる。

⑥で述べた等高線と坪内の長地型の長辺が直交する関係が最も正確にあらわれているのが曲金地区である。この地区では、曲金微高地を軸線にして北東部と南西部の等高線がほぼ直交している。この直交する等高線を阡陌線として設定し、あわせて坪内の長地型の縦横の配列を設計したと推定できる。したがって条里の阡陌線の設定基準点も曲金微高地にあった可能性がある。

⑦条里地割施工の工区境を示すものとして小鹿地区堂々メキにある二ツ池が考えられる。二ツ池は条里地割が施工された区域の南東隅にあたり端を条里の阡線と陌線によって区切られている。この二ツ池の南の陌線を基準にみると、小鹿地区では陌線の北側には長地型が多く存在しているのに対して南側では条里の規制にしばられていない地割がみられる。さらにこの陌線の延長線上は高松地区と有東・石田地区の境界線となっている。また、大谷川地区新出道ノ坪西端で、1923（大正12）年に発掘された杉駆馬捨場の円墳が陌線の上にある。以上の諸点から、この陌線は条里地割施工の工区境の一部として考えてよいと思われる。⑧条里地割のみられない地域は根方街道沿いの地域と大谷地区的稻妻坪より以南の大谷川周辺（以下、大谷川南部周辺と略す）である。

Aまず根方街道沿いの地割は根方街道を基軸に設定され片山廃寺の寺域もこれにならっている。理由は有度山丘陵部の等高線にはば並行して根方街道が緩やかにカーブしながら通っており、これに規制されたものと考えられる。しかし、片山廃寺から小鹿地区堀ノ内にかけて丘陵部の斜面にもかかわらず、ほぼ規則的な方格地割が見られる。地割の軸線はN-3°~Wである。

B大谷川南部周辺地域は、西側は久能街道、東側は福久ノ坪、南側は下瀬田坪まで、旧大谷川の蛇行の跡を各所に残し、複雑な地割を示している。この地域の1876（明治9）年の地籍図（第38図）を見ると圧倒的に畠地が多いことがわかる。大谷低地を蛇行しながら流れる大谷川は攻撃斜面側をたえず浸食し、河道を変えている。旧河道には多くの粘土・砂礫が堆積され微高地状を呈するようになっていく。これらの微高地での農業は水がかりも悪く、畠作に向いていたと考えられる。また水田の中に畠がある島畠状の地帯は、門村浩の「静清地域の地形分類図」（1966）に示された「旧河道跡」とほぼ一致している。

しかし、この地域でも大まかな方格地割を見ることができる。本宮川坪を南北に通る道と南側を通る宮川道の方格軸の方向性（N-18°-W）は、この地域全体に一般的なものであり、さらに久能街道をわたり、高松地区神明原でも同様な方格軸が認められる。これは等高線に示された大谷低地の谷線が軸線となっているものと考えられる。しかしこれも単に自然条件による規制のみではなく人為的な地割規範が設定されていた可能性もある。

また横井ノ坪を中心とした南部は、中世居館の設営によって地割を改変させた可能性もある（第Ⅲ章第1節水上地区・水上3区参照）。北の本宮川坪は、地籍図からも方形の地割の中央に南から道がつけられていることが確認でき、神社があった可能性をうかがわせる地点もある。このことは1672（寛文12）年の『駿州久能御神領宮川村大谷片山村御検地帳』にも坪字名として「本宮川宮脇」「本宮川宮ノ後口」とあり神社があったことを示唆している。また宮川部落に伝承する話に1685（貞享2）年の大谷川の氾濫により宮川の人々は東の丘陵部へ移住し、以前住んでいた所なので本宮川と名づけたという。今回の発掘調査で古墳時代後期から奈良時代にかけての大量の祭祀遺物が検出された宮川6区は本宮川坪の南西部に位置しており、神社を含めた本宮川坪と何らかの関係がある可能性もあるかもしれない。この大谷川南部周辺で条里地割が地籍図上で確認できるところは、北の本宮川坪と稻妻坪の坪界線と壹丁畠坪と下川11坪の坪界線だけである。

なお、昭和60年度に行なわれた稻妻地区発掘調査の中で稻妻1区北部で東西方向の溝状遺構が10本以

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡名	所在地	種別	時期	遺物	主な出典
1 神明社・元宮川遺跡	静岡市高畠・宮川・大谷・佐須原 ・西大谷・大谷	古墳、古墳、 集落跡、 平安・山田	範六世孫代、丹戸、 延立柱建物、高 古墳、土器、 木造構築	萬葉文、奈良、 石斧(打)、九木舟、 石鏡、土器、石鏡、 木製構築、 高古墳、瓦、鐵劍、 山茶瓶、鉢、木 造構築	ア「民史」1(1932) ・「静岡縣史研究」5(1935) イ「1954-1960-1961(1963-1965年度調査 報告書)」 エ「大谷船とよし」、「静岡県出土研究」 オ「大谷船」(1930) ウ「1969年度調査」 エ「1978-1979-1980年度調査」 イ「1943-1947-1950-1955年度調査『豊川川 底』(1948)、『民史本編』(1954) 1961-1962年度調査(1952)
2 大井森遺跡	静岡市中村二丁目	散在地	古墳	土器	ア「民史」1(1932)
3 沙久遺跡	静岡市高畠・河原	古墳跡	海生、古墳、 古墳	古墳、土器、 刀(打)、水鏡、 土器	ア「民史」1(1932)
4 佐久遺跡	静岡市高畠五丁目	古墳跡、 古墳	佐久(打)、古 代住跡12、高 古墳、木 造構築	佐久十石、石鏡、 刀(打)、木製構築 (住跡材、鐵劍、玉、削下 石、灰陶、板瓦、 土器)	ア「民史」1(1932)
5 木之森跡	静岡市入島	散在地	海生+古墳	海生土器、土器等	イ「民史」1(1932)
6 大光遺跡	静岡市下五丁目、 静岡市中村一丁目、 静岡市中村二丁目、 静岡市中村三丁目	散在地、 古墳	佐久(打)、水 鏡、高古 墳、 牛牛(打)、 木造構 築、古墳	佐久十石、土器、 刀(打)、高古 墳、鐵劍、 木製構築	ア「民史」1(1932) イ「古占子」、加藤、 内沢(1988) 1923年度調査 (今松、田代跡付近に位置を示唆した)
7 有吉遺跡	静岡市東二丁目	散在地	海生?	稻荷木棺	ア「民史」1(1932)
8 馬頭塚遺跡	静岡市東二丁目	散在地	海生?	稻荷木棺	ア「民史」1(1932) 「古占子」、加藤、 内沢(1988) 1923年度調査 (今松、田代跡付近に位置を示唆した)
9 西の渡遺跡	静岡市八幡町石田一丁目 二丁目、小谷二丁目	散在地	海生、古墳	海生土器、土器等、木製品	イ「民史」1(1932)
10 西田遺跡	静岡市中田・下丁目、 下金	集落跡	佐久(打)+古 墳	古墳跡、鉢形、水 鏡、高古墳、 水滴陶	ア「1980-1981-1982年度調査 『西田・西田跡』」 「『西田跡』出土報告書」
11 有明遺跡	静岡市中田町	散在地	海生?	海生土器、土器等	イ「『西田跡』出土報告書(市立富士見小学校) 1981-1982年度調査(市立富士見小学校) 『有明遺跡』」(1983)
12 小糸遺跡	静岡市小糸	古墳跡、 水田跡	佐久(打)、 高古墳	佐久(打)、 高古墳、鐵劍、 土器等	ア「民史」1(1932) 「1982-1983年度調査 (芦原路、体育館用地)
13 三ノ山1号墳遺跡	静岡市小糸一丁目	水田跡	佐久(打)、 高古墳	佐久(打)、 高古墳、土器等	イ「民史」1(1932)
14 鎌田堀遺跡	静岡市小糸一丁目	散在地	佐久(打)、 高古墳	佐久(打)、 高古墳	ア「民史」1(1932)
15 金子山遺跡	静岡市小糸一丁目	古墳跡	佐久(打)+古 墳	佐久十石、土器等	イ「古占子年鑑」、『金子遺跡(1949)
16 由比山遺跡	静岡市中田町	古墳跡	佐久(打)+古 墳	佐久十石、 高古墳、玉、灰陶	ア「1992年度調査(西田山小坂地)
17 谷山古墳群	静岡市大谷・谷山町 一丁目、九郎町、古河町	古墳	佐久(打)2、 高古墳、鐵劍、 刀(打)、 灰陶、 丸瓦2、 高古墳、 刀(打)、 灰陶	佐久(打)2、 高古墳、鐵劍、 刀(打)、 灰陶	ア「民史」1(1932)
18 八幡山古墳群	静岡市八幡	古墳	古墳	上田式石室+瓦 蓋、土器、 新田式石室	ア「民史」1(1932)
19 八幡山古墳群	静岡市八幡	城跡	岐阜	岐阜、土器、 鐵劍	ア「安原郡上、文保丸(1476) 由伊勢新九郎 ・長氏の命勅諭に対する誓を乞うといわれ る。『甲陽軍鑑』、水鏡11(1588) 年度信玄公 が越後侵入時、当城に陣を置く。」
20 有吉野跡	静岡市東一丁目	城跡	岐阜	岐阜、 土器	ア「被國定跡。有吉山野は今川家の城。岐 阜又切。」
21 上ノ山遺跡	静岡市東大谷	散在地、 古墳	海生(早)、 佐須原 ・佐生+古 墳	海生(早)、 打野石斧、石鏡、 土器、 佐生+古 墳	ア「1982年度調査 ・佐生+古墳、 佐須原、 土器等」
上ノ山古墳群	静岡市東大谷	古墳	古墳	門道1、 方墳13、横 刀(打)、 玉、鐵劍、 土器、 高古墳	イ「2-10号墳1980年度調査
22 由大谷古墳群	静岡市東大谷、井田段	古墳跡、 高古墳	佐久(打)	佐久(打)1、 横穴式石室+瓦 蓋、 刀(打)、 鐵劍、 高古墳	ア「1988年度調査 ・佐久(打)1、 横穴式石室+瓦 蓋、 刀(打)、 鐵劍、 高古墳」
23 静岡寺坂遺跡	静岡市大谷戸田	散在地	海生(早)、 佐須原	海生(早)、 佐須原、 土器	ア「1972年度調査『被國定跡古墳』」
24 静岡寺保戸田遺跡	静岡市大谷戸田	散在地	海生(早)、 佐須原	海生(早)、 佐須原、 土器	ア「片川橋の左を走る道。国定跡寺坂遺跡とし て指定決定。1971年度調査」
25 田代山・糸山神社古墳 遺跡群 宮川遺跡	静岡市大谷戸田山 ・糸山川	古墳	古墳	古墳(2、四 面斜)、 刀(打)、 鐵劍、 高古墳	ア「1972年度調査『被國定跡糸山遺跡』」
26 宮川古墳群	静岡市大谷戸田山	古墳	古墳	古墳(2、四 面斜)、 刀(打)、 鐵劍、 高古墳	ア「1号墳・1959-1974年度調査『被國定跡糸 山遺跡』、3、5号墳1974年度調査 7号墳1973年度調査『被國定跡糸山遺跡』」
27 片山遺跡	静岡市大谷戸田山	散在地	海生、古墳	海生土器、石鏡、 土器等	ア「民史」1(1932)
28 片山寺跡	静岡市大谷戸田山	寺院跡	奈良、平安	奈良石、 奈良(金)、 土器、 鐵劍、 高古墳	ア「1968-1969-1970-1971年度調査 『日本寺跡』、1981年度『被國定跡糸山遺跡』」
29 伊豆山遺跡	静岡市大谷戸田山 ・古墳群	古墳	古墳	10號石、 鐵劍(石) (鐵劍)、 土器等	ア「伊豆山遺跡、奈良時代の2男船跡、3男船跡 はともに小規模地盤に作られた。小盆地を名乗る。 文保丸(1476) 由伊勢新九郎(1487) の伊勢新 九郎との争いに敗死。」
30 小糸指跡	静岡市小糸指	散在地	岐阜	岐阜	ア「小糸指の一定範囲の外郭と円を描 く複数の府地跡から構成された。スクリーブ ショーンで示された。『被國定跡糸山遺跡』、第3回 調査の記述あり。『被國定跡糸山遺跡』、第3回

主な出典の記号は、括弧の番号間連続記号又手順の00ア～乙からとった。

※ 通説番号290未記載される遺跡のうち主張の大きさが田舎から外れるため、その説明は省いた。



第7図 大谷川周辺条里図(遺跡分布図)

- 13 * 14 -



第8図 大谷川周辺旧小字集成図(昭和10年代)

上確認されており、これが、壹丁畠坪と下川口坪の坪界線と一致している可能性も考えられる。

⑦大谷川南部周辺と根方街道沿いの丘陵部の畠地との間の水田は条里地割がみられる。ただし、大谷川南部周辺に隣接する前田ノ坪・花之谷津坪・馬場坪では変形条里が確認される。

⑧大谷川南部周辺の東側と西側で条里地割が確認されたにもかかわらず、今回の発掘調査の結果、稻妻1区北部以外では確認できなかった。そのことは、東側の条里地割が、大谷川南部周辺を除外して実施された可能性を示しているといえよう。

⑨曲田坪以北の大谷川周辺(以下大谷川北部周辺と略す)は南部と異なり、全て条里地割が実施されており、大谷川自体も条里地割によって河道を規制され上恩田原坪から小川橋坪まで、ほぼ直線的に坪境を南に流れ、久七坪から曲田坪まで、坪境を再び直線的に南に流れている。また大谷川支流の長沢川も浜井出ノ坪の南側の坪境を直線的に西に流れ大谷川本流に合流している。大谷川は北部では流入する水量も少なく南部と比べると、河道を直線的に改修することが容易であったと考えられる。条里地割に規制されて蛇行による河道変遷のない長沢川は大谷地区で最も発達した天井川のひとつとなっている。大谷川北部周辺はほとんど長地型の坪並となっているが、稻妻1区北部と連続する下川口坪・新井橋坪は地割のタイプが異なっており、性格を異にしている。

地籍図による検討の結果、得られた神明原・元宮川遺跡にかかるものを要約したい。

⑩統一的な条里地割が曲全微高地付近を中心に実施された可能性がある。

⑪非条里地区の片山庵寺付近には独自の方格軸がある。

⑫大谷川周辺は稻妻坪を境として南北に地割が大きく異なる。

⑬大谷川南部周辺は地形条件に左右され、独自の方格軸があること。本宮川坪には神社があった可能性をうかがわせる地点もあり、本遺跡との何らかのかかわりも考えられる可能性もある。

⑭大谷川北部周辺は地甲地区に組み込まれ、人工的な河川改修を受けているとされる。

⑮大谷川流域の条里地割の施工年代は現在のところ不明である。しかし静岡市北東部にあたる内荒遺跡周辺の旧地籍図にみられる条里地割が発掘調査により、律令期の遺構群と密接な関係があることが確認されており、大谷川流域の条里地割と内荒遺跡周辺の条里地割とがほぼ同一の方格軸を有することから、大谷川流域の条里地割が律令期に遡る可能性もある。

条里閏連図(第7・38図)作成手順

第7図 大谷川周辺条里図(遺跡分布図)は以下のよう手順で作成した。

①静岡市所蔵・昭和10年代・地籍図(1/600)(A図)を1/3000に縮小編集し原図をつくる。(地割・道路など新規工事部分は、できるかぎり旧状を記入する)

②静岡県作成・昭和33年測図・静清広域都市計画図(1/3000)(B図)を原図に重ねて・有度山丘陵部・有東山・八幡山・谷津山の等高線(5m間隔)・方位を記入する。

③陸海測量部作成・明治20年測図・地形図「久能山」(1/20000)(C図)をもとに、海岸線・平野部等の高線(1.25m間隔)を原図に記入する。明治期に丘尾切削された谷津山等も旧状を復元する。その際、補正用に静岡市作成・昭和初期測図・静岡市都市計画による実測図(1/3000)(D図)を使用する。

④遺跡分布を、原図に記入する。

資料(7) 静岡県教育委員会(1979)「静岡県遺跡地図・静岡県遺跡地名表」 (イ) 静岡市教育委員会(1985)「静岡市遺跡地名表・静岡市遺跡地図」 (ウ) 静岡県教育委員会(1983)「有東遺跡I」 (エ) 静岡県教育委員会(1981)「静岡県の中世城跡」 (オ) 静岡県教育委員会(1980)「静岡県歴史の遺跡調査報告書・東海道一」

第38図 「橋井ノ坪」開闢地範囲は以下のよう手順で作成した。

①大谷土地改良区作成・昭和50年・「大谷土地改良区第二工区整理前土地図」(1/1200)(E図)の地割・道路・水路を堆田第一郎氏所蔵・明治9年作成「大谷村地籍図」(1/800)(F図)によって、E図の道路・水路・地割を明治9年段階のものと同じものに修正した第1原図(1/1200)を作成する。

②F図に記載されている地番を第1原図の「革ごと」に転記する。

③地田作・郎氏所蔵・明治13年筆「大谷村地租改正別帳」により②で転記された一筆ごとの土地利用状況を第1原図に色分けする(明治9年の土地利用図が完成する)

④大谷土地改良区作成・昭和50年「大谷土地改良区第二工区整理後土地図」(1/1200)(G図)に、発掘調査で使ったグリッド配直図(1/1000)(H図)を同一端点にして重ね、第2原図(1/1200)を完成させる。

⑤第1原図に第2原図を重ねてグリッド配置図を転記する。

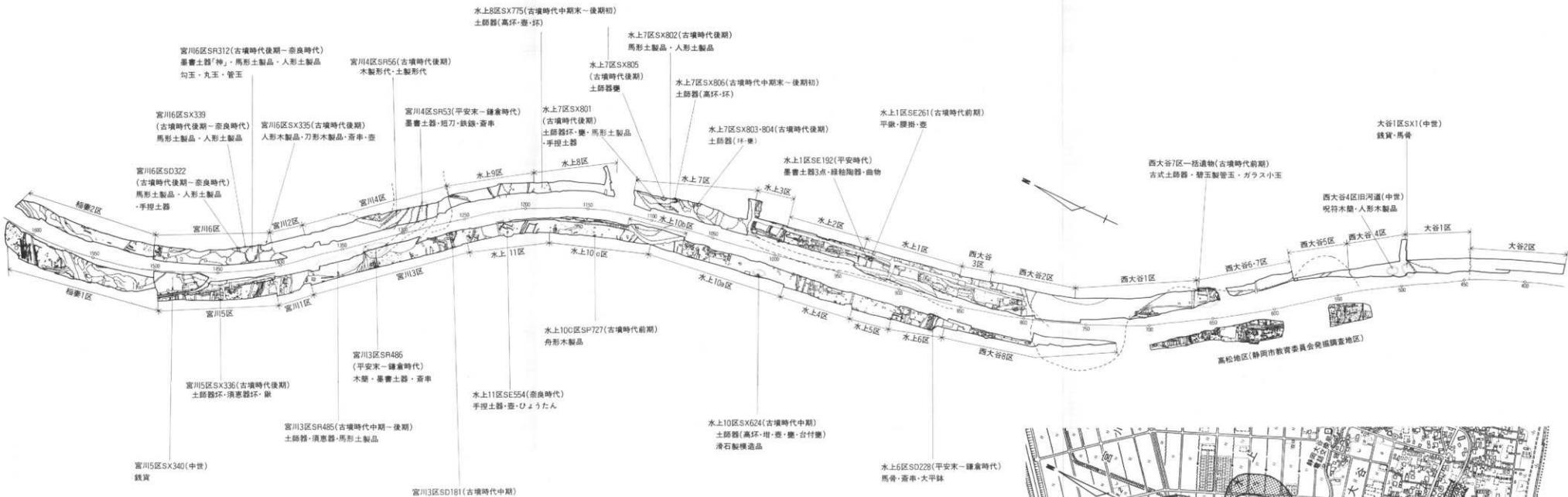
⑥⑤の作業の完了した第1原図のグリッド方眼を発掘によって検出された旧大谷川河道を書き入れる。(発掘調査によって判明した水上7区南部の東側への流路、水上1、3区のSR150・西大谷2区の東側からの旧河道の流入個所などを記入)

⑦地籍図の地割・土地利用をもとに「橋井ノ坪」の周囲を検出する。

⑧1946(昭和21)年米軍撮影空中写真により、耕地界が判別できたものを一点鎖線で記入する。



第9図 大谷川周辺空中写真—1946（昭和21）年米軍撮影



第10図 遺跡全体図

- 19 • 20 -



第三章 遺跡の概要

昭和59・60年度の調査は大谷地区の1・2区、西大谷地区の3～8区、水上地区の1～11区、宮川地区の3～6区で実施した。遺跡の南限に位置する大谷2区では砂丘下の粘土層から丸木舟をはじめとして縄文時代から弥生時代中期にいたる遺物を検出した。大谷1区から西大谷4区は大谷川の旧河道にあたり祭祀遺物の出土がみられた。西大谷3区は微高地にあたり粘土探掘跡やピットが検出された。西大谷5区～8区の南半部では旧河道と古墳時代前期の遺物包含層が顕著であった。西大谷8区の北半部は弥生時代後期～古墳時代前期の集落を検出することができた。水上地区では微高地部分と旧河道が交互に検出され古墳時代中期から近世にいたる遺構・遺物が多く検出された。宮川地区では旧河道内から大量の祭祀遺物が出土したなかに、祭祀遺構と認識できる個所を含んでいた点が注目される。また、微高地上の遺構にも奈良時代から平安時代にかけての井戸、掘立柱建物がみられ木簡や墨書き器も出土している点で注目される。

第1節 大谷・西大谷地区

大谷2区（第12図）

1. 概要

大谷2区は河口起点より370m上流に位置し現大谷川左岸にあたる。厚さ約4mにおよぶ砂層（第13図6～10層）の下に縄文時代後期・縄文時代晚期・弥生時代中期の遺物を包含する粘土層を検出したが遺構はみられない。

11層は弥生時代中期の包含層で壺形土器を検出した。12層は人足スコリア（B.P. 2700年）を含む13層より上位にあり丸木舟・櫂・合せ弓などの木製品の出土をみた。15・16層は砂が主体であり、ヒシの実などの植物遺存体とともに木製ヤス、石皿、丸木弓などが検出された。

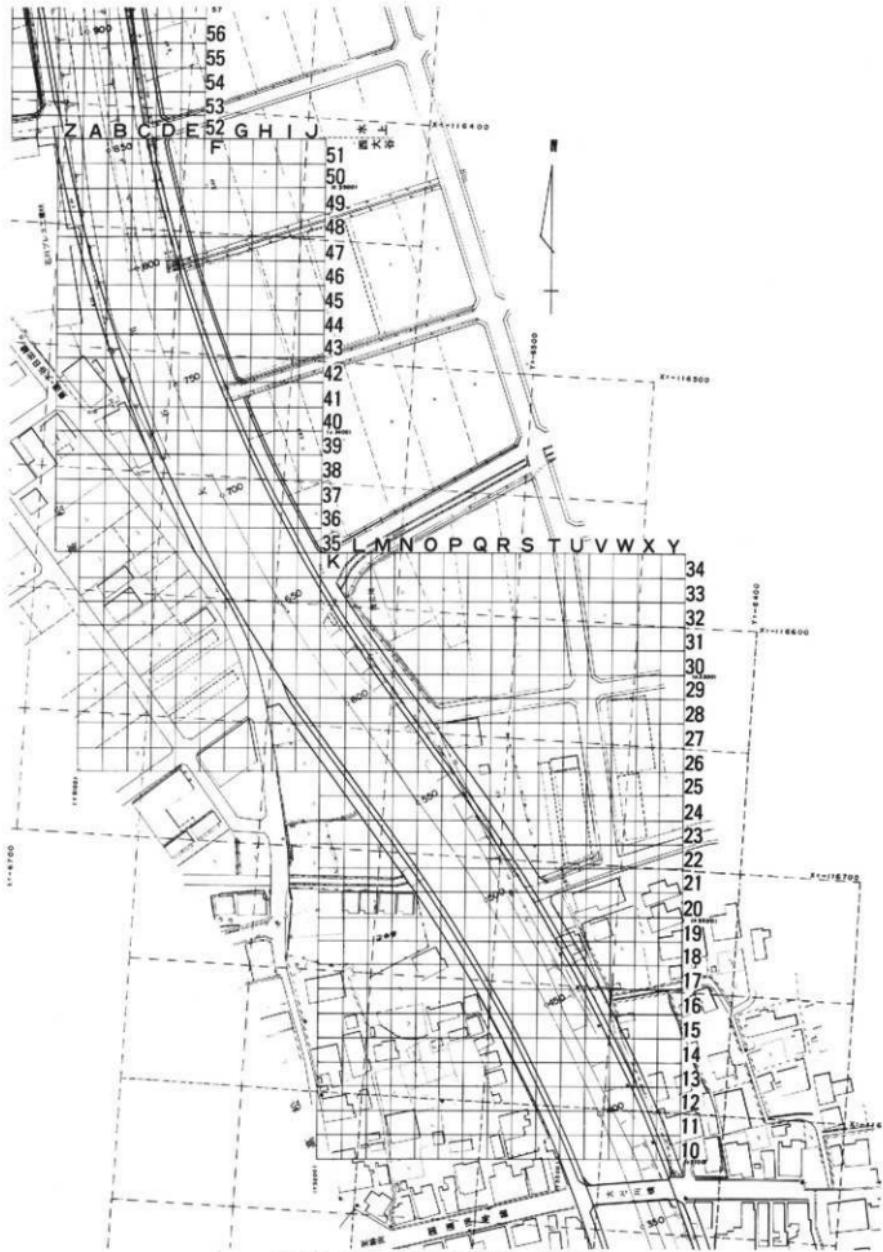
2. 地形の変遷

11～17層の堆積は白色粘土、黒色粘土、白色粘土、灰色シルトの順位で堆積した基盤粘土層が疊地状をなす部分にのみみられる特徴的な堆積である。疊はまったく含まれず低湿地内におだやかに堆積した粘土層であるが、9列から12列に左岸ともよべる基盤層の高まりがみられ、14列を中心南北方向に帯状の最深部をつくり、15・16列で再び高まる傾向をみせている。

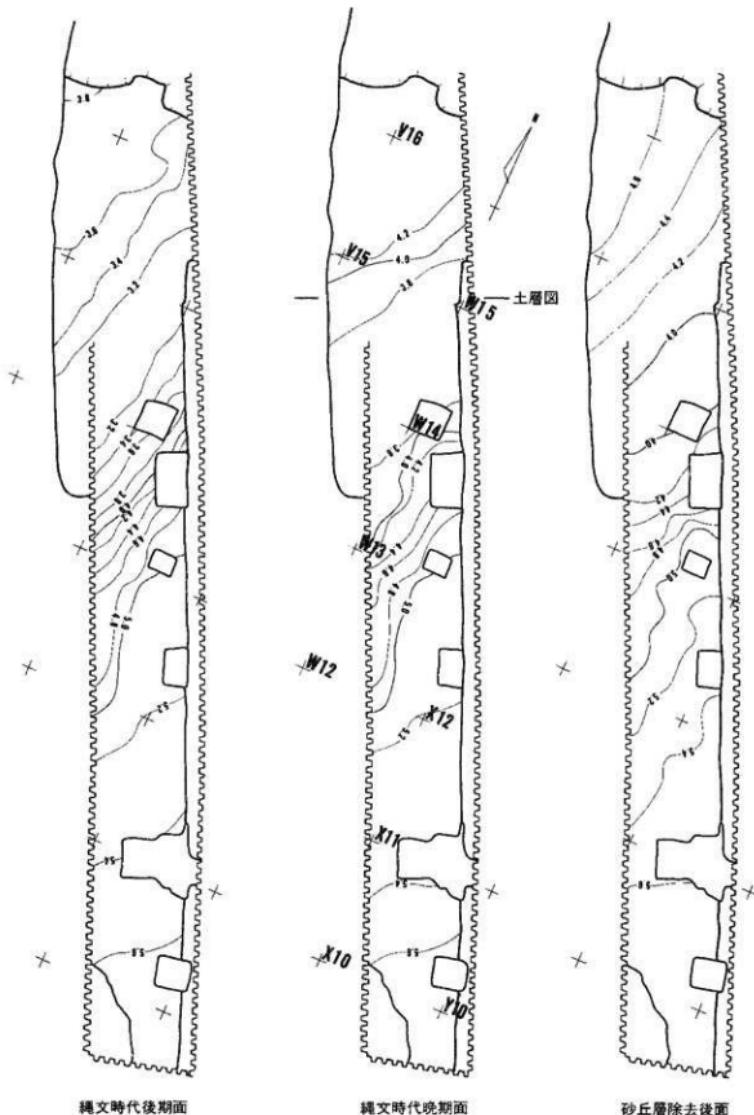
縄文時代後期の面では左岸部から最深部にかけて水平距離10mに対し1.8mの比高差をはかる。遺物は帯状の最深部に沿うように検出された。縄文時代晚期になると岸部と最深部との比高差は1.2mと浅くなるが、帯状の最深部の位置に変化はない。丸木舟はV13～14グリッドにかけての最深部で発見された櫂・合せ弓なども縄文時代後期と同様に岸状の高まりに沿って出土している。弥生時代中期になっても地形的変化は少なく最深部の位置・方向とも同一である。

3. まとめ

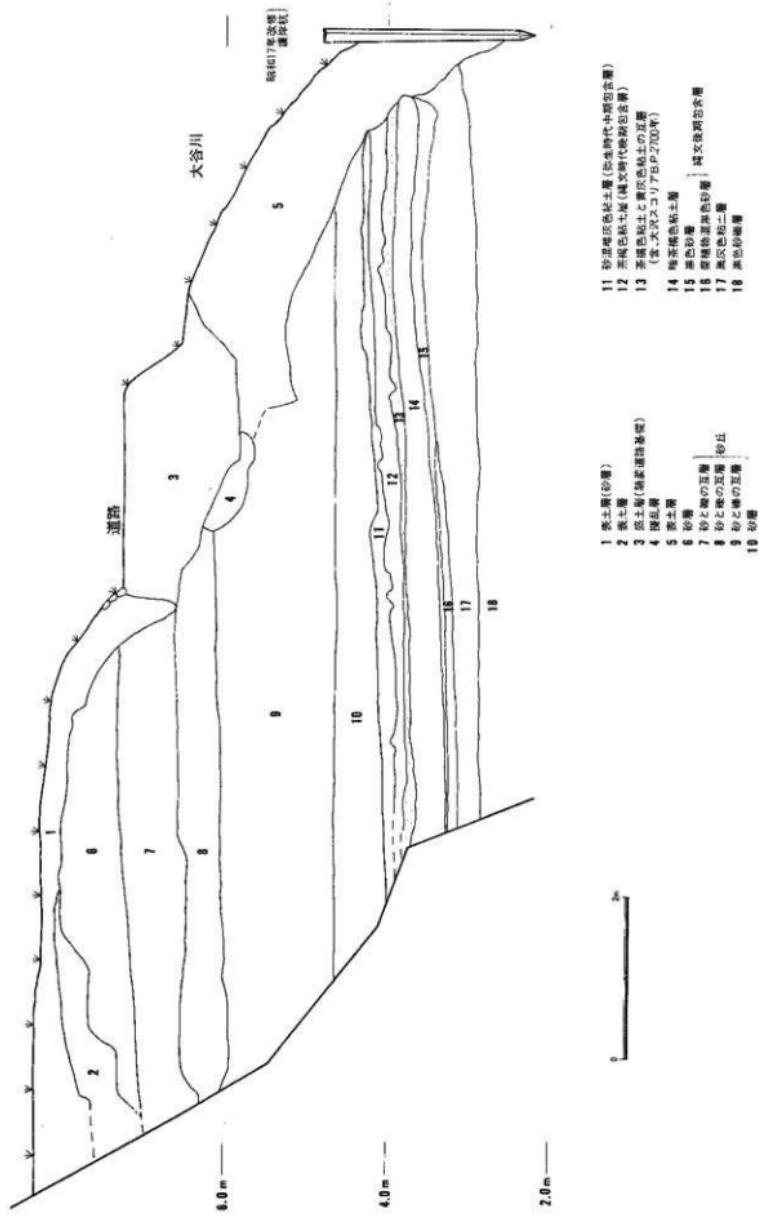
大谷2区では低湿地と微高地が検出されたが、微高地上には遺構も遺物もまったく検出されず、遺跡の南限を示していることが明らかとなった。低湿地内では予想もしなかった縄文時代後期から弥生時代中期にいたる遺物が出土した。このことは大谷川の形成される前段階において広がっていた沼沢地が魚貝類やヒシの実などの採集地となっていたことを意味し、周辺遺跡との関連をふまえて今後の発掘調査に重要な方向性を示したと言えよう。



第11図 大谷・西大谷地区グリッド配置図



第12図 大谷2区等高線図



第13図 大谷2区土層断面図

大谷1区・西大谷4区（第15図）

1. 概 要

大谷1区および西大谷4区は河口起点より450m上流に位置し、現大谷川の左岸部にあたる。全域が旧河道であり、大谷1区の16列に左岸が検出され、西大谷4区の25列に右岸が検出された。また19列を中心に中洲状の地形がみられ旧河道を二分する様相を呈する。旧河道の幅は約105mにおよび、古墳時代中期から近現代にいたるまでの小路路が蛇行をくりかえして幅105mの河川敷を形成している。左右岸および中洲を構成する粘土層は大谷2区でみられる低湿地内の土層と整合し、低湿地地形を浸食して河道が形成されたものである。

2. 遺 様 各 説

旧河道跡 旧河道は互いに重複しているため位置や幅を明確にすることは困難であったが、遺物の出土状況から古墳時代中期・古墳時代後期・鎌倉時代・中世・近世～昭和17年の流路の位置を推定した。

古墳時代中期の旧河道はS20・21グリッドを中心とした高まりに沿って北から南に流れる。この部分は河床最深部標高が0mにまで到達し、厚さ2mにおよぶ砂疊で被覆されている。遺物の量は少ないものの完形の壺形土器が1点出土した。

古墳時代後期の旧河道は中洲状地形の両側でT列とS列に分離された状態とみられる。いずれも80cmほどの厚さをもつ粘土泥り砂疊層で覆われ、土師器・須恵器が散見されるが、量的にはS列の方が多い。S21グリッドでは上器だまりもみられた。

鎌倉時代の旧河道も古墳時代後期とほぼ同一地点を北から南に流れるが川幅をやや広げている。覆土は暗灰色の粘土にかわる。R21グリッドでは2号木簡（「一 南無阿○○○」）と3号木簡（「天足 ○○○」）に伴って人形木製品・箸状木製品・小型板塔婆・蝶形木製品・金剛草履・鉄鎚・短刀などの祭祀的な遺物も出土している。またT20区では同一層位より折敷も検出された。

中世の旧河道は全域に広がり沼沢地化の様相を呈し、暗青灰色粘土で広く覆われる。遺物はほとんど含まれない。

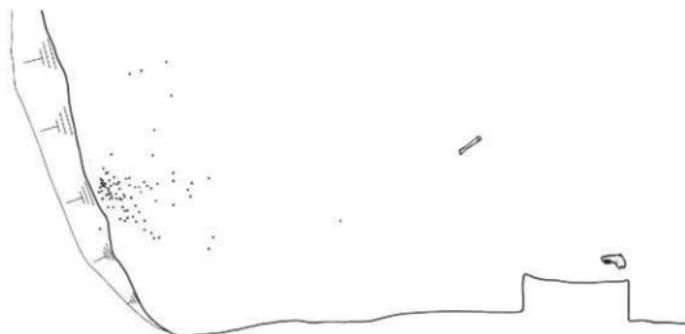
近世～昭和17年までの旧河道はU16グリッド付近を北東から南西に流れている。検出された左岸はこの時代の岸である。河道内は赤褐色の砂疊で被覆され、わずかに志野焼皿や五輪塔などが検出されたのみである。

SX01（第14図）S20グリッドで検出された集石遺構である。鎌倉時代の旧河道とほぼ同時期と思われる。地形的には旧河道に面した中洲状部分の縁辺にあたる疊は6m四方の範囲に広がり、周辺に人頭大以上の疊があり、中心部にはこぶし大の円疊がおかれる。このうち9個の疊に火を受けた痕跡がみられるがそれらは散在している。出土遺物は2点の馬骨と92枚の宋錢がみられる（第2表）。馬骨は大型の疊が集中する部分で検出され、1点は下顎骨が良好に遺存していた。錢貨は西側部分に密集しており、初鎌年1039年の「皇宋通宝」の12枚を最高に、初鎌年621・845年の「開元通宝」から初鎌年1225年の「大宋元宝」まで24種類がある。遺構の年代は錢貨の铸造年代と、明銭を含まない点から13世紀を上限とすることができよう。

遺構の性格は不明ながら、馬骨が出土している点と同時代の旧河道（R21グリッド）から呪符木簡や人形木製品などの祭祀遺物が出土していることから、祭祀的性格をもつ可能性もある。錢貨も西大谷6区宮川4・5・6区の旧河道内で検出されており、目的をもった投棄であろう。

残存名	初期年	枚数	残存名	上期年	枚数	
頸元通宝	821～845	6	頸元通宝	1056	1	
宋	968	1	高麗正字	宋	1268	7
宋	995	2	高麗正字	宋	1078	2
宋	995	3	元口通宝	宋	1096	10
宋	1064	3	高麗正字	宋	1094	7
宋	1068	5	高麗正字	宋	1098	3
宋	1098	1	高麗正字	宋	1101	1
宋	1123	2	高麗正字	宋	1111	5
宋	1223	4	初期通宝	宋	1111	5
唐	1234	2	高麗通宝	宋	1208	2
宋	1039	12	大宋元宝	宋	1225	1
宋	1054～55	1	不		4	
宋	1056	2				

第2表 大谷1区SX01出土錢貨一覧（計92枚）



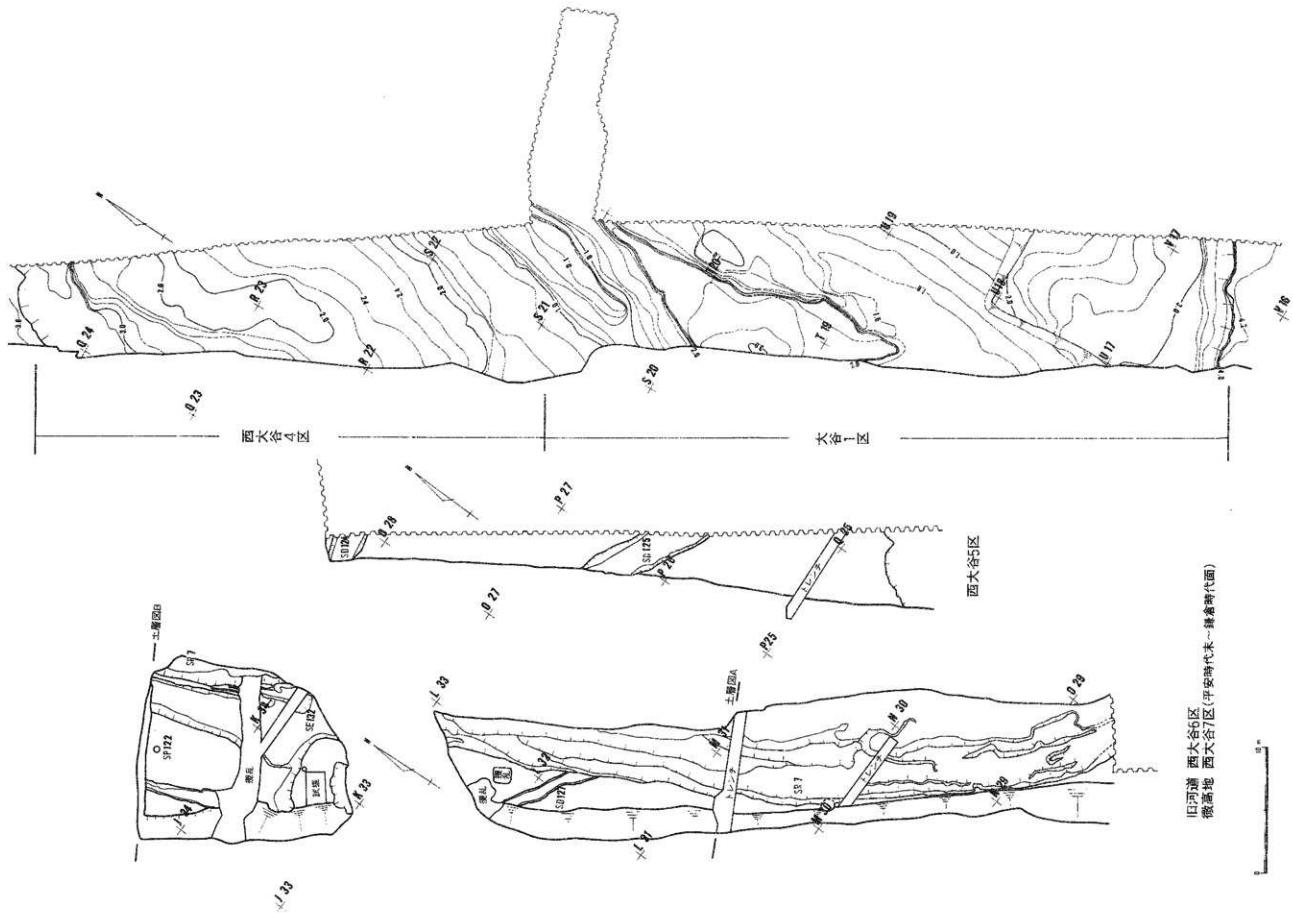
古錢・馬骨分布図



3.0 m



第14図 大谷1区 S X 01 実測図



第15図 大谷1区・西大谷4・5・6・7区全体図

日向川 西大谷6区
後高地 西大谷7区(平安時代末~鎌倉時代)

西大谷 5 区（第15図）

1. 概 要

西大谷 5 区は河口起点より 550 m 上流に位置し、現大谷川の左岸となる。大谷 2 区、西大谷 6・7 区と整合する低湿地内の粘土層堆積を示すが、遺物の包含量は希薄である。遺構は平安時代以降に掘削された溝状遺構（SD124）と弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝状遺構（SD125）の 2 個所のみである。

2. 遺構 各説

SD125 O26・P26 グリッドで東西方向に検出された溝状遺構である。確認面での幅は 3.0 m、延長は約 9 m を測る。深さは 0.37 m であるが、検出面での標高が 3.8 m～3.9 m であり、後世の削平を受けていることは確実である。基本十層のレベルを参考に復元すると、当初の深さは 0.9 m～1.0 m と推定される。出土遺物は壺形土器・甕形土器を中心とする上器片のはか木製柄杓、不明木製品、磁石などが出土した。弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落は現大谷川の対岸（右岸）の微高地上で検出されている。西大谷 5 区は右岸の微高地から連続する低湿地の東向きの傾斜面に相当することから、右岸の集落域に対応する遺構の存在が予想される。

西大谷 6・7 区（第15図）

1. 概 要

西大谷 6・7 区は河口起点より 580 m 上流に位置し現大谷川左岸にある。旧河道部分を西大谷 6 区とし旧河道以外の包含層を西大谷 7 区と呼称した。旧河道はゆるやかな湾曲をみせながらほぼ調査区を北から南に縦断する。微高地は本来の低湿地地形が粘土の堆積により微高地化した地区であるため井戸状遺構・溝状遺構・小穴などをもつ集落が営まれるのは平安時代末～鎌倉時代のみであった。しかし、低湿地地形が残っている部分であっても北半部では傾斜面上に古墳時代前期の遺物が大量に投棄されていた。33・34列は大谷 2 区から続く低湿地内包含層の遺存状態が良く、古墳時代前期の遺物を大量に包含する地点でもあるため以下に詳述する。

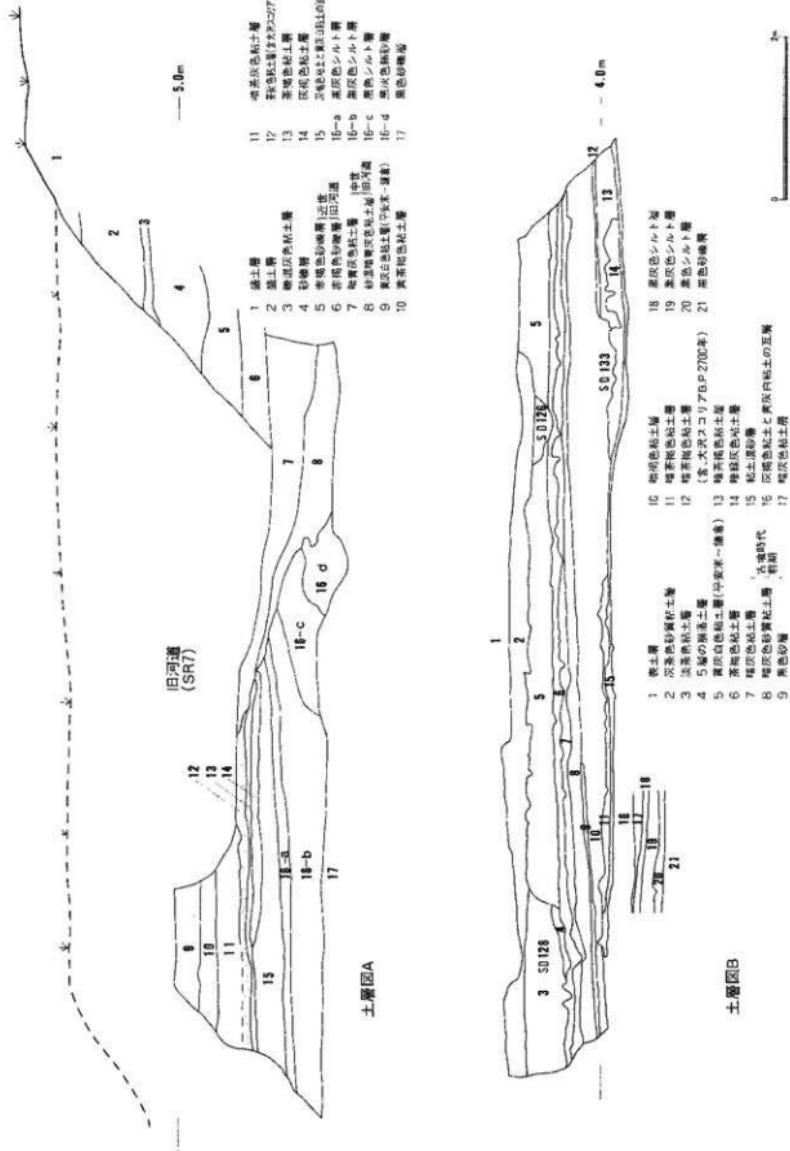
2. 土 層

1 層は表上層であり重機によって除去した。2 層は近世以降の耕作土である。3・4 層は溝状遺跡（SD128）の覆土である。5 層は黄灰白色を呈する粘土層で平安時代を中心とする小海進期に沿沢地化して堆積した土層と考えられ、土中に含まれるリン酸鉄が還元し白色を呈しているとみられる。5 層上面では井戸状遺構（SE132）、溝状遺構（SD128 他）、小穴（SP122）などが検出される。また 5 層は中近世においてはさかんに採掘され、その痕跡が水上 1 区や水上 6 区に顕著にみられる。6 層は茶褐色の粘土層である。古墳時代後期から奈良時代までの須恵器・土師器を包含するが遺構はみられない。7 層は暗灰色の粘土層で上師器のみを包含する。古墳時代前期末頃と考えられる。8・9 層も古墳時代前期の包含層である。この 8・9 層については南西から北東に傾斜する地形の窪地部分にまず 9 層の黒色砂層が堆積し、そのうち 8 層の暗灰色砂質粘土層が堆積したものと観察できる。両層とも遺物を大量に包含していた。12 層では富士火山を起源とする火山灰（人沢スコリアー B.P. 2700 年頃）がみられる。12 層は大谷 2 区の 13 層と整合する。15 層は大谷 2 区の 15・16 層と整合し、縄文時代後期の包含層と思われるが遺物はきわめて少なく判然としない。

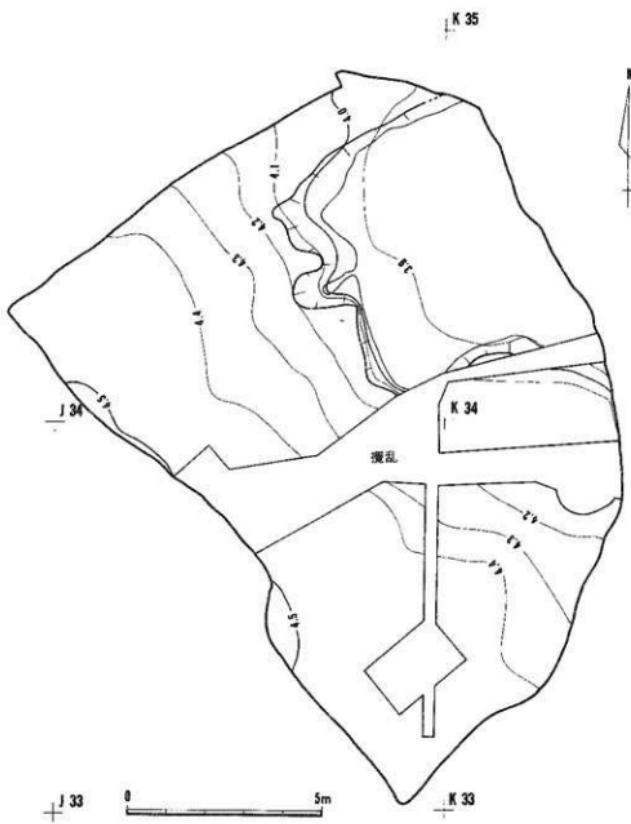
3. 5 層の調査

5 層では旧河道（SR7—西大谷 6 区）のほか井戸状遺構 1 基、溝状遺構 5 本、小穴 3 個所が検出された。

SR7 中世の旧河道（第15図）と近世から昭和17年の旧河道が重複して検出された。右岸部のみの検



第16図 西大谷6・7区土層断面図

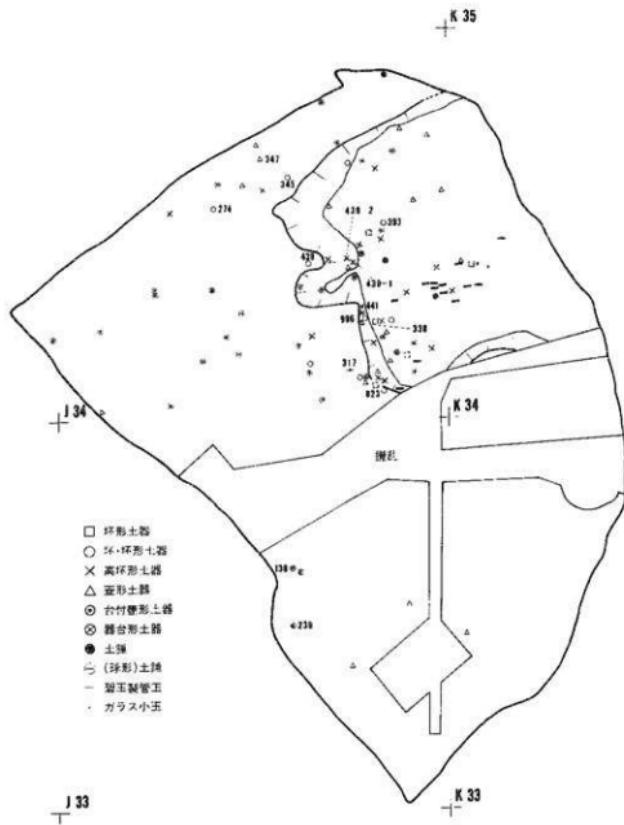


第17図 西大谷7区(北区) 古墳時代前期面等高線図

出であったため川幅は不明である。中世の旧河道は暗青灰色の粘土層(7・8層)を覆土としている。出土遺物は少ないが漆椀が3点検出された。近世から昭和17年までの旧河道は赤褐色砂疊層(5・6層)を覆上にもち陶磁器片が出土している。

SE 132(第116図) K 33グリッドで検出された井戸状造構である。上面をヒューム管埋設に伴う掘削により破壊されているため全容は明らかではないが、直徑1.65mほどの円形掘り方をもつと推定される。井戸枠は四隅に角柱をもつ縦板組である。角柱は掘り方底面に小坑を穿ち据えている。縦板は西辺に幅5cm~10cm程度のものが8枚残存している。角柱の上端部には柄穴がみられることから横桟によって縦板をとめていたと考えられる。

掘り方底面は標高3.69mを測るが、全面を水留とするのではなく、北側に寄せて2段に掘り込み水留をつくりだしている。井戸枠内覆土中層より赤彩された手捏ねの小皿形上器が出土している。年代は



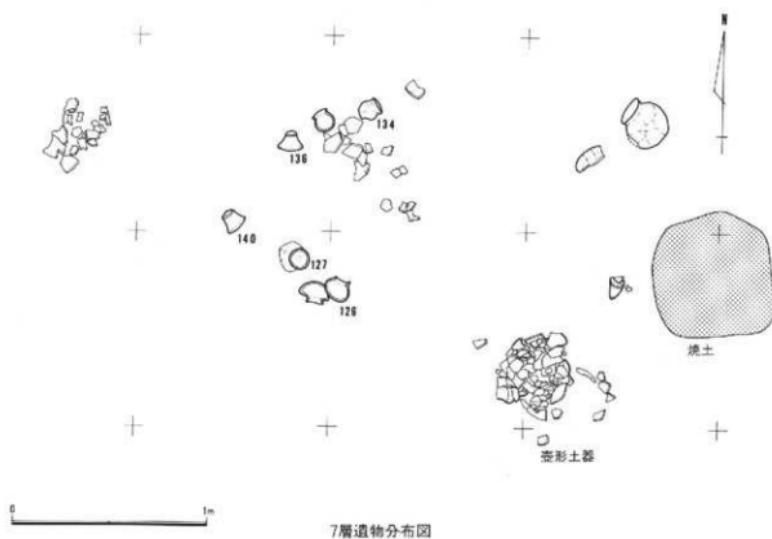
第18図 西大谷7区(北区)8・9層遺物分布模式図

肩位から平安時代末から鎌倉時代と推定する。

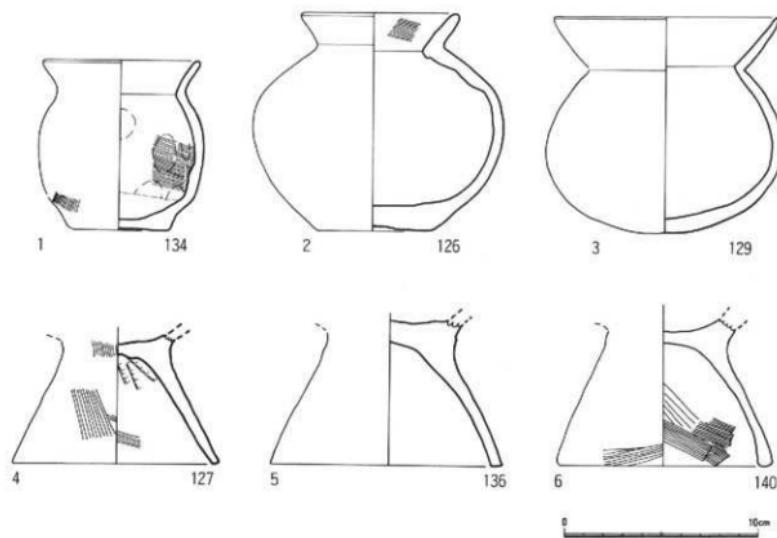
SP122 J34グリッドから検出された円形の小穴である。長径 0.75 m、短径 0.66 m、深さ 0.32 m を測るが、関連する小穴はなく柱穴とは考えられない。覆土中から盃形を呈する完形の手程上器 2 点が出土している。

4. 7層の調査

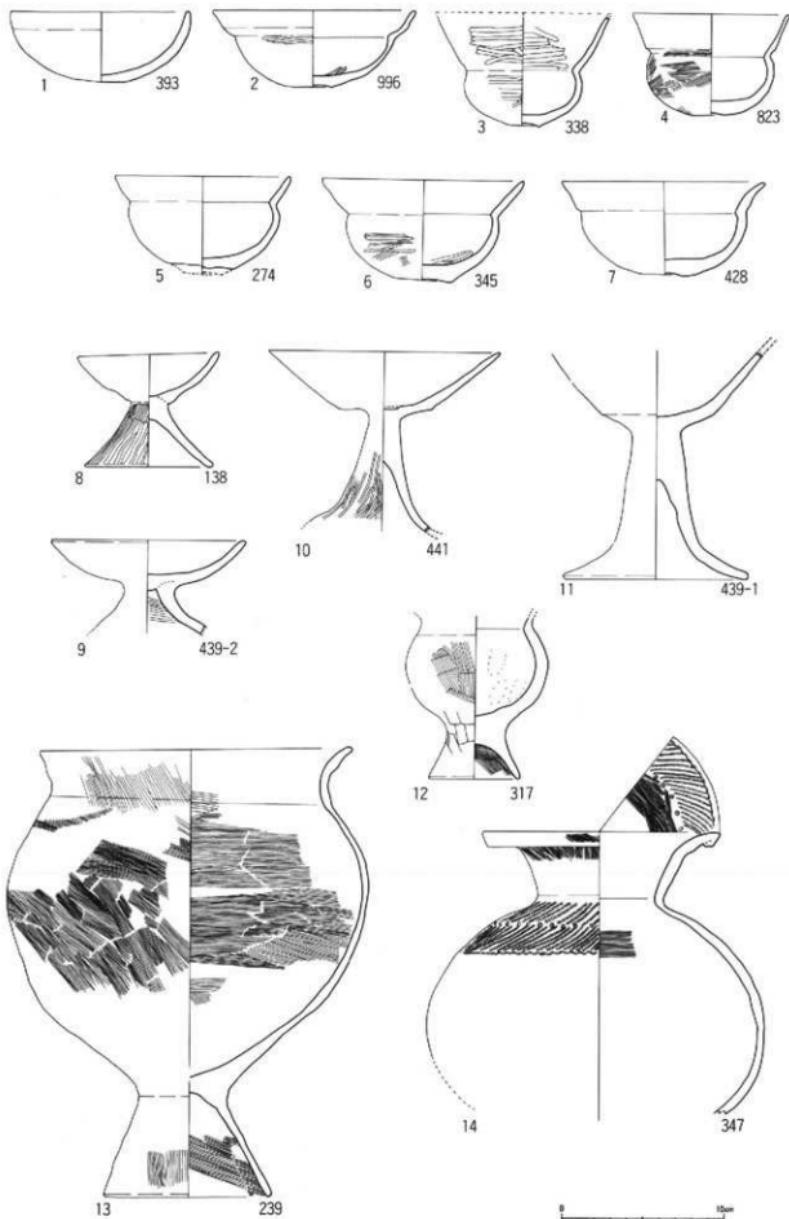
J33グリッドで焼上とともに台付變形土器、変形土器、高杯形土器などが一括で出土した(第19図)。柱穴などはみられず住居跡とはならない。集落の中心からも離れていることから屋外の炊事場的な個所と考えられる。



7層遺物分布図



第19図 西大谷7区(北区)7層J 33グリッド遺物図



第20図 西大谷7区(北区)8・9層出土土器実測図

第3表 西大谷7区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	遺構面 標高	特記事項
SP121	M30	1.00	0.95	0.63	0.95	4.61	
SP122	J34	0.75	0.66	0.32	0.88	4.75	手握土器2点
SP123	J・K34	0.50	0.40	0.18	0.8	4.91	

第4表 西大谷5・6・7区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面 標高	特記事項
SD124	N28	(1.24)	0.84	1.12	4.16	中世時代以降
SD125	O26	(9.00)	3.00	0.37	3.79	弥生時代末～古墳時代(前期)
SD126	J34	(2.35)	0.55	0.10	4.81	平安時代末～中世
SD127	K31	(2.72)	0.42	0.21	5.04	平安時代末～中世
SD128	K34	(8.00)	1.75	0.50	4.74	平安時代末～中世
SD129	K・J33	(3.56)	3.20	0.33	4.97	平安時代末～中世
SD130	K34	(3.15)	0.74	0.28	4.36	平安時代末～中世
SD133	J34	(6.92)	1.65	0.29	4.02	

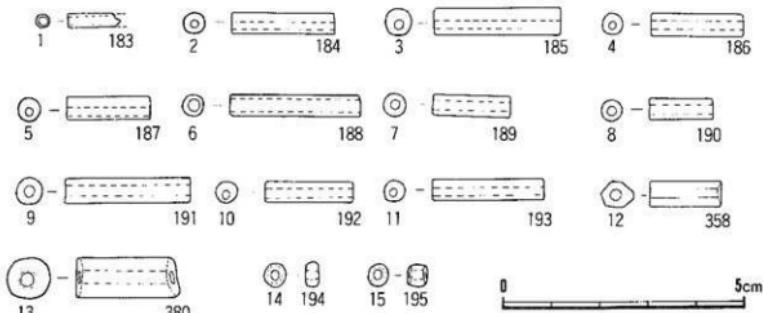
5. 8・9層の調査

8・9層は南西から北東に下降する傾斜面上に堆積した包含層である。北東部の窪地部分での標高は3.9mを測り、最高位との比高差は0.6mである。遺物は土器を中心にしてJ34・K34グリッドにわたって検出されるが(第18図)、壺形土器は周辺に多く出土し、高杯形上器、器台形土器、壺形上器などは窪地の縁で多く出土している。玉類は窪地中央部に密集する傾向を示していた。器種構成では壺形類が過半数を占めている。

また窪地の縁に沿って20本の杭が打ち込まれていた。

6. まとめ

本遺跡で古墳時代前期の遺構が集中するのは西大谷8区を中心とする微高地である。西大谷8区と西大谷7区の検出面での比高差は1m～1.5mと大きく低湿地にむかう急な傾斜面上に西大谷7区が位置する。また出土遺物は、玉類をはじめとして壺形土器や器台形土器など祭祀的性格を認めることができる。本遺跡での祭祀のあり方は「水辺のまつり」に代表され、この西大谷7区のあり方が「水辺のまつり」の初現の形態をもつと考えられる。



第21図 西大谷7区(北区)8・9層出土玉類実測図

西大谷 8 区（第22図）

1. 概 要

西大谷 8 区は河口起点より 720 m 上流に位置し、現大谷川の右岸にあたる。南北 140 m におよぶ細長い調査地区である。南半部は中世の旧河道が検出され、北半部の微高地上では 48・49列を中心とする弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構が検出された。包含層は 1 層のみで、盛土層と近世以降の耕作土を除去すると基盤層の黄灰白色粘土層になり、掘り込まれた遺構が確認された。検出された遺構には掘立柱建物（SH378）、溝状遺構（SD348、359）、大型柱穴列、土坑（SP354）などがあり、切り合ひをみせながら連続して構築されていた。

2. 遺構 各説

SH378（第25図） Z48グリッドにある桁行 2 間染間 1 間の掘立柱建物である。桁行 3.73 m、染間 3.17 m を測る。平側の柱間寸法は等間隔となりず 2.25 m と 1.50 m となり北側で狭い。柱穴掘り方は長方形プランを基本とするが不整形である。寸法は長軸とともに 40 cm ~ 50 cm ほどの範囲におさまる。礎板を残す柱穴が 2 個所あり 1 枚あるいは 2 枚の板を用いている。柱穴のひとつである SP336 は SP337 を切り、SP372 は SD348 に切られていることから溝状遺構や大型柱穴をもつ掘立柱建物が構築される前段階の建物であり、もっとも古い時期が想定される。

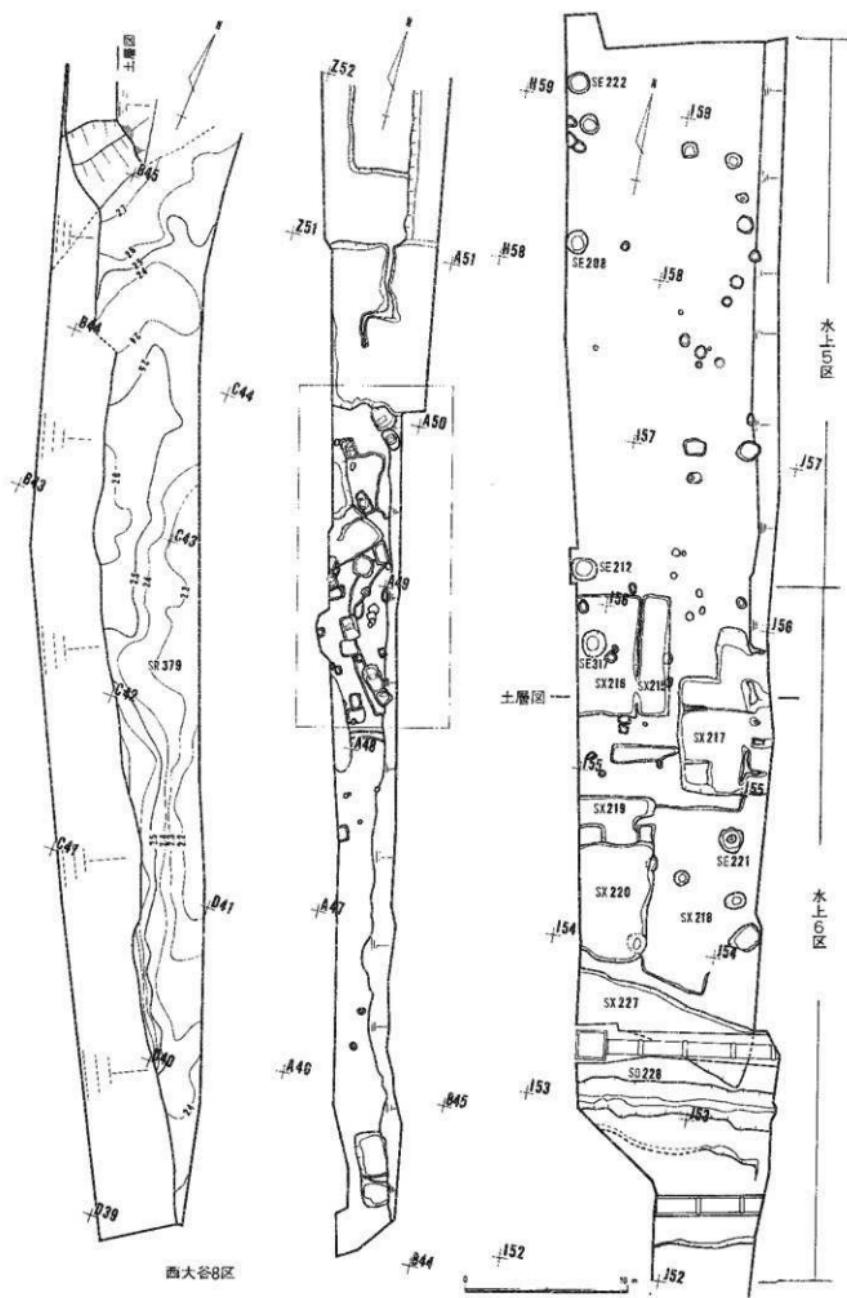
SD348 Z48・49グリッドにまたがって検出された三日月形を呈する溝状遺構である。延長 3.55 m、最大幅 1.0 m、深さ 0.24 m を測る。SD348 は SH378 を切り、大型建物の柱穴 SP350、SP333 によって切られている。このことから、SH378 の次段階で大型建物の前段階に構造されたことになる。同一規模の SD359 も SP340、SP360 によって切られていることから、SD348 と SD359 は同一時期のものである。

大型柱穴群（第24図） 48・49列には長軸約 1.5 m、短軸約 1 m 程度の掘り方をもつ柱穴が 9 個所発見された。A-A'列には北から SP349、SP333、SP340、SP360 がならび、B-B'列には北から SP353、SP355、SP350 がならぶ。掘り方は明らかではないものの礎板の存在から、B-B'列の東側に SP330 と SP377 が確認できた。礎板は 7 個所の柱穴で検出され 40 cm × 60 cm の板材を 1 枚、あるいは 15 cm × 20 cm 程の板材を 2 枚敷いていた。このうち SP340 の礎板は一本造りの梯子を断ち切り転用していた。SP349・SP333・SP340（A-A'列）は直線上にならび柱間寸法が 3.4 m で等間隔に配置されている。これを掘立柱建物の平を構成する柱列の一部とした。SP353・SP355・SP350（B-B'列）も直線上にあり、柱間寸法も 3.35 m と等しい。したがってこれもセットと考えられる。A-A'列と B-B' 列は同一の規格をもって構築されているが一軒の建物とみると、軸線方位のわずかな相異もあり問題が残る。

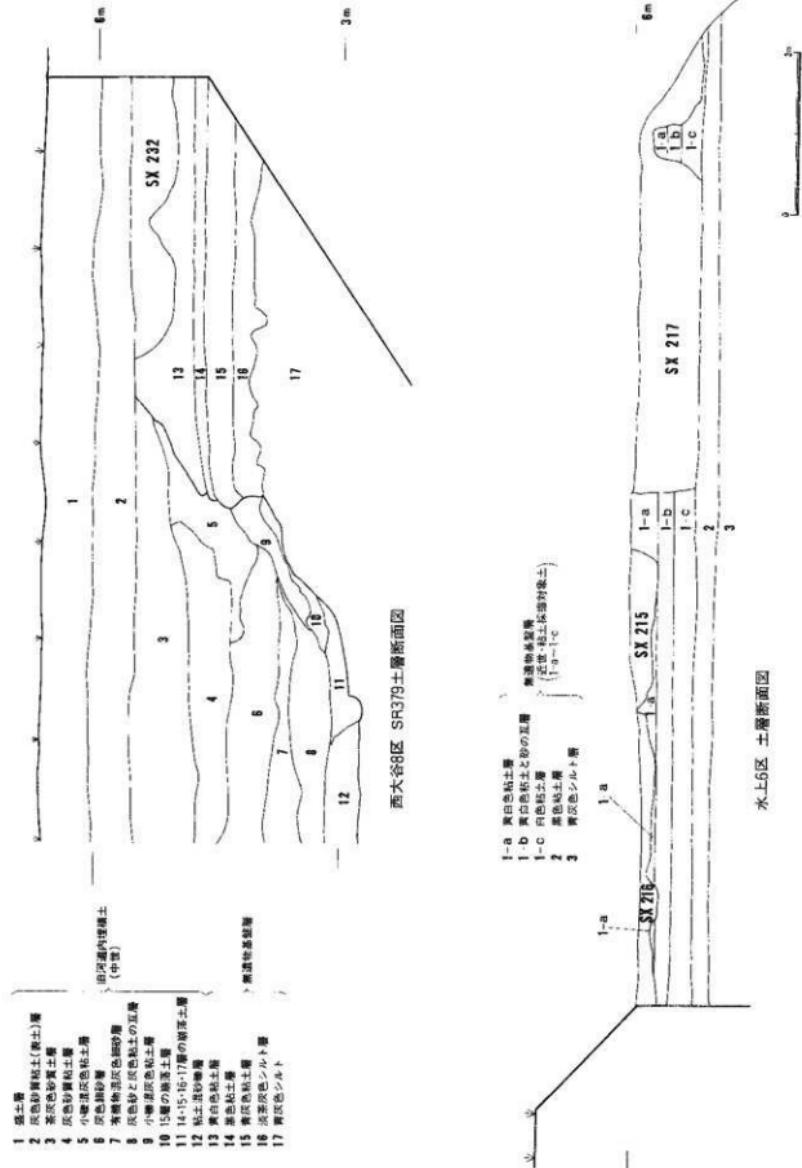
この大型掘立柱建物は SD348、SD359 を切って構築され、土坑状遺構 SP354 によって切られていた。
SP354（第27図） Z49グリッドにあり大型掘立柱建物の柱穴 SP355 を切っている。直径 0.58 m を測る不整円形の土坑状遺構である。深さは 0.12 m と浅い。内部には古墳時代初頭に比定される壺形土器（第26図）が出土した。

SE332（第116図） Z49で検出された素掘りの井戸状遺構である。長軸 1.24 m、短軸 1.21 m を測る隅丸正方形の平面プランを有する。深さは 0.72 m を測る。復土から平安時代以降の遺構と推定される。

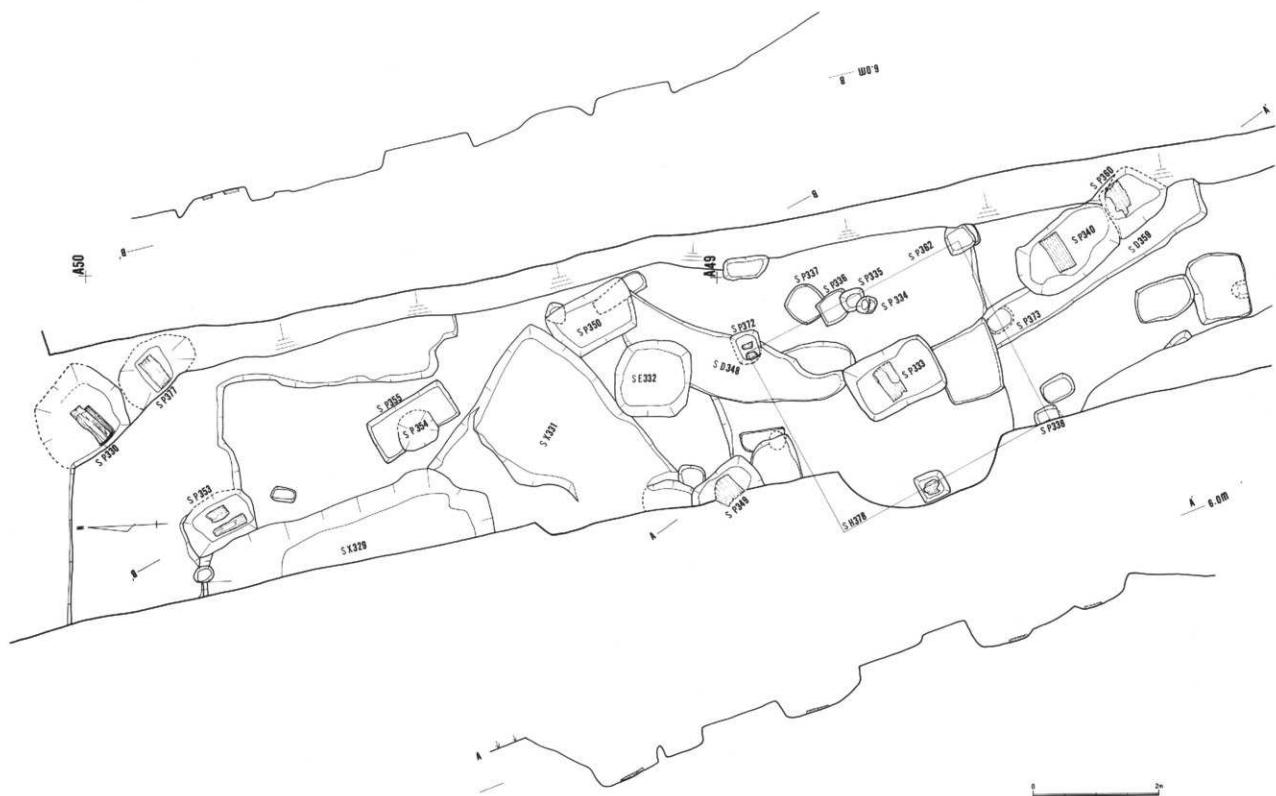
SR379（第22図） 39列から 44列にかけて検出された旧河道である。A44グリッドで検出された岸は右岸となる。河道は北東から流れ込み屈曲して南東にむかっている。中世旧河道の蛇行で攻撃斜面側の頂点に相当する。河床最深部標高は 2.2 m を測り、検出面との比高差は 3.3 m と非常に深い。遺物はほとんど含まれず土師器・須恵器の小片と漆碗が出土したのみである。SR379 は西大谷 6・7 区の SR7 に連



第22図 西大谷8区、水上5・6区全体図



第23図 西大谷8区・水上6区土層断面図



第24図 西大谷8区Z48・49グリッド遺構実測図

続する旧河道跡である。

3. まとめ

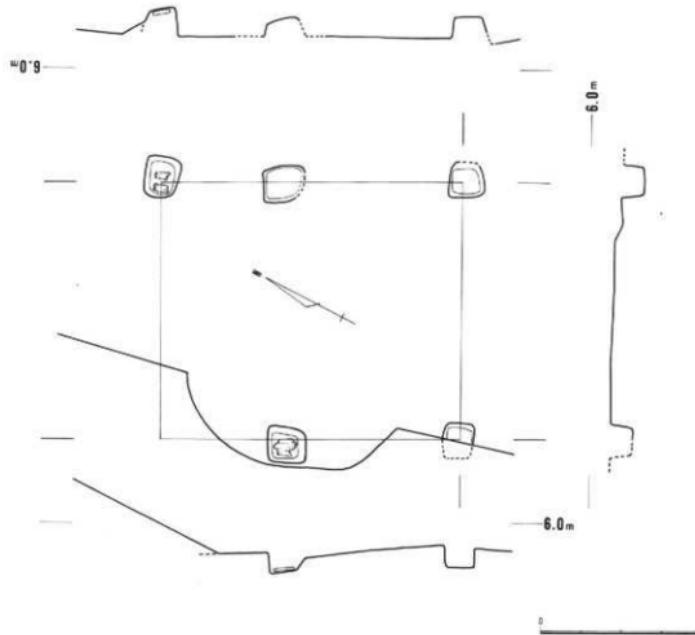
西大谷8区は南北に細長い調査区であったが48・49列で検出された掘立柱建物をもつ集落の存在が明らかとなった成果は大きい。遺構の変遷と年代を切り合い関係や遺物からまとめてみると以下のようになる。

- 第1段階 SH378が存続した時期
- 第2段階 SD348・SD359が存続した時期
- 第3段階 大型の掘立柱建物が存続した時期
- 第4段階 SP354が掘削された時期

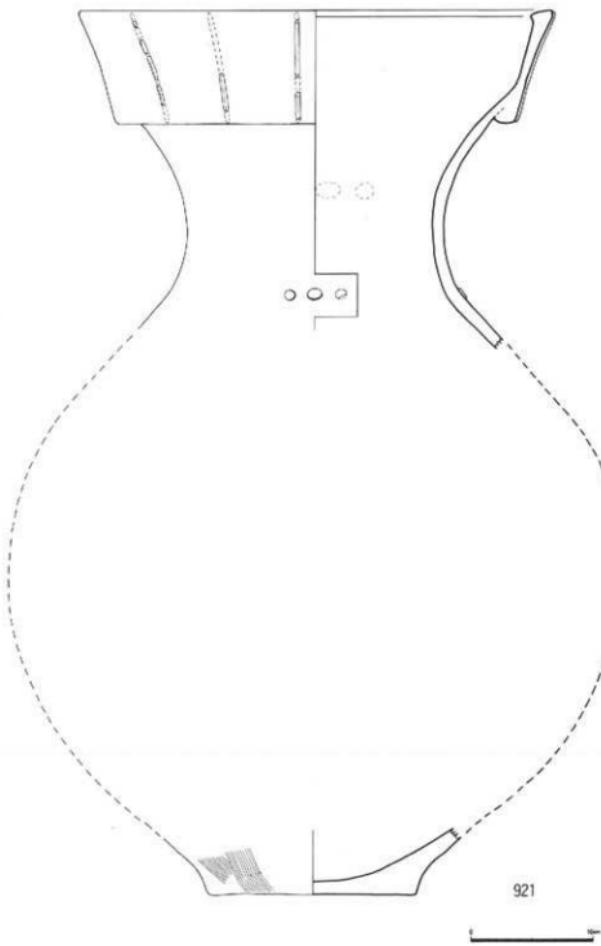
第4段階のSP354から出土した壺形土器は古墳時代初頭に比定されることから下限年代が決まる。柱穴、溝状遺構から出土した土器片は弥生時代後期末頃に比定できる。したがって第1段階から第4段階は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の変遷としてとらえることができる。50列以北は近世の粘土探掘

第5表 西大谷8区溝状遺構一覧表

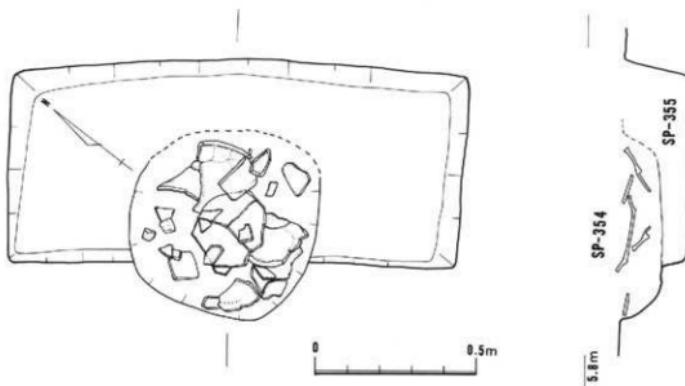
遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面高	特記事項
SD342	A48	2.08	0.50	0.30	5.62	
SD348	Z48・49	(3.55)	1.00	0.24	5.62	
SD359	Z・A49	(4.20)	0.72	0.30	5.67	



第25図 西大谷8区SH378実測図



第26図 西大谷8区SP354出土土器実測図



第27図 西大谷8区SP-354実測図

によって基盤層深部まで破壊され、47列以南は耕作によって削平されていた。集落域の範囲を想定する場合にこの搅乱が障害となつたが、水上1区および水上5・6区では同時期の遺構が散見される程度であること、昭和57年度に静岡市教育委員会によって調査された高松1・2区でも掘立柱建物が発見されていることから高松1区から西大谷8区の低湿地に面した微高地上に集落の中心があることが確実となつた。

西大谷3区（第29図）

1. 概要

現大谷川右岸で河口起点より830m上流に位置する長さ25mの調査区である。南側は、昭和58年度の調査区である西大谷2区に接し旧大谷川右岸を形成している。調査区中央やや東側に南北に走る現代水路があり搅乱を受けていた。基盤層である白色粘土の上に黄灰白色粘土層が南西に緩やかに傾斜しながら堆積している。現代用水路東側ではこの粘土層上面に溝状遺構・小穴・井戸状遺構が検出され、平安時代末から鎌倉時代の遺構面となつている。用水路西側では黄灰白色粘土層は薄くC50グリッドではほとんど検出されなかった。C51グリッドのSX66、B50グリッドのSX67は近世の粘土採掘跡であり、黄灰白色粘土と基盤の白色粘土層が採掘されていた。さらに下層では50列北側から51列にかけて12m～17mの幅で調査区を横断するように基盤の白色粘土が採掘されていた。埋土中の遺物より古墳時代前期と推定される。同種のものは水上1区でも検出されている。D50グリッドでは埋土の暗茶褐色粘土にも小穴が掘り込まれていた。

2. 遺構各説

SD68 B50グリッドからC51グリッドで検出された。幅0.60mで弧状に存在し、延長18.50m、深さ0.21mを測る。内側には小穴も検出され、居住域を区画した溝とも考えられる。覆土中より山茶碗が出土している。

SE62 D50グリッドで検出された。長径1.34m、短径1.21mの長円形プランをもち、深さ1.71mを測る素掘りの井戸状遺構である。掘り込み面は黄灰白色粘土で、底面の青灰色シルト層が滞水層と考えられる。

第6表 西大谷8区柱穴・小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長 線	短 線	深 さ	長短比 (長線=1)	遺構面標高	特記事項
SP229	A48	—	—	0.12	—	5.61	
SP330	Z49	(1.50)	(1.50)	0.15	(1.00)	5.40	礎板
SP333	Z48	1.44	0.95	0.43	0.66	5.62	礎板
SP334	Z48	0.33	0.28	0.29	0.85	5.60	
SP335	Z48	0.39	0.33	0.25	0.85	5.65	
SP335	Z48	0.51	0.47	0.24	0.92	5.60	SH378
SP337	Z48	0.62	0.58	0.17	0.94	5.60	
SP338	Z48	0.39	—	0.25	—	5.71	SH378
SP339	Z48	0.54	0.38	0.12	0.70	5.70	
SP340	A48	1.74	1.00	0.52	0.57	5.63	礎板
SP341	Z48	0.95	0.65	0.21	0.68	5.63	
SP343	A47	0.26	0.22	0.13	0.85	5.65	
SP344	A47	0.30	0.24	0.15	0.80	5.67	
SP345	A47	0.18	0.15	0.14	0.83	5.66	
SP346	A46	0.43	0.37	0.15	0.86	5.45	
SP347	A46	0.45	0.35	0.18	0.78	5.49	
SP349	Z48	1.15	0.85	0.35	0.74	5.69	礎板
SP350	Z49	1.40	0.83	0.22	0.59	5.62	
SP351	Z49	0.92	0.30	0.13	0.32	5.46	
SP352	Z49	(0.40)	(0.30)	0.22	(0.75)	5.62	
SP353	Z49	1.16	0.77	0.18	0.66	5.62	礎板
SP354	Z49	(0.58)	0.58	0.12	(0.85)	6.00	
SP355	Z49	1.52	0.60	0.28	0.39	5.69	
SP356	Z49	0.39	0.22	0.06	0.56	5.70	
SP357	Z48	—	—	0.21	—	5.63	
SP358	Z48	1.15	0.92	0.16	0.80	5.61	
SP360	A48	1.08	0.89	0.21	0.82	5.32	礎板
SP361	Z48	1.22	0.57	0.11	0.47	5.61	
SP362	Z49	0.50	0.44	0.23	0.88	5.57	SH378
SP363	A48	0.75	0.33	0.20	0.44	5.59	
SP364	Z48	0.28	0.27	0.05	0.96	5.58	
SP365	Z48	1.05	0.85	0.07	0.81	5.63	
SP369	Z49	0.87	0.65	0.13	0.75	5.62	
SP370	Z48	(0.30)	(0.25)	—	(0.83)	5.42	
SP371	Z48	0.70	0.33	0.16	0.47	5.63	
SP372	Z48	0.55	0.43	0.20	0.78	5.52	礎板 (SH378)
SP373	Z48	0.45	(0.35)	—	(0.78)	5.46	
SP374	A44	0.24	0.20	0.15	0.83	5.65	
SP376	Z48	0.47	0.43	0.26	0.91	5.64	礎板 (SH378)
SP377	Z49	(1.35)	(0.85)	0.16	0.63	5.34	礎板

第7表 西大谷3区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径-1)	遺構面積高	特記事項
SP63	D50	0.58	0.44	0.13	0.76	5.58	
SP64	D50	0.48	0.46	0.14	0.96	5.60	
SP69	D50	0.54	0.39	0.51	0.72	5.58	
SP70	D50	0.32	0.30	0.09	0.94	5.60	
SP71	D50	0.30	0.23	0.11	0.77	5.61	
SP72	D50	0.42	0.30	0.17	0.71	5.60	
SP73	D50	0.28	0.28	0.10	1.00	5.58	
SP74	D50	0.24	0.23	0.07	0.96	5.59	
SP75	D50	0.32	0.30	0.21	0.94	5.63	
SP76	D50	0.32	0.29	0.05	0.90	5.63	
SP77	D50	0.24	0.23	0.11	0.96	5.58	
SP78	D50	0.33	0.28	0.11	0.85	5.58	
SP79	D50	0.28	0.21	0.11	0.75	5.63	
SP80	D50	0.31	0.28	0.14	0.90	5.63	
SP82	D51	0.24	0.22	0.20	0.92	5.60	
SP83	D51	0.32	0.25	0.11	0.78	5.62	
SP84	D51	0.26	0.23	0.14	0.88	5.61	
SP85	D52	0.20	0.17	0.06	0.85	5.58	第一面
SP86	D52	0.28	0.25	0.11	0.89	5.57	黄灰色粘土層
SP88	C51	0.77	0.67	0.34	0.87	5.40	
SP91	C50	0.37	0.24	0.11	0.65	5.30	
SP92	C50	0.44	0.29	0.19	0.66	5.33	
SP93	C50	0.25	0.23	0.09	0.92	5.34	
SP94	C50	0.38	0.26	0.12	0.68	5.36	
SP95	C50	0.28	0.24	0.09	0.86	5.27	
SP96	C50	0.34	0.31	0.09	0.91	5.33	
SP97	C50	0.38	0.32	0.06	0.84	5.30	
SP98	C50	0.25	0.24	0.06	0.96	5.33	
SP99	C50	0.25	0.24	0.13	0.96	5.28	
SP100	C50	0.23	0.21	0.09	0.91	5.31	
SP101	C59	0.26	0.22	0.15	0.85	5.35	
SP102	C51	0.50	0.39	0.17	0.78	5.25	
SP103	B51	0.44	0.31	0.04	0.70	5.18	
SP104	B52	0.51	0.46	0.09	0.90	5.33	
SP105	C50	0.32	0.26	0.16	0.81	5.33	
SP151	D50	0.24	0.23	0.16	0.96	5.45	
SP152	D50	0.27	0.25	0.20	0.93	5.40	
SP153	D50	0.32	0.28	0.04	0.88	5.42	第二面
SP154	D50	0.32	0.29	0.18	0.91	5.42	黑茶色粘土層
SP155	D50	0.41	0.37	0.37	0.90	5.45	

造構番号	グリッド	長　徑	短　徑	深　さ	長短比 (長短=1)	造構面標高	特記事項
SP156	D50	0.26	0.22	0.12	0.85	5.48	
SP157	D50	0.62	0.54	0.20	0.87	5.44	
SP158	D50	0.24	0.22	0.15	0.92	5.47	
SP159	D50	0.29	0.28	0.10	0.97	5.47	
SP160	D50	0.50	0.22	0.14	0.44	5.46	
SP161	D50	0.20	0.18	0.12	0.90	5.48	
SP162	D50	0.16	0.14	0.08	0.88	5.47	第二面
SP163	D51	0.28	0.24	0.06	0.86	5.55	黒茶色粘土層
SP164	D51	0.31	0.27	0.10	0.87	5.55	
SP165	D51	0.25	0.20	0.07	0.80	5.52	
SP166	D51	0.38	0.37	0.18	0.97	5.54	
SP167	D51	0.31	0.22	0.13	0.71	5.52	
SP168	D51	0.23	0.21	0.13	0.91	5.49	
SP169	D51	0.16	0.16	0.12	1.00	5.41	

第8表 西大谷3区溝状造構一覧表

造構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	造構面標高	特記事項
SD28	D50	37.90	2.70	0.55	5.52	昭和58年度 西大谷2区SD28に 連続(中世初頭)
SD68	B50	18.50	0.60	0.21	5.13	平安時代末～ 鎌倉時代
SD81	D51	2.70	0.74	0.13	5.63	

第2節 水上地区

水上1区（第29図）

1. 概要

水上1区は、河口起点より855m上流に位置し、現大谷川左岸部にあたる。地形的には、微高地である。ここでの遺物包含層は、次の3面が確認された。第1面では、近世の粘土採掘跡が4個所検出され調査区全面におよんでいた。第2面は、平安時代後期から中世にかけての面である。9層の黄褐色粘土を掘り込んでいる溝状遺構SD81と大型水路SR150が主要な遺構である。（第2面検出の中世遺構については、水上3区であわせて述べる。）第3面は、古墳時代前期から平安時代中期にかけての面である。古墳時代前期の遺構としては、15層の白色粘土から掘り込まれた井戸状遺構SE261、粘土採掘跡SX262ほか4個所。古墳時代中期の遺構としては、手握土器が一括出土したSX322。平安時代の遺構としては、井戸状遺構SE192が検出された。SE261とSE192は、ともに祭祀的性格をうかがわせる遺物が出土している。なお、L59グリッド、L58グリッドの現代水路より東側で、10層の紫茶粘土直上から古墳時代中期の土器が検出されている。（第35図 図版23-1）

2. 遺構各説

近世粘土採掘跡（図版19-2） 近世粘土採掘跡は、SX151・156・157・158の4個所が確認された。いずれも、4層の黄灰褐色粘土と9層の黄茶褐色粘土を30~40cmほど採掘しているもので、現大谷川に並行して約4.5m幅で南北約82mにわたって検出された。覆土中から、近世陶磁器が出土している。

SE261（第31図、第32図、図版20） L59グリッドで検出された井戸状遺構である。確認面で長径2.86m、短径2.83m、深さ1.45mを測る円形プランをもつ素掘りの井戸である。

a構造と機能 掘り方は4段階からなる。第1段階は、円形プランをもち、堅固な白色粘土層を深さ、0.45m掘削し、幅0.35m前後のテラス状の平坦面をつくりだしている。第2段階は、長径2.69m、短径1.65m、深さ0.45mの長円形の掘り込みである。白色粘土と黒色粘土の丘層と、シルト層への漸移層への掘削であり、約45度の傾斜をもたせている。第3段階は、伏流水の湧出するシルト層を深さ0.55mにわたり垂直に掘削している。塙水による井壁の一部崩落が確認されたものもこの層である。第4段階は井底中央部にみられる直径0.39m、深さ0.10mの円形の掘り込みである。この掘り込みにはめ込まれた状態で検出されたのが、リング状に巻かれた植物遺存体である。この第4段階は、22層の暗青灰色砂質粘土層に掘り込まれている。第3段階、第4段階あわせて湧水を溜める「水溜」と考えられる。

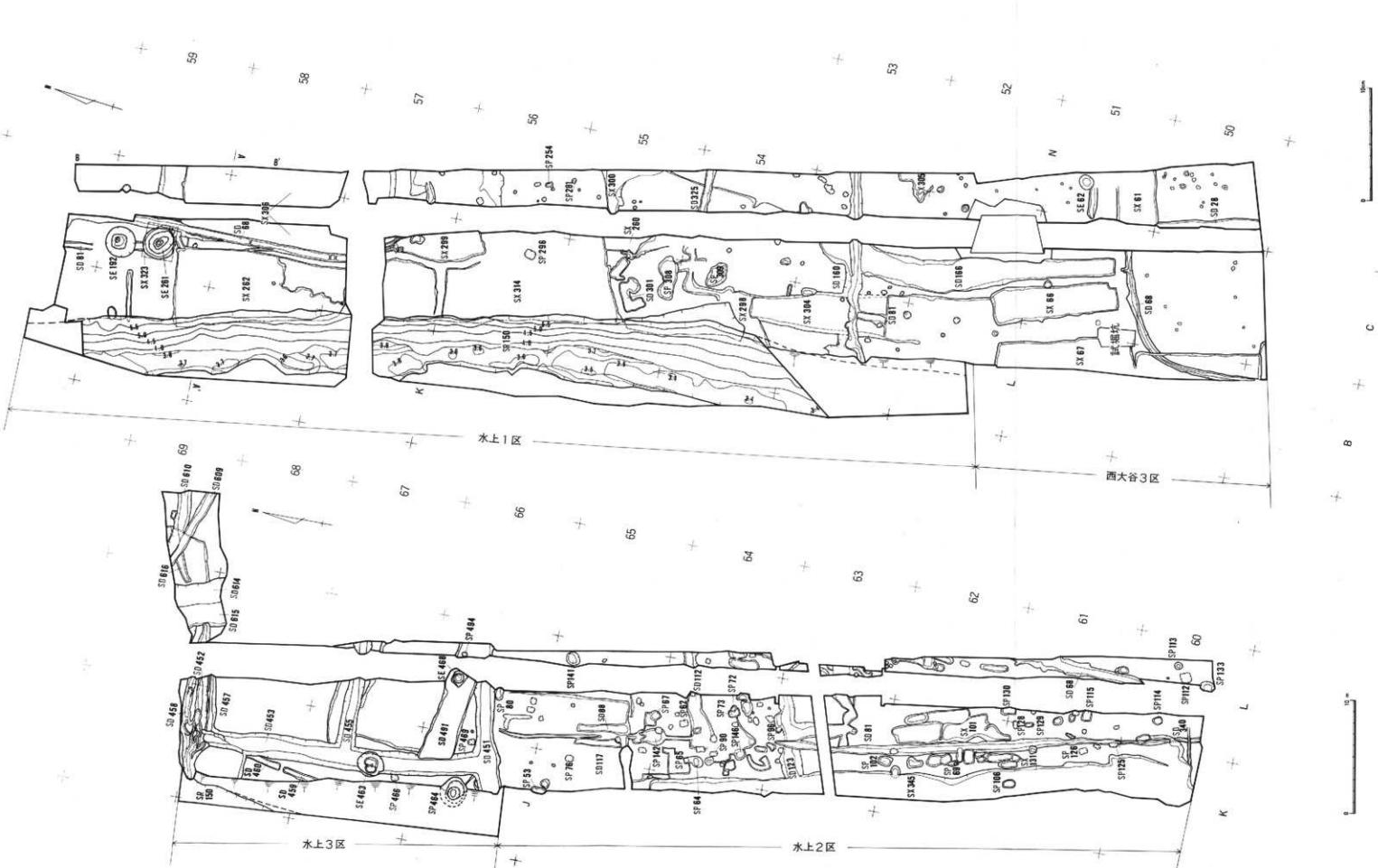
b出土遺物と井戸祭祀 主要遺物は、下層と中層から出土している。

下層では、井底のリング状植物遺存体の直上5cmの位置で木製広鏡の身が検出された。この広鏡の上には、30~40cmの厚さで砂質粘土が堆積していることから、井戸使用前か井戸浚え直後に井底に置かれたものと考えられる。井底には井神に対する豊水祈願を目的として、生活用具などを納置し、井戸浚えのときそれらを取り上げ、終了後再び井底へ納置する民俗事例もあり、本遺跡出土の広鏡も時代はへだたるが、今後検討を加えていきたい。

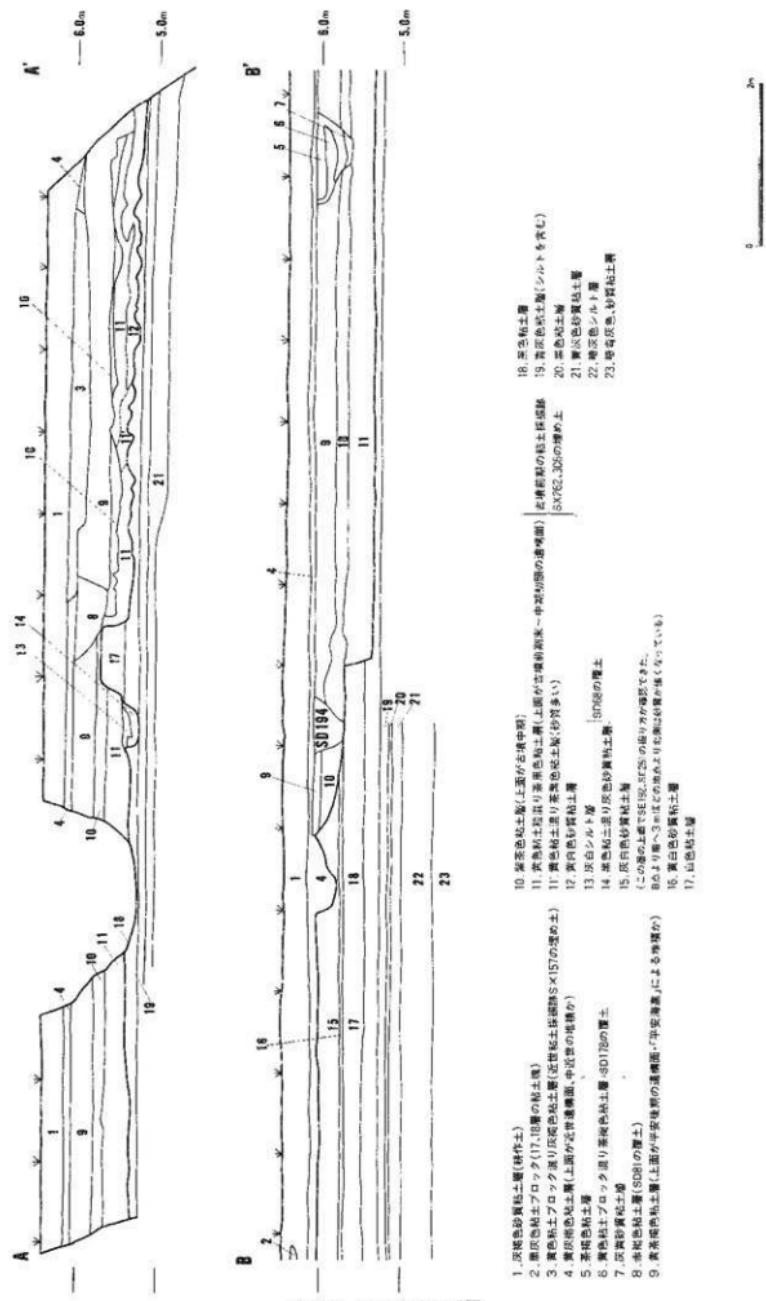
中層からは、一木作りの腰掛け状木製品（762）と古式土師器の壺形土器（758）が発見された。前者は、下層のシルト層に脚の部分が埋められるような状態で検出され、後者の壺は、腰掛け状木製品の直上3cmの位置で出土した。また壺の周辺からは木片、小礫、土師器の台付壺形土器、高杯形土器、壺形土器の破片などが井戸側の法面に沿うようにして検出された。これらの遺物を含む中層は、シルトの混じった粘土からなる。



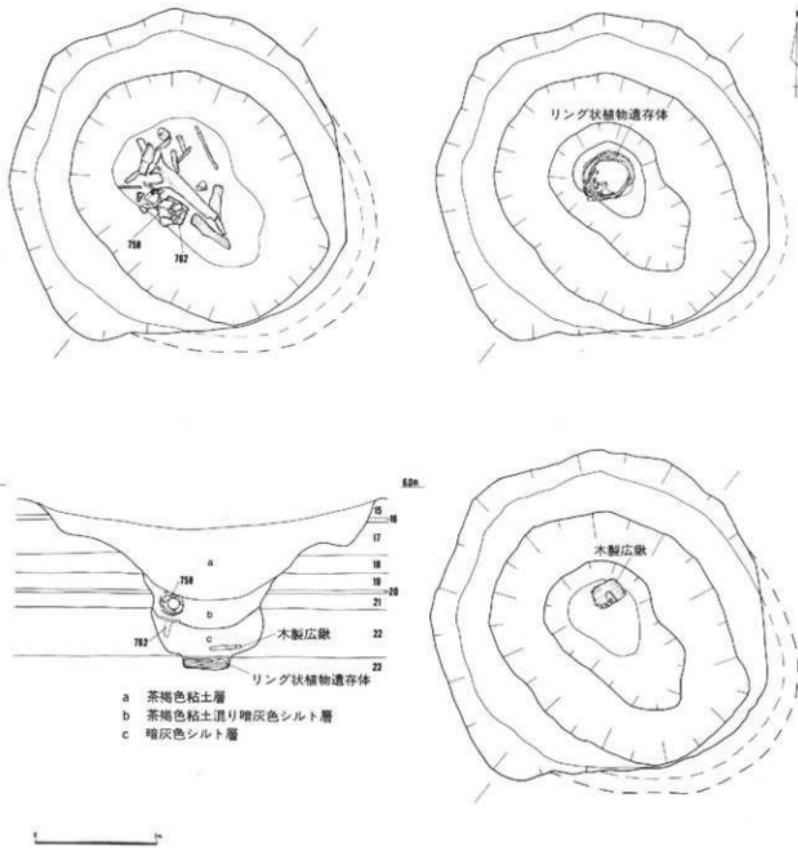
第28図 水上地区グリッド配置図



第29図 水上1・2・3区・西大谷3区全体図



第30図 水上1区土層図



第31図 水上1区SE 261実測図

中層出土の腰掛状木製品とその直上で検出された壺形土器は、検出状況から考えるとセットで納置された可能性が強い。これは、第3段階・第4段階の埋積（素掘りの井戸からの砂質粘土の剥落などによる自然埋積）が完了した後、井戸機能終了時の埋井の祭料とも考えられる。上層での夥しい土器片の検出は、埋井祭祀が行なわれ、井戸としての機能、神性がともに消滅した後、土器捨て場となったと推定している。なお穿井と埋井祭祀の執行された時期は、出土遺物およびSD68に切られていことから、古墳時代前期とする。

SD68（第29図）水上2区L62グリッドから水上1区L58グリッドまで40mにわたって検出されている。直線的に南下し、L57グリッドで南東方向に弧を描いて曲がり、M57グリッド南部では、再び直線的に東流する溝状遺構である。確認面で最大幅0.88m、深さ0.72m、延長54.75mを測る。覆土中より古式土師器片が出土しており、古墳時代前期の溝といえる。

SX262・SX306（第29図）ともにSE261の南側で検出された粘土探掘跡である。両者は、L59・L59グリッド南部からL57・M57グリッドまで拡がる。前者は、長さ23.0m、幅5.9m、後者は長さ18.4m、幅7.1mを測り、深さは両方とも0.45mである。いずれも15・16・17層の白色粘土を探掘対象としているが、下層の黒色粘土も0.1mほど掘り込まれている。

またSX262・SX306はともに覆土として下層に11層の黄色粘土粒混り茶黒色粘土（層厚0.35m）をもち、ここから古式土師器の壺形土器が出土している。さらに、11層の土質は攪拌された状態で堆積しておりSX262・SX306を埋め戻した土とも考えられる。

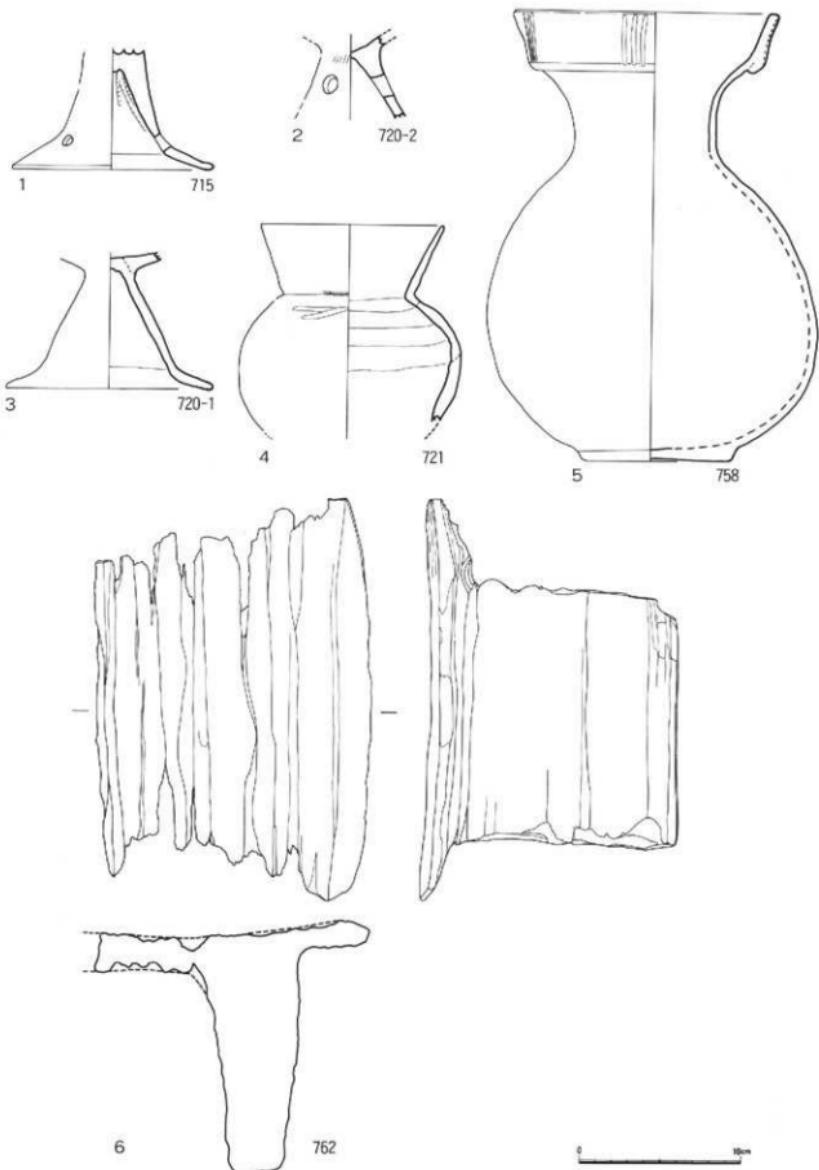
SX323（第33・34図 図版22）SE261の埋積土が陥没して形成された擂鉢状の窪地内にみられた土器集中部である。長径1.54m、短径1.27m、深さ0.25mを測る窪地内の北側・南西側・南東側に集中して土器群が検出された。手捏土器14点、壺形土器（小型）19点、高环形土器15点、壺形土器12点、壺形土器9点、台付壺形土器4点、埴形土器6点、环形土器1点、総計80点が出土した。出土状態はいずれも土圧で直上から押しつぶされた状態で出土しており、原位置をあまり動いていないと考えられる。SX323は出土遺物から古墳時代中期のものと考えられる。

出土遺物とその祭祀性（第9表）北側土器群では土器総数31点のうち広口の壺形土器（小型）が13個、手捏土器が14個出土した。これらのうち壺形土器（小型）の中に手捏土器が入った状態で出土したもののが2例（656-1の中に657・668の中に669）、器形の異なる手捏土器3点が組み合わせられたような状態で出土した個所も1例検出された（658・662・666）。北側土器群の分布は3群の中で最も密集している。

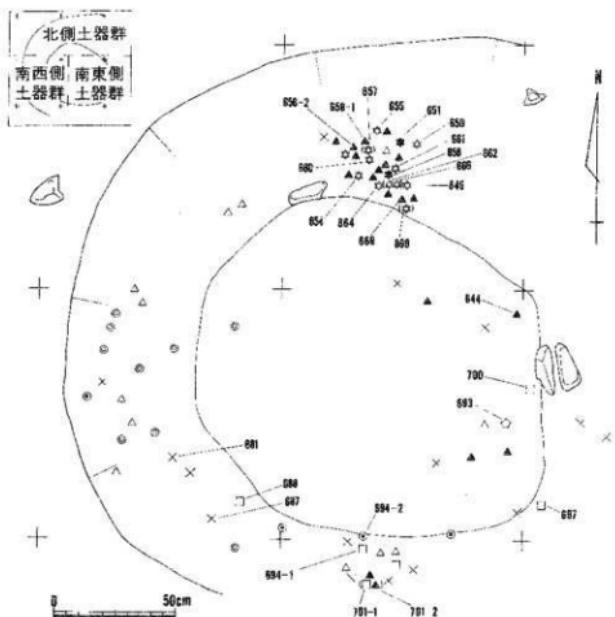
南西側土器群では壺形土器9点、壺形土器5点、高环形土器4点を含む上器総数21点が見られた。

南東側土器群では、高环形土器10点、広口の壺形土器（小型）6点、埴形土器5点、壺形土器4点を含む土器総数28点であった。

SX323の土器群は、中央の窪地を囲むように分布している。さらに祭祀的性格が強いといわれる手捏土器や高环形土器がそれぞれ、北側と南側に分かれて出土している。また壺形土器（小型）の中に手捏土器を入れたり、手捏土器3個が重なった状態での出土状況もみられる。



第32図 水上1区SE261中層出土遺物実測図

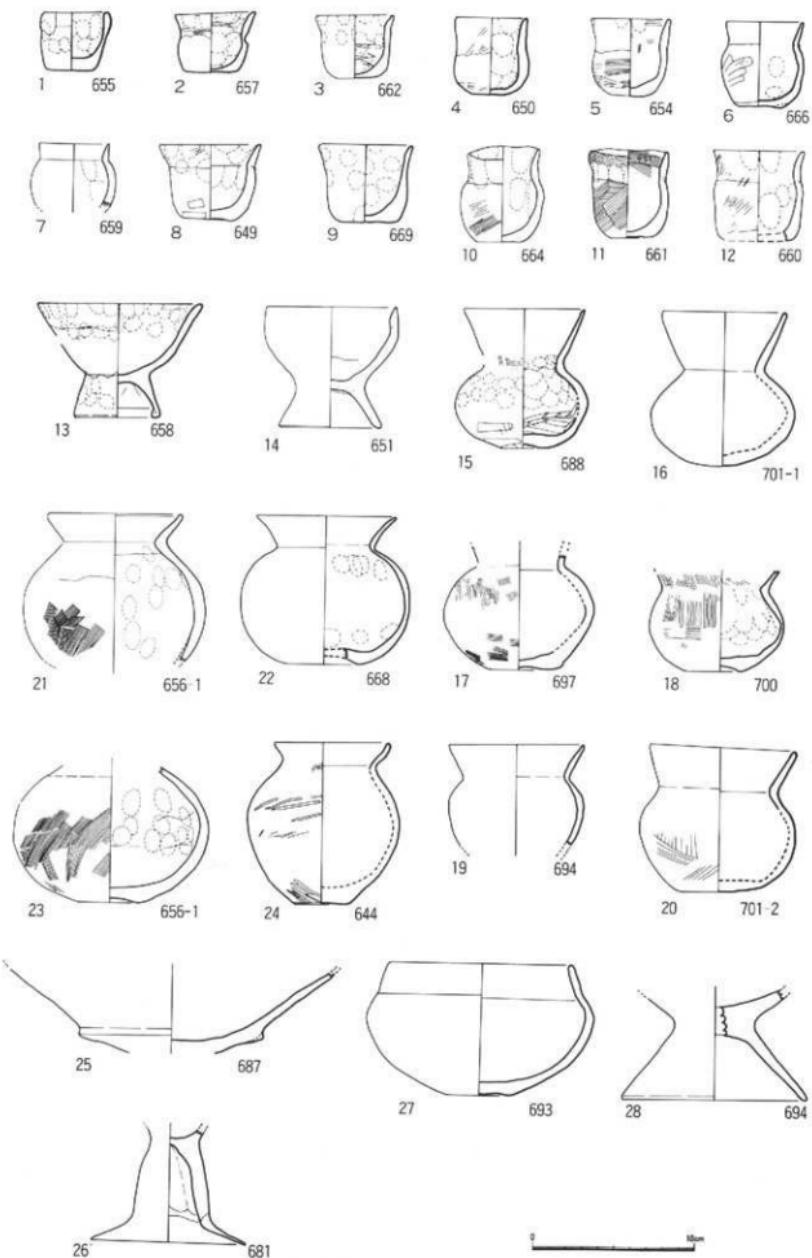


第33図 水上1区SX 323遺物分布模式図

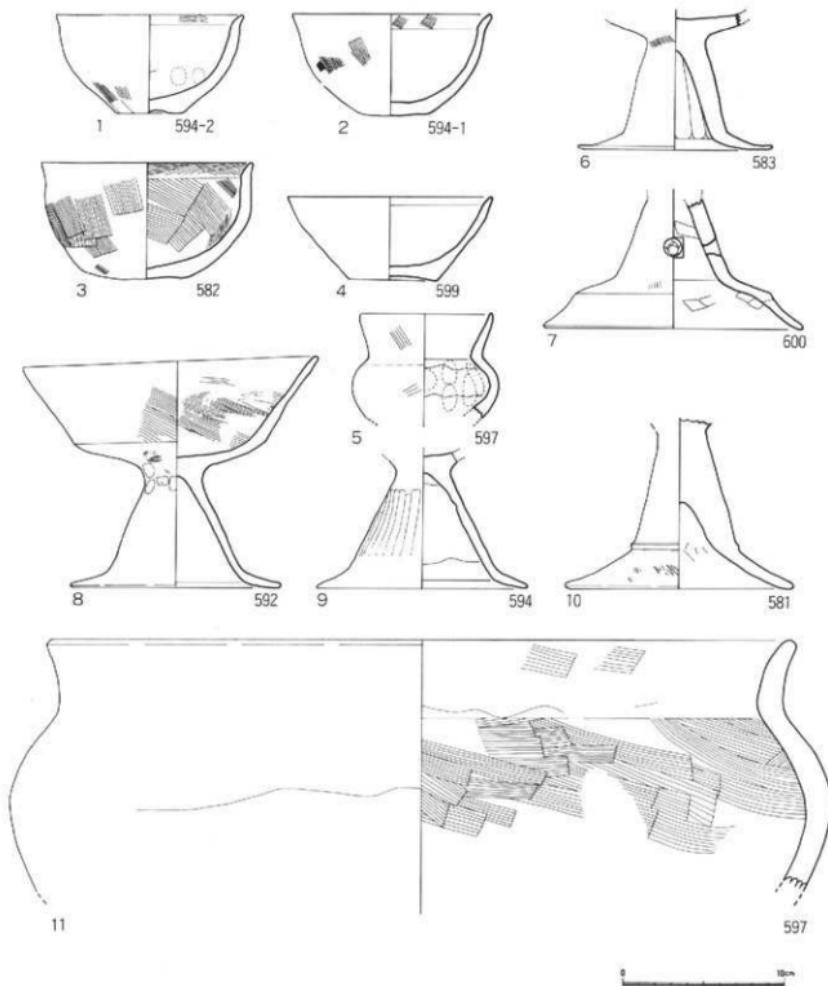
第9表 水上1区SX 323主要遺物一覧表

種類	記号	北側土器群		南西側土器群		南東側土器群		合計		
		個	%	個	%	個	%	個	%	
上 部 器	高杯形土器	×	1	3.2	4	19.0	10	35.7	15	18.8
	杯形土器	□	0	0	0	—	1 (1)	3.6	1	1.2
	壺形土器	□	0	0	1	4.8	5 (2)	17.9	6	7.5
	壺形土器	△	3	9.7	5	23.8	4	14.3	12	15.0
	壺形土器(小型)	▲	13 (3)	41.9	0	—	6 (2)	21.4	19	23.8
	壺形土器	◎	0	0	9	42.9	0	0	9	11.2
手 提	台付壺形土器	●	0	0	2	9.5	2	7.1	4	5.0
	壺形土器	◆	12 (9)	38.1	0	—	0	0	12	15.0
	台付壺形土器	＊	2 (2)	6.5	0	—	0	0	2	2.5
合計		31	100	21	100	28	100	80	100	

括弧()内は完形



第34図 水上1区 SX 323出土土器実測図



第35図 水上1区茶粘土層直上出土土器実測図

SE192（第36図 図版21） L.59グリッド北西部で検出された井戸状遺構である。確認面で長径2.66m、短径2.58m、深さ1.79mを測る円形プランを持つ素掘りの井戸である。

a 構造と機能 掘り方は、2段階からなる。第1段階は確認面から深さ0.55mほど壠状に掘り下げられており、「井戸側」と考えられる。第2段階は一辺約1.25mの正方形プランで、溜水層部分が深さ1.2m、ほぼ真下に掘り下げられており、「水溜」と考えられる。

b 出土遺物と井戸祭祀 主要遺物は、上中下3層で出土している。

下層（e、f）のf層からは、残存長2.05cmの横櫛が検出されている。

中層（c、d）からは、灰釉陶器の罐3点（いずれも墨書き器）、綠釉陶器の皿1点、残存長42.5cmの側板に目釘が残存する曲物状木製品1点、人頭大の疊2個が下層のシルト直上に置かれたような状態で検出された。

上層（a、b）からは人頭大の疊96個が密集した状態で出土した。疊の間の土からは土器片がほとんど検出されなかった。

下層のf層から、出土した横櫛（665）は「水溜」内部での単独出土であり、穿井時または井戸浚えの際の祭祀的性格をもつ投棄であると考えられる。

上層出土の人頭大の疊96個と中層出土の疊2個とは、出土状況から一体のものと考えられる。また水上5区の井戸状遺構SE222（平安時代）でも井戸枠内に人頭大の疊を大量に投棄していることから、井戸廃棄に伴って疊を投入することがあることは確実であり、SE192の疊も井戸廃棄を意図して投入したとしてよいであろう。

疊群の直下で検出された墨書き器、綠釉陶器、曲物状木製品は同一面からの出土であり、一括性が認められ、疊による井戸廃棄（埋井）の前段階の投棄である。また出土層位は帯水層がほぼ埋まって井戸としての機能を終了する段階である。

灰釉陶器の墨書きを見ると、「風」（609-1）は風の異体字、「牛」（609-2）は、牛と米の合わせ字、「火」（624-2）は賀の異体字とも考えられる。これらの墨書き字句はそれぞれ吉祥句を表わしている可能性も考えられる。

以上の上・中層出土遺物の出土状況から、埋井にかかわると思われる祭祀の祭料として吉祥句を墨書きした碗、綠釉皿、曲物状木製品が有機的に関連して用いられ、それらが投棄された直後に大量の疊が投棄されたといえよう。また、この祭祀が行なわれたのは灰釉碗、綠釉皿の年代（狼投票編年での折戸53号窯式併行期）から10世紀後半と考えられる。

本遺跡において井戸にかかわる祭祀に墨書き器・綠釉陶器などを用いた例は、このSE192が唯一の例である。また井戸の規模も同時代のものと比較して大きい。このことからSE192が数ある井戸の中で特異な地位をもっていたと推定してもよいかもしれない。

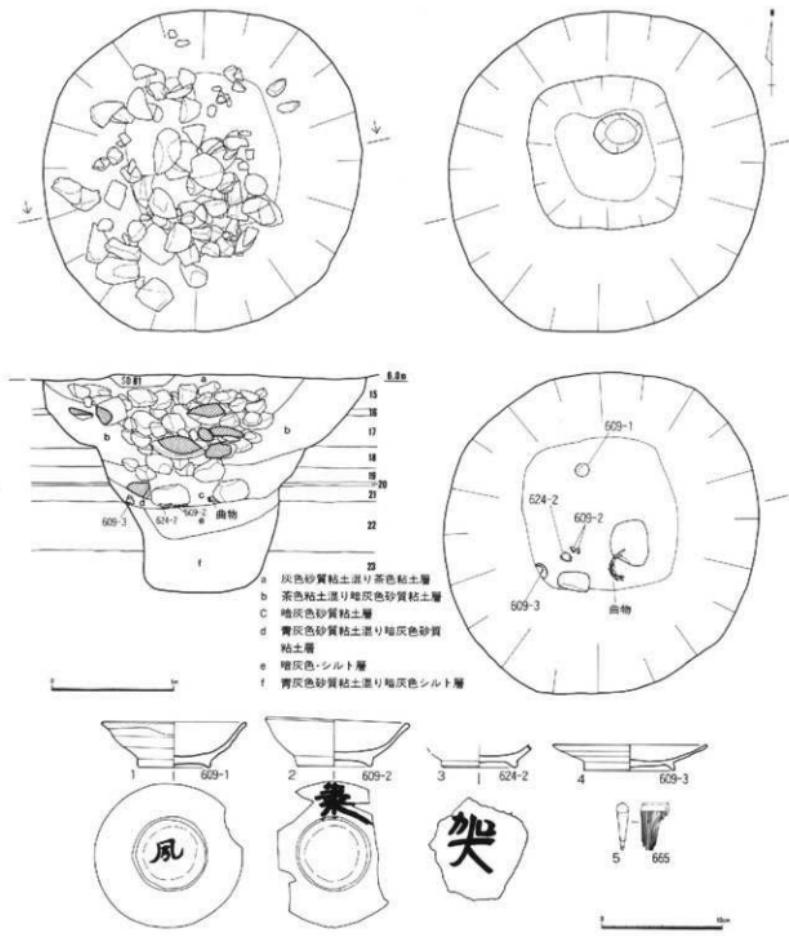
3. 小 結

本調査区では時代を異にした3個所の祭祀遺構が検出された。要点を以下に略記する。

①井戸状遺構SE261では使用前または使用時の祭祀に木製平歛が用いられ、また埋井時の祭祀に腰掛状木製品と壺形土器がセットで納置された可能性がある。

②SX323は sondage部分の斜面に手捏土器を主体とした土師器群が器種ごとに一括投棄された跡であり、滑石製模造品は1点も検出できなかった。

③SE192の埋井時の祭祀として中層の同一面から検出された3点の墨書き器と綠釉皿1点さらに飾とも考えられる曲物1点はそのセット関係が認識できた。



第36図 水上1区SE 192実測図

第10表 水上1区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長短比 (長径=1)	遺構面標高	特 記 事 項
SP159	M54	1.51	0.36	0.64	0.24	5.75	
SP167	M59	0.78	0.49	0.30	0.63	5.96	
SP168	M56	0.44	0.31	0.17	0.70	5.96	
SP169	M56	0.63	0.36	0.49	0.57	5.92	
SP170	M56	0.42	0.29	0.19	0.69	5.92	
SP171	L56	0.37	0.32	5.71	0.86	6.01	
SP172	L58	0.47	0.33	0.10	0.70	6.00	
SP173	M58	0.58	0.49	0.19	0.84	5.97	
SP174	M58	0.58	0.46	0.14	0.79	6.01	
SP175	M58	0.56	0.45	0.13	0.80	6.01	
SP176	M58	0.51	0.41	0.16	0.80	5.98	
SP177	M58	0.45	0.38	0.15	0.84	6.02	平安時代
SP179	M56	0.44	0.32	0.14	0.73	5.91	
SP180	M54	0.46	0.34	0.16	0.74	5.77	
SP181	M54	0.77	0.38	0.29	0.49	5.74	
SP182	M54	0.44	0.33	0.38	0.75	5.76	
SP183	M54	0.85	0.38	0.33	0.45	5.76	
SP184	M54	0.67	0.32	0.24	0.48	5.74	
SP185	M54	0.95	0.67	0.43	0.71	5.68	
SP186	M54	0.11	0.46	0.44	0.41	5.68	
SP187	M54	0.68	0.46	0.20	0.68	5.80	
SP188	M54	0.67	0.42	0.17	0.63	5.81	
SP189	M54	0.75	0.31	0.24	0.41	5.76	
SP190	M54	1.63	0.59	0.18	0.36	5.78	
SP191	M53	0.96	0.45	0.45	0.47	5.70	
SP322	M57	0.82	0.47	0.02	0.57	5.98	
SP323	M57	0.51	0.38	0.05	0.76	5.98	
SP324	M57	0.47	0.35	0.05	0.74	5.98	
SP193	M57	0.43	0.37	0.03	0.86	5.77	
SP251	M54	0.47	0.43	0.07	0.91	5.72	
SP252	M54	0.66	0.49	0.06	0.74	5.70	
SP254	M56	0.65	0.31	0.46	0.48	5.74	古墳時代前期、磚板検出
SP255	M56	0.65	0.33	0.16	0.51	5.76	
SP256	M56	0.32	0.23	0.06	0.71	5.75	
SP257	M56	0.29	0.25	0.11	0.86	5.76	
SP258	M56	0.19	0.16	0.09	0.84	5.79	
SP259	M56	0.37	0.28	0.11	0.75	5.75	

遺構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長径比 (長径-1)	遺構面標高	特 記 事 項
SP263	N52	0.64	0.54	0.13	0.84	5.54	
SP264	M52	0.75	0.59	0.13	0.79	5.65	
SP265	N52	0.37	0.27	0.03	0.73	5.50	
SP266	N52	0.24	0.17	0.05	0.71	4.93	
SP267	N52	0.31	0.29	0.02	0.94	5.36	
SP268	N52	0.27	0.21	0.03	0.78	5.35	
SP269	M52	0.27	0.24	0.23	0.89	5.72	
SP270	M53	0.47	0.38	0.16	0.81	5.47	
SP271	M53	0.77	0.25	0.12	0.32	5.50	
SP272	M53	1.06	0.65	0.06	0.61	5.49	
SP273	M59	1.13	0.65	0.12	0.58	5.73	
SP274	M53	0.47	0.34	0.04	0.72	5.50	
SP275	M54	0.42	0.29	0.25	0.69	5.48	
SP276	M55	0.31	0.28	0.19	0.90	5.55	
SP277	M55	0.29	0.27	0.04	0.93	5.58	
SP278	M55	0.36	0.31	—	0.86	—	
SP279	L59	0.66	0.65	0.21	0.98	5.89	
SP281	M56	0.44	0.33	0.41	0.75	5.71	縦板検出
SP282	M55	0.25	0.24	0.08	0.96	5.71	
SP283	M55	0.22	0.19	0.15	0.86	5.55	
SP284	L52	0.56	0.49	0.51	0.88	5.29	
SP285	L52	0.38	0.29	0.08	0.76	5.27	
SP286	L53	0.31	0.25	0.14	0.81	5.42	
SP287	L53	0.52	0.36	0.20	0.69	5.51	
SP288	M53	0.31	0.20	0.22	0.65	5.58	
SP289	M53	0.51	0.38	0.11	0.75	5.56	
SP290	L59	0.48	0.27	0.21	0.56	5.89	
SP291	K58	0.32	0.25	0.14	0.78	5.24	
SP292	L53	0.49	0.35	0.10	0.71	5.39	
SP293	L53	0.35	0.28	0.15	0.80	5.45	
SP295	M54	0.38	0.36	0.17	0.95	5.48	
SP296	L56	0.92	0.78	0.48	0.85	5.25	古墳時代前期
SP303	M54	0.82	0.52	0.30	0.63	5.56	
SP307	M54	0.51	0.48	0.13	0.94	5.53	
SP308	L55	3.64	1.21	0.18	0.33	5.50	
SP309	L54	2.48	1.49	0.11	0.60	5.44	
SP310	L54	1.09	0.26	0.03	0.24	5.51	
SP311	L53	1.27	0.61	0.29	0.48	5.51	
SP312	M53	0.34	0.31	0.08	0.91	5.61	

遺構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長 短 比 (長径 = 1)	遺構面標高	特 記 事 項
SP313	M54	1.31	0.89	0.05	0.68	5.48	
SP315	M53	0.44	0.28	0.08	0.64	5.53	
SP316	L52	0.66	0.65	0.11	0.98	5.26	
SP317	M54	0.71	0.68	0.20	0.96	5.54	
SP318	M56	0.37	0.32	0.20	0.86	5.59	
SP319	L57	0.56	0.43	0.06	0.76	5.56	
SP320	M56	0.65	0.54	0.41	0.83	5.59	
SP321	L57	1.20	0.65	0.07	0.54	5.38	

第11表 水上1区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延 長	幅	深 さ	遺構面標高	特 記 事 項
SD68	L62～L58	54.75	0.88	0.72	6.11	古墳時代前期
SD81	K66～L52	133.10	1.60	0.46	6.05	平安時代後期
SD152	L54	2.15	0.73	0.22	5.16	
SD153	L54	3.46	0.57	0.50	5.75	
SD154	L54	6.10	0.74	0.42	5.64	
SD155	L54	5.06	1.38	0.91	5.49	平安時代
SD160	L53	17.25	1.55	1.10	5.73	平安時代後期
SD161	M53	3.02	0.80	0.71	5.72	
SD163	L56	1.60	0.95	—	5.75	
SD164	L56	5.18	0.91	0.51	5.90	
SD165	L57	1.86	0.36	0.27	5.58	平安時代後期
SD166	M52	37.20	3.35	2.35	5.90	平安時代後期
SD178	L58	2.98	1.47	0.46	6.04	鎌倉時代
SD194	L59	5.79	0.96	0.68	5.75	
SD195	M57	1.72	0.73	0.52	5.63	
SD253	M54	1.98	0.31	0.27	5.70	
SD280	K59	4.30	0.46	0.37	5.70	
SD294	L57	19.14	0.61	0.73	5.43	
SD301	L55	4.53	1.53	0.77	5.48	
SD325	L54	10.40	0.75	0.51	5.65	

水上 2 区 (第29図)

1. 概 要

水上 2 区は河口起点より 937 m 上流に位置し現大谷川左岸部にあたる。地形的には窪高地にあたる。ここでの遺物包含層は 1 層のみ検出された。盛土と近世以降の耕作土の直下に基盤層である黄灰白色砂質粘土(水上 1 区の 15 層に整合する)が露出し、この上面に古墳時代前期から近世までの遺構が混在して検出された。このうち調査区西側では近世粘土探掘跡 SX345 (長さ 47.4 m、最大幅 3.8 m、深さ 0.14 m) が南北に掘り込まれ、水上 1 区の近世粘土探掘跡 SX157 に連続している。また平安後期の水路 SD 81 が調査区中央を南北に貫き、南東部では古墳前期の溝状遺構 SD 68 (水上 1 区であわせて述べる) が南流している。調査区北部中央には古墳時代前期の土坑 SP 142 が検出された。このほか多くの小穴・土坑が検出された。とりわけ K64 グリッドを中心とする北部では柱穴とみられる小穴が多数確認できた。しかし確認面が後世の開発による搅乱を受けていたために、遺構底面がわずかに残るのみで、しかも出土遺物も限られており、年代推定の困難なものが多く、小穴・土坑群の性格は不明なものが多い。

2. 遺構 各説

SP 142 (図版23-3-4) K65 グリッド南辺に位置し、隅丸方形のプランを有し、長径 2.24 m、短径 1.03 m、深さ 0.54 m を測る土坑状遺構である。遺構中央部は南北に平安時代後期の水路 SD 81 によって破壊されかつ近世の耕作で削平されており、表土を除去すると遺構覆土がただちに確認され、その中央から古式土器の壺形土器が検出された。SP 142 の底部は基盤層のシルト層にまで達しており、井戸状遺構になる可能性もある。

第12表 水上 2 区 小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長短比 (長径=1)	遺構面標高	特記事項
SP50	K65	0.40	0.25	0.08	0.63	6.08	
SP51	J65	0.31	0.21	0.01	0.68	6.00	
SP5	J66	0.24	0.22	0.08	0.92	6.11	
SP5	J65	1.32	0.58	0.27	0.44	6.07	
SP5	K65	0.42	0.26	0.02	0.62	6.18	
SP5	K64	0.42	0.33	0.08	0.79	6.23	
SP5	K64	0.30	0.29	0.03	0.97	6.19	
SP57	K64	1.08	0.48	0.05	0.44	6.08	
SP58	K64	0.51	0.41	0.16	0.80	6.02	平安時代
SP59	K65	0.55	0.43	0.21	0.78	6.13	
SP60	K64	0.61	0.49	0.09	0.80	6.17	平安時代
SP61	K64	0.96	0.60	0.18	0.63	6.18	
SP62	K64	0.66	0.51	0.21	0.77	6.21	
SP63	K64	0.62	0.59	0.37	0.95	6.12	古墳時代前期
SP64	K64	1.08	0.93	0.38	0.86	6.21	
SP65	K64	0.62	0.56	0.19	0.90	6.15	
SP66	K64	0.77	0.72	0.22	0.94	6.20	
SP67	K64	0.83	0.80	0.28	0.96	6.16	

造構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長 短 比 (長径-1)	造構面標高	特 記 事 項
SP69	K62	1.01	0.34	0.29	0.34	6.22	
SP70	K62	1.11	0.79	0.19	0.71	6.10	古墳時代前期
SP71	K62	0.61	0.49	0.15	0.80	6.18	
SP72	K64	0.60	0.41	0.28	0.68	6.15	
SP73	K64	0.93	0.58	0.22	0.62	6.15	
SP76	J65	0.65	0.56	0.35	0.86	6.09	
SP77	J65	0.79	0.75	0.42	0.95	6.07	
SP78	K66	0.58	0.47	0.17	0.81	6.13	
SP79	K66	0.57	0.47	0.12	0.82	6.14	
SP80	K66	1.07	0.68	0.27	0.64	6.13	古墳時代前期
SP83	K65	0.39	0.34	0.03	0.87	6.11	
SP84	K65	0.31	0.27	0.01	0.87	6.14	
SP85	K65	0.44	0.37	0.02	0.84	6.17	
SP86	K65	0.66	0.44	0.04	0.67	6.02	
SP89	K64	1.10	0.48	0.02	0.44	6.17	
SP90	K64	0.56	0.41	0.13	0.73	6.09	
SP91	K64	0.50	0.46	0.04	0.92	6.08	
SP92	K63	0.79	0.46	0.14	0.58	6.15	
SP93	K64	0.70	0.43	0.09	0.61	6.19	
SP94	K64	0.67	0.49	0.05	0.73	6.03	
SP95	K64	0.62	0.54	0.07	0.87	6.06	
SP96	K63	0.67	0.49	0.04	0.73	6.15	古墳時代前期
SP97	K64	0.51	0.17	0.04	0.33	6.22	
SP98	K64	0.19	0.17	0.06	0.89	6.19	
SP99	K64	0.19	0.18	0.10	0.95	6.23	
SP100	K64	1.32	0.81	0.12	0.61	6.20	
SP102	K62	1.14	0.86	0.12	0.75	6.19	
SP103	K62	1.46	0.61	0.27	0.42	6.20	
SP104	K62	1.32	0.51	0.20	0.39	6.16	
SP105	K62	0.52	0.43	0.21	0.83	6.16	
SP106	K61	0.46	0.29	0.21	0.63	5.88	古墳時代前期
SP108	L62	0.67	0.64	0.14	0.96	6.20	
SP109	L62	0.82	0.44	0.05	0.54	6.18	
SP111	L61	0.82	0.51	0.10	0.62	6.04	
SP112	L60	0.95	0.84	0.28	0.88	6.00	古墳時代前期
SP113	L60	0.66	0.66	0.27	1.00	6.05	古墳時代前期
SP114	L60	0.86	0.74	0.24	0.86	6.09	
SP115	L61	0.92	0.84	0.18	0.91	6.08	
SP116	K61	0.64	0.62	0.11	0.97	6.09	

遺構番号	グリッド	長 範	短 範	深 さ	長短比 (長径 = 1)	遺構面標高	特 記 事 項
SP118	K65	0.27	0.26	0.02	0.96	6.19	
SP124	L60	1.24	0.51	0.30	0.41	6.08	
SP125	K61	0.74	0.42	0.08	0.57	6.10	
SP126	K61	0.69	0.50	0.35	0.72	6.15	
SP127	L61	0.84	0.55	0.21	0.65	6.15	古墳時代前期
SP128	K61	0.69	0.36	0.03	0.52	6.12	
SP129	K61	0.73	0.41	0.13	0.56	6.12	
SP130	L61	1.29	0.59	0.15	0.46	6.15	
SP132	K61	0.64	0.25	0.08	0.39	6.15	古墳時代前期
SP133	L60	1.26	0.90	0.49	0.71	6.01	
SP137	L64	0.54	0.31	0.12	0.57	6.20	
SP139	L64	0.38	0.32	0.06	0.84	6.15	
SP140	K62	0.93	0.57	0.38	0.61	6.18	
SP141	K65	1.23	1.14	0.55	0.93	6.20	古墳時代前期
SP142	K64	2.24	1.03	0.54	0.46	6.15	古墳時代前期
SP143	K65	1.15	1.00	0.20	0.87	6.09	
SP144	L61	0.44	0.29	0.14	0.66	6.12	
SP145	K64	0.34	0.27	0.02	0.79	6.07	
SP146	K64	1.00	0.93	0.11	0.93	6.18	
SP147	K64	0.61	0.59	0.02	0.97	6.15	
SP148	K64	0.64	0.48	0.06	0.75	6.18	
SP149	K63	0.31	0.31	0.09	1.00	6.16	
SP326	K63	0.49	0.41	0.14	0.84	6.17	
SP327	L63	0.39	0.32	0.20	0.82	6.20	
SP328	L63	0.31	0.28	0.07	0.90	6.14	
SP329	L63	0.28	0.26	0.08	0.93	6.14	
SP330	L63	0.32	0.24	0.09	0.75	6.18	
SP333	L62	0.23	0.20	0.15	0.87	6.24	
SP334	L61	0.54	0.41	0.11	0.76	6.17	
SP336	L61	0.32	0.29	0.11	0.91	6.17	
SP337	L61	0.66	0.49	0.08	0.74	6.11	
SP338	L61	0.58	0.38	0.11	0.66	6.01	
SP339	K61	0.70	0.21	0.09	0.30	6.05	
SP341	L60	0.22	0.17	0.09	0.77	5.98	
SP342	K64	0.35	0.27	0.07	0.77	6.20	
SP343	L63	(0.92)	(0.78)	0.04	0.85	6.08	

第13表 水上2区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
SD74	K 63	5.34	1.46	0.60	6.19	
SD82	K 66	3.08	0.58	0.27	6.12	
SD88	K 65	4.56	1.03	0.54	6.11	古墳時代前期
SD107	L 62	2.84	0.52	0.22	6.22	
SD117	K 65	4.06	0.70	0.40	6.09	
SD119	J 64	2.38	0.51	0.39	6.1	
SD120	K 64	3.31	0.68	0.34	6.09	
SD121	K 64	1.04	0.85	0.32	6.08	
SD122	K 64	4.96	2.09	1.10	6.22	
SD123	K 63	7.04	1.92	1.04	6.18	
SD134	L 62	1.99	0.68	0.13	6.22	
SD340	K 60	2.63	0.21	0.18	6.08	
SD344	K 63	5.06	1.18	0.41	6.07	

水上3区(第29図)

1. 概要

水上3区は河口起点より 997m 上流に位置し現人谷川左岸部にあたる。地形的には微高地である。ここでの遺物包含層は次の3面であった。第1面では、2層の暗灰褐色砂質粘土を覆土とする中世溝状遺構が検出された。これらの溝状遺構は周辺地籍図からの考察を含めて、中世居館跡の一部と推定している。第2面は4層の紫茶色粘土を覆土とする古墳時代中期の遺構群、第3面は、5層の茶褐色粘土を覆土とする古墳時代前期の遺構群がそれぞれ検出された。第2面、第3面とともに、溝状遺構と井戸状遺構(土坑状遺構)と小穴群が確認された。

2. 遺構名説

S X 617 K67グリッドを中心に、基盤層である6層の黄白色粘土を掘り込んだもので確認面での標高 6.1m、深さ 0.1m、東西残存長 10.3m、南北全長 6.6m を測る長方形の遺構である。S X 617 の中に 4 個所の小穴があり、小穴の覆土中から古式土師器片が検出された。

SD491 (図版 28-1) J 66・K 66グリッドの北部にあり、S X 617 の南側に接し、基盤層である6層の黄白色粘土と7層の白色粘土を削除している。延長 10.2m、幅 3.04m、深さ 0.39m を測る東西方向の溝状遺構である。覆土中から古代土師器片が検出された。

SD465 J 66・K 66にあり SD491 の南側に約 30cm 隔てて並行して検出された東西方向の溝状遺構である。延長 9.06m、幅 0.65m、深さ 0.10m を測る。覆土中から古式土師器片が検出されている。

SD609 L 69グリッドにある東西方向の溝状遺構である。延長 9.90m、幅 0.92m、深さ 0.49m を測る。覆土中からは古式土師器が検出されている。

SD459・SD460 ともに J 68グリッドにある南北方向の溝状遺構である。前者は延長 2.91m、幅 0.59m、深さ 0.46m を測る。後者は延長 3.25m、幅 0.61m、深さ 0.13m を測る。ともに覆土中から遺物は検出されなかった。覆土は 5 層の茶褐色粘土であった。

以上の古墳時代前期の 5 本の溝状遺構のうち、SD491・SD465・SD609 は S X 617 の南辺および北

辺にはば並行し、SD459・SD460はSX617の西辺に並行している。

SP464 (図版27-5) J66グリッドで検出された土坑状遺構である。長径2.69m、短径1.96m、深さ0.74mを測る。西半分は、1942(昭和17)年の大谷川改修時に破壊されていた。掘り方は、円形プランで3段階に掘削されている。底面直上の覆土中から古式土師器片が出土した。この覆土の内側に、深さ約0.65mを測る2段階目の掘り方が検出されている。この掘り方の内面全体からは、炭化物が一面に付着して検出された。底部には焼土、灰が確認できた。覆土中からは、礫が数点検出されたが、火をうけた痕跡は見られない。また土鍤1点、手捏土器1点が古式土師器と伴出している。SP464は形状から見て、掘削当初は井戸として使用された可能性をもつものの、2段階目の掘り方が1段階目の掘り方とはほぼ同じ規模であり、炭化物・焼土の検出状況から見て、がまたは廃棄物を焼却するための上坑として使用された可能性もある。

なおSX617の方格軸と周辺の溝状遺構の方格軸がおおむね一致している。

SD456 (図版27-1・2) J66グリッド北部からK67グリッド南部に位置し、延長13.13m、最大幅3.72m、深さ0.15mを測る溝状遺構である。覆土第4層の紫茶粘土層からは、多数の上師器片と3点の手捏土器が検出された。

SE463 (第117図 図版28-2) K65グリッドに位置し、5層の茶褐色粘土層に掘り込まれた井戸状遺構である。掘り方の東側3分の2が現代水路により破壊されていたため、遺構として確認できたのは底面のみであった。底面は一辺約1.15mの方形のプランを有し、その中央部に直径0.92m、深さ0.07mの円形の掘り込みがある。円形の掘り込みは7層の砂層に達しており、水溜の機能をもつと考えられる。井戸枠などの検出ではなく、現状では素掘りと推定しておく。覆土中から検出された上師器片から古墳時代中期とした。

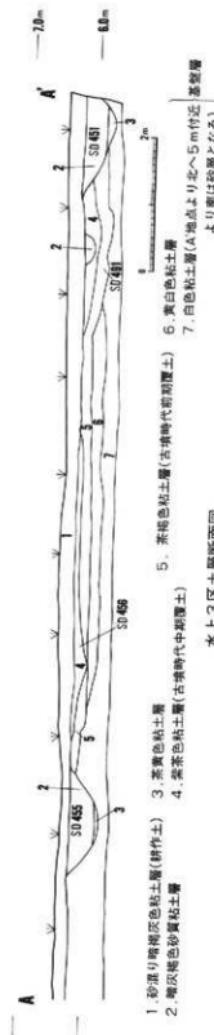
J67・K67グリッドの5層上面から、6層の紫茶粘土層を覆土とする11個所の小穴が検出され、K67グリッドの6層からは炭化物が、一辺約1.2mの範囲で検出された。前述の小穴群と6層中から出土した土師器片により、古墳時代中期とした。

SE463 (第117図 図版27-4) J67グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。長径2.22mを測り円形プランを有する。深さは0.98mを測る。遺構中央部をSD453によって切られているため、全容を明らかにすることは困難であった。下段部は砂層に掘り込まれ、「水溜」の機能を果したと考えられる。下段部の覆土中から土師器片が検出されたが、年代の推定はできなかった。

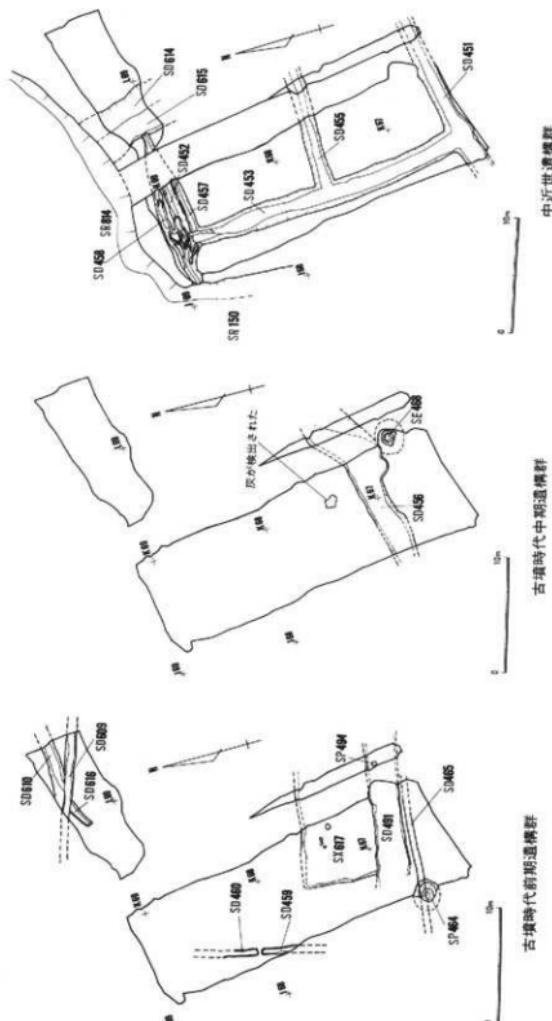
SR150 (図版25-5、26) 水上3区のJ68グリッドの西部と水上1区の西部全域で検出された大型水路状遺構である。確認された全長は約171m、幅8.2m、深さ2.55mである。水上1区での検出状況を見ると、標高5.95mの中世造構面から45~50度の傾斜で左岸部が掘削されている。水路底面は、幅約2.0mの平坦面となっており、右岸部も左岸部と同様の傾斜で0.3mの立ち上がりが確認された(別個体)。また、礫群の間から銭貨4枚が検出された。初銘年代621年または845年の「開元通宝」1枚、1023年の「天聖元宝」1枚、1408年の「永樂通宝」1枚の計3枚の輸入銭と表裏両面ともに摩滅した銅錢1枚である。これらの銭貨は、一括投棄と考えられる。また、覆土最下層から白磁・青磁片も検出されている。SR150の年代は銭貨の鋳造年代から15世紀初頭をさかのばらないと考えられる。

SD451 (図版24-1) 水上3区J66・K66グリッドで東西方向に検出された、東から西へ流れる溝状遺構である。確認面での延長は9.46m、幅1.57m、深さ0.41mを測る。SD451の覆土は2層の暗灰色粘土層である。

SD458・SD457・SD452 いずれも水上3区北部のJ68・J69グリッドで東西方向に検出され、東から西に流れる溝状遺構である。SD458・SD457は、基盤層である7層の白色粘土層に掘り込まれ、前者は延長14.05m、幅2.20m、深さ0.86mを測る。後者は延長4.88m、幅0.72m、深さ0.24mを測る。S



水上3区土層断面図



第37図 水上3区土層図・実測図

SD452はSD458の覆土を掘削して作られたもので、延長14.05m、幅1.10m、深さ0.20mを測る。SD458・SD457の覆土は、2層の暗灰褐色粘土層である。

SD455（図版24-3）水上3区のJ67・K67グリッドで東西方向に検出され、東から西へ流れる溝状遺構である。確認面での延長は、10.90m、幅は1.71m、深さは0.47mを測る。覆土は2層の暗灰色粘土層である。

SD453（図版24-2）水上3区のJ68グリッドからJ66グリッドまで南北方向に検出された溝状遺構である。確認面での全長は24.18m、幅は2.26m、深さ0.52mを測る。覆土は2層の暗灰色粘土層である。

SD614・SD615（図版24-4）いずれも水上3区北西拡張部分のK69グリッドで南北方向に検出された。前者の延長は4.65m、幅は2.15m、深さは0.39m。後者の延長は4.10m、幅は2.05m、深さは0.36mを測る。覆土はともに2層の暗灰褐色砂質粘土層である。

第14表 水上3区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	遺構面標高	特記事項
SP464	J66	2.69	1.98	0.95	0.74	6.37	古墳時代前期
SP466	J66	0.63	0.54	0.48	0.86	6.12	
SP469	J66	0.56	0.48	0.24	0.86	6.15	
SP470	K66	0.25	0.20	0.14	0.80	6.15	
SP472	J67	0.11	0.11	0.12	1.00	6.13	
SP473	J67	0.42	0.41	0.11	0.98	6.10	
SP474	J67	0.32	0.22	0.18	0.69	6.12	
SP475	J67	0.27	0.21	0.12	0.78	6.05	
SP476	J67	0.13	0.12	0.10	0.92	6.10	
SP477	J67	0.20	0.17	0.19	0.85	6.10	
SP479	J67	0.26	0.19	0.28	0.73	6.08	
SP480	J67	0.32	0.24	0.13	0.75	6.08	
SP481	J67	0.18	0.17	0.07	0.94	6.08	
SP482	J67	0.14	0.14	0.08	1.00	6.07	
SP483	J67	0.20	0.14	0.08	0.70	6.10	
SP484	K67	0.24	0.18	0.15	0.75	6.02	
SP485	K67	0.38	0.19	0.05	0.50	6.03	
SP486	K67	0.35	0.19	0.11	0.54	6.03	
SP492	K67	0.44	0.38	0.09	0.86	6.03	
SP493	J66	0.21	0.18	0.08	0.86	6.02	
SP494	K66	0.41	0.38	0.35	0.93	6.19	古墳時代前期

第15表 水上3区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
SD451	K66	9.46	1.57	0.41	6.18	中近世
SD452	J68	14.05	1.10	0.20	5.85	中近世

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
SD453	J 67	24.18	2.26	0.52	6.15	中近世
SD455	K 67	10.90	1.71	0.47	6.18	中近世
SD456	K 67	13.13	3.72	0.15	6.19	古墳時代中期
SD457	J 68	4.88	0.72	0.24	6.08	
SD458	J 68	14.05	2.20	0.86	5.85	
SD459	J 68	2.91	0.59	0.20	6.07	
SD460	J 68	3.25	0.61	0.13	6.09	
SD465	J 66・K 66	9.06	0.65	0.10	6.17	
SD491	J 66・K 66	10.20	3.04	0.39	6.05	
SD609	L 69	9.90	0.92	0.49	5.84	古墳時代前期
SD610	L 69	4.26	1.22	0.46	5.86	
SD614	K 69	4.65	2.1	0.39	5.65	
SD615	K 69	4.10	2.05	0.36	5.65	
SD616	K 69	2.16	0.74	0.12	5.61	古墳時代前期

2 小 結

中世大型水路状遺構 SR150 と中世居館（第38図）

水上1・2・3区はいずれも1876（明治9）年作製の大谷村地籍図によれば旧小字「構井ノ坪」北西辺に位置している。この「構井ノ坪」は地元では「構井のおしろ」とも呼ばれ、かつてここに「武士の居館」があったという伝承がある。今回、同地籍図による旧小字・地割と1880（明治13）年筆写の「有度郡大谷村地租改正反別帳」による一筆ごとの土地利用状況を同一図面に表わし、あわせて発掘調査用グリッド座標系を記入した合成図（第38図）を作成し、旧地籍図により推定できることがらと、発掘調査によって確認できたことからを総合して、水上1・3区の中世大型水路状遺構 SR150 の性格を考えていきたい。

中世居館との関連を推定できる地名として、まず屋敷の構を意味する「構井ノ坪」。「構井ノ坪」を北東、南西から開むようにして「新堀ノ坪」「堀ノ坪」がある。これらは堀割を想定させる。さらに「構井ノ坪」の北西の「竹之内坪」、西側の「西内内坪」は、それぞれ武士の屋敷（館）を示唆している。「西内内」という表現からは居館の西側部分を示していると考えられる。また周辺にある「大弓ノ坪」「馬場坪」「出口ノ坪」も弓場・馬場・居館の出口の存在を推定させる。「大弓ノ坪」の東に隣接する「下景致坪」「上景致坪」は景致という中世武士の人名との関連も考えてよいかも知れない。

また旧小字の検討資料とした1672（寛文12）年『駿州久能御神領宮川村大谷片山村御検地帳』を見ると、「上半坪」の「上半」は、「上半堀」。「構井ノ坪」の「構井」は「構ノうしろ」と記されている。「上半坪」には堀が存在した可能性が考えられ、さらに「構ノうしろ」は現在伝承されている「構井のおしろ」とも関連があると考えられる。

地割と土地利用から考えると、まず「堀ノ坪」にある逆L字形の水田が、現大谷川まで続いていることがわかる。これが堀の一部であると安本博は「静岡県の中世城館跡」（1981）で推定している。さらにこの堀は北にのび、「新堀ノ坪」の南東部（72列付近）まで達していることが、水田分布から推定できる。また水上系N72グリッド付近で、現大谷川から北東側に湾曲して東側の水田部分に連続する地割境は、蛇行を伴う旧河道の存在を示唆しており、これが「構井ノ坪」の北側の堀として転用され、「新



第38図 「橋井之坪」関連地籍図(大谷地区部分、明治9年作成)

堀ノ坪」の小字名に関連したとも考えられる。発掘調査からわかったことは、この「構井ノ坪」の南側と北側の掘推定地がそれぞれ西大谷1・2区と水上7区で検出された旧大谷川流路とほぼ一致することである。このことは、地籍図上で堀と推定できるものが、旧大谷川流路そのもの一部の区間である可能性が高いことを意味している。

コの字形の堀(A)に囲まれた内側に、さらに2重にB・Cの堀が地籍図から推定できる。このB・Cの堀については、沼館愛三が『静岡県郷土研究』第5輯の「有度山塊を中心とする古城館址之研究」(1935)の中で「構といふ地名」に言及され、「遺構一部の所有者神谷氏の言に依れば、土堀と濠を以て囲まれた方形の屋敷城であった」としている。また、「現在は開墾せられて其遺構として認むべきものがない」と述べているものの一部がその範囲に含まれることは明らかである。前記の「地租改正別表」によればB・Cを含む道敷敷で囲まれた方形区画内は神谷清吉氏の所有とあり、それが昭和初期以前に作成されたと推定できる地籍図(大谷農協所有)では地割線が変更され、畠地はほとんど水田に変えられてしまっている。よって破壊は明治9年以降昭和初期以前ということになる。

大型水路状遺構として検出されたSR150は、コの字形の堀(A)と連結して「構井ノ坪」の周濠となっていたと考えられる。「構井ノ坪」関連居館址は第38図に示したように東西を南北に走る根方街道(大谷街道)と久能街道に囲まれ、北辺を「大弓ノ坪」の北側を東西に通る宮川道、南辺を大正寺沢川に囲めた逆台形の網張りの中に旧大谷川流路の蛇行を防御用の堀として巧みに利用し、「構井ノ坪」を中核部分とした平城と推定しうる。

中世は、平安期と同様水位の高い時代であり、水上7区土層図の第41図を見てもわかるように川幅が広がり、それまでの川岸の居住域が浸水し、比較的高標な微高地部分である「構井ノ坪」部分が島状に点在することとなり、中世の居住域となったものと考えられる。SR150は前述したような防衛的役割の周濠をつくるためばかりではなく、水はけをよくするためのバイパスの機能も兼ねていたと推定している。

その後、中世の終末をむかえると、防衛的周濠の機能は不要となり、かつ湾曲部の水はけは直流部と比べると悪く、粘土がしだいに厚く埋積ていき、新田開発の対象地となっていたと考えられる。同時に直流部分のSR150はバイパスから本流へと機能を変えていったと思われる。

なお、1820(文政3)年に書かれた『駿河記』にある「高松、構之森」「古此處に城ありて……」の「構之森」と大谷の「構井ノ坪」との異同は不明である。

第16表 「構井ノ坪」関連小字一覧表

大谷「構井ノ坪」関連		高松「構之森」関連			
1876(明治9)地籍図	1877(貞永1)機械版	1899(文化6)駿河記	1930(文政13)新規122	1863(大正14)統括施設	1861(文政元)駿河志略
(件名)					
構井ノ坪	構ノうしろ	構之森	カマへの森	構へノ森	構の森
堀ノ坪	堀	西長津社	荒井社	社	社
新堀ノ坪	新堀	堀	堀	堀	堀
竹之内坪	竹之内	猪場	猪場	猪場	猪場
西大内坪	西大内	大屋敷	大屋敷	大屋敷	大屋敷
大弓ノ坪	大弓				
上景致坪	景致	古此處に城ありて西	古此處に城ありて西	古此處に城ありて西	古此處に城ありて西
下景致坪		端に鬼神を祭る。	端に鬼神を祭る。	端に鬼神を祭る。	(ボクシニア、
馬場坪	馬場	縫合で一社とすと云。	しを合せ祭りたりと	社有り	小ナリ都ナリ)
上坪	上坪		云々。	しを私に神に遷し	久須御子(古跡場あり)
	幸・坪字提出シ 上日記(1905) 都原	の 名 前		數る云ふ。	高松

水上5・6区（第22図）

1. 概 要

水上5・6区は河口起点より860m上流に位置し、現大谷川右岸にある。微高地であるため遺構検出面が高く表土下20cm-30cmで基盤層になる。したがって包含層は1面しか認められず同一面に古墳時代初頭の小穴から近世の粘土探査跡までが検出された。

2. 遺構 各説

SE 208（第22図） H58グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。直径1.4mの円形プランをもつ。掘り方底面の標高は5.7mを測り検出面との比高差は0.5mと浅い。断面形はすり鉢を呈する。出土した土器より古墳時代後期の井戸状遺構と考える。

SE 317（第22図） H55グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。長径1.65m、短径1.46mの長円形プランをもつ。掘り方底面の標高は4.8mを測り、検出面との比高差は1.24mである。出土した土器から平安時代の井戸状遺構と考える。

SE 221（第22図） J54グリッドとJ54グリッド境界部分で検出された木組の井戸状遺構である。長軸1.42m、短軸1.38mの不整円形プランを有する。井戸枠は四隅に角柱をもつ縦板組である。横機の存在は崩壊が著しく明らかでない。中央よりやや東寄りに掘り込まれた水留めは井戸枠底面より35cm深く、標高4.81mを測る。検出面との比高差は0.8mである。出土遺物から平安時代の井戸状遺構と考える。

SE 212（第22図） H56グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。長軸1.61m、短軸1.34mの不整形掘り方プランをもつ。掘り方底面の標高は5.18mで検出面との比高差が0.1mである。出土した山茶碗から平安時代末期の井戸状遺構とした。

SE 222（第22図） H59グリッドで検出された井桁の井戸枠をもつ井戸状遺構である。直徑1.35mの円形プランを呈する。掘り方底面の標高は5.58mで、検出面との比高差は0.43mと浅い。井桁は1段で幅20cm、長さ80cm程度の板材4枚を柄によって組んでいる。廃棄時に20cm大の磯を井戸枠内に投棄している。出土遺物は土器の破片のみで年代は明らかではないが、平安時代と推定した。

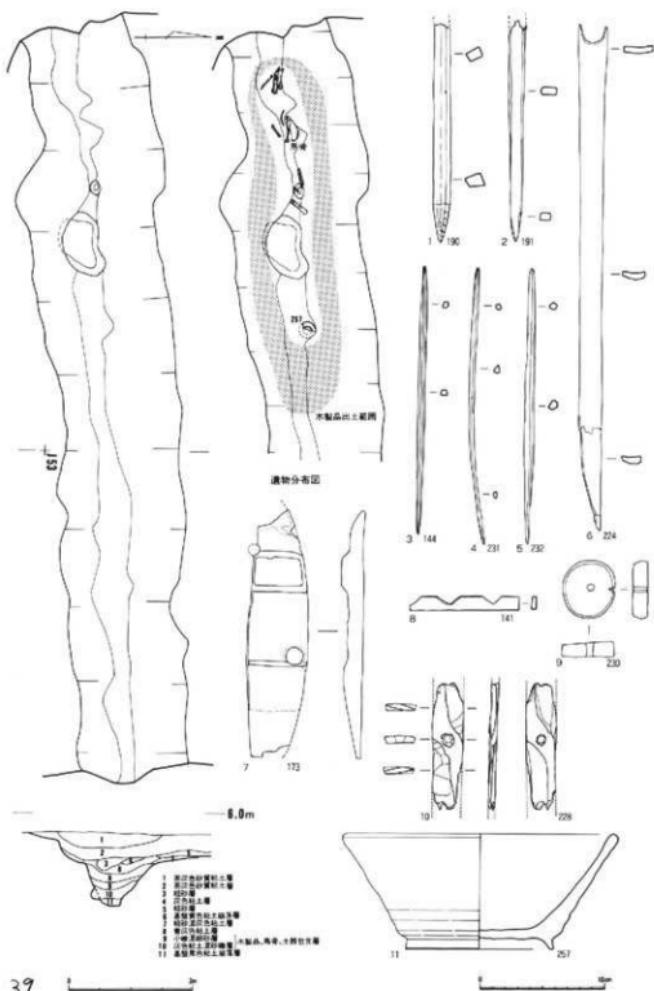
SD 228（第39図） I 53・J 53グリッドで検出された東西方向の溝状遺構である。幅2m、深さ1.2m、延長12mを測る。出土遺物から平安時代末から鎌倉時代の溝状遺構としておく。SD 228は遺物に特徴があるため以下詳述する。

完形遺物はすべて覆土9-10層より出土した。両層とも砂・砂礫を主体とし年代的差違は認められない。大平鉢と馬骨は10層からの出土で2mほどの間隔をおいている。木製品は両層ともに出土しており、平面的な範囲は網かけ部によって示した。遺物の種類は、馬骨10点（下顎骨1点を含む）、箸状木製品43点、棒状木製品7点、木製羽根（竹とんぼ状木製品）1点、紡輪1点、下駄1点、加工木製品（片）42点、焼痕のある木片多数、大平鉢1点、青磁1点である。このうち箸状遺物としたものは本遺跡においては、呪符木簡、卒塔婆姿の木簡、人形木製品、墨書き土器などと共に溝、河道、井戸といった限定された地点でのみ検出され、年代も平安時代末から鎌倉・中世に限られている。SD 228は宮川3区のSR 486の481点について多い。

SD 228の機能はその規模から給排水にあると思われるが、…括弧をもつ遺物群から祭祀の場としても重要な地点であった。

粘土探査跡 粘土探査跡はS X 215・216・217・218・219・220・227の7個所が確認された。すべて水上6区である。これは水上5区の基盤層が砂層となってしまうためである。探査は30cmほどの浅いものと80cmにおよぶ深いものとがみられる。S X 215・216は浅く1-1b層の砂をかけて1-a層のみを探査対象土としているのに対し、S X 217は1-C層の白色粘土をも対象としているため深くまで

掘られている。また深い採掘跡（S X 217・S X 220・S X 227）はすべて2層（黒色粘土層）の上面で採掘を中止している。覆土中からは国産陶磁器片が出土することから近世段階の採掘跡と考える。また、安永年間に駿府在勤の幕吏の手に成るとされる『駿府風土記』（『静岡市史』中世・近世史料 = 1981）によれば、「大屋村 此村ニテ御城内御用瓦ヲ焼ナリ」とされることから駿府城の瓦を焼くための粘土採掘であったと思われる。



第39図 水上6区SD228実測図

第17表 水上5・6区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長 広	短 幅	深 さ	長幅比 (長幅 - 1)	遺構面標高	特 記 事 項
SP201	I 57	0.73	0.66	0.27	0.90	5.93	
SP202	I 58	1.05	0.93	0.33	0.89	6.03	
SP203	I 58	1.00	0.96	0.21	0.96	5.94	平安時代末
SP204	H 57	0.28	0.25	0.21	0.89	6.00	
SP205	H 58	0.52	0.46	0.23	0.88	5.95	古墳時代(後期)
SP206	I 57	0.73	0.58	0.95	0.79	6.00	古墳時代(前期)
SP207	I 58	0.72	0.60	0.49	0.83	6.15	
SP209	I 58	0.80	0.70	0.23	0.88	6.05	古墳時代(前期)
SP210	I 57	0.56	0.54	0.04	0.96	6.02	
SP211	I 57	0.23	0.19	0.08	0.83	5.99	
SP213	I 56	0.89	0.63	0.50	0.71	5.97	
SP214	I 57	0.68	0.42	0.13	0.62	5.97	
SP223	H 58	1.25	1.08	0.34	0.86	5.80	
SP224	H 58	(0.95)	0.85	0.22	(0.68)	6.00	
SP225	H 58	(1.05)	(0.90)	0.30	(0.86)	6.00	
SP226	H 58	(0.80)	0.58	0.15	(0.73)	5.99	
SP233	I 56	0.38	0.33	0.10	0.87	5.92	
SP234	I 56	0.28	0.25	0.06	0.89	5.95	
SP235	I 56	0.53	0.42	0.08	0.79	5.90	
SP236	I 57	1.37	0.92	0.35	0.67	5.90	
SP237	I 57	1.44	1.13	0.36	0.78	5.92	
SP238	I 57	0.38	0.32	0.11	0.84	5.94	
SP239	I 57	0.63	0.55	0.26	0.87	5.99	
SP240	I 57	0.27	0.22	0.02	0.81	6.03	
SP241	I 58	1.07	0.93	0.16	0.87	6.02	
SP242	I 58	0.72	0.55	0.17	0.76	5.98	
SP243	H 55	0.70	0.58	0.25	0.83	5.98	礎板
SP244	I 56	0.59	0.39	0.05	0.66	5.98	
SP245	I 56	0.44	0.34	0.10	0.77	5.99	
SP246	I 56	0.62	0.50	0.15	0.81	5.96	
SP247	I 56	0.44	0.24	0.20	0.55	5.98	
SP248	I 56	0.51	0.49	0.40	0.96	5.97	
SP249	I 55	0.67	0.54	--	0.81	6.00	
SP250	I 55	0.57	0.35	0.08	0.61	6.01	
SP311	I 55	0.58	0.52	0.05	0.90	5.88	
SP312	I 55	0.43	0.35	0.06	0.81	5.86	
SP313	I 54	0.88	0.83	0.36	0.94	5.52	
SP314	J 54	1.24	1.00	0.74	0.81	5.51	
SP316	I 54	0.81	0.53	0.19	0.65	5.58	

遺構番号	グリッド	長 範	短 範	深 さ	長短比 (長径=1)	遺構面標高	特 記 事 項
SP320	I 55	0.33	0.27	0.08	0.82	5.93	
SP321	I 55	0.32	(0.19)	0.07	(0.59)	5.94	
SP322	I 55	0.20	0.18	0.13	0.90	5.99	
SP323	I 55	0.75	0.52	0.11	0.69	5.93	
SP324	I 55	0.56	0.42	0.09	0.75	5.92	
SP325	I 54	1.25	1.18	0.49	0.94	5.65	
SP326	I 55	0.52	0.26	0.16	0.50	5.93	
SP327	I 55	0.21	(0.20)	0.17	(0.95)	5.94	
SP328	I 54	0.41	0.39	0.20	0.95	5.87	

水上 7 区・10 b 区（第40・42図）

1. 概 要

水上 7 区は河口起点より 1025 m 上流に位置し現大谷川左岸部にあたる。水上 10 b 区は河口起点より 1075 m 上流に位置し現大谷川右岸部にあたる。本調査区において、流路としては①帶状低地内の溝状地形 1 個所②古墳時代後期から近世までの旧河道跡 8 本が検出できた。旧河道跡はいずれも旧大谷川の蛇行部分がしだいに外湾し順次河道が外側または南側に移動した状況を示していた。①・②の中で覆土中に遺存する遺物の伴出関係を明らかにすることができたのは SR807、SR808、SR810 の I 73 グリッド部分、SR811 の I 72 グリッド部分、SR812 の I 71 グリッド部分、SR813 の J 70 グリッド部分の 6 個所であった。それ以外はいくつかの時期の河道が同一地点で重複して検出されたため、遺物の伴出関係についての詳細な検討は今後の課題としたい。

また本調査区では旧大谷川の河道変遷の跡とともに水辺の祭祀に関連すると考えられる遺構が 6 個所検出された。

なお水上 7 区の 73 列以南の上層部分からは近世の水田状遺構 SX467 と連続土坑 SX461・SX462（図版 46-3・4）の合計 3 面の遺構を検出した。

2. 遺構 各 説

SR807（第45図 図版47） 水上 7 区 I 72 グリッドから J 75 グリッドにかけて、調査区を南西から北東へ横切る幅 13 m 前後の帯状の低地地形があり、この南東側に幅 4 m ほどの溝状地形が形成されていた。これを SR807 とした。SR807 の延長は 24.7 m、溝底最深部の標高は 4.20 m である。溝底の傾斜から、北東方向への流れが推定できる。SR807 の覆土は黒灰色粘土層である。内部から杭列と多量の棒状木片および刀形木製品 1 点と土師器の壺形土器・壺形土器・壺形土器・高壺形土器（第46図）などが検出された。土器の特徴から古墳時代中期から後期初め頃と考えられる。

なお SR807 は水上 10 a 区の SR673 と連続すると考えられる。

SX806（第42図-1、第47図 図版48-1・2） 水上 7 区 I 75 グリッドで検出された、上師器の高壺形土器 3 点（1654・1653・1651）、壺形土器 1 点（1652）の計 4 点の一括出土部分である。この一括土器は低地地形の斜面上におかれている。高壺形土器は完形で使用や投棄後の二次的原因による摩滅がみられない。また周辺からはほとんど遺物が出土していないことを考慮すれば、意図的に置いた状態で遺存していたと考えてよいであろう。年代は古墳時代中期から後期初頭と考えられる。

SR808 水上 7 区の I 78 グリッドから I 75 グリッドまで西側に湾曲して南流する旧河道跡である。確認面で、延長は 35.6 m を測る。河道は攻撃斜面側の深く浸食された部分とその外側の微高地を浅く抉り

とった部分からなり階段状の断面形を呈する。SR808の年代は古墳時代後期と考えられる。この旧河道は低地地形の縁辺を大量の砂礫の押し出しを伴う浸食によって形成されたものであり、大谷川旧河道形成の初期のものと考えられる。

SX805 (第48図 図版48-3・4) 水上7区のSR808内で検出された、土師器の壺形土器2点 (1135ほか1点) が出土した遺構である。これはSR808内の、標高3.23～3.25mの平坦面(河床)におかれていた。2個の壺形土器の間には全長1.2m、直径6cmなどの棒状木製品も検出されている。2個体の壺形土器はいずれも完形品で、流れ込みとは考えにくく、砂礫層内に並置された可能性もみておきたい。年代は古墳時代後期と推定した。

古墳時代後期旧河道跡 (SR809・SR810・SR811・SR812) (第42図-2・3)

ここではSR808を除いた古墳時代後期の旧河道跡4本について述べる。

SR809 水上7区I77グリッドから南流しI74グリッド付近から東にむかって蛇行する旧河道跡である。確認面での幅は4.2m、延長は42.7m、河床は平坦で標高4.27mを測る。覆土は褐灰色砂礫層(33層)である。覆土中からの遺物により6世紀代と考えられる。

SX810 (図版47-3、50-1・2) 水上7区I77グリッドからJ72グリッドまで、SR809の外側に蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での幅は13.6m、延長は66.7m、河床は平坦で標高4.42mを測る。覆土は灰茶褐色砂礫層(32層)である。覆土中から大量の土師器・須恵器が検出された。これにより7世紀前半代と考えられる。

SR811 (図版50-3、51-1) 水上7区I77グリッドからJ71グリッドまで、SR810の外側に蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での幅4.10m、延長は搅乱をうけた中間部を含めると69.6m、河床は平坦で標高は4.47mを測る。覆土は茶褐色砂礫層(31層)である。覆土中から馬形土製品4点他と大量的土師器・須恵器が検出された。これにより7世紀後半代と考えられる。

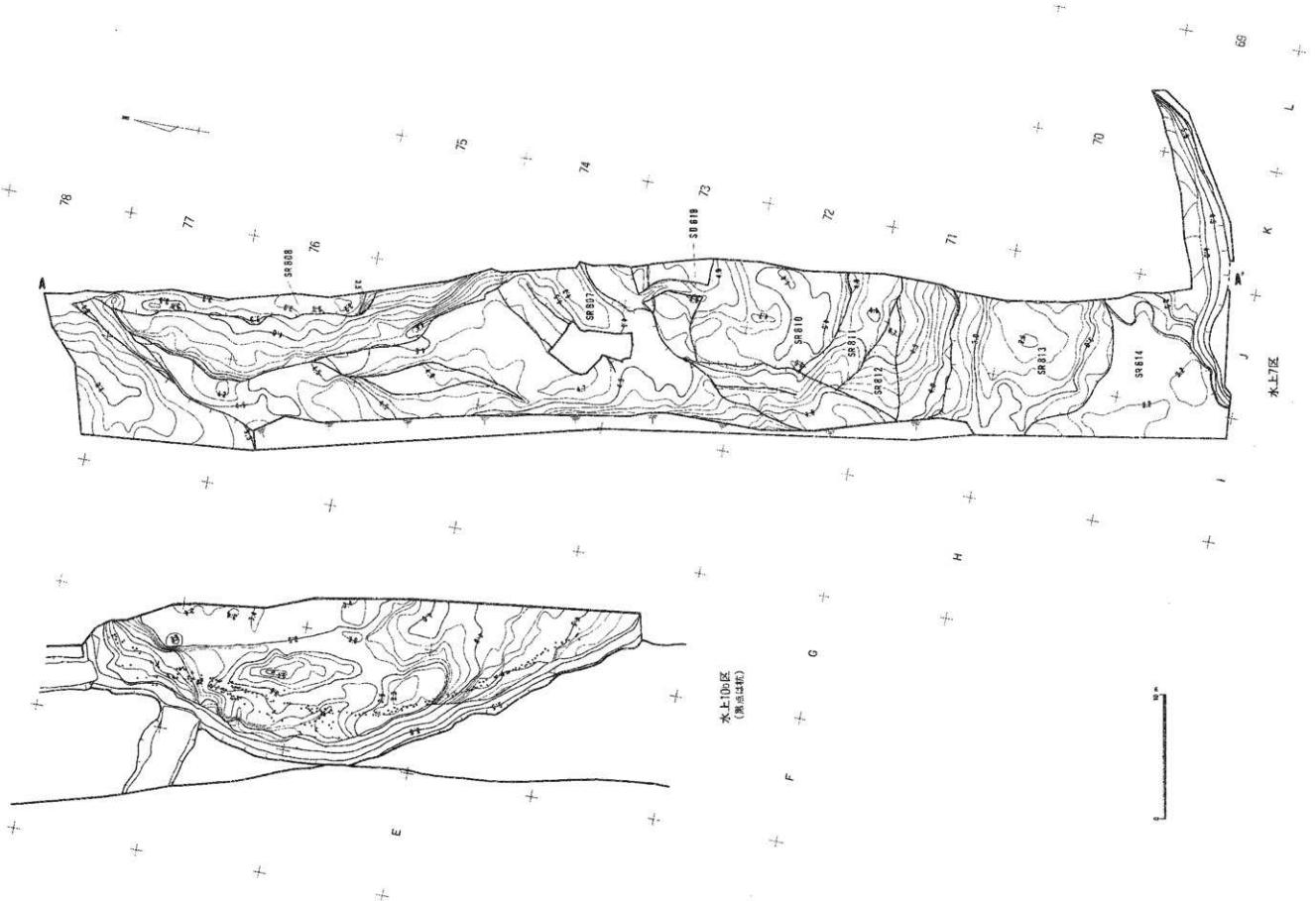
SX812 水上7区I77グリッドからJ77グリッドまで、SR812の外側を蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での幅は38.4m、延長は搅乱をうけた中間部を含めると78.1m、河床は平坦で標高は4.50mを測る。覆土は暗茶褐色砂礫層(30層)である。覆土中から大量の土師器・須恵器と馬形土製品2点他が出土した。これにより7世紀後半代と考えられる。

古墳時代後期蛇行洲上遺構 (SX803・SX804・SX801・SX802・SD618)

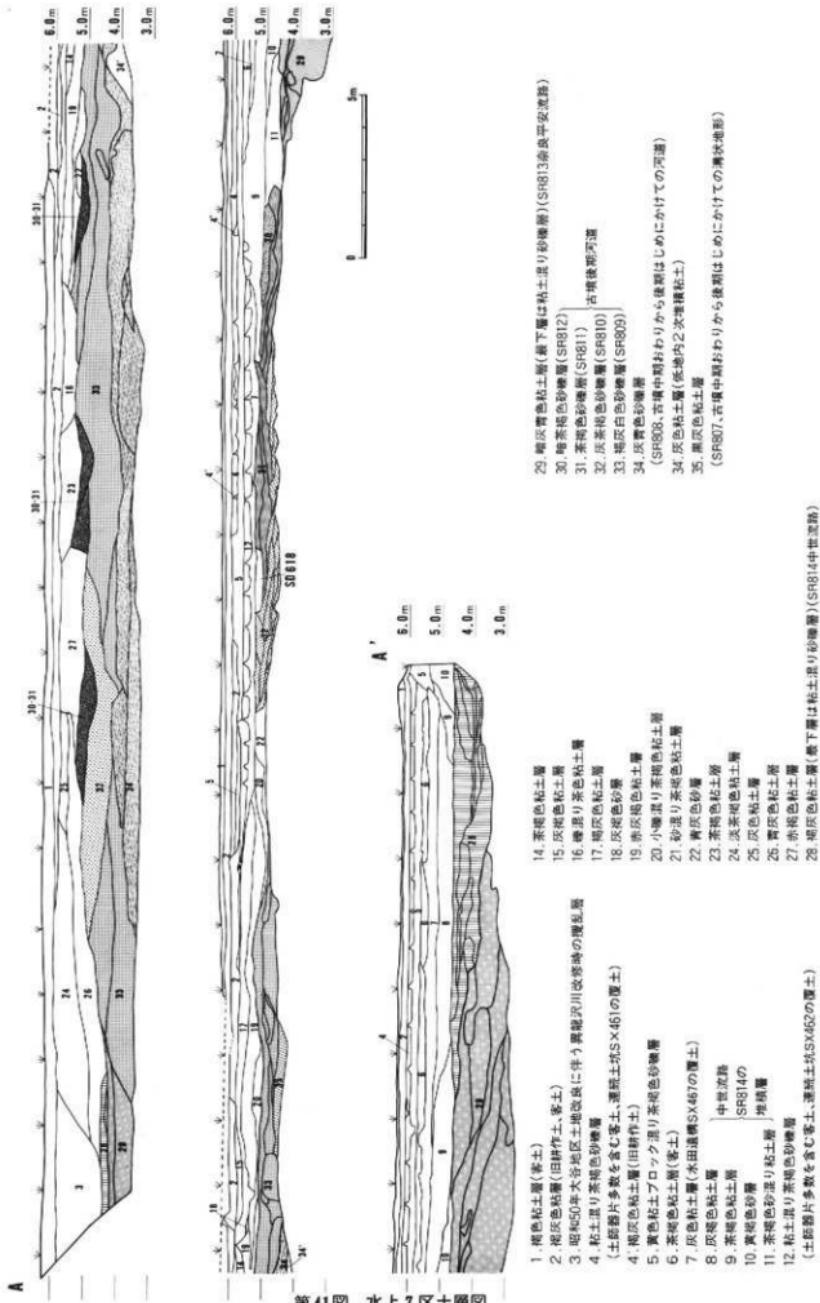
これらの遺構はいずれもSR809・SR810・SR811・SR812の4本の旧河道跡が順次、砂礫の堆積によって埋められて形成された蛇行洲上に立地している。

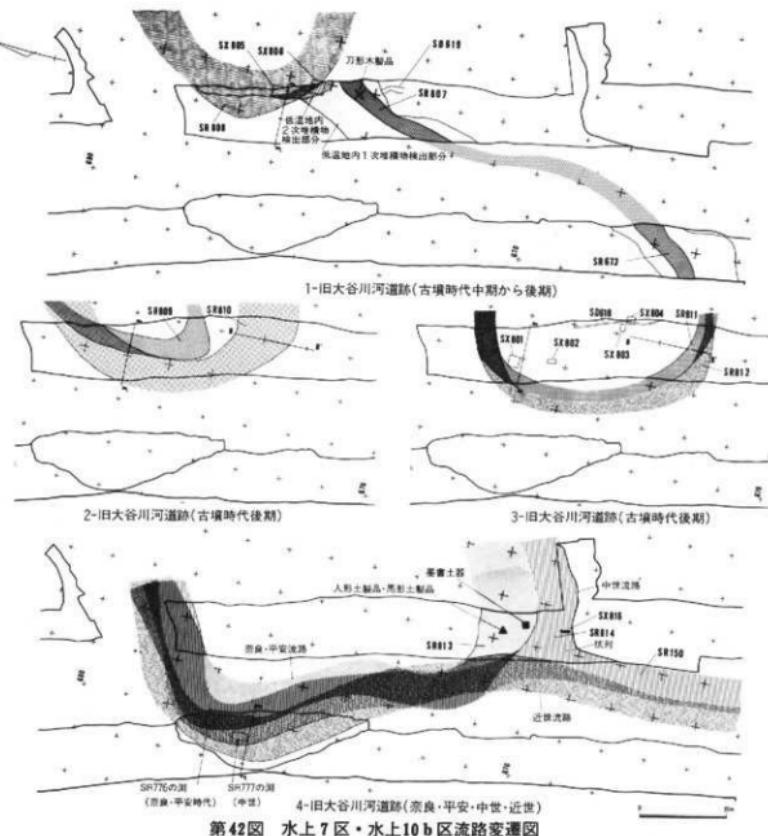
SX803 (第50・53図 図版52-2) 水上7区J73グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は赤灰褐色粘土層(19層)で、標高5.02mを測る平坦面である。基準杭J74より南東2.13mの地点に土師器壺形土器1点が出土し、その北側に隣接して土師器壺形土器1点(622)、北東15cmに土師器壺形土器1点(621)が検出された。壺形土器と壺形土器(621)はいずれも底部が正位で接地した状況で、そのうち壺形土器は破損もほとんどなく完形、壺形土器は口縁部・胴部が底部の周囲に原形のまま土圧で押しつぶされた状態で検出された。また周辺の同一面からは遺物が出土していないことを考慮すれば、意図的に置いた状態で遺存していたと考えてよいであろう。年代は、赤灰褐色粘土層がSR809の覆土の上に堆積していることから6世紀と考えられる。

SX804 (第51・53図 図版52-3) 水上7区J73グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は赤灰褐色粘土層(19層)で、標高5.29mを測る平坦面である。基準杭J74より南東4.65mの地点に土師器壺形土器1点が出土し、その周囲の1m×0.7mなどの範囲に土師器壺形土器18点(第53図3～18ほか2点)が検出された。壺形土器は底部が正位で接地し、壺形土器の中に壺形土器6点が正位で積み重なった状態で、壺形土器もろともに土圧で真上から押しつぶされた様相で検出された。またこの壺形土

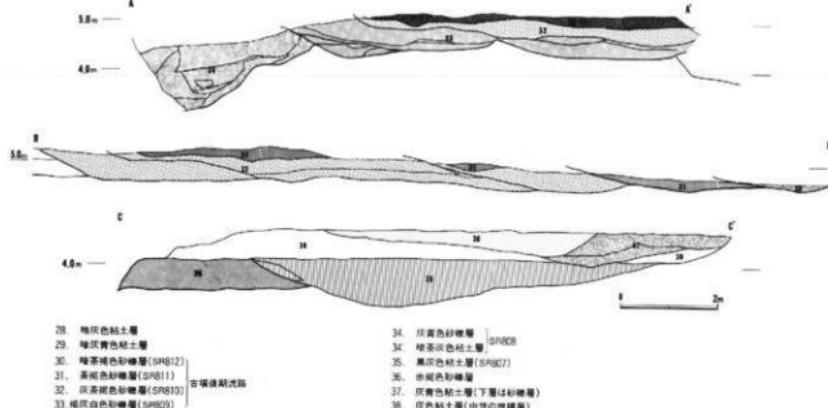


第40図 水上7区・水上10b区等高線図

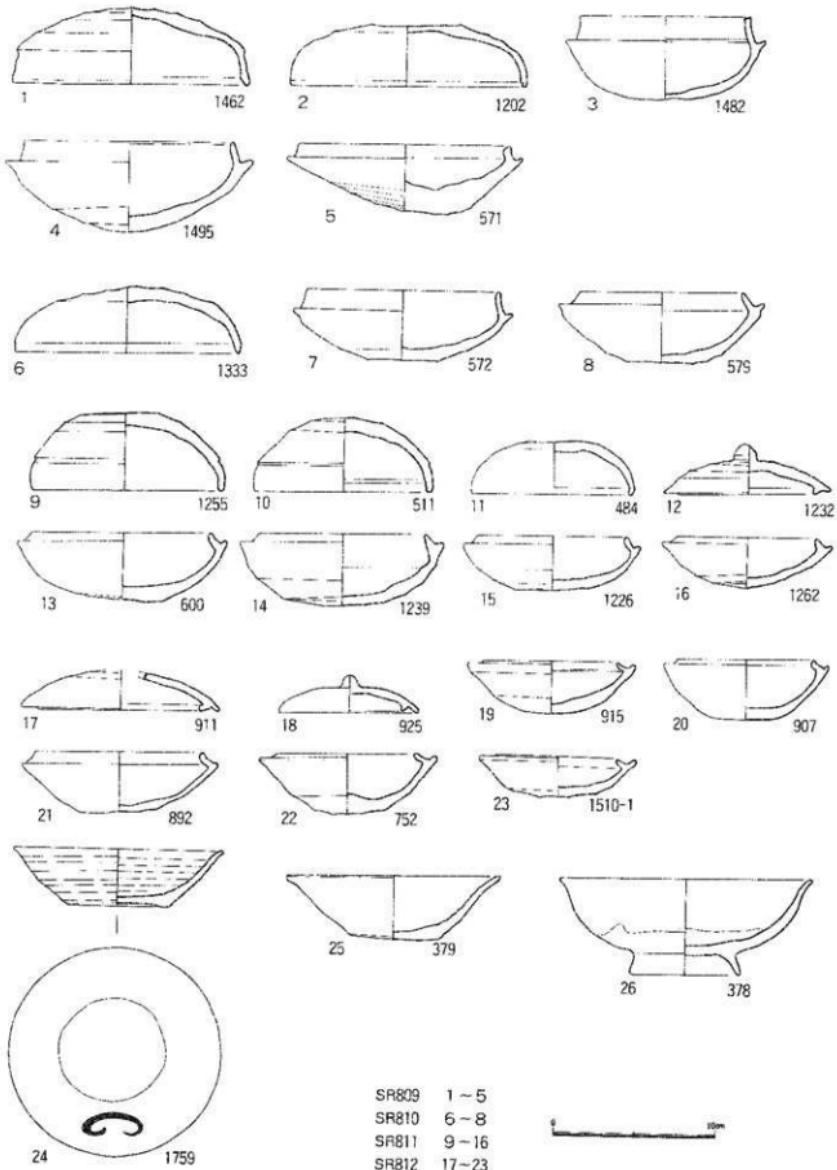




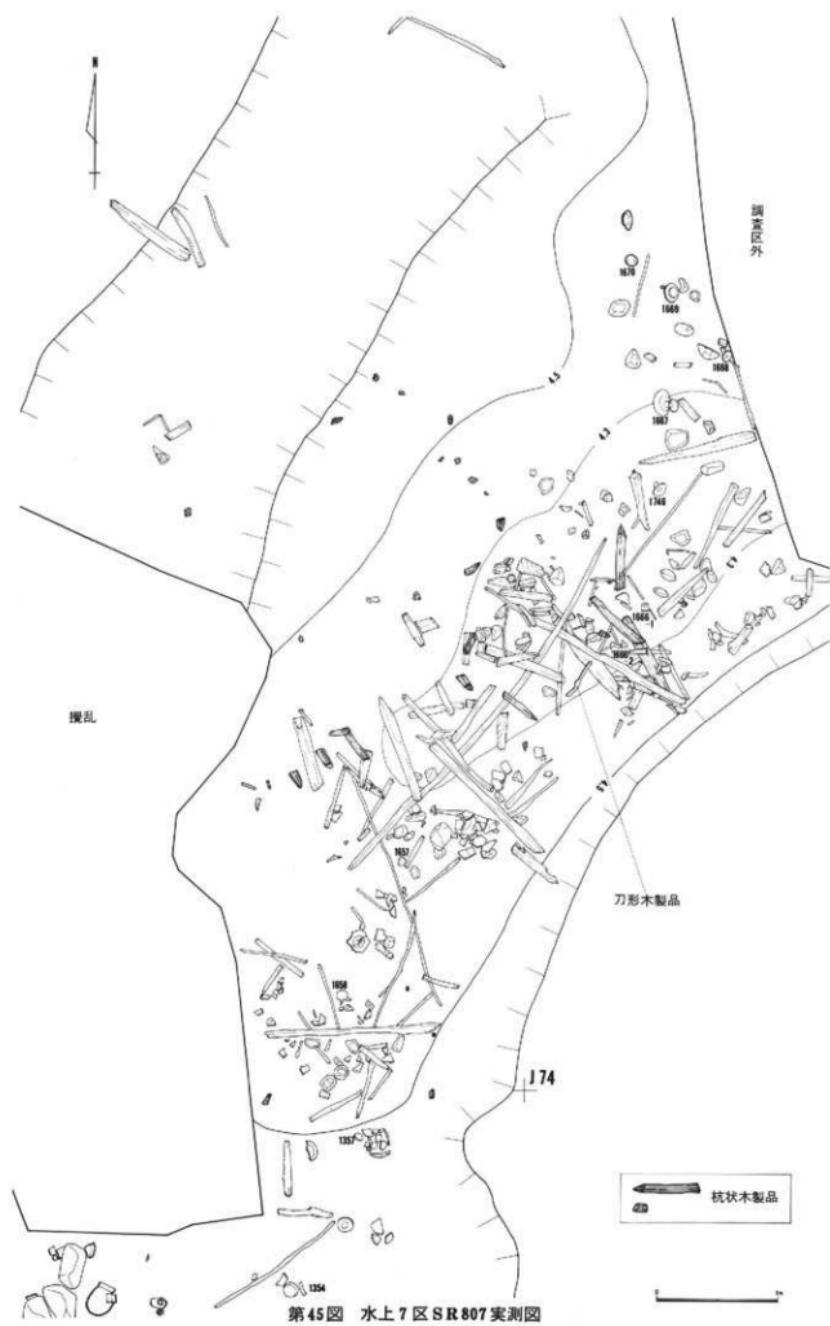
第42図 水上7区・水上10b区流路変遷図



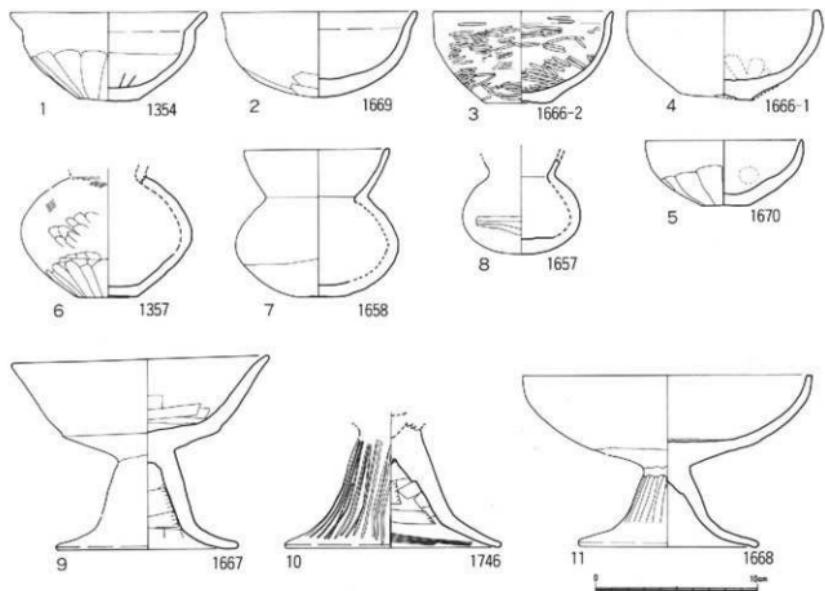
第43図 水上7区・水上10b区土層断面図



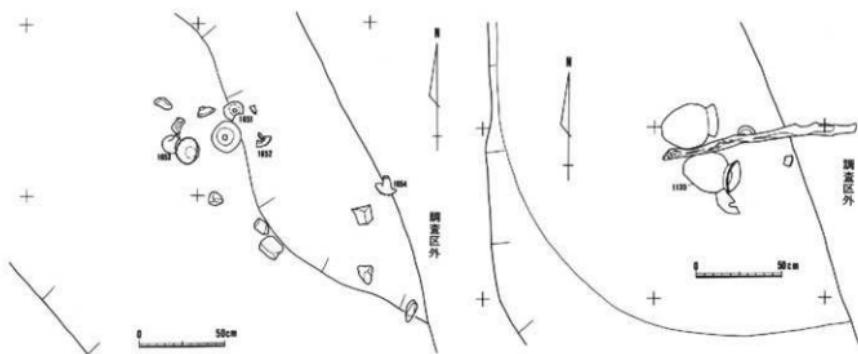
第44図 水上7区流路別出土土器実測図



第45図 水上7区SR 807実測図

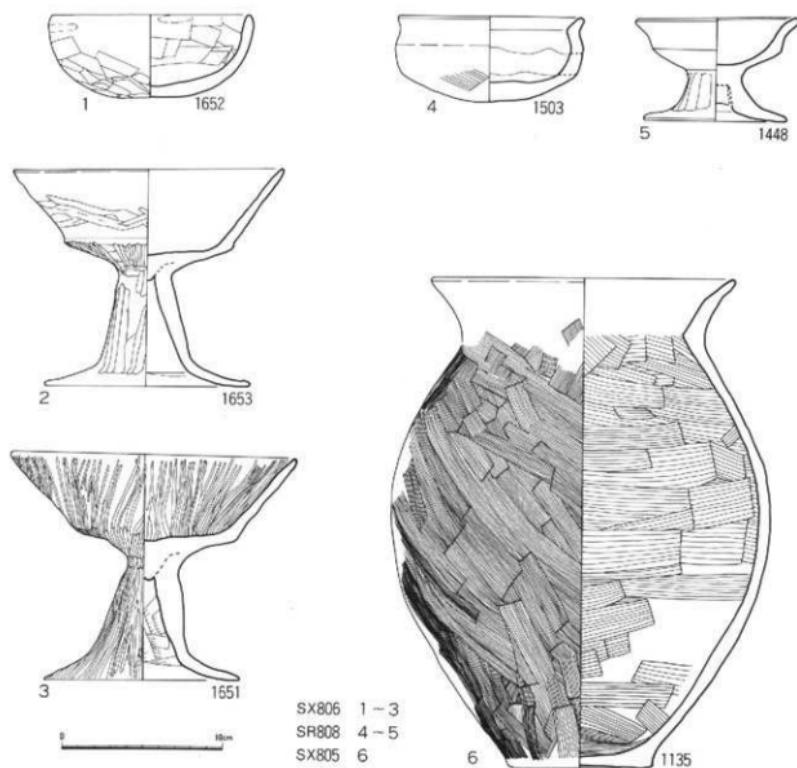


第46図 水上7区SR 807出土土器実測図



第47図 水上7区SX 806実測図

第48図 水上7区SX 805実測図



第49図 水上7区SR 808出土土器実測図

器に隣接した3箇所で壺形土器が底を下にして2個が重なった状態で検出された。また周辺の同一面からは遺物が出土していないことを考慮すれば、意図的に置いた状態で遺存していたと考えてよいであろう。年代は、赤灰褐色粘土層がSR 809の覆土の上に堆積していることから、6世紀代と考えられる。

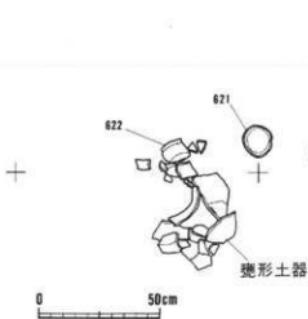
なお、SX 803とSX 804は同一層での検出であり、相互の間隔は2mたらずであったものの比高差は0.27mと大きい。河道の埋積過程での時間差を認めるべきかもしれないが現段階では同時期の投棄としておく。

SX 801（第52・54図 図版53）水上7区H76グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は小礫混りの褐灰色粘土層（17層）で、標高5.21mを測る平坦面である。基準杭I 76より北西2.40m地点付近を中心とした1.6m×1.1mほどの範囲から土師器の壺形土器31点（第54図1～30ほか3点）、壺形土器1点、手捏土器1点（第54図31）、馬形土製品4点（第54図32～34ほか1点）が検出された。出土土器の大部分は底部が正位で接地し、完形のまま検出されている。壺形土器は半径40cmほどの円弧状に配

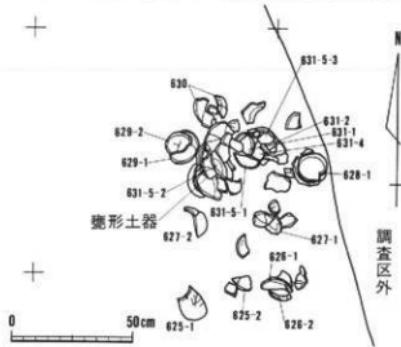
列されたものの11点とその内側に置かれているもの8点(壺形土器1点を含め合計9点)、さらに円弧の外側に位置するもの6点が認められた。土馬は壺形土器の北側に隣接して3点、南東側に1点が出土し、北側の土馬には手捏土器1点も併出した。

出土した壺形土器33点のうち28点は口径・器高ともに均一で、他の5点はやや大型であった。

このように壺形土器を円弧を基調として配列し、その周囲に土馬と手捏土器を置くSX801の形態は土馬を用いる祭祀跡と考えてよいであろう。なお年代は遺物の特徴と覆土から7世紀後半と推定した。



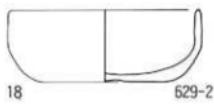
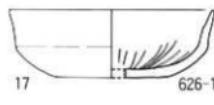
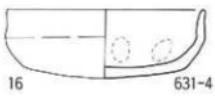
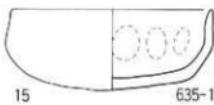
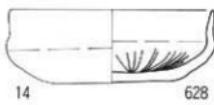
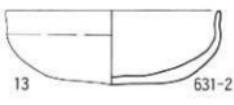
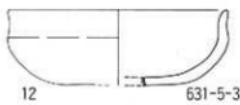
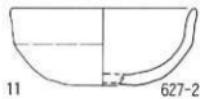
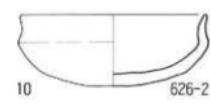
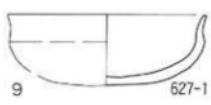
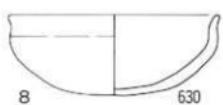
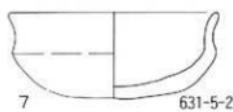
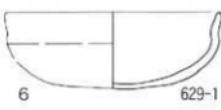
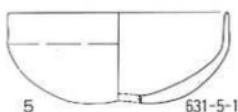
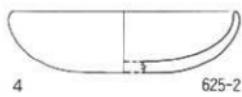
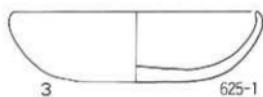
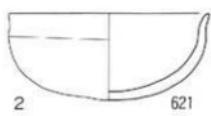
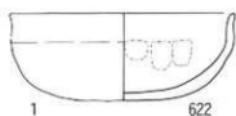
第50図 水上7区SX 803実測図



第51図 水上7区SX 804実測図



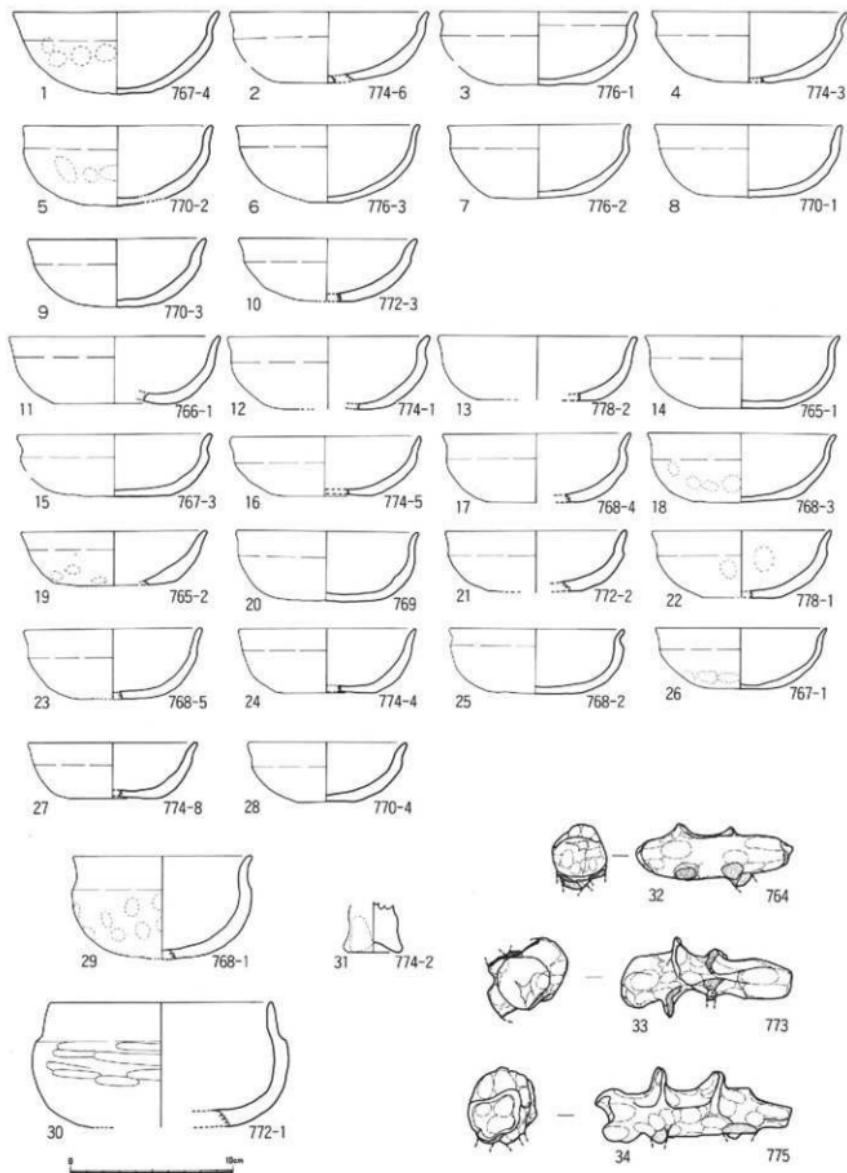
第52図 水上7区SX 801実測図



SX803 1-2
SX804 3-18



第53図 水上7区 SX803・SX804出土土器実測図



第54図 水上7区SX801出土遺物実測図

S X 802 (図版51-2・3) 水上7区I 75グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は褐色粘土層(17層)で、標高は5.08mを測る平坦面である。基準杭I 75より北3.40m地点付近を中心とした1.1m×0.6mほどの範囲に人形土製品3点、馬形土製品5点が検出された。人形土製品はほぼ完形で出土したものが1点(図版51-2)、下半身を欠損したものが2点であった。馬形土製品は頭部片が3点、胴部片が1点、尾部が1点であった。このほかに馬形土製品の胸部か人形土製品の胸部か判別の難しいものが11点出土した。以上の土製形代は散乱した状態で検出され配置性は認められなかった。また周辺の同一面からは土製形代類やS X 801のような一括性をもつ上器は検出されなかった。このことからS X 802は人形土製品・馬形土製品のみが一括して投棄されたものと考えられる。年代は覆土の状況から、7世紀後半とされる。

SD 618 (第42図-1 図版52-4) 水上7区J 73・J 74グリッドで南北方向に検出された、南から北へ流れる溝状遺構である。確認面での延長は18.8m、幅は0.61m、長さは0.29mを測る。SD 619の検出面は標高5.33mの平均面であり、赤灰褐色粘土層(19層)の上面にある。覆土は褐色粘土(17層)であり、覆土中から土製形代と考えられる破片1点と土師器片が検出された。年代はSD 618がSR 811内に堆積した砂礫層をも掘り込んで開削されているため、7世紀後半とされる。

奈良・平安時代河道跡 (第42図-4)

SR 813 水上7区I 71・J 70グリッドを中心で検出された旧河道である。確認面での幅は12.7m、河床は平坦で標高は2.60mである。覆土は暗灰青色粘土層(最下層は粘土混り砂礫層)(29層)である。覆土中から墨書き土器「匁」1点(第44図-24)、人形土製品1点、馬形土製品5点他と灰釉陶器・須恵器・土師器が大量に出土した。年代は遺物の特徴から平安時代とした。

なお水上10b区では75列～76列にかけて調査区東端に蛇行の屈曲部と思われる淵(最深部標高3.27m)が検出され、底面より出土した土器より奈良時代～平安時代の河道と推定された。あるいは水上7区SR 813と連続するのかもしれない。

中世河道跡 (第42図-4)

SR 814 水上7区J 69グリッドを中心で検出された旧河道跡である。確認面での幅は13.4m、河床は平坦で標高は3.20mである。覆土は褐色粘土層(最下層は粘土混り砂礫層・28層)である。覆土中から、しがらみ状遺構SX 816(図版54-4)、杭列が検出され、漆器碗1点、キセル雁首1点が出土した。SR 814は平安時代河道SR 813がさらに外側に蛇行した河道であり、しかもSR 814の上層には近世水出跡SX 467がある。また出土遺物からも中世から近世にかけての旧河道跡と考えられる。水上3区でも検討したように、このSR 814は「橋井ノ坪」関連の中世居館の堀としての機能を果していた可能性もある。

水上10b区ではF 75グリッド北半部からF 76グリッド南半部にかけて幅2.5mほどの淵が検出され、最深部は標高3.0mに達していた。底面からは山茶碗が出上し、平安時代末～鎌倉時代の河道の攻撃斜面側の屈曲部と判断された。

なお水上7区北端部の旧河道部分は、昭和50年の大谷土地改良区の工事の一環として異龍沢川の付替工事に伴い、大規模な攪乱を受けたこともあり奈良～近世の遺物が混在して検出された。

3. 小 結

本調査区の最大の成果は、古墳時代中期から後期にかけての水辺の祭祀に関連する遺構を検出できることである。以下にそれらの特徴を指摘したい。

①古墳時代中期から後期にかけての低湿地内溝状遺構SR807での刀形木製品の単独出土は本遺跡からの出土例としては最も古い刀形である。またこの時代の低地斜面上での土師器の高坏形上器3点と坏形土器1点が検出されたSX806は同時代と推定される水上8区SX775とともに古墳時代中期から後期初頭にかけての水辺の祭祀を考える上で重要な遺構である。

②SR808は、水上8区のSR778とともに旧大谷川河道形成の初顔を考える上で重要な位置を占めている。またSR808に堆積した大量の砂礫中から検出されたSX805の土師器壺形上器2個は古墳時代後期の特異な河道内祭祀と考えられる。

③古墳時代後期の蛇行洲上での祭祀関連遺構は6世紀代の土師器の壺形土器と坏形土器のセットから7世紀後半代の土師器の壺形土器と坏形土器および馬形土製品が加わるセット関係の変化が注目されよう。とりわけSX801では坏形土器の円弧状の配置などは祭祀の執行状況の一端をうかがわせるものといえよう。またSX802は馬形土製品と人形土製品のみで十器類を伴わない検出例として重要である。

第18表 水上7区小穴・溝状遺構一覧表

(小穴)

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径-1)	遺構面標高	特記事項
SP601	I 75	0.29	0.27	0.21	0.93	4.99	
SP602	I 75	0.32	0.25	0.35	0.78	5.26	
SP603	I 75	0.79	0.57	0.41	0.72	5.29	
SP604	I 75	0.57	0.42	0.25	0.71	5.18	
SP605	I 75	0.51	0.43	0.22	0.84	5.18	

(溝状遺構)

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
SD618	J 73・J 74	18.8	0.61	0.29	5.33	古墳時代後期
SD619	J 73	5.72	0.96	0.37	4.97	

水上4区・水上10a区低湿地（第56図）

1. 概 要

現大谷川の右岸にあり、河口起点より 933m 上流に位置する。旧大谷川右岸の微高地にあたるこの調査区は、砂層または砂混りの黄灰色粘土層が基盤をなしている。しかし64列～67列にかけては南西から北東に調査区を斜めに横切る幅25mほどの低地が存在し、低地全体が北東方向に傾斜している（第56図）。この低地内には上層に黄灰白色粘土（第57図6・7層）、下層に黒色粘土（10～13層）が堆積していた。このうち上層の黄灰白色粘土層は平安時代末から鎌倉時代初頭の造構面であり溝状造構・小穴が検出された。下層の黒色粘土は古墳時代の造構面であり、G66・G67グリッドでは微高地から低地へ向かう緩斜面上に石製模造品を含む大量の土師器群が出土した（第56図）。一方63列以南は表土および客土直下が基盤層となり、古墳時代前期の井戸状造構SE8、同じく古墳時代前期の溝状造構SD12、古墳時代後期の土坑SP41、平安時代後期の土坑SP17などが検出され、年代推定困難な他の造構も含めて古墳時代前期から鎌倉時代までの造構が同一面で混在している。このうち溝状造構は東西方向のものと南北方向のものが直交するように存在し、ほぼ同一の方向性を有するが、確認面が後世の擾乱を受けているため造構底面のみが確認されたものが多くほとんどの年代推定が困難でその性格は不明である。このほか小穴が多数検出されたが、住居跡・建物跡と認められるものは存在しない。

2. 造構各説

溝状造構

SD4 G63グリッドからH64グリッドにかけて、調査区内を東西に横切る。確認された延長は 12.4m、幅は 0.86 ～ 1.28 m、深さは最大で 0.21 m である。覆土中より祭祀用の小型高壺形土器の脚部が出土している（第60図10）。伴出遺物より古墳時代後期と推定される。

SD29 H59グリッドからI59グリッドにかけて、調査区内を東西に横切る。確認された延長は 8.0m、幅は 1.30 ～ 1.41 m、深さは最大で 0.14 m である。覆土中より土師器の祭祀用小型壺形土器（第60図11）が出土している。小型壺形土器の形状から古墳時代後期と推定される。SD4・SD29ともほぼ同方向であること、底面の標高が 6.0 m 前後とほぼ同一であること、幅が 1.28 m、1.41 m と近似していること、わずかな出土遺物の中に祭祀用小型上器 1 点が含まれていることなど共通点を有している。

SD12 H60・H61・H62グリッドの東端に延長 20.70 m、幅 1.00 m で円弧をえがくように存在する溝状造構で、南側・北側ともに屈曲部より先を現大谷川により破壊されている。出土遺物より古墳時代前期であると推定される。

土 坑

SP2 確認面で長径 1.88 m、短径 1.58 m、深さ 0.43 m の長円形の掘り方を持つ上坑である。盃形の手捏土器 1 点が検出され、伴出した土師器坏から古墳時代後期と推定される。

SP17 確認面で長径 1.32 m、短径 1.05 m の長円形プランをもち、深さ 0.41 m を測る。出土した灰釉陶器より平安時代後期と推定される。

SP41 確認面で長径 1.20 m、短径 1.06 m のほぼ円形のプランをもち、深さ 0.59 m を測る。底面で土師器坏と曲物の一部が検出され、古墳時代後期と確認された。

井戸状造構

SE8（第118図）調査区の東端で検出されたため 5 分の 2 程度を現大谷川により破壊されていた。確認できる範囲で径 2.72 m の半円形で、深さ 1.27 m を測る。3段階の掘り方をもち素掘りである。出土した土師器より古墳時代前期と推定される。

SE13（第119図）調査区の西端で検出されたため東西方向が長軸となる円形プランの東側 5 分の 3 のみ

が確認された。推定長径 3.30m、短径 2.42m、深さ 0.27m である。長さ 0.65m の方形と推定される井戸枠の東辺のみが残存していた。10.0cm × 6.0cm の 2 本の角材を隅に置き、その間に幅 8.0cm ~ 14.0cm ほどの縦板 4 枚をならべて井戸側としている。南辺では長 0.42m の構機のみが検出された。井戸側内部は径 0.62m の曲物をはめ込み水溜としている。また水溜の中央部からは径 0.20m の手桶状の曲物が検出されている。上層より出土した須恵器壺より埋没年代は奈良時代と推定される。

S X 624 (第56図・第58図) 64列~67列にかけての低地内には、66列~67列に南西から北東方向に調査区を横切る幅 2.8 ~ 4.0m ほどの溝状地形 SR 673 があり、グライ化した粘土が 20cm ほど堆積していた(第57図8・9層)。この層の下部からは土師器片と古墳時代中期末~後期初頭に比定される須恵器壺 1 点と木片が出土した。この溝状地形 SR 673 は南西から北東方向に緩やかな傾斜があり、増水時には排水路的な役割をしていたと考えられる。溝状地形 S R 673 に向かう南東向の緩斜面から石製模造品を含む多量の土師器群が検出され、S X 624 と呼称した。

出土遺物と状況 遺物群のうち標高 6.1m ほどまでにあるものは上に黄灰白色粘土が堆積しているが、G 67グリッドの 6.2m 以上のものは表土あるいは客土直下に存在するため若干の攪乱を受けていた。コントナ 30 箱以上におよぶ七輪器は、破片がほとんどで、集中部では折り重なるように出土している。復元は困難なものが多く土器全体の形状が確認されたものは 45 点のみであったが、器種が判別できるものを一個体として扱うと 168 点を数える。

出土状況から土師器群を a ~ d の 4 群に分割した(第58図)。このうち a 群と d 群は集中が著しい所である。a 群は微高地末端部に位置し、土器群の内で最も標高の高い部分にあたる。土器は破損が激しく各器種器型の破片が混在していた。a 群の特徴は有孔円板 4 点、剣形模造品 2 点を含むことである。上器は a ~ d 群で最も多数の 57 個体を確認したが、一個体として認識できないものが多く実際にはより多数であると考えられる。器種構成をみると高环形土器 38.6%、壺形土器 33.1% と二器種でその大半を占め、壺形土器 21.1% と続き、台付壺形土器 2 点と手捏ね土器 1 点も含まれている。他群にくらべ壺形土器が高い比率を示している。

b 群は a 群に隣接して南に位置する。a 群が小破片の混在であるのにくらべ完形品が多い。特に中心部(1.1m × 1.2m の範囲)では高环形土器 3 点、壺形土器 3 点、壺形土器 3 点、壺形土器 4 点、台付壺形土器 1 点、台付壺形土器 1 点の計 15 点が置かれ、このうち高环形土器 1 点、壺形土器 1 点、壺形土器 1 点、壺形土器 1 点、台付壺形土器 1 点はほぼ完形で出土している。器種構成では壺形土器・壺形土器・台付壺形土器で総個体数の半数を占めている。個体数が少ないので一概には言えないが、他群にくらべ際立った特徴である。中心部を除く周辺は破片の散乱と考えられ、中心部のみは原位置をほとんど動いていないと考えてもよいだろう。

C 群は土器の分布が他の群にくらべ希薄で破片が多く復元された個体も少数である。他の群の土器が散乱したものと想定してよいだろう。

d 群は a 群とともに土器の集中が著しいが、位置的には a 群が微高地末端部であるのに対し、微高地から溝状地形 SR 673 にいたる緩斜面上にあり溝状地形に沿うように存在している。溝状地形および低地全体を意識した分布とみてよいだろう。a 群同様小破片が混在している。器種構成では高环形土器が 42.1% と高いが、これは高环形土器が比較的個体として認識しやすいという条件によるところが大きく実際には多量の破片の大半を壺形土器・台付壺形土器が占めている。特に台付壺形土器が他群にくらべて多い。滑石製模造品では勾玉 1 点、管玉 1 点が出土している。なお臼玉は a 群と b 群で 72 点、c 群と d 群で 212 点出土している。

ともに集中出土した a 群と d 群では器種構成において大きな差異がみられる。a 群は壺形土器が多く壺形土器では台付のものが 2 点のみで平底のものはみられない。これに対し d 群では壺形土器は 1 点の

みで、壺形土器、台付壺形土器が多い。b群は壺形上器、壺形土器は同数である。a群の壺形土器には古い要素をもつものが多く、①a群②b群③d群の推移が考えられる。

まとめ

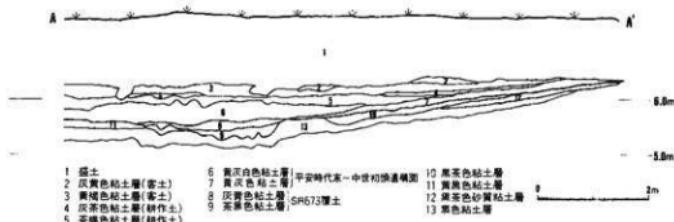
- (1) 土師器群は祭祀の後廃棄した跡と考えられる。その根拠として次のことがあげられる。
- ①有孔円盤6点・劍形2点・勾玉1点・管玉1点の滑石製模造品が出土している。
 - ②高杯・壺形上器で全体の60%以上を占め、手捏ね土器も含め祭祀的性格の強い土器構成になっている。
 - ③微高地の末端部と低地にいたる緩斜面に位置し、緩斜面の上器群は南東の溝状地形に沿うように分布している。
 - ④土師器群は破片が散乱しているが、ある程度のまとまりをもっている。また溝状地形内には微高地にみられるような土器の集中はない。
- (2) 出土遺物はa～d 4群に分けられ、c群を除き①a群②b群③d群の推移がみられ、古墳時代前期末葉～中期と考えられる。

3. 小 結

本調査区64列から76列にかけて検出された低湿地は現大谷川をはさんでさらに北東側へと続いている。水上7区72列から75列にかけて調査区を南西から北東方向に斜めに横切る幅20mほどの帯状の低湿地が認められ、この低地の南東側の端には幅3mほどの溝状地形(SR807)が存在する。この状況は本調査区の低湿地および溝状地形(SR673)とほぼ同じであり、いずれも南西～北東方向の傾斜を有していることから2つの低湿地および溝状地形は連続するものと考える。出土遺物より古墳時代中期から後期初頭まで機能していたものと推定され、旧大谷川未発達段階の低湿地に沿った流れの一つと考えられる。

第19表 水上4区溝状遺構一覧表

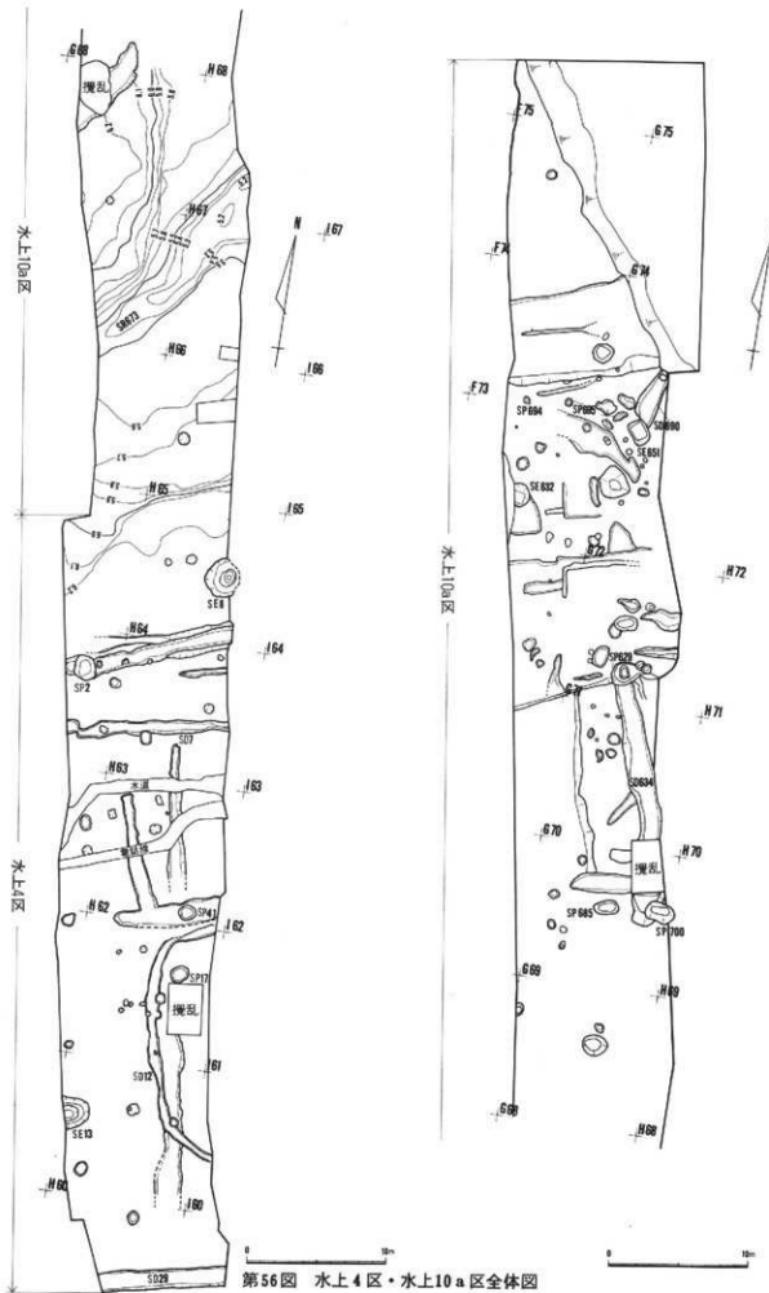
遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
SD4	G 53	12.40	1.28	0.21	6.16	古墳時代(後期)
SD6	G 63	9.20	0.96	0.05	6.25	
SD7	H 63	11.90	1.14	0.15	6.16	
SD10	H 63	3.50	0.54	0.08	6.23	
SD11	H 61	8.30	1.27	0.14	6.23	
SD12	H 60	20.70	1.00	0.11	6.18	古墳時代(前期)
SD14	H 62	6.00	1.28	0.04	6.19	
SD20	H 62	7.50	1.62	0.29	6.21	
SD25	G 64	10.10	0.32	0.03	6.20	
SD29	H 59	8.00	(1.41)	0.14	6.05	古墳時代(後期)
SD21	H 60	4.30	2.02	0.14	6.06	



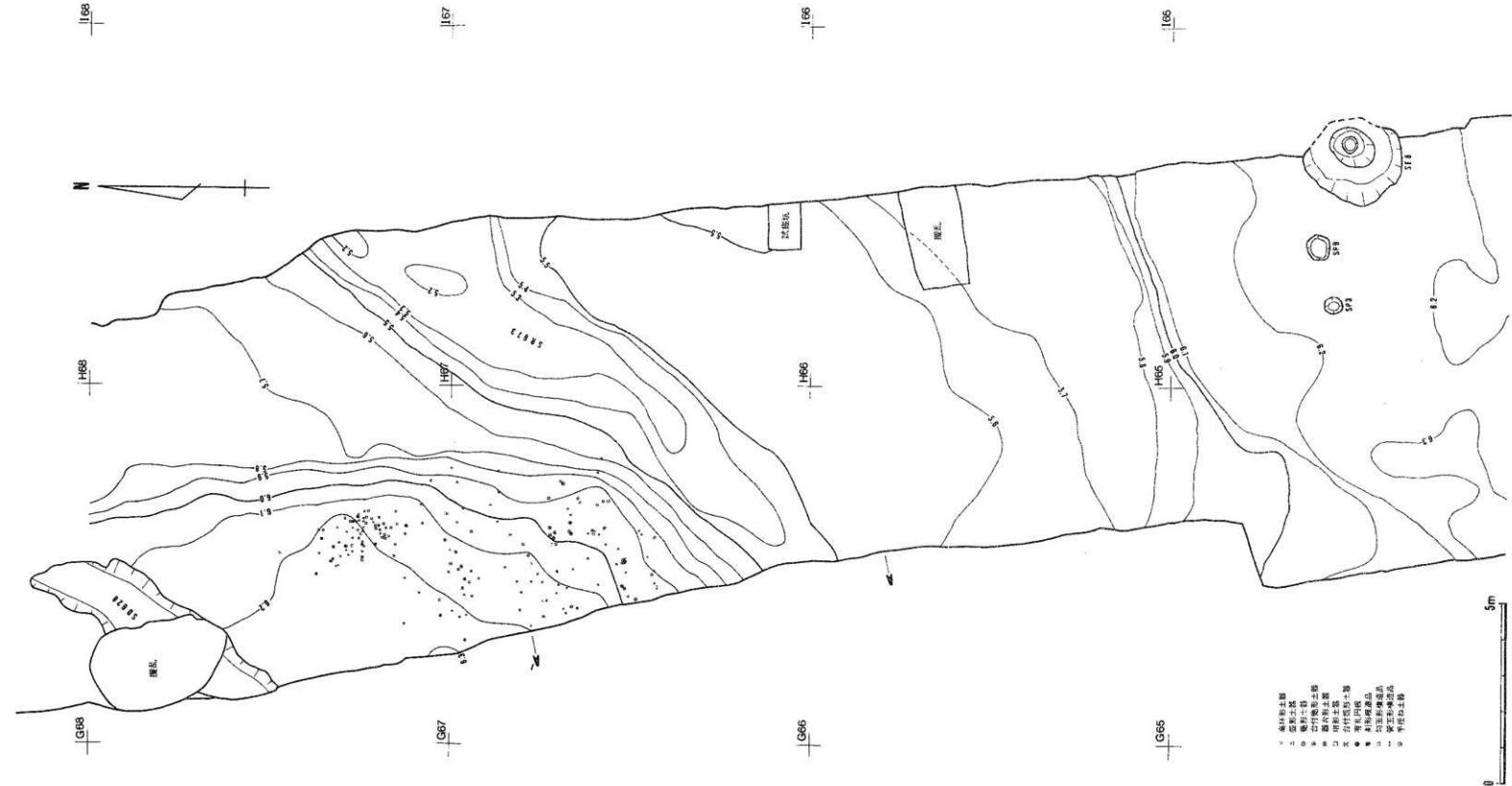
第55図 水上10a区低湿地土層断面図

第20表 水上4区小穴土坑状遺構一覧表

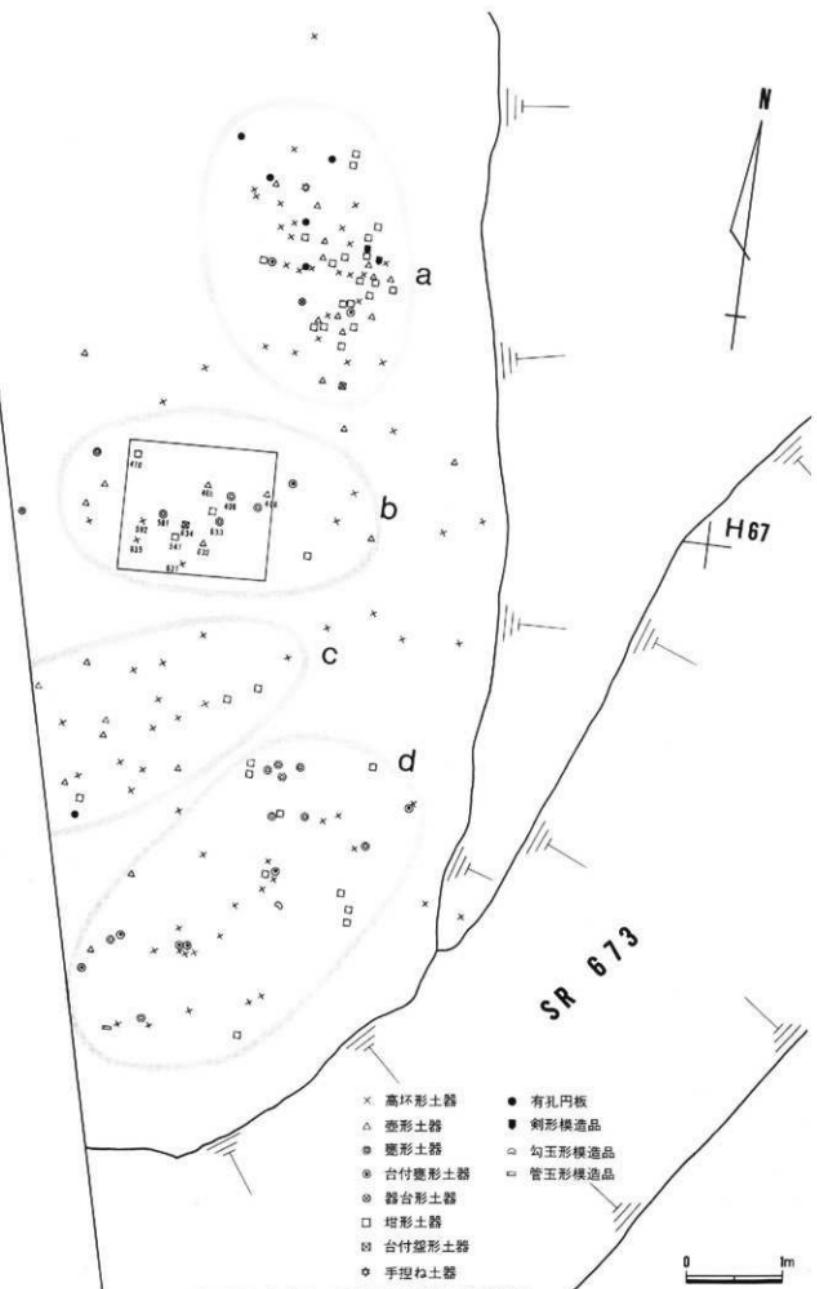
遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	遺構面標高	特記事項
SP1	G 63	1.77	1.70	0.24	0.91	6.26	
SP2	G 63	1.88	1.58	0.43	0.84	6.21	古墳時代(後期)
SP3	H 64	0.51	0.46	0.12	0.90	6.25	
SP9	H 64	0.72	0.68	0.16	0.94	6.29	
SP15	G 61	0.68	0.56	0.07	0.82	6.23	
SP16	H 59	1.00	0.83	0.55	0.83	6.10	
SP17	H 61	1.32	1.05	0.41	0.80	6.18	平安時代
SP19	H 63	0.99	0.67	0.09	0.68	6.17	
SP21	H 60	1.04	0.86	0.21	0.83	6.33	
SP22	G 64	0.21	0.20	0.18	0.95	6.17	
SP23	H 62	0.90	0.65	0.15	0.72	6.29	
SP24	H 62	0.72	0.58	0.19	0.81	6.22	
SP26	H 64	0.26	0.24	0.11	0.92	6.16	
SP27	G 62	1.10	0.80	0.27	0.73	6.16	
SP28	G 61	1.10	0.82	0.68	0.75	6.17	
SP30	H 60	0.71	0.64	0.22	0.90	6.10	
SP34	H 60	0.84	0.74	0.06	0.88	6.31	
SP35	H 60	0.53	0.50	0.12	0.94	6.14	
SP36	H 63	0.74	0.69	0.02	0.93	6.25	
SP37	H 61	0.50	0.50	0.22	1.00	6.17	
SP38	G 63	0.58	0.50	0.11	0.86	6.17	
SP39	G 62	0.74	0.66	0.11	0.89	6.16	
SP41	H 62	1.20	1.06	0.70	0.88	5.95	古墳時代(後期)
SP42	H 63	0.38	0.32	0.23	0.84	6.25	
SP43	H 61	0.76	0.68	0.36	0.89	6.20	
SP44	H 63	0.50	0.42	0.14	0.84	6.14	
SP45	G 63	0.54	0.37	0.14	0.69	6.18	
SP46	H 61	0.60	0.60	0.07	1.00	5.48	
SP47	H 60	0.31	0.28	0.24	0.90	6.32	
SP48	H 62	0.73	0.41	0.03	0.56	6.29	
SP49	H 61	0.40	0.24	0.15	0.60	6.19	
SP151	H 61	0.34	0.30	0.06	0.88	6.26	
SP152	H 61	0.50	0.38	0.28	0.76	6.26	
SP153	H 61	0.32	0.28	0.04	0.88	6.28	
SP154	H 61	0.48	0.27	0.18	0.56	6.18	
SP155	H 61	0.38	0.38	0.13	1.00	6.18	



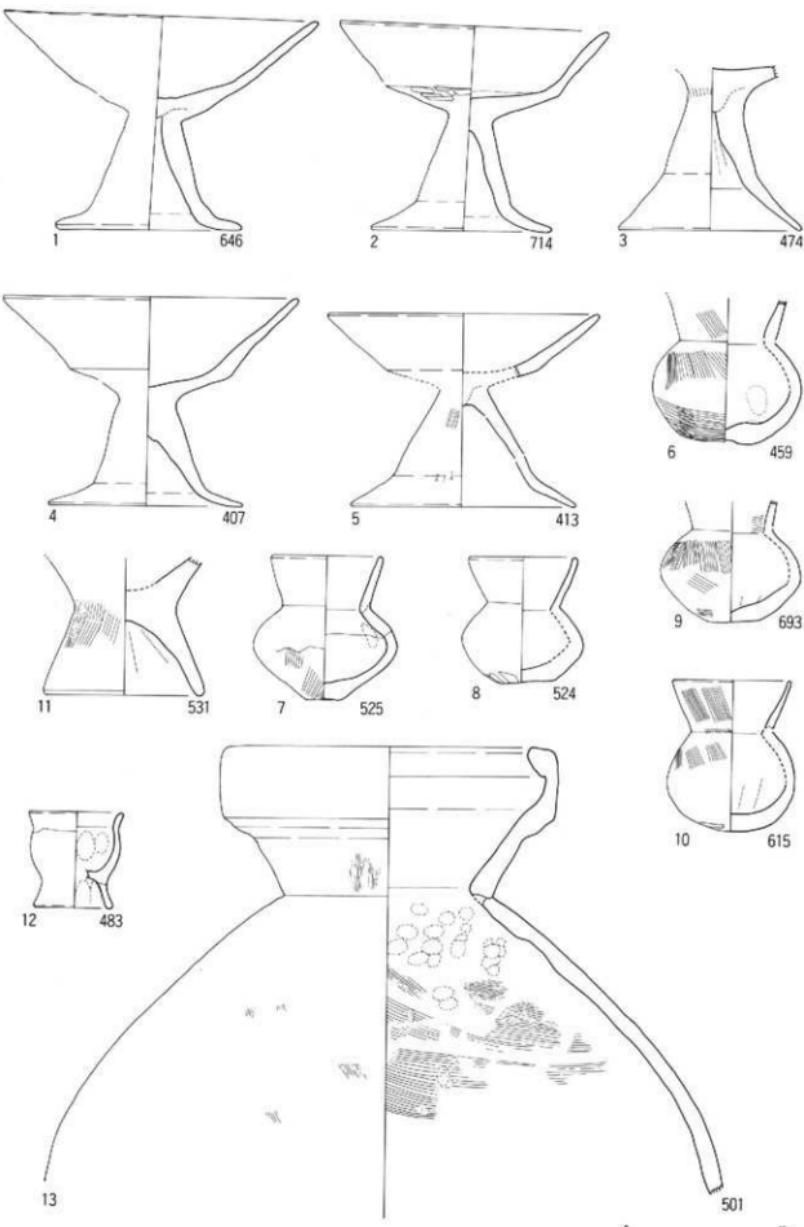
第56図 水上4区・水上10a区全体図



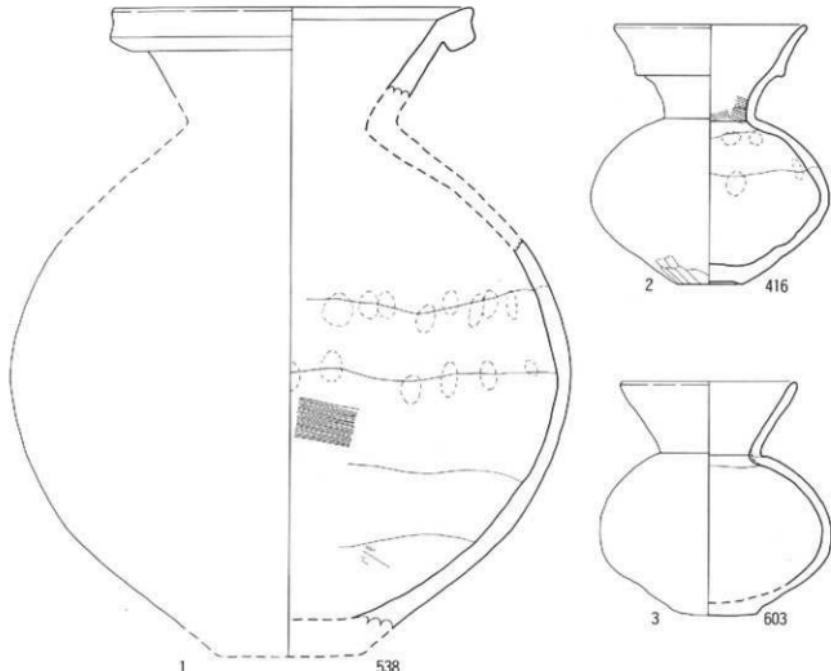
第57図 水上10a区 SX624・SX624出土状況図



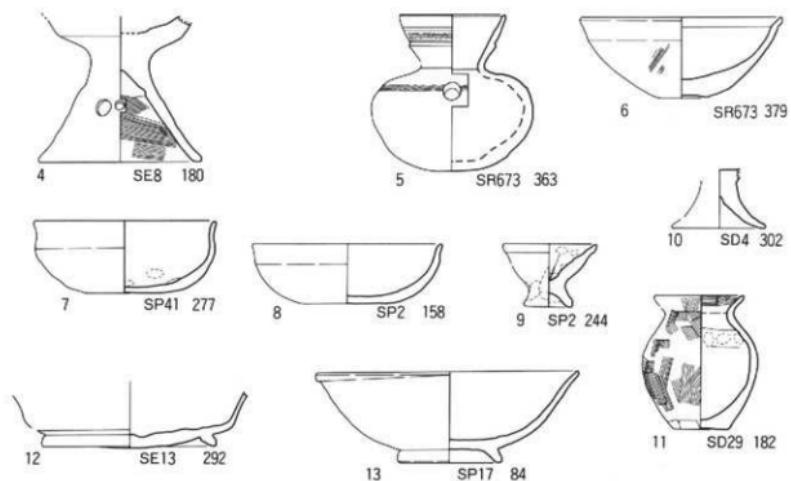
第58図 水上10a区 SX 624遺物分布模式図



第59図 水上10a区SX 624 a群出土土器実測図

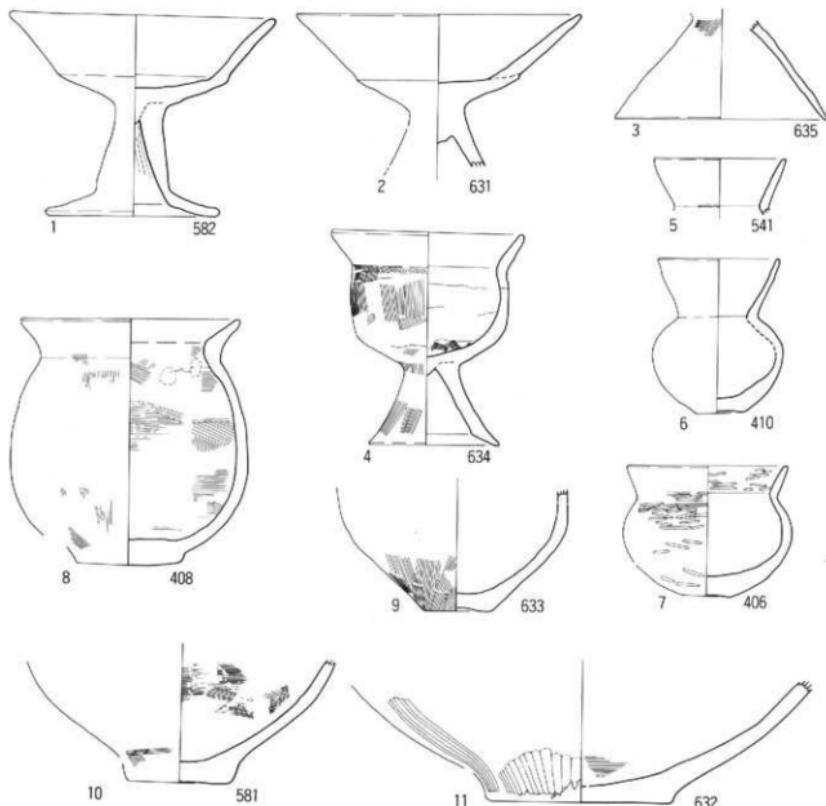


水上10区SX624 a群出土土器(1~3)



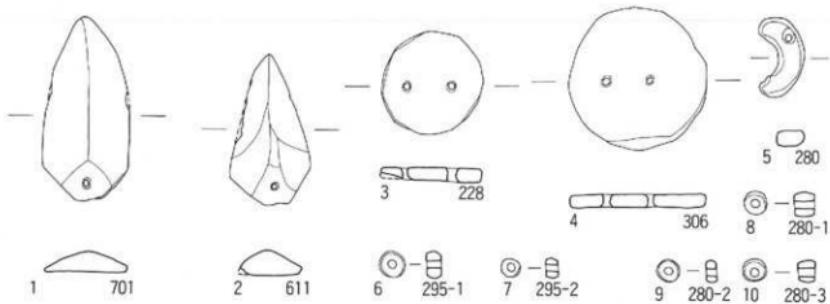
第60図 水上4区・水上10a区遺構出土土器実測図





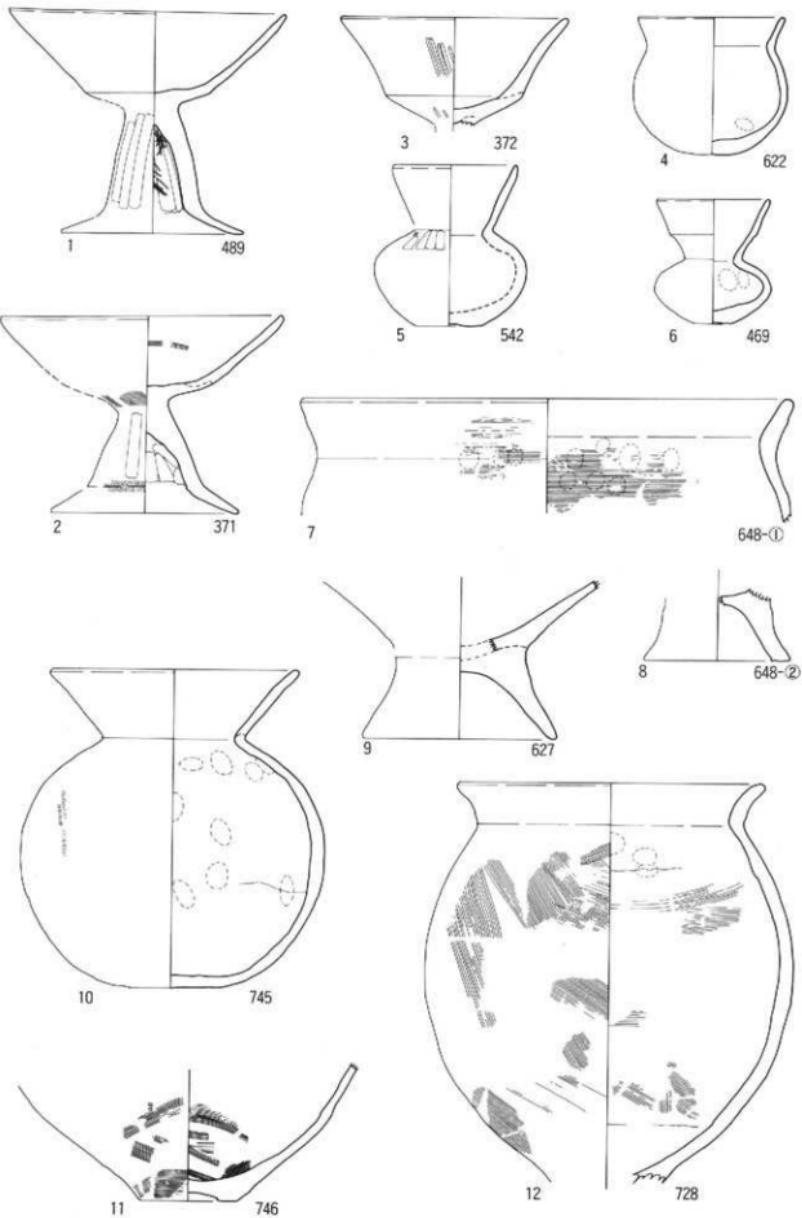
SX624 b群出土土器実測図

10mm



SX624石製模造品実測図

第61図 水上10a区SX624出土遺物実測図



第62図 水上10a区S X 624 d群出土土器実測図

第21表 水上10a区S X 624主要遺物一覧表

	a群		b群		c群		d群		その他		合計	
	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
高环形土器	22	38.5	6	27.3	12	57.1	16	41.0	20	76	45.2	
彫形土器	12	21.1	5	22.7	6	28.6	1	2.6	5	29	17.3	
彫形土器			5	22.7			9	23.1		14	8.3	
台付彫形土器	2	3.5	1	4.5			5	12.8	1	9	5.4	
増形土器	19	33.3	4	18.2	3	14.3	8	20.5	1	35	20.8	
台付彫形土器	1	1.8	1	4.5						2	1.2	
手握ね土器	1	1.8								1	0.6	
器台形土器									2	2	2	
合計	57		22		21		39		29	168		
有孔円板	4				1				1	6		
劍形模造品	2									2		
勾玉形模造品							1			1		
管玉形模造品			1				1			1		
臼下	a群b群合わせて	72	c群d群合わせて	212							284	

水上10a区(第56図)

1 概 要

現大谷川の右岸で河口起点より 988 m 上流に位置する調査区である。旧大谷川は73列～77列で検出されており、北東から南西方向の流れが北西から南東方向へと大きく蛇行する攻撃斜面となっている。水上10a区はこの蛇行の外側の微高地にあたる。前述の67列より続く砂層が基盤をなしているが、場所によっては上層に黄灰色粘土が堆積し基盤となっている。72列から74列にかけてはこの黄灰色粘土上を採掘した跡が見られ、近世以降のものと推定される。またこの粘土採掘跡底面の砂層では採掘により破壊された井戸状遺構、溝状遺構、小穴が検出された。水上4区・水上10a区67列以南と同様に表土および客土直下が基盤層であるため、同一面で古墳時代前期から中世初頭までの遺構が混在する。

2 遺構各説

溝状遺構

S D 634 G69・G70グリッドで検出された南北方向の溝状遺構である。北端は近世以降の粘土採掘によって切られ、中間部は擾乱を受けている。確認面で延長 17.70 m、幅 1.22 m～2.34 m、深さ 0.24 m を測る。出土した上師器より古墳時代前期と推定される。

S D 690 G73グリッドで検出され、北端を旧大谷川、南端を近世以降の粘土採掘および S E 651 により切られている。確認面で延長 3.82 m、幅 1.12 m～1.57 m、深さ 0.24 m を測る。覆土中より手握ね土器 3 点が出土した。出土した土師器より古墳時代中期と推定される。

土坑状遺構

S P 700 G69・H69で検出された。確認面で長径 2.16 m 短径 1.30 m の長円形のプランを有する土坑で深さは 0.89 m である。覆土中より石製紡錘車が 1 点出土している。伴出した須恵器より奈良時代と推定される。

S P 629 G71グリッドで検出され、確認面で長径 2.02 m、短径 1.60 m の長円形のプランをもち、深さ 0.33 m を測る。底面には多数の小疊が置かれていた。上部は近世以降の粘土採掘により破壊されていた。

第22表 水上10a区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	遺構面 標高	特記事項
S P 597	G 65	0.70	0.38	0.02	0.54	5.79	
S P 598	H 65	0.90	0.90	0.62	1.00	5.75	
S P 620	G 66	0.14	0.13	0.12	0.93	5.94	
S P 621	G 66	0.21	0.15	0.09	0.71	6.07	
S P 622	G 66	(0.60)	0.44	0.14	(0.73)	5.64	
S P 629	G 71	2.02	1.60	0.33	0.79	5.87	古墳時代(後期)
S P 630	G 67	0.85	0.72	0.10	0.85	6.09	
S P 635	G 72	0.45	0.36	0.33	0.80	6.12	
S P 636	G 72	0.84	0.72	0.16	0.86	6.13	
S P 638	F 72	0.82	0.54	0.02	0.66	6.14	
S P 639	F 72	0.66	0.40	0.21	0.61	6.13	
S P 640	G 72	0.32	0.29	0.15	0.91	5.94	
S P 641	G 72	0.30	0.28	0.18	0.93	5.92	
S P 642	G 72	2.16	2.03	0.55	0.94	5.96	
S P 643	G 72	0.48	0.46	0.13	0.96	5.90	
S P 645	G 72	0.38	0.28	0.16	0.74	5.91	
S P 646	G 72	0.84	0.46	0.20	0.55	6.04	
S P 649	G 72	0.28	0.26	0.21	0.93	5.97	
S P 650	G 72	0.34	0.32	0.19	0.94	5.94	
S P 652	G 70	0.41	0.20	0.07	0.49	6.05	
S P 653	G 70	0.28	0.26	0.04	0.93	6.10	
S P 654	G 70	0.35	0.22	0.03	0.63	6.09	
S P 655	G 70	0.74	0.47	0.04	0.64	6.12	
S P 656	G 70	0.21	0.20	0.04	0.95	6.12	
S P 658	G 70	0.74	0.45	0.12	0.61	6.08	
S P 659	G 70	0.72	0.62	0.04	0.86	6.10	
S P 660	G 71	1.54	1.06	0.18	0.69	5.69	
S P 661	G 71	1.74	1.06	0.40	0.61	5.65	
S P 662	G 71	1.71	0.66	0.48	0.39	5.63	
S P 664	G 71	0.64	0.62	0.15	0.97	5.63	
S P 666	F 71	0.51	0.49	0.22	0.96	5.93	
S P 667	F 71	1.02	0.76	0.09	0.75	5.82	
S P 668	F 71	0.22	0.21	0.07	0.95	5.93	
S P 671	F 71	0.30	0.24	0.03	0.80	5.88	
S P 675	G 69	1.41	0.88	0.36	0.62	6.04	
S P 676	G 69	0.66	0.55	0.07	0.83	5.90	
S P 677	G 69	0.74	0.65	0.14	0.88	5.99	
S P 678	G 71	0.38	(0.32)	0.25	(0.84)	6.05	
S P 680	G 69	(0.72)	0.70	0.33	0.97	5.92	

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	遺構面高	特記事項
S P 681	G 69	0.52	0.42	0.12	0.81	5.81	
S P 682	G 69	0.58	0.42	0.21	0.72	5.76	
S P 683	G 68	1.84	1.48	0.29	0.80	5.57	
S P 684	G 68	0.80	0.61	0.19	0.76	5.55	
S P 685	G 69	1.71	0.98	0.37	0.57	5.93	古墳時代(中期)
S P 687	G 71	0.90	0.78	0.06	0.86	6.07	
S P 688	G 72	0.70	0.48	0.27	0.69	5.91	
S P 689	G 69	0.96	(0.67)	0.15	(0.70)	5.91	
S P 691	F 72	0.94	0.90	0.39	0.96	6.06	
S P 692	F 72	0.82	0.55	0.15	0.67	6.07	
S P 693	F 72	0.22	0.20	—	0.91	6.11	
S P 694	F 73	0.48	0.45	0.24	0.94	6.05	
S P 695	F 73	0.52	0.45	0.24	0.87	6.09	
S P 696	F 72	0.65	0.58	0.28	0.89	6.03	
S P 697	F 72	0.60	0.42	0.21	0.70	5.91	
S P 698	F 73	1.56	1.42	0.44	0.91	5.67	
S P 699	F 73	0.42	0.30	0.13	0.71	5.98	
S P 700	G 69	2.16	1.30	0.89	0.60	5.69	奈良時代
S P 701	F 74	0.75	0.66	0.16	0.88	5.98	
S P 703	G 71	(1.07)	0.90	0.10	(0.84)	5.68	
S P 704	G 71	0.68	0.59	0.12	0.87	5.58	
S P 705	F 71	1.04	0.34	0.43	0.33	5.88	
S P 706	F 71	(0.64)	0.54	0.27	(0.84)	5.75	
S P 707	G 71	(0.34)	0.32	0.17	(0.94)	5.78	
S P 708	G 71	0.42	0.34	0.12	0.81	5.66	
S P 709	G 71	0.72	0.62	0.15	0.86	5.72	
S P 710	F 73	0.61	0.36	0.13	0.59	5.98	
S P 711	F 73	0.59	0.32	0.09	0.54	5.50	
S P 713	F 72	0.16	0.16	0.08	1.00	6.07	
S P 715	G 72	1.06	0.40	0.20	0.38	6.09	
S P 716	G 73	0.56	0.48	0.17	0.86	5.87	
S P 717	F 73	1.06	0.90	0.11	0.85	6.11	
S P 718	G 73	0.30	0.28	0.05	0.93	5.81	
S P 719	G 73	1.36	0.62	0.14	0.46	6.09	

第23表 水上10c区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	遺構面高	特記事項
S P 545	C 82	0.68	0.60	0.17	0.88	6.06	
S P 556	C 83	0.76	0.26	0.12	0.34	6.03	
S P 557	C 83	0.50	0.42	0.20	0.84	6.15	
S P 566	C 83	1.06	0.72	0.12	0.68	5.96	
S P 567	C 82	0.66	0.52	0.12	0.79	6.07	
S P 722	E 81	0.48	0.40	0.03	0.83	5.58	
S P 725	D 79	0.71	0.68	0.23	0.96	5.99	
S P 726	D 79	0.48	0.32	0.08	0.67	6.00	
S P 727	D 79	1.38	1.14	0.85	0.83	5.98	古墳時代(前期)
S P 728	D 79	0.94	0.88	0.56	0.94	5.99	
S P 729	D 79	1.14	1.02	0.24	0.89	6.03	
S P 730	D 81	0.22	0.18	0.04	0.82	5.82	
S P 732	D 82	0.56	0.48	0.21	0.86	6.14	
S P 733	D 82	0.22	0.20	0.10	0.91	5.96	
S P 734	D 82	0.20	0.20	0.13	1.00	6.14	
S P 735	D 82	0.25	0.24	0.25	0.96	6.00	
S P 736	D 82	0.40	0.33	0.12	0.83	6.06	
S P 737	D 80	0.34	0.31	0.09	0.91	6.01	
S P 738	D 80	0.14	0.12	0.13	0.86	5.94	
S P 739	D 81	0.46	0.22	0.13	0.48	5.98	
S P 740	D 81	0.25	0.23	0.12	0.92	5.85	
S P 741	D 79	0.47	0.36	0.10	0.77	6.02	
S P 742	E 80	0.18	0.18	0.09	1.00	6.12	
S P 743	E 80	1.25	0.96	0.20	0.77	5.92	
S P 744	E 80	0.18	0.16	0.03	0.89	5.80	
S P 745	D 80	0.32	0.24	0.15	0.75	6.00	
S P 746	D 81	0.22	0.20	0.07	0.91	5.97	
S P 747	D 80	0.10	0.10	0.12	1.00	5.86	
S P 748	D 80	0.20	0.18	0.06	0.90	5.86	
S P 749	D 80	0.22	0.22	0.06	1.00	5.90	
S P 750	D 80	0.14	0.14	0.04	1.00	5.86	
S P 751	D 80	0.11	0.11	0.05	1.00	5.85	
S P 752	D 80	0.26	0.20	0.14	0.77	5.84	
S P 753	D 80	0.18	0.11	0.06	0.61	5.83	
S P 754	D 80	0.21	0.20	0.06	0.95	5.84	
S P 755	D 80	0.15	0.14	0.05	0.93	5.83	
S P 756	D 80	0.23	0.19	0.06	0.83	5.94	
S P 757	D 81	0.23	0.17	0.05	0.74	5.86	
S P 758	D 81	(0.42)	0.37	0.06	(0.88)	6.11	

造構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	造構面高	特記事項
S P 759	E 77	1.52	1.34	0.38	0.88	5.83	
S P 760	E 77	0.76	0.74	0.20	0.97	5.87	
S P 764	E 77	(1.80)	1.68	0.37	0.93	5.74	平安時代末
S P 767	E 78	0.84	0.78	0.71	0.93	5.68	
S P 768	E 80	0.80	0.64	0.15	0.80	5.68	古墳時代(後期)
S P 769	E 80	0.88	0.41	0.21	0.47	5.60	
S P 772	D 82	0.35	0.24	0.08	0.69	6.01	
S P 773	D 82	0.23	0.20	0.09	0.87	6.15	

第24表 水上10a区溝状造構一覧表

造構番号	グリッド	延長	幅	深さ	造構面高	特記事項
S D 589	G 65	10.30	1.02	0.31	5.70	平安時代末
S D 590	G 65	4.90	0.45	0.03	5.78	
S D 591	G 65	4.40	0.43	0.03	5.75	
S D 593	G 65	0.73	0.66	0.05	5.73	平安時代末
S D 594	G 65	11.00	1.06	0.04	5.59	平安時代末
S D 595	G 66	5.20	1.34	0.26	5.87	
S D 596	G 65	3.71	0.78	0.30	5.58	
S D 599	G 65	2.40	0.31	0.04	5.74	
S D 600	G 65	3.71	1.08	0.16	5.85	
S D 623	G 66	1.50	0.24	0.04	5.98	
S D 628	G 67	3.60	1.92	0.05	6.13	
S D 634	G 70	17.70	2.34	0.24	5.99	古墳時代(前期)
S D 637	G 72	1.30	0.35	0.04	6.19	
S D 647	G 72	2.26	0.54	0.10	5.99	
S D 648	F 72	6.00	2.30	0.22	6.00	
S D 657	G 70	2.80	0.90	0.07	6.07	
S D 665	G 71	3.14	0.86	0.16	5.62	
S D 669	F 71	6.30	0.48	0.10	5.90	
S D 670	F 71	2.80	0.94	0.08	5.91	
S D 672	F 71	2.30	1.12	0.08	5.90	
S D 674	G 69	4.30	1.40	0.21	5.99	
S D 679	G 71	1.70	0.61	0.10	6.01	
S D 686	G 71	2.10	0.38	0.10	5.81	
S D 690	G 73	3.82	1.57	0.24	6.00	古墳時代(中期)
S D 702	G 68	11.90	1.98	0.12	6.01	
S D 714	F 72	3.40	0.28	0.05	6.03	
S D 721	F 73	4.80	0.24	0.07	5.73	

出土した土器器坏より古墳時代後期と推定される。

S P 685 G69グリッドで検出された。平面長円形であり、確認面で長径 1.71 m、短径 0.98 m、深さ 0.37 m を測る。出土した埴形上器より古墳時代中期と推定される。

小穴

S P 694・S P 695 F73グリッドで検出され、ともに隅丸の方形プランであり、S P 694 は 0.48 m × 0.45 m、S P 695 は 0.52 m × 0.45 m である。深さはともに 0.24 m であり覆土上も同じ暗茶褐色であった。2つの小穴は東西方向に 2.5 m 離れて存在するが、これらの 2 m 北側には幅 6.0 m ~ 6.5 m の近世以降の粘土探査跡がある。2つの小穴はこの粘土探査跡により破壊された振立柱建物跡の一部とも考えられる。

井戸状遺構

S E 632(第 118 図) F72グリッドの調査区西端で検出されたため、東側 4 分の 3 の調査となった。確認された範囲で平面は径 1.50 m の半円形を呈し、底面は 0.68 m × 0.84 m の長方形に近い形状をなす。上面のうち南側半分は隣接する粘土探査跡により上部を 0.1 m ほど掘削されている。また底面の西側は隣接する現在の土堤により若干の擾乱を受けていた。掘り方の北側は比較的ゆるやかな傾斜をもつが、南側では井戸枠に沿うように急傾斜の掘り込みがなされていた。確認面は黄灰色粘土上面で、この下層の砂層の中間に底面となっている。井戸枠内および要込め土内には 3 cm 前後から拳大の礫の堆積が底面より 0.2 m ほどまで見られた。井戸枠は幅 8.0 cm ~ 34.0 cm、長さ 7.0 cm ~ 18.0 cm の板を縦に埋め込み方形にならべてある。西辺の全部と北辺・南北の一部は擾乱を受けたため東辺のみ全容が確認された。東辺は 0.78 m で 7 枚の板を配してあり二重になっている部分も見られた。北辺は確認された長さ 0.82 m で、7 枚の板を配し西端に角材が見られるが支柱とも考えられる。南辺は確認された長さ 0.49 m で、幅 34.0 cm と幅 13.0 cm の 2 枚の板を配している。底面の礫の直上から出土した須恵器坏身より奈良時代と推定される。

S E 651(第 118 図) G72グリッドで検出された。確認面で 1.55 m × 1.08 m の隅丸の方形プランをもつ。底面は 1.18 m × 0.85 m である。深さは 0.90 m を測る。掘込み面は黄灰色粘土であり、急傾斜に掘られた砂層の中間にまで達している。井戸枠は四隅に柄を有する約 10cm × 20cm 角、長さ 50cm の角材を置き、その間に幅 6.0 cm ~ 27.0 cm、長さ 22.0 ~ 42 cm の縦板を 23 枚ならべ、1.10 m × 0.85 m の長方形をなしている。井戸内中央では底面から 0.18 m に長径 15.8 cm、短径 14.1 cm の円板が検出され、桶状の容器の底と推定される。井戸枠内よりの土器の出土は土器の小片だけにとどまったが、井戸の構造が S E 632 と類似しており S E 632 と同時期である可能性が高い。

第 25 表 水上 10 c 区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面高	特記事項
S D 550	C 82	6.54	1.16	0.17	6.03	古墳時代（前期）
S D 712	D 81	2.80	0.92	0.21	5.97	
S D 720	D 81	8.20	1.36	0.32	6.02	
S D 731	D 81	3.70	0.64	0.10	6.01	
S D 761	D 81	7.40	1.52	0.18	5.93	
S D 762	D 82	0.82	0.92	0.34	5.36	
S D 763	H 66	2.90	0.68	0.08	5.91	
S D 765	E 76	6.30	4.16	0.47	5.58	奈良時代～平安時代
S D 766	E 77	8.70	3.50	0.35	5.69	
S D 770	E 81	4.70	0.52	0.19	5.55	奈良時代
S D 774	E 79	9.00	0.98	0.04	5.64	

水上10c区（第64図）

1 概 要

現大谷川の右岸で河口起点より約1100m上流に位置する調査区である。旧大谷川が大きく蛇行する外側の微高地であるが、現大谷川対岸の水上8区が低湿地である状況から微高地末端部と推定される。76~77列は砂混りの黄灰色粘土が基盤層となり、78列以北は灰色の砂層が基盤層である。溝状遺構・土坑・小穴が検出されているが、水上10a区同様遺構面は一面のみで古墳時代前期~中世初頭の遺構が混在している。調査区東端に昭和17年まで使用されていた旧大谷川のバイパスである石橋川が検出された。なお調査区全域で中央部分に落差があり、東側半分が傾斜して客土が見られたが、この石橋川の工事による擾乱と考えられる。

2 遺 構 各 説

溝 状 遺 構

S D 765 E 76・F 76グリッド北側からE 77・F 77グリッド南端にかけて検出された東西方向の溝で、西から旧大谷川に流れ込む。確認面で幅3.18~4.16m、深さ0.47mを測る。延長6.30mが確認されたが西端は調査区外へと続いている。覆土中より馬形土製品1点と動物の形代と考えられる土製品2点が出土した。いずれも欠損部分が多くかなり摩耗していた。伴出土器は須恵器、灰釉陶器、土師器であり小破片が多く溝に流れ込んだものと考えられる。須恵器は奈良時代と推定されるものが大半でこの溝の掘削年代は奈良時代であり、灰釉陶器の時期である平安時代中頃に埋没したものと考えられる。

S D 550 C 82・D 82グリッドで検出された東西方向の溝状遺構で、西端は擾乱により東端はS D 720により切られている。確認面で延長6.54m、幅1.16~0.74m、深さ0.17mを測る。出土した土師器から古墳時代前期と考えられる。

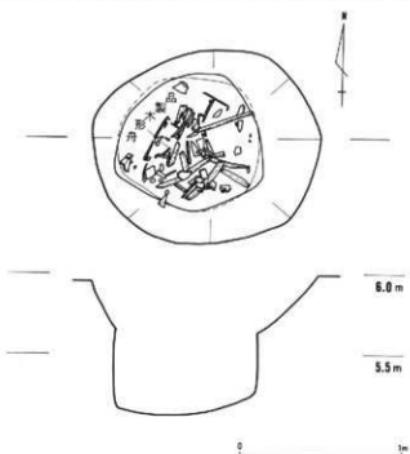
土坑状遺構

S P 727 (第63図) D 79グリッドで検出された。掘り方の形状は上半部がすり鉢状で、下半部は垂直の掘り込みである。上半部は長径1.41m、短径1.18mの長円形で深さは0.35mである。下半部は長径0.88m、短径0.85mの円形で深さ0.50mである。上半部上層からは台付甕・壺などの土師器片が出土

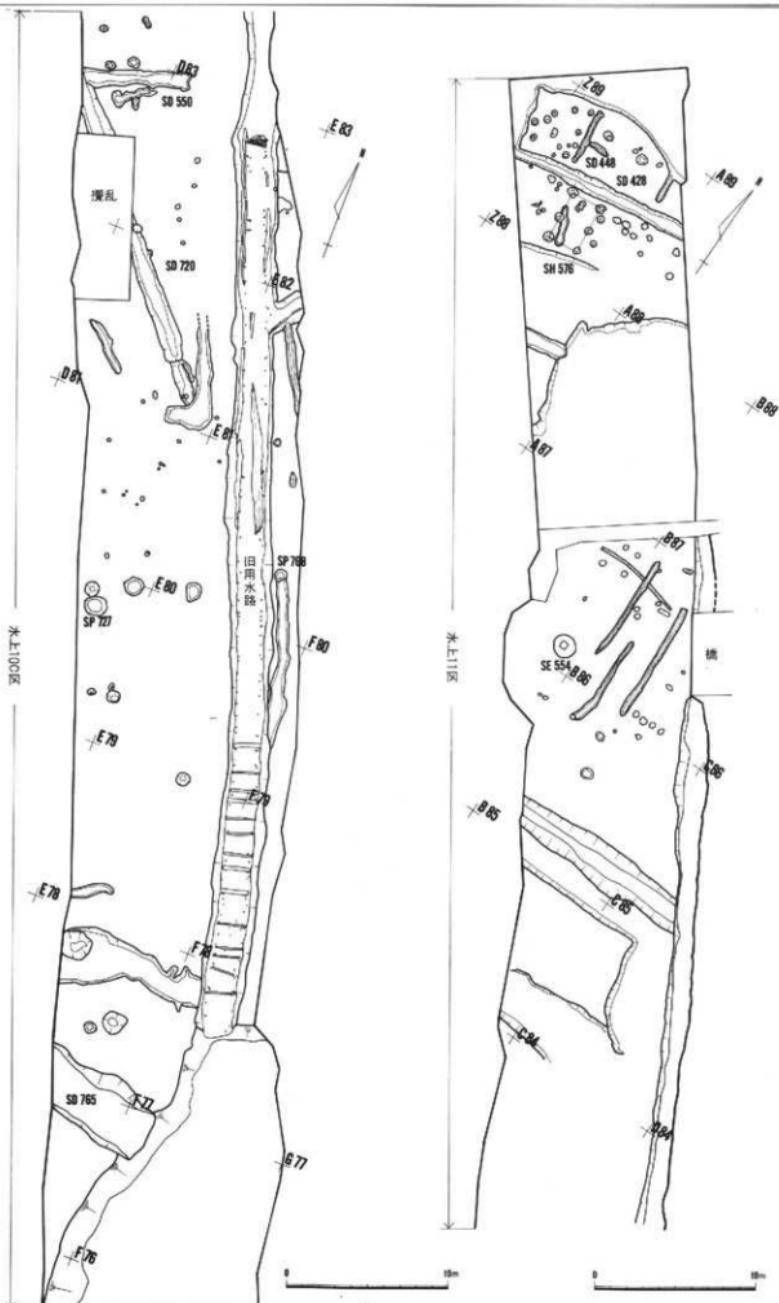
し、上半部下層から下半部上層にかけては多数の木片が折り重なるように出土した。これらの木片からは舟形木製品も検出された。出土した土師器片より埋没年代は古墳時代前期と考えられる。奈良県桜井市纏向遺跡辻地区の古墳時代前期の土塙4から黒漆塗木製皿、舟形木製品、水鳥形木製品、大型木製高杯などが出土しており、その祭祀性が指摘されている(『纏向』「奈良県立橿原考古学研究所編1976」)。本遺跡の舟形木製品および土坑が同じ性格であるかどうかは今後の検討課題としたい。

小 穴

S P 768 E 80グリッドで検出され、長径0.80m・短径0.64mの長円形のプランで、深さ0.15mを測る。径2~4cmほどの小礫が底部に敷きつめられていた。出土した須恵器壺より古墳時代後期と推定される。



第63図 水上10c区S P 727 実測図



第64図 水上10c区、水上11区全体図

水上 11 区（第 64 図）

1 概 要

現大谷川の右岸で河口起点より約 1190 m 上流に位置する調査区である。北側の宮川 3 区で現大谷川が大きく蛇行するが、この外側の微高地にある。水上 10 区で基盤を形成していた砂層は 83 列までみられなくなり、84 列以北は白色粘土が基盤となる。85 列北半部と 86 列、88 列では茶褐色粘土上に堆積し、奈良時代～平安時代の遺構面となり溝状遺構、掘立柱建物跡、井戸状遺構、小穴群が検出された。84 列と 85 列南半部、87 列は、近世以降の水田により搅乱を受けていた。

2 遺 構 各 説

掘立柱建物跡

S H 576（第 65 図）Z 88 グリッドで検出された。2 間 × 1 間の南北棟建物で、桁行 3.02 m、梁間 1.96 m を測る。柱据り方はほぼ円形のプランで、径 0.46 m ~ 0.68 m、深さ 0.04 m ~ 0.17 m を測る。覆土は灰色粘土である。

溝 状 遺 構

S D 428（第 65 図）Y 88・Z 88 グリッドで検出され、調査区を東西に横切って西端は調査区外へ続き、東端は現大谷川により切られている。延長 12.98 m、幅 0.84 m ~ 1.04 m、深さ 0.46 m を測る。Y 88・Z 88 で確認された小穴群のはば中央にあり、南に S H 576 が隣接することから排水路として機能していたものと考えられる。出土した灰釉陶器から平安時代前期後半と考えられる。

S D 448（第 65 図）Z 88 グリッドにあり、延長 3.54 m の南北方向の溝状遺構で、幅 0.26 m ~ 0.44 m、深さ 0.07 m を測る。出土した須恵器長頸壺より平安時代前期後半と考えられる。西側に隣接して小穴群があるが、このうち S P 509、S P 511、S P 449 は約 0.3 m 内に 1.5 m 間隔でこの溝状遺構と同方向にならんでいる。掘立柱建物の想定が可能ならば、周溝として機能していたのかもしれない。

井戸状遺構

S E 554（第 119 図）A 86 グリッドで検出された木組みの井戸状遺構である。長径 1.51 m、短径 1.37 m の東西にやや長い円形プランで、深さ 1.27 m を測る。掘り込み面は茶褐色粘土層で、底盤層である白黒互層粘土の三層目白色粘土が底面となっている。井戸枠は幅 49 cm ~ 52 cm、長さ 118 cm ~ 125 cm の縦板 4 枚を方形に組んでいる。東西の両辺には、上面から 0.14 m にそれぞれ長さ 44 cm、48 cm の横棟が残存していた。底面からは 5 cm ほどは黄灰色粘土が埋められ、この上 10 cm ほどに径 1 cm ~ 5 cm ほどの多数の小礫が水を濾過する目的で置かれている。さらにこの小礫の直上には須恵器の肩部から口縁部にかけての破片が口縁を下にする状況で検出された。あるいは水溜の代用として置かれたものかもしれない。底面より 0.2 m ~ 0.3 m 上には須恵器壺 1 点と土師質の小皿 4 点、手捏ね工器 1 点が検出され、ヒョウタンも伴出することから井戸廃棄に伴う祭祀に用いられたものとも考えられる。出土した須恵器より古墳時代後期～奈良時代前期と考えられる。

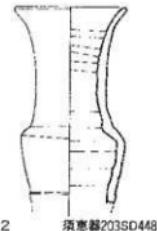
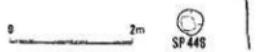
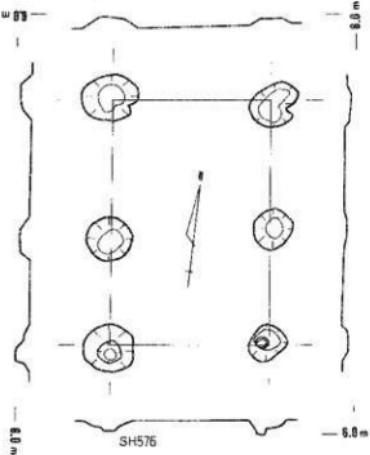
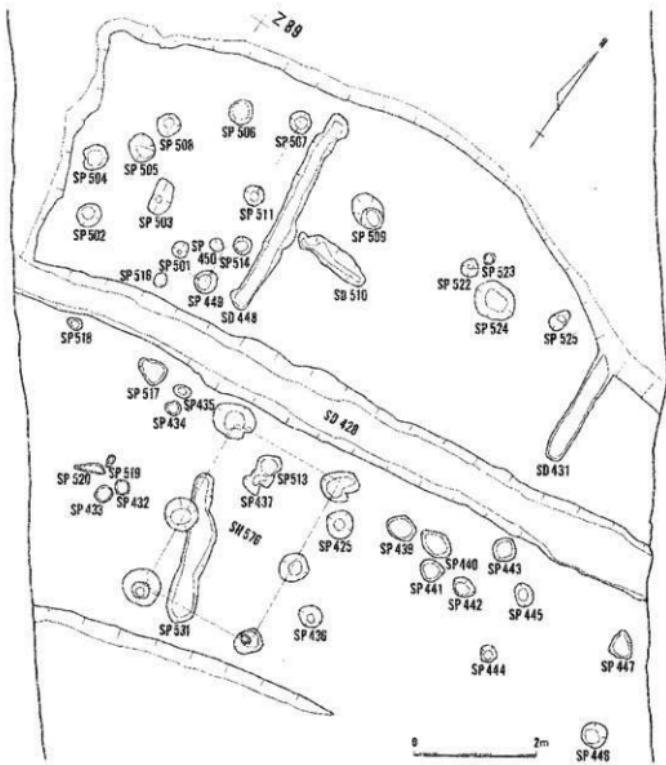
第26表 水上11区小穴・土坑一覧表

造構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	造構面 標高	特記事項
S P 425	Z 88	0.48	0.46	0.19	0.96	6.13	
S P 432	Z 88	0.26	0.22	0.12	0.85	6.16	
S P 433	Z 88	0.30	0.24	0.08	0.80	6.16	
S P 434	Z 88	0.24	0.22	0.05	0.92	6.18	
S P 435	Z 88	0.30	0.22	0.09	0.73	6.18	
S P 436	Z 88	0.38	0.36	0.13	0.95	6.12	
S P 437	Z 88	0.74	0.22	0.12	0.30	6.17	
S P 439	Z 88	0.51	0.38	0.23	0.70	6.06	
S P 440	Z 88	0.60	0.42	0.06	0.70	6.10	
S P 441	Z 88	0.38	0.35	0.06	0.92	6.12	
S P 442	Z 88	0.36	0.32	0.06	0.88	6.10	
S P 443	Z 88	0.46	0.42	0.07	0.91	6.10	
S P 444	Z 88	0.28	0.26	0.07	0.92	6.11	
S P 445	Z 88	0.40	0.30	0.09	0.75	6.10	
S P 446	A 88	0.44	0.40	0.09	0.91	6.04	
S P 447	A 88	0.42	0.36	0.28	0.86	6.05	
S P 449	Z 88	0.40	0.38	0.08	0.95	6.18	
S P 450	Z 88	0.24	0.18	0.12	0.75	6.19	
S P 501	Z 88	0.30	0.27	0.18	0.90	6.18	
S P 502	Y 88	0.42	0.38	0.13	0.90	6.13	
S P 503	Z 88	0.58	0.34	0.21	0.59	6.17	
S P 504	Y 88	0.42	0.36	0.10	0.86	6.12	
S P 505	Y 88	0.46	0.44	0.16	0.96	6.16	
S P 506	Z 88	0.42	0.40	0.14	0.95	6.18	
S P 507	Z 88	0.40	0.38	0.10	0.95	6.17	
S P 508	Y 88	0.38	0.36	0.17	0.95	0.18	
S P 509	Z 88	0.66	0.48	0.24	0.73	6.18	平安時代
S P 511	Z 88	0.36	0.34	0.12	0.94	6.18	
S P 514	Z 88	0.32	0.30	0.06	0.94	6.19	
S P 516	Z 88	0.24	0.22	0.05	0.92	6.16	
S P 517	Z 88	0.52	0.24	0.15	0.46	6.16	
S P 518	Z 88	0.26	0.18	0.13	0.69	6.13	
S P 519	Z 88	0.26	0.12	0.15	0.46	6.16	
S P 520	Z 88	0.50	0.12	0.16	0.24	6.13	
S P 522	Z 88	0.32	0.30	0.10	0.94	5.99	
S P 523	Z 88	0.22	0.18	0.06	0.82	5.99	
S P 524	Z 88	0.74	0.56	0.31	0.76	6.06	
S P 525	Z 88	0.38	0.22	0.13	0.57	6.03	平安時代
S P 528	A 86	0.40	0.38	0.21	0.95	5.99	平安時代

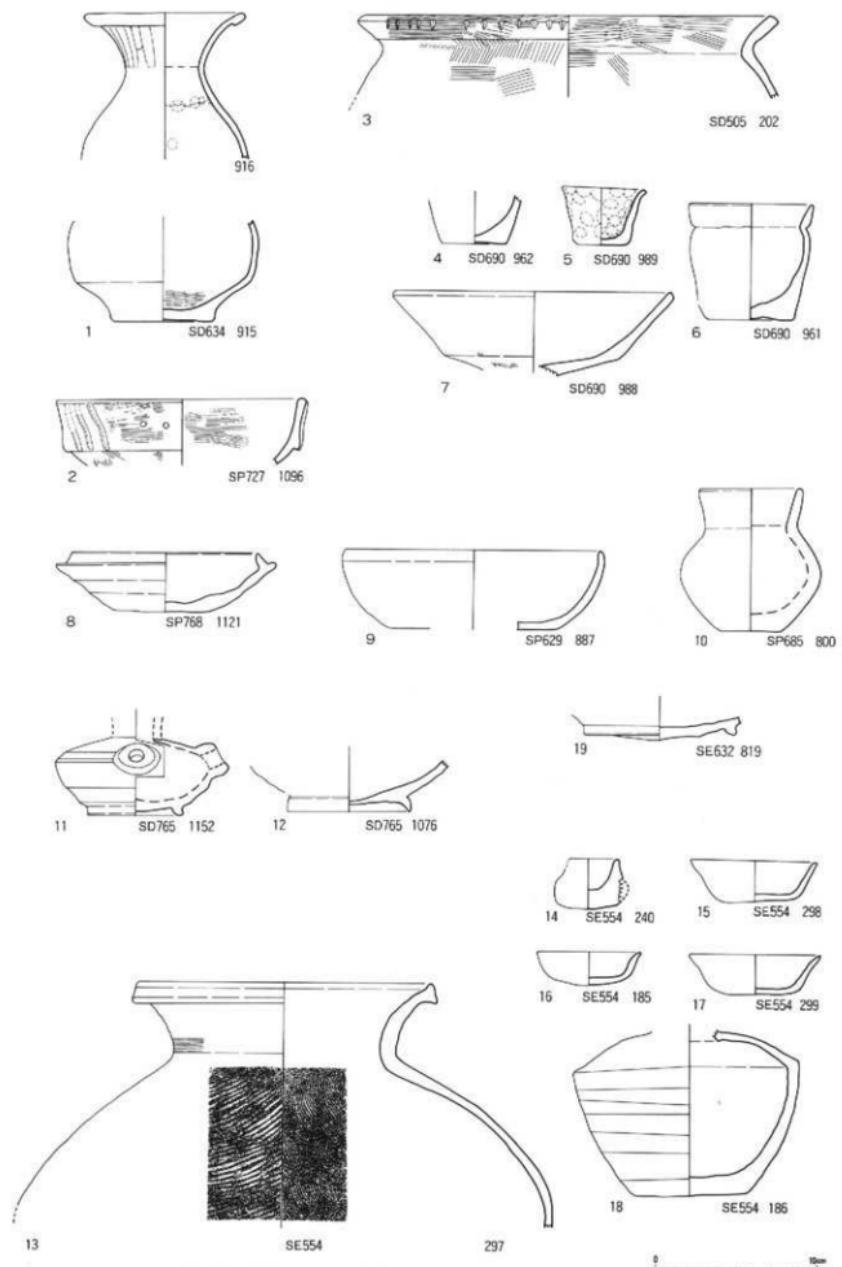
遺構番号	グリッド	長 広	短 長	深 さ	長 短 比 (長径=1)	遺構面 標	特 記 事 項
S P 529	A 86	0.42	0.38	0.08	0.90	6.02	
S P 530	A 86	0.34	0.28	0.13	0.82	5.98	
S P 531	A 86	0.34	0.28	0.10	0.82	5.97	
S P 532	B 86	0.22	0.20	0.55	0.91	5.88	
S P 533	B 86	0.64	0.26	0.05	0.41	5.96	
S P 534	B 86	0.36	0.34	0.17	0.94	6.00	
S P 535	B 86	0.38	0.34	0.31	0.89	6.29	
S P 537	B 86	0.30	0.22	0.13	0.73	6.00	
S P 539	B 86	0.84	0.22	0.02	0.26	6.00	
S P 540	A 86	0.28	0.18	0.03	0.64	6.00	
S P 541	B 86	0.26	0.22	0.17	0.85	5.88	
S P 542	B 86	0.54	0.28	0.12	0.52	5.91	
S P 543	B 86	0.48	0.46	0.11	0.96	6.02	
S P 544	B 86	0.46	0.36	0.03	0.78	5.98	
S P 546	B 85	0.40	0.26	0.14	0.65	5.98	
S P 547	B 85	0.68	0.36	0.13	0.53	6.04	
S P 548	B 85	0.40	0.28	0.17	0.70	6.00	
S P 558	B 85	0.78	0.66	0.08	0.85	5.92	平安時代
S P 561	A 85	0.36	0.26	0.13	0.72	5.96	
S P 562	A 85	0.22	0.20	0.08	0.91	5.96	
S P 563	B 86	0.36	0.32	0.11	0.89	5.92	
S P 564	B 86	0.42	0.34	0.08	0.81	5.86	
S P 565	B 85	0.24	0.20	0.02	0.83	5.89	

第27表 水上11区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延 長	幅	深 さ	遺構面 標	特 記 事 項
S D 420	Z 87	2.64	1.02	0.14	6.01	
S D 428	Z 88	12.98	1.04	1.40	6.18	平安時代
S D 431	Z 88	1.96	0.38	0.08	6.13	
S D 448	Z 88	3.54	0.44	0.07	6.18	平安時代
S D 510	Z 88	1.30	0.38	0.09	6.18	
S D 515	C 83	8.24	0.84	0.15	6.05	
S D 526	B 86	7.48	0.44	0.10	6.00	
S D 527	B 86	6.90	0.52	0.09	5.99	
S D 538	A 86	5.72	0.26	0.06	5.99	
S D 549	D 82	9.92	2.10	0.06	5.92	
S D 551	B 86	5.94	0.55	0.07	5.99	
S D 555	C 83	9.04	2.22	0.15	5.93	
S D 568	B 85	11.14	2.60	0.08	5.75	



第65図 水上11区 S II 576 平安時代遺構図



第66図 水上10a区・水上10c区・水上11区遺構出土遺物実測図

水上 8 区（第67図）

1 概 要

現人谷川の左岸で河口起点より約1130m上流に位置する調査区である。北側の水上9区から8区にかけてはほぼ全域で底地地形が確認されている。水上9区の北端にあたる90列・91列には微高地の堆積がみられ、本遺跡の基盤層である海成シルト層（第68図G層）と白色粘土・黒色粘土の互層（第68図A～F層）はほぼ水平に堆積している。これらの基盤層は89列ではやや傾斜しながら河口起点より1236m上流地点（以下□m地点と略す）付近で切れ、東方向に傾斜する低地地形を形成し水上8区および調査区外へと続いている。この低地内には腐植を含んだ粘土層（第68図d～k）があり、ほぼ水平の堆積がみられる。これらの土層は低地内に微高地状の形状を呈している。この微高地状の堆積は水上8区1178m地点で切断され、旧大谷川河道となり厚い砂の堆積がみられる（第68図B～B'）。この砂の堆積は水上8区南端まで続くが、1142m～1134m地点では基盤層および低地内の堆積粘土が調査区西端で検出され（第68図C～C'）、東向きに傾斜しながら砂により切断されていた。これは1178m地点で蛇行した河道の右岸と考えられる。低地内には8層の堆積がみられたが、このうち遺物が認められたのは灰白色粘土層（d層）、黒茶色粘土層（e層）、緑茶色腐植土層（h層）である。灰白色粘土層上面ではF84・F85グリッドで土師器の高环形土器・壺形土器・坏形土器が器種別に置かれた状況で検出され、古墳時代中期～後期初頭の遺構面となっている。この下の黒茶色粘土層（e層）からは古墳時代中期の土器片が出土した。またさらに下層の緑茶色腐植土層（h層）からは縄文時代晚期の土器片が出土し、南側に隣接する水上7区の同じ層から縄文時代後期の土器片が出土している。この緑茶色粘土層直上の暗灰白色粘土層（g層）には黄白色の微粒子が含まれ大沢スユリアであると思われた。旧河道の砂層からは遺物は検出されず、わずかにF83・F84グリッドで岸の緩斜面の黄緑色混砂粘土層（o層）から土師器片と木片が出土したにすぎない。これら低地の堆積土層および旧河道に伴う堆積砂層の上に淡青灰色砂層あるいは黄灰白色粘土層が水上8区・水上9区ともに全面に堆積し、平安時代～近世の遺構面となっており溝状遺構、小穴、土坑が検出されている。

2 遺構各説

S R 778（第69図）F 84 グリッド中央部を北東から南西へ横切る旧大谷川右岸が検出された。岸に沿ったテラス状の緩斜面があり、標高4.3m～4.5mほどに黄緑色砂混り粘土層が堆積し古墳時代中期の土師器片と木片が出土した。上層には厚い砂の堆積がみられ83列以南は無遺物の砂層が2m以上にもおよび河床は確認できなかった。これらは氾濫による堆積と考えられ、本流は調査区東側に推定される。旧大谷川の初期の河道の一つと判断された。

S X 775（第69図・第70図）E 85・F 85グリッドで検出された土師器群である。検出面は低地内堆積層の最上層にあたる灰白色粘土層であり、低地内に形成された微高地状の地形の末端部に位置し、南側はS R 778となっている。基準杭F 85より北2.0m地点に土師器高环形土器5点が出土した。これらは50cm×70cmほどの範囲にあって、いずれも原形をとどめた状態であった。うち3点は底部が接地しており、坏部はその周囲に落下した状態で検出された。要するに人為的に置かれた状態がそのまま土圧で押しつぶされたものと判断された。さらに東へ1.5mほど離れて壺形土器2点が検出された。それらは0.5mほどの間隔で東西に存在するが、高环形土器にくらべると破損がすすんでおりとくに東側のものは底部と口辺部がやや離れて存在していた。西側のものは肩部から口辺部のみが復元できた。さらに東へ3.0mほど離れて坏形土器2点が出土した。高环形土器・壺形土器が東西方向に並んでいるのに対し、坏形土器は南北方向に並んだ状態にあった。

これらの土師器群はほぼ東西方向の直線上に存在し、それぞれの器種には他の器種は含まれていない。

のことから土師器群は器種別に置かれ、原位置をあまり動いていない状況とみてよい。また土師器群南側には2つの小穴と上坑1基が検出されている(第69図)。

S P 584 (第71図) F 84グリッドの中央北端部のS X 775の環形上器より0.4mほど南で検出された。長径0.40m、短径0.37mのはば円形のプランをもち深さ0.17mを測る。底面には径1cm~7cmほどの小礫が敷きつめられていた。

S P 585 (第71図) S P 584から西へ2.8mの地点にある。確認面で長径0.28m・短径0.24mの円形プランで、深さはわずか0.06mで底面のみの検出となった。S P 584と同様に径1cm~5cmほどの小礫が敷きつめられていた。

これら2つの小穴とも確認面は黒茶色粘土層であるが、覆土が黄灰色粘土層でありS X 775の遺構面である灰白色粘土層と酷似していることから掘り込み面は灰白色粘土層であったと推定される。また土器の配置方向とS P 584・S P 585の方向は東西ではば一致している。

S P 580 (第71図) F 84グリッド中央やや西よりで検出された。S P 584・S P 585との距離は約3.75mとほぼ同じで南に位置している。直徑0.80mの円形プランで深さ0.56mを測る。検出面はS X 775と同じ灰白色粘土層である。底面より0.15mほどより上は拳大から人頭大の割石がみられ、板状のものや二分割したものが目立った。またそのほとんどが燃焼を受けた石であったことにも注目しておきたい。

ま と め

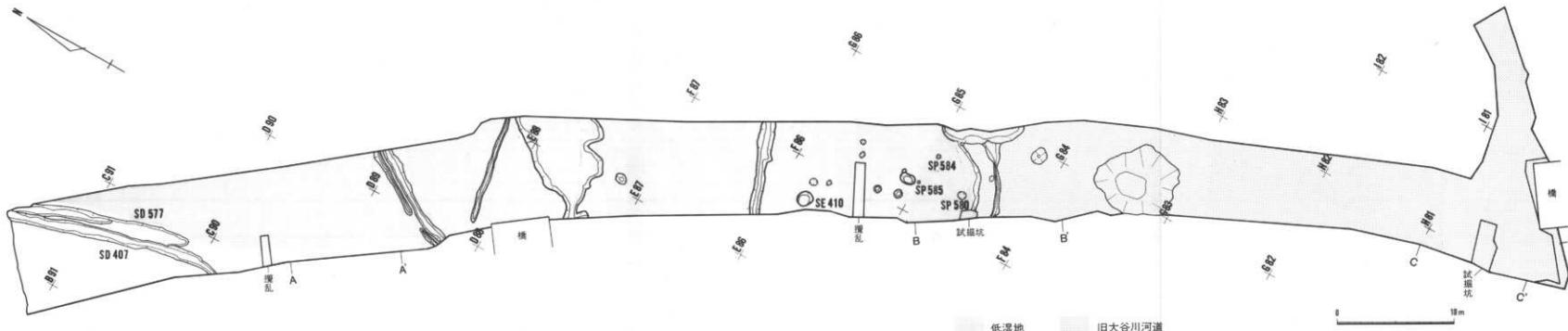
(1)S X 775土師器群は南に旧大谷川を臨む低湿地内に形成された微高状地形の末端部に位置し、器種別に置かれた状態で検出された。

またS P 584・S P 585の底面の小礫が柱を固定する目的で置かれたとすれば、S X 775土器群の配置方向と2つの小穴の方向がほぼ同じであり土器群に関連した柱穴と想定してもよいかもしれない。さらにこれらの南側の旧大谷川の岸近くで検出されたS P 580も土師器群と同一面であり、この面での遺構は他にないことから関連する遺構である可能性もあり、燃焼を受けた割石は七器群に伴う祭祀に関連するとも考えられる。

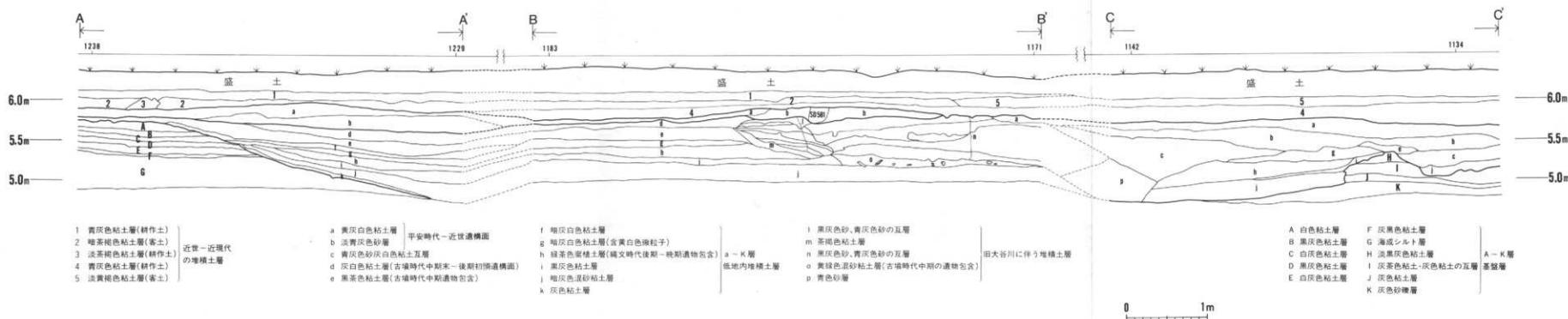
(2)水上9区から水上8区にかけて確認された低地はさらに他調査区への広がりが考えられる。南側に隣接する水上7区は占墳時代後期から現代にいたる旧河道が確認されたが、72列から75列にかけて調査区を南西から北東方向に横切る幅14m~17mほどの帯状の低湿地が検出され、調査区外に続き北東方向へ広がっていた。これらは水上8区南端のG80グリッドで確認された低湿地が連続するものと思われる。また北側の宮川3区S R 485でも低湿地が検出され対岸の宮川4区S R 56河床で検出された低地内堆積粘土に連続している。この帯状の低湿地は水上8区・水上9区の東側に広がる低湿地へと続く可能性が強い。水上8区83列・84列で検出された旧河道はこの広大な低地内に形成され、厚い砂層はかなり大きな氾濫による短期間の堆積を示している。出土した遺物より古墳時代中期後半と考えられ、旧大谷川の初期の河道の一つと考えられる。

第28表 水上8区・9区溝状遺構一覧表

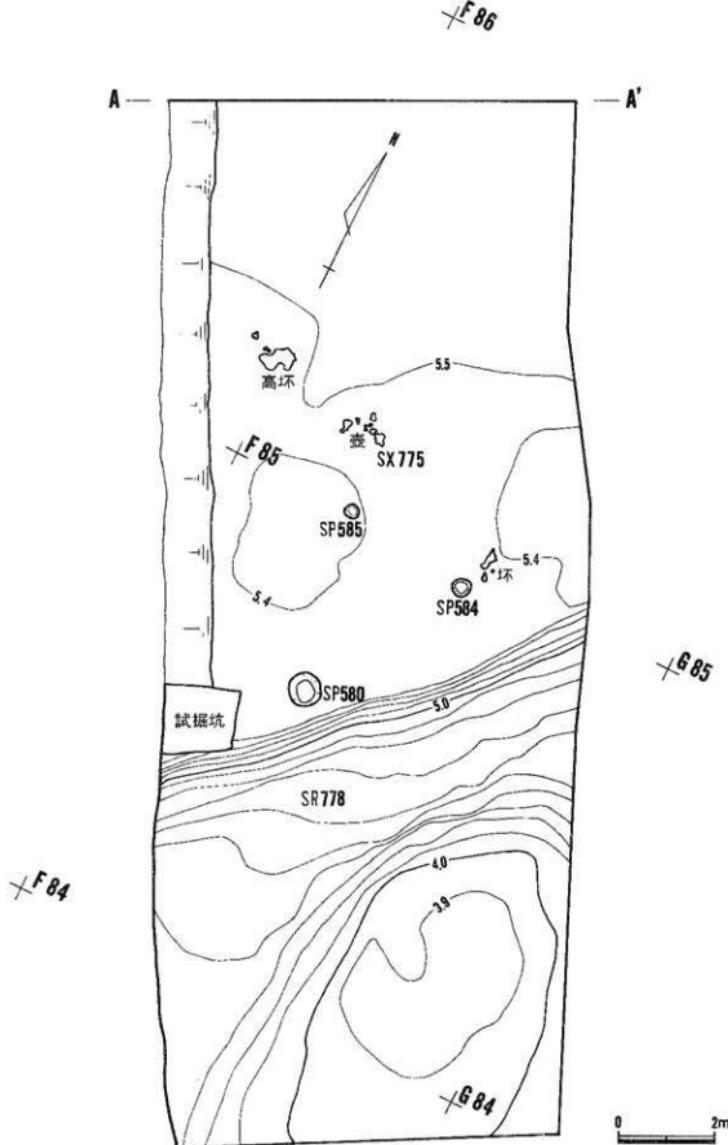
遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面高	特記事項
〈水上8区〉						
S D 581	F 84	6.40	1.43	0.30	5.51	
〈水上9区〉						
S D 405	C 88	9.10	1.08	0.26	5.47	
S D 406	D 88	9.80	0.72	0.15	5.53	
S D 407	B 90	17.80	1.16	0.35	5.78	
S D 552	D 88	9.50	0.51	0.07	5.54	
S D 553	E 86	7.90	2.02	0.08	5.65	
S D 577	B 90	14.80	0.94	0.34	5.78	



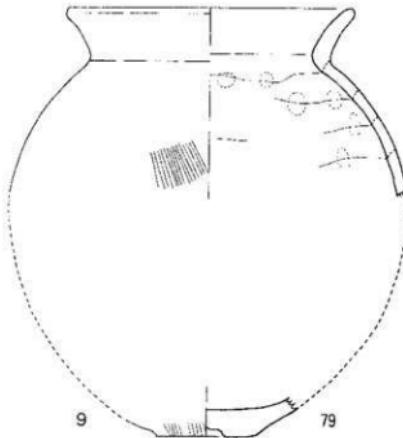
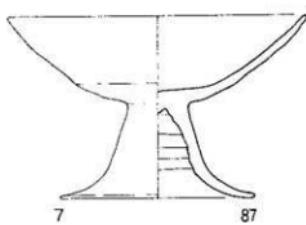
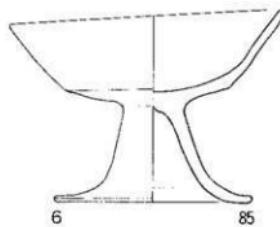
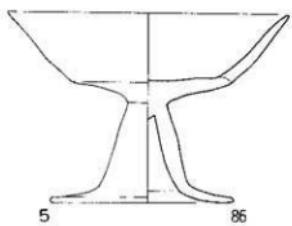
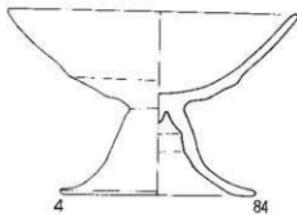
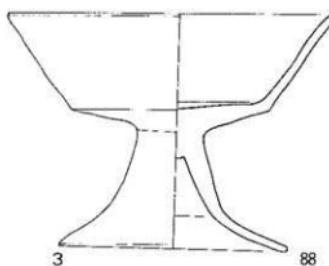
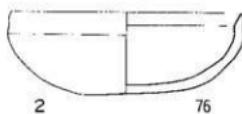
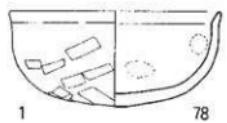
第67図 水上8区・水上9区全体図



第68図 水上8区・水上9区低湿地土層断面図



第69図 水上 8 区古墳時代遺構平面図



第70図 水上8区S X 775出土土器実測図

1cm

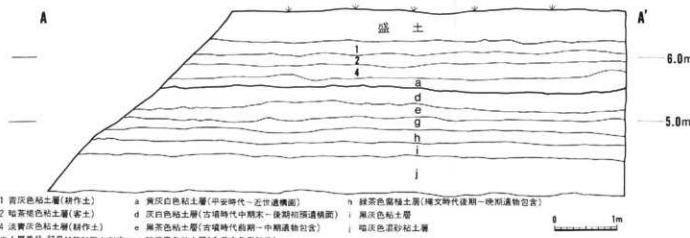
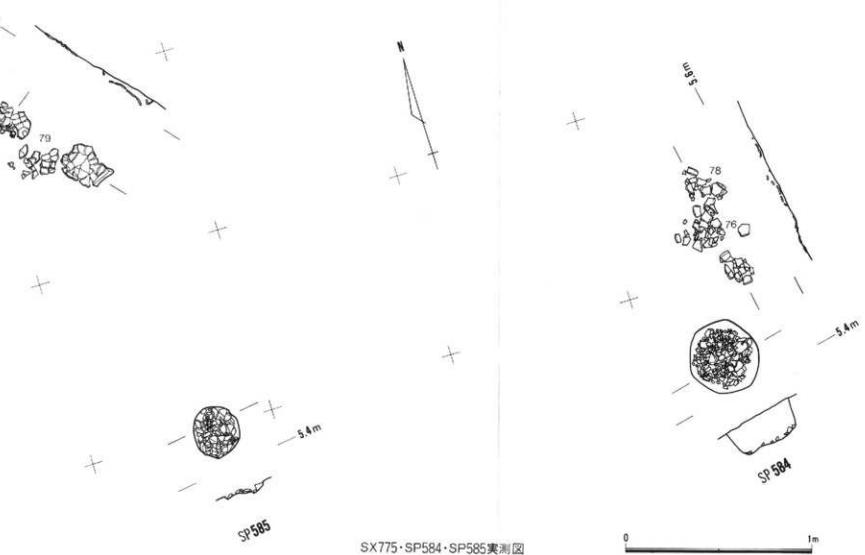
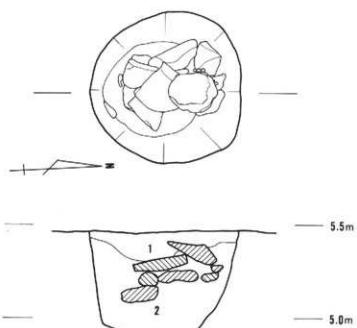
1 淡灰色粘土層
2 暗灰色粘土層

0 1m

SP580実測図

第71図 水上8区古墳時代遺構実測図

— 123 • 124 —



水上8区北壁土層断面図

水上9区（第67図）

1 概 要

現大谷川の左岸で河口起点より約1193m上流に位置する調査区である。北端は旧大谷川に接し右岸を形成している。90列以南では水上8区まで続く南東方向に傾斜する低湿地が検出された。本遺跡の基盤層である白色粘土と黒色粘土の互層（第69図A～F）はB90・B91グリッドで南東方向の緩傾斜が見られ、C89グリッド以南ではこれら基盤粘土層と下層の海成シルト層を切断するように腐植を含んだ粘土層（第69図c～k）が堆積している。これらの上層には全域にわたって黄灰白色粘土層（第69図a層）が堆積している。この黄灰白色粘土層では溝状造構・土坑・小穴・井戸状造構が検出され、平安時代から近世の造構面となっている。また下層の黒茶色粘土層（第69図c層）ではB91グリッドで掘立柱建物跡が1棟検出されている。

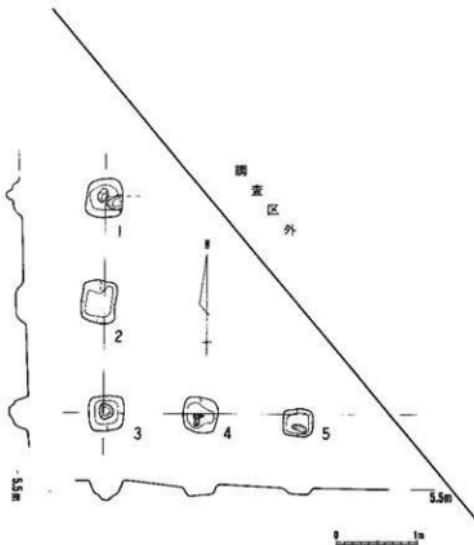
2 遺構各説

掘立柱建物跡

S H 570（第72図）B91グリッドにある。調査区東端で検出されたため、梁間2間、桁行3間以上と推定される東西棟建物物の一部のみの調査となった。梁間は2.68m、柱間寸法は1.3mを測る。桁行は不明であるが、柱穴3・4、柱穴4・5とも柱間寸法は1.2mである。柱穴4・5では礎板が検出された。確認面は低湿地内堆積上層であり南東に傾斜しているため、掘り込み面はより上層であると判断された。

井戸状遺構

S E 410（第119図）E85グリッドで検出された。長径1.30m、短径1.15mの長円形のプランをもち、深さ0.90mを測る。素掘りである。



第72図 水上9区SH 570実測図

第29表 水上8区・水上9区小穴・土坑一覧表

造構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長 短 比 (長径=1)	造 構 面 標 高	特 記 事 項
<水上8区>							
S P 580	F 84	0.73	0.71	0.37	0.97	5.29	
S P 583	F 84	1.38	1.20	0.30	0.87	5.55	古墳時代(後期)
S P 584	F 84	0.40	0.37	0.17	0.93	5.22	
S P 585	F 84	0.28	0.24	0.06	0.85	5.24	
<水上9区>							
S P 411	E 85	0.69	0.63	0.10	0.91	5.78	
S P 412	E 85	0.49	0.42	0.06	0.86	5.83	
S P 414	F 85	0.63	0.44	0.04	0.70	5.81	
S P 415	F 85	0.47	0.43	0.05	0.91	5.85	
S P 416	F 85	0.62	0.60	0.23	0.97	5.74	
S P 417	F 85	0.72	0.68	0.25	0.94	5.62	
S P 418	F 85	0.36	0.31	0.07	0.86	5.67	
S P 569	F 85	1.32	0.76	0.23	0.58	5.58	
S P 571	B 90	0.42	0.33	0.10	0.79	5.65	
S P 572	B 90	0.49	0.42	0.04	0.86	5.66	
S P 573	B 90	0.43	0.30	0.10	0.70	5.69	
S P 574	B 90	0.34	0.21	0.11	0.62	5.58	
S P 578	B 90	0.31	0.24	0.13	0.77	5.58	

第3節 宮川地区

宮川3区（第74図）

1. 概 要

宮川3区は河口起点より1,250m上流に位置し、現大谷川の右岸にある。南北に133mと長い調査区のうち95列以北には低湿地地形（S R 485）が弧状に広がり、中央部には明瞭な旧河道（S R 486・S R 487）が検出され、その他の部分は微高地になっていた。面積的には微高地部分が全体の約6割を占める。微高地上の遺構の主体は溝状遺構と井戸状遺構で、遺存状態も良く居住域の中心が近いことを予想させるに十分であった。出土遺物も古墳時代中期の一括土器（S X 484）から古墳時代後期、奈良時代、平安時代、平安時代末から鎌倉時代の遺物が良好な状態で検出された。しかし一方で、近世以降になると耕作の対象地として開墾され、各所で遺構が破壊されていた。浅い溝状遺構が寸断されているのはこのためである。

2. 遺構各説

溝状遺構

S D 181（第75図） Y89グリッドを中心南西から北東にむけて掘り込まれた溝状遺構である。確認面で最大幅1.95m、深さ0.9m、延長12.3mを測る。掘り方底面には4個所の土坑状部分を設けている。中央の2個所の規模は、東側で長軸2.0m、短軸1.4m、西側で長軸2.4m、短軸1.35mを測る。最深部標高は5.15mと5.10mである。

S D 181は砂層を基盤とする面に掘り込まれている。土坑状部分以外ではこの砂層下面で削削を終了しているのに対して、上坑状部分は砂層下位の不透水粘土層にまで掘り込みが進んでいる。このことから4個所の上坑状部分は集水と貯水を目的としている施設と考えられる。

上器は東端の土坑状部分の底面に密着して須恵器線（2667）が出土し、中央東側の上坑状部分では、土坑状部分が埋没した段階で土器が一括投棄されていた。これらの土器は古墳時代中期後半から後期初頭に比定されるS D 181の年代を示すものと考える。

須恵器と土師器に大きな年代差がみられないことと、須恵器が溝床への投棄、土師器が埋没した後の投棄であることから土坑状部分は段階的に削削されていった可能性がある。

線が単独で遺構中より出土した例は水上10区S R 673で認められた。また宮川4区のS R 56（古墳時代後期）では形代類に伴出する土器の中で坏類以外では線が多い。これらのことから、線は祭祀性が認められ、S D 181での投棄は水にかかる祭祀と関連があると思われる。

S D 145（第76図） I 95グリッドで検出された溝状遺構である。西から東にむかって傾斜をもち旧河道（S R 486）に流入している。確認面での幅は最大1.9m、最小0.9m、深さは1.0m、延長は16mを測る。溝床標高は西端で4.83m、東端で4.21mであり比高差0.62mの傾斜をもっている。

検出地点は、低湿地（S R 485）と微高地の境界線上にあたり、S D 182とともに居住域を区画している周溝的機能をもつ溝状遺構としてよいであろう。出土遺物としては2点の土器と3点の著状木製品がみられた。遺物の特徴から平安時代末の遺構と考える。

S D 182（第77図） M90・91グリッドに位置するL字形の溝状遺構である。確認面での幅は最大で2.25m、最小で1.16m、深さは1.08m、延長は21mを測る。溝床標高は西端部で5.08m、北端部で4.88mを測り0.2mの比高差をもって西から屈曲を経て北に流れる。延長線上には旧河道（S R 486）があり、S D 145と同様に河川に流入していた溝状遺構と考えられる。溝床の形状は4個所に七手状の高まりを残している。

出土遺物の特徴から平安時代末から鎌倉時代の溝状造構とする。この年代は S D 145 と一致している。S D 145 が居住城の北辺に相当する周溝的溝状造構であり S D 182 が南辺に掘削された溝となる。東辺は S R 486 によって規定されることから、宮川 3 号における平安時代末から鎌倉時代の居住城の南北幅は約 65 m となる。

井戸状造構

S E 103 (第 120 図) I 98 グリッドに位置する井戸状造構である。確認面で東西 2.58 m、南北 2.88 m を測る長方形プランをもつ。掘り方底面は上面プランの中心よりやや南側にずらして 0.86 m ほどの深さで方形に掘り込まれている。底面の標高は 4.9 m および不透水の粘土層にまで達していることから、側面の砂層から伏流水を得て取水する形式をとる。

井戸枠は四隅に角柱をもつ縦板組で二段の横棟をもつ。井戸枠の北半部は原状を完全にとどめるが、南半部は破壊され主要な部材は抜かれていた。北辺では上下二段の納穴を設けた角柱を両側に立て、柱間に幅 20 cm ~ 25 cm の縦板 5 枚を横口面を密着させてならべている。横棟は幅 7 cm、厚さ 3 cm 程度の角材を上下二段に用いている。前面の縦板の外周には、さらに 10 枚の縦板が互いの一部を重ねて立てられ砂泥の流入を防いでいた。北半部の内法寸法は角柱の外間の距離により 121 cm となるが、121 cm は曲尺の 4 尺となる点が注目される。

井戸廃棄は半分のみを取り壊すことによって行なわれていた。残存する北辺部から推測すると S E 103 には角柱 4 本、桟木 8 本、縦板材 60 枚程度が使用されていたはずであるが角柱 2 本と桟木 6 本および 15 枚ほどの縦板は抜き取られたことになる。残った廃材は井戸枠内に放置されているが掘り方底面より数センチメートル上位に折り重なっていた。廃材の上にはヒョウタンが 1 点置かれていた。廃棄後も埋めもどすことはしなかったようで覆土は自然堆積の状況を示している。

出土遺物はヒョウタンのはか須恵器の环片、土師器の环片がほとんどであるが、その特徴は奈良時代後半期を示している。また須恵器には藤枝市助宗古窯跡で生産されたと思われる削り出し高台をもつ坏身が 2 点含まれている。

S E 170 (第 120 図) I 94 グリッドで検出された木組の井戸状造構である。長径 2.26 m、短径 2.05 m のほぼ円形を呈するプランをもつ。掘り方は南側を除く三方向に三日月状のテラスを残し、井戸枠の中心が南側に片寄るように掘られている。底面の標高は 5.41 m を測り、検山面との比高差は 0.94 m である。

井戸枠の遺存状態は良好で廃棄に伴う部材の抜き取りはみられない。井戸枠の構造は四隅の角柱と縦板で内側を構成し、縦板の外周に井桁に組んだ横板をもつ複合構造をとっている。井戸枠内の内法は 0.6 m × 0.6 m の正方形である。四辺の縦板はそれぞれ 2 枚 (合計 8 枚) で構成され角柱を支えとしている。横棟は用いられず外周の井桁の横板によって土圧を分散させている。井戸枠は三日月状のテラス部分の高さまでしかなく、取水はテラス部分に降りて行なっていたと考えられる。

遺物は須恵器、土師器の小片にまじって、手捏ねの皿状土器が覆土中層から 2 点出土した。S E 170 の年代は奈良時代と推定される。

S E 147 (第 120 図) M91 グリッドの北隅で検出された井戸状造構である。長径 1.65 m、短径 1.55 m のほぼ円形プランからすり鉢状に掘り窪んでいる。中央には直径 0.7 m の円形掘り方を設け、段階とする。深さは 0.64 m で底面の標高は 5.18 m を測る。水溜には直径 54 cm の曲物を使用している。掘り込み面から 20 cm の深さまで砂層があり、この砂層からしみ出る水を曲物内にためる形式である。

年代は覆土中から出土した山茶碗から平安時代末頃の井戸状造構と考えられる。

S E 424 (第 120 図) K92 グリッドで検出された木組の枠をもつ井戸状造構である。調査区の西端であるため半分しか検出できなかった。掘り方は推定 1.45 m を一辺とする不整形な方形と思われる。深さ 1.1 m まで垂直に近い角度で掘り込んで井戸枠を構築したと考えられる。現状では掘り方底面が検出面より

2.08m（標高4.1m）の深さにまでおよんでいるが、これは使用中に湧水が枯れ、再掘削した結果であろう。再掘削の掘り方形状をみると標高4.5mの位置に肩をつくり出している。井戸枠をのせる部分であるが実際には井戸枠は設置されず素掘りの状態で使用されていた。

井戸枠は縦板と横桟で構成されている。東辺の縦板は幅33cm、長さ80cm、厚さ4cm程の板材3枚を横口面を合わせて用いている。外周にも幅のせまい縦板が用いられ板の隙間に当っている。横桟は幅8cm、厚さ4cm、長さ95cm程度の桟木を小口面と広口面を枘穴で組み合わせて上下2段に設置している。

出土遺物は山茶碗・青磁片のほか箸状木製品が6点検出された。のことから平安時代末頃から鎌倉時代とする。

S E 429（第121図）L92基単坑の北側に位置する素掘りの井戸状遺構である。長軸1.4m、短軸1.38mで丸く方形の平面プランをもつ。掘り方は1.1mほど垂直に掘り下げたのち平坦面をつくり、さらに底面のほぼ中央に直径約0.6mの不整円形の深掘り部をつくりだして水溜としている。井底の標高は4.89mである。

出土遺物は山茶碗のほか木製椀1点、箸状木製品2点が検出されている。年代は平安時代末から鎌倉時代とする。

S E 437（第121図）M91グリッドにある素掘りの井戸状遺構である。長軸1.25m、短軸1.23mを測る不整形の平面プランを有する。掘り方は45度～60度の角度で0.4mほど掘り下げて平坦面をつくりだし、底面のほぼ中央に直径30cmの円形深掘り部を設け水溜としている。出土した山茶碗の特徴から平安時代末から鎌倉時代とする。

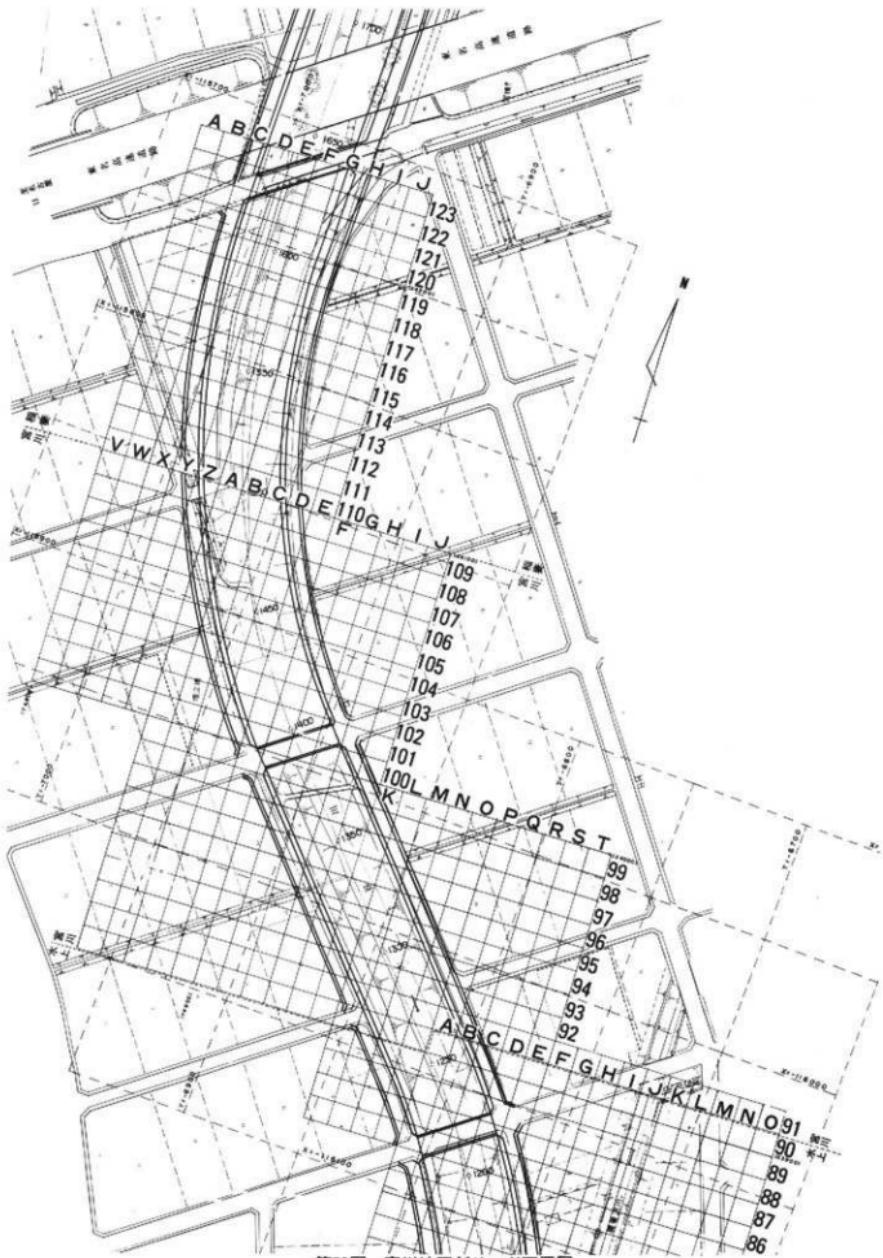
旧河跡

S R 485（第74図）宮川3区の北部で95列から98列に弧状に広がる低湿地地形であるが中世に河道となった。绳文時代にさかのぼるS R 485は粘土層の静穏な堆積により埋没していくが古墳時代中期以降の堆積粘土層には水辺に投棄された遺物が包含されていた。一括性が認められる遺物集中部が8個所確認されS X 484・S X 483・S X 482・S X 481・S X 480・S X 479・S X 478・S X 477（第78図）とした。以下でS R 485内の上層および遺物集中部について詳述する。

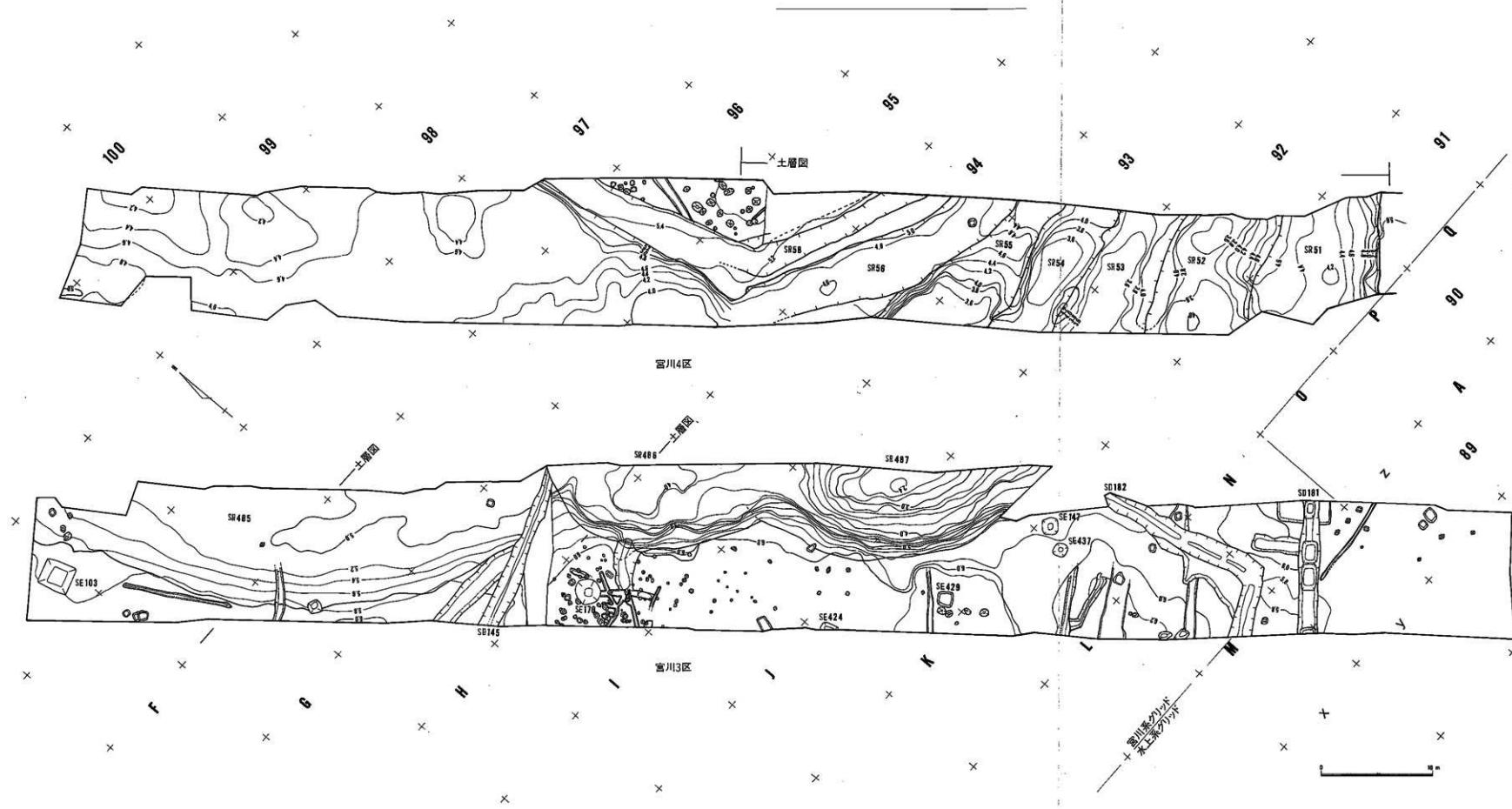
土層（第99図）1層から8層は低湿地の岸に堆積した土層であるが中世以降の擾乱を受けている。9層は茶灰色粘土層、10層は灰褐色粘土層である。9層は平安時代、10層は奈良時代の包含層と考えて調査したが9・10層とともに両時代の遺物が混在していた。遺構は認められず、遺物の量も少ない。11層は茶色粘土層で古墳時代後期の遺物を大量に包含しており、S X 481・S X 480・S X 479・S X 478・S X 477が検出された。12層は灰黄色粘土層で古墳時代後期の遺物が若干検出された。13層は灰白色粘土層で古墳時代中期から後期初め頃の包含層である。14層・15層は無遺物層である。16層は微高地の基盤層を構成する黒色粘土層の末端部分である。

S X 484（第79図）H95グリッドで検出された遺物集中部である。低湿地の岸部近くの斜面上に集中していた。1.5m×1mほどの狭い範囲に埴形土器、高坏形土器、壺形土器とともに滑石製の勾玉と臼玉がそれぞれ1点出土している。遺物の特徴から古墳時代中期とした。また土器集中部のうちでもっとも古い段階の投棄と考えている。

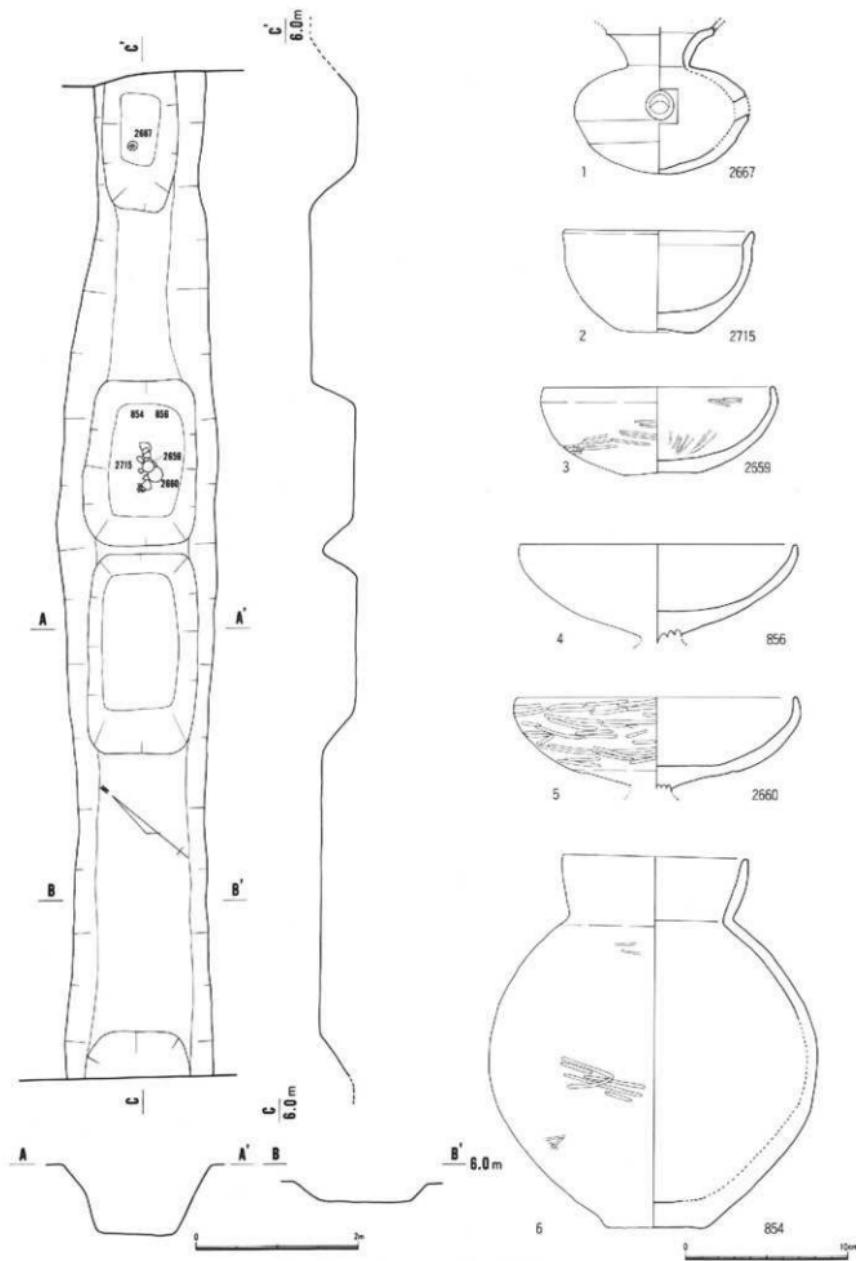
S X 483（第80図）H96グリッドで検出された遺物集中部である。S X 484と同様に低湿地の岸部近くの斜面上に存在した。3m×2mほどの範囲に土師器高坏形土器を中心に投棄されていた。高坏形土器は約50点にのぼる。他器種では壺形土器・甕形土器・坏形土器が合計で10点ほど数えた。滑石製模造品は含まれず、須恵器の壺形土器（第87図）が1点出土した。遺物の特徴から古墳時代中期と考えるがS X 483にみられた滑石製模造品と埴形土器が含まれず高坏形土器が主体となることからS X 483はS



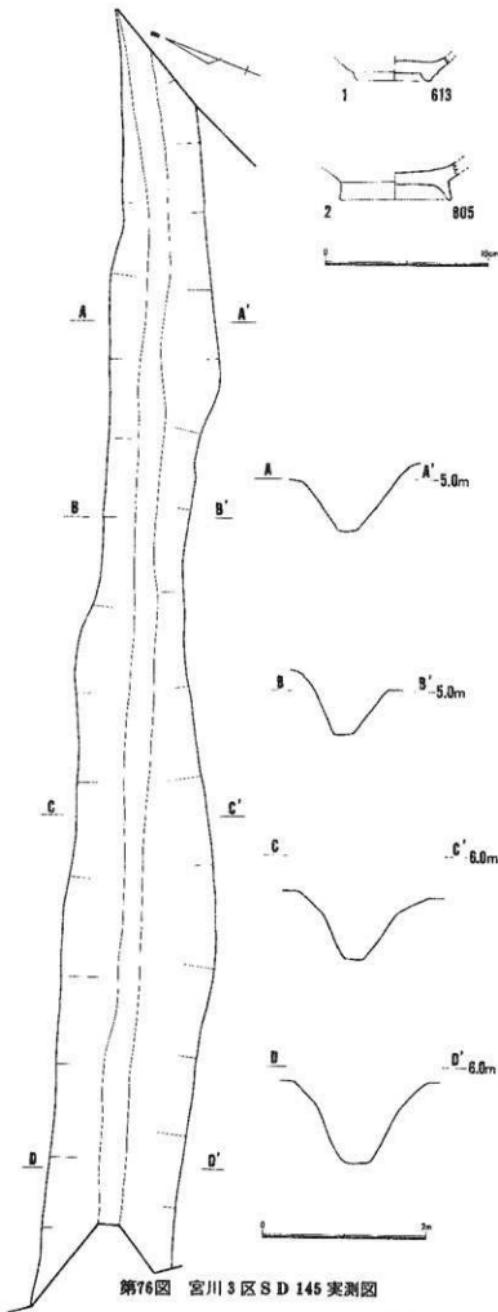
第73図 宮川地区グリッド配置図



第74図 宮川3・4区全体図



第75図 宮川3区S D 181 実測図



第76図 宮川3区SD 145実測図

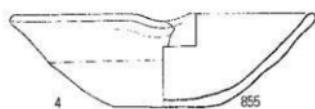
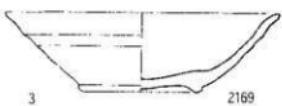
X 484よりも新しい段階での投棄を考えたい。なお、SX 484と類似する遺構は水上10匁のSX 624にみられ、SX 483の類似例は水上8匁SX 775にある。いずれも低湿地の縁辺である。

SX 482(第81図) H96グリッドで検出された遺物集中部である。1.5m×1mほどの範囲に土師器の壺形土器が集中している。須恵器壺身(1785)も1点検出された。土器の特徴から古墳時代後期の前半と考える。

SX 477(第83図) I95グリッドで検出された土器集中部である。5m×3mほどの範囲に土師器の壺形土器を主体に投棄されている。須恵器も8点出土しているが壺形土器が多く壺形土器と壺形土器の破片がわずかにみられるにすぎない。20cm~40cm大の礫が土器とともに投棄されている。出土遺物は破片が火半をしめる点が特徴的である。土器の特徴から6世紀末頃から7世紀初め頃と推定した。

SX 478(第84図) I96グリッドで検出された遺物集中部である。3.5m×2.5mの範囲に土師器を主体に投棄されている。中心部には9個所の土師器壺形土器と2個所の瓶形土器が集中し、周辺部には礫および須恵器・土師器の壺形土器が投棄されている。また、馬形土製品1点と手捏土器1点が共伴している。遺物の特徴から6世紀末から7世紀初め頃の投棄と推定した。

SX 480(第82図) H97グリッドで検出された遺物集中部である。土師器の壺形土器を主体に投棄されているが須恵器では壺形土器のほか短頸壺も1点出土した。手捏土器1点と石製丸玉1点が共伴する。遺物は2m×2mほどの範囲に広がり礫の伴出は少ない。遺物の特徴から7世紀前半代の投棄と推定する。



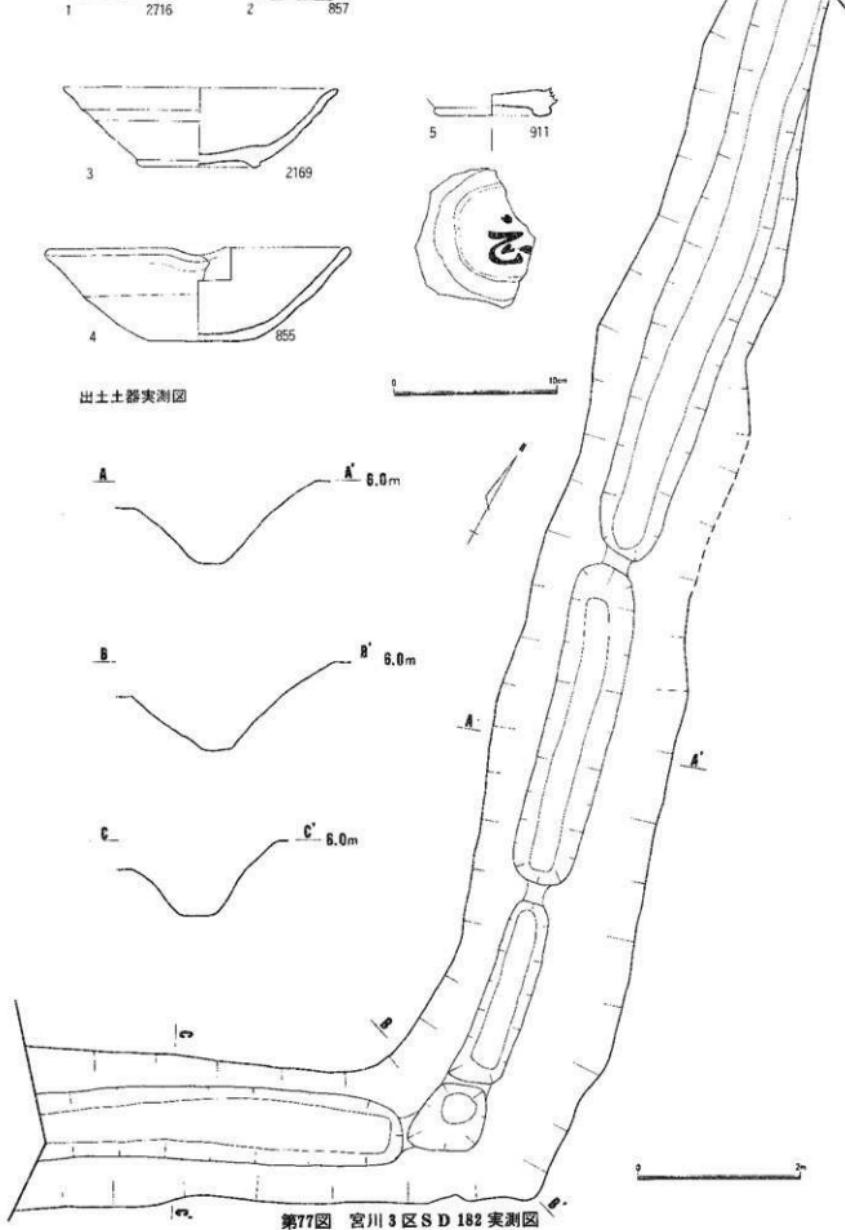
出土土器実測図

0 10cm

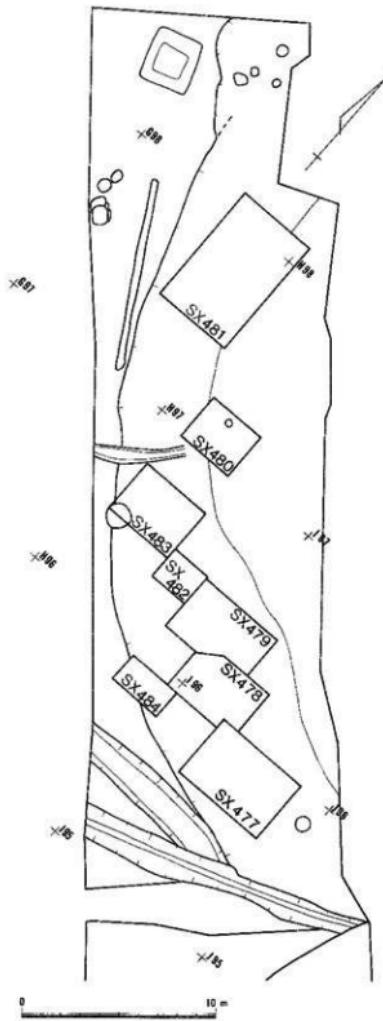
A A' 6.0m

B B' 6.0m

C C' 6.0m



第77図 宮川3区S D 182 実測図



第78図 SX 477～SX 484 位置図

る期間地面に立てられていたことがうかがわれる。

墨書き土器は灰釉陶器以前の段階の墨書き文字とは内容が一変する。山茶碗にみられる墨書きは、内容から

S X 481 (第85図) G 97グリッドで検出された遺物集中部である。遺物の出土範囲は南北 6 m ほどに広がり低湿地埋没段階での岸線に沿って投棄された状況を示している。土師器の投棄が主体であるが器種によって投棄地点が異なる点に特徴をもっている。北半部は大型の碟と甕のように土師器の壺形土器と瓶形土器があり、須恵器の横銘とともに良好な遺存状態を示して検出された。南半部は土師器の壺形土器が主体をなしている。碟は小型のものがわずかにみられるにすぎない。遺物の特徴から 7 世紀前半代の投棄と推定した。

S X 479 (第86図) H 96・I 96グリッドで検出された遺物集中部である。4.5 m × 2.5 m ほどの範囲にわたるが中央部には顕著な集中部分がみられた。この中央部にみられた集中は土師器の壺形土器が主体をなしていた。土器は完形品が多く口径の異なるものを 2 点あるいは 3 点重ねて投棄されている。土器以外では動物形土製品（土馬）8 点と石製丸玉 4 点が共伴する点が注目される。土器の特徴から 7 世紀後半代での投棄と考える。

S R 486 (第88図) J 94・J 95・K 94グリッドを中心検出された旧河道である。蛇行の攻撃斜面側の頂点にあたり、北東から流れ込む水流が屈曲して南東に流れる。古墳時代後期から徐々に浸食が始まり、鎌倉時代まで河道として水を保っていたと考えられる。宮川 4 区の S R 53・S R 54 に連続する旧河道である。

遺物は 2 層の灰黒色粘土層から平安時代末から鎌倉時代の木簡、墨書き土器、箸状木製品などが括して出土した。4 层から 6 層までは古墳時代後期から平安時代の遺物が混在するが平安時代が主体をなす。層位にしたがって調査を進めたが旧河道の変遷を正確に把握することは困難な状況であった。以下は 2 層から出土した平安時代末～鎌倉時代の遺物を中心に詳述する。

木簡が 5 点出土している。卒塔婆を形どった薄板には「南無大日」・「仁王」といった仏教的文字が記されている。出土地点は河道跡の中心付近に集中する。文字がうき出ている部分もみられあ

「大」・「も」・「兎」・「みやいめ」または「み虫め」の4種に分けることができる（第89図）。「大」は8点でもっとも多い。ついで「も」が7点、「兎」・「みやいめ」はそれぞれ3点が検出された。墨書き位置はすべて底部外面である。出土地点は河道内全面にわたるが、層位は大半が2層におさまる。

箸状木製品は481点を数える。岸部付近に2箇所の集中部が検出された。完形品は少なく大半が先端から3cmほどのところで折れている。また先端がつぶれている場合が多く刺して用いたのち投棄されたと思われる。呪符木簡・獸骨などに伴出する傾向があり、井戸、溝、河道など水にかかる地点で、しかも平安時代末から中世の遺構でのみ出土している。また、焼痕のある木片を伴う場合が多いことも注目される。これらのことからこの箸状木製品を斎串と認定してよいと考える。

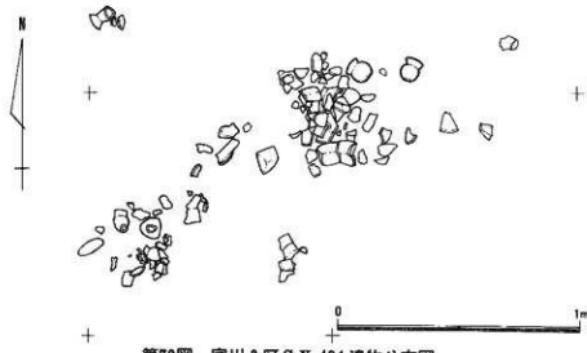
このほかミニチュアの膳と杵が出土している。

S R 486 は S D 145、S D 182とともに平安時代末から鎌倉時代の居住域を区画する役割も果していた。墨書き土器と木簡は他の調査区でもみられるが、内容的に共通するものは宮川4区の墨書き土器のみである。宮川4区は宮川3区の連続部分であることから、S R 486で検出された遺物は宮川3区を中心とした居住域内で行われた仏教的儀礼で用いた料であったことは確かである。

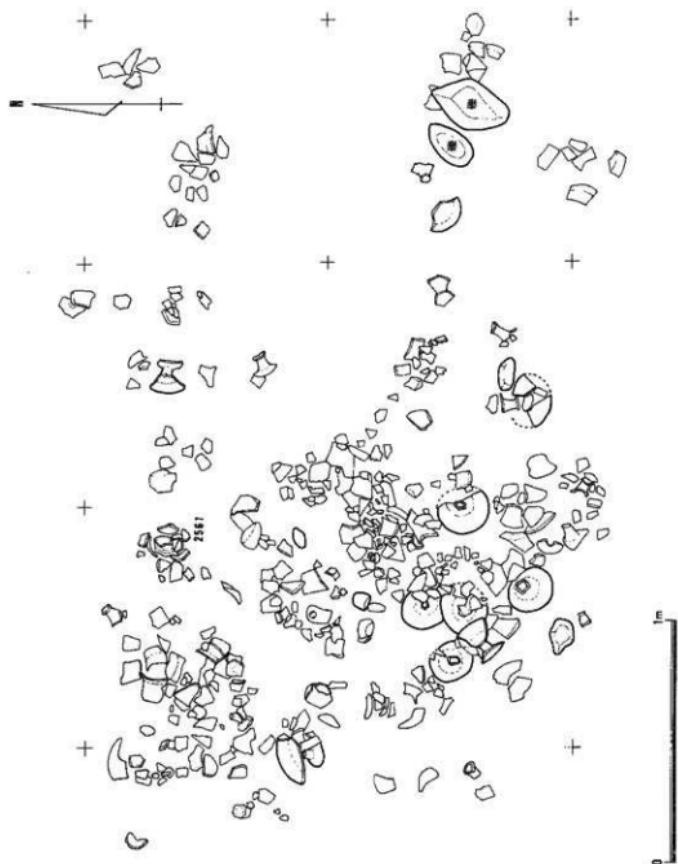
S R 487 L 92・93グリッドを中心に検出された旧河道跡である。S R 486が中世段階に南側に移動したことにより形成された蛇行の攻撃斜面側の頂点にあたる。最深部標高は2.4mで深さは2.2mにもおよぶ。暗青灰色の粘土によって被覆されている。S R 487は宮川4区のS R 52に連続する河道跡である。

3.まとめ

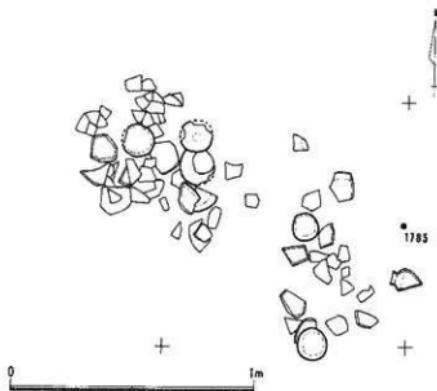
- (1) 宮川3区の北半部は奈良時代の遺構・遺物が比較的多く検出された。これは宮川2区および宮川5区の遺構とともに奈良時代の居住域を想定する根拠となろう。これに対し南半部は平安時代末から鎌倉時代の居住域と想定し得る。いずれも旧大谷川の右岸に相当する。低湿地と旧河道は祭祀遺物の可能性をもつ遺物の投棄場所として古墳時代中期から鎌倉時代まで活用され続けている。特にS R 485では①埴形土器と滑石製造品の祭祀、②高杯を用いる祭祀、③變形土器・腹形土器を主体とする祭祀、④馬形土製品を用いる祭祀というような段階的变化を示していた。これは本遺跡での祭祀の変遷を明らかにする上で重要な資料となった。
- (2) 宮川3区S R 486で大量に出土した箸状木製品は出土状況・伴出遺物から斎串と考えられ、同種のものは大谷1区・西大谷4区・水上6区SD 228・宮川4区S R 53・宮川6区S R 316などでもみられる。また同種の機能を果たしていたと考えられる断面方形でやや太い棒状木製品も出土しており、それぞれ箸状の斎串・棒状の斎串と認定する。



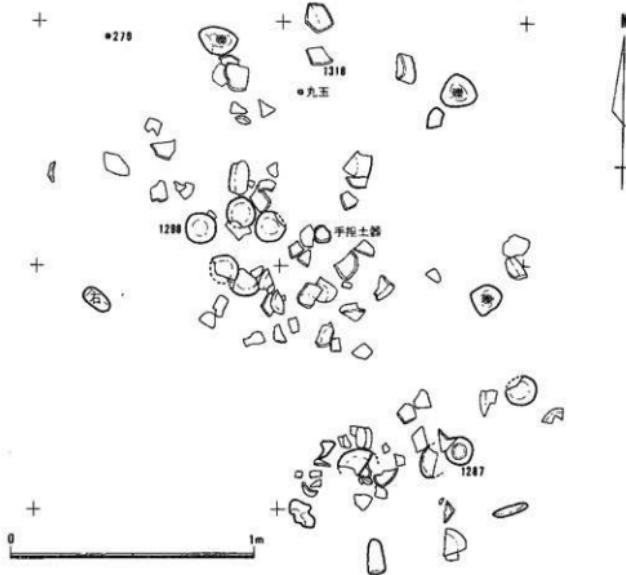
第79図 宮川3区S X 484 遺物分布図



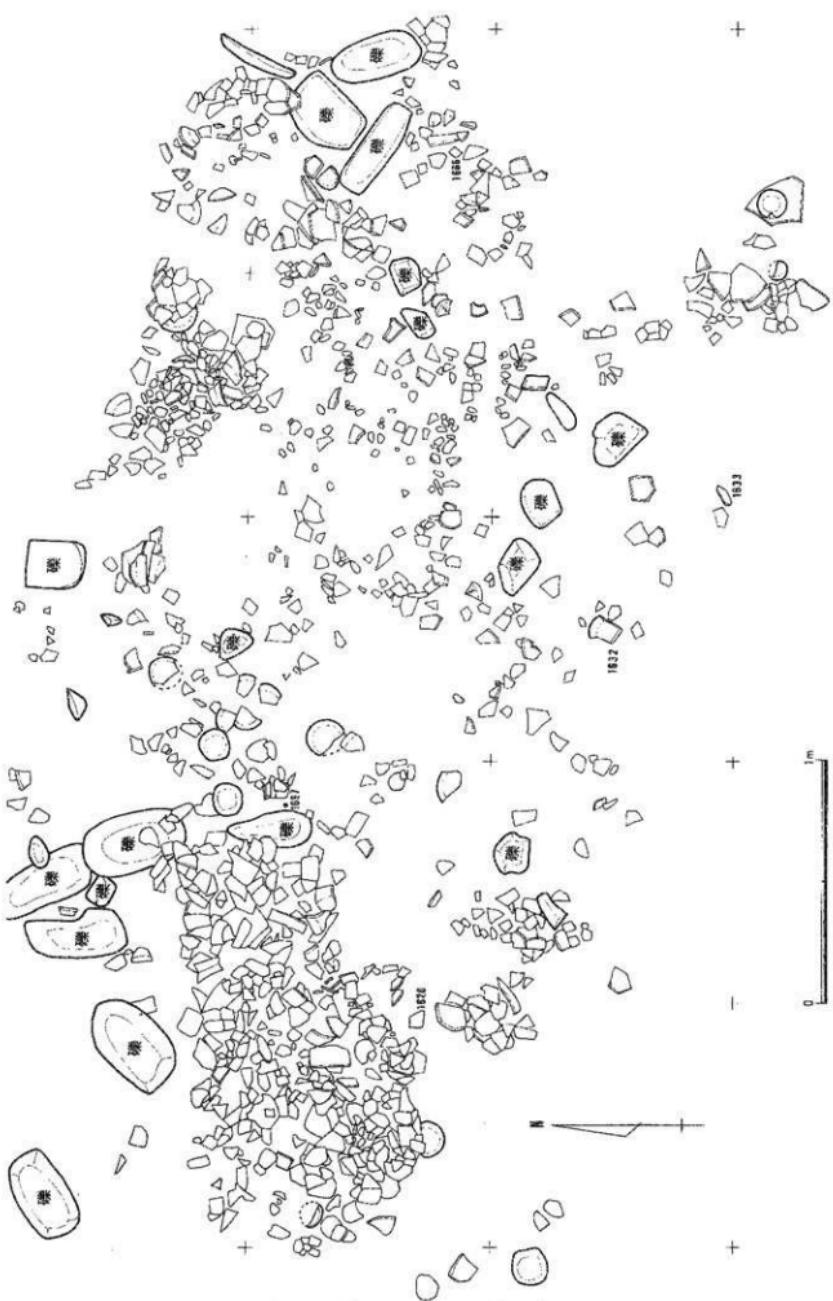
第80図 宮川3区S X 483遺物分布図



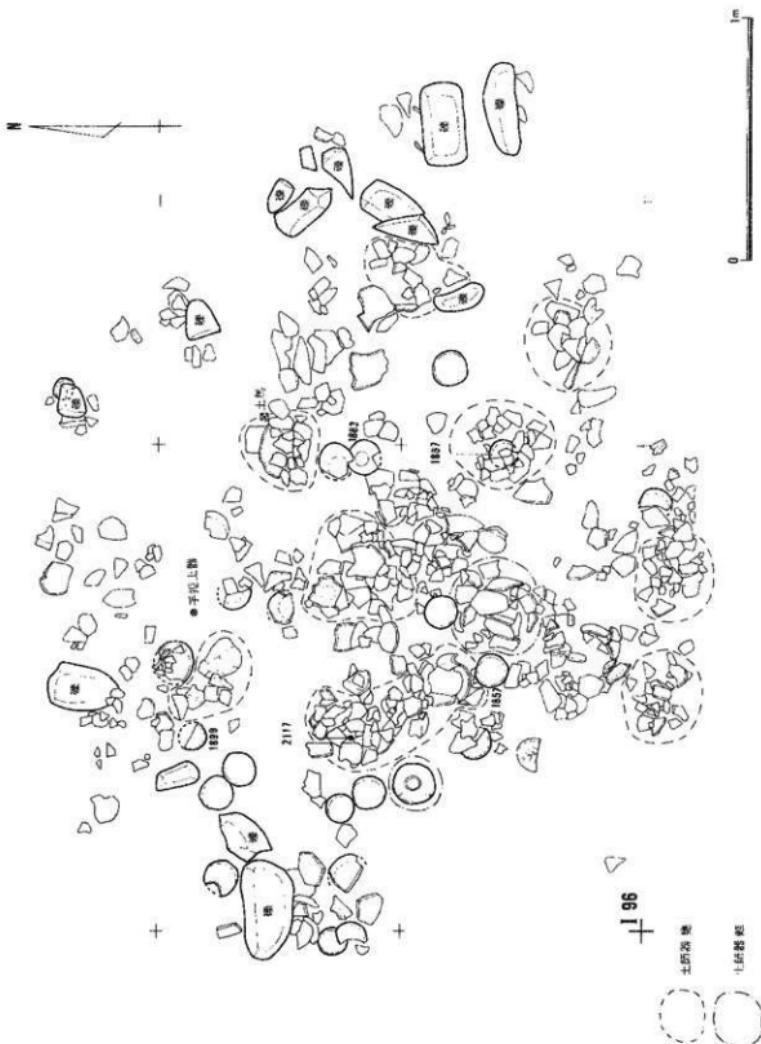
第81図 宮川3区S X 482 遺物分布図



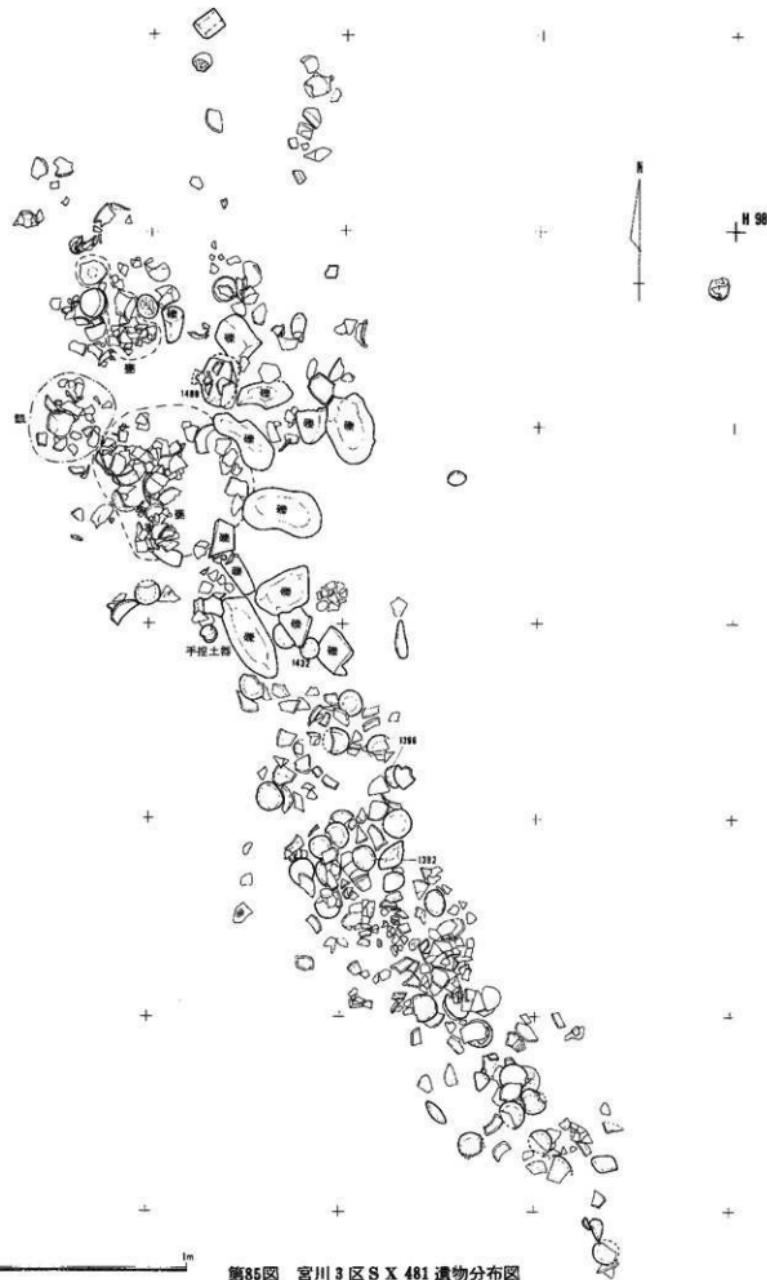
第82図 宮川3区S X 480 遺物分布図



第83図 宮川3区SX477遺物分布図



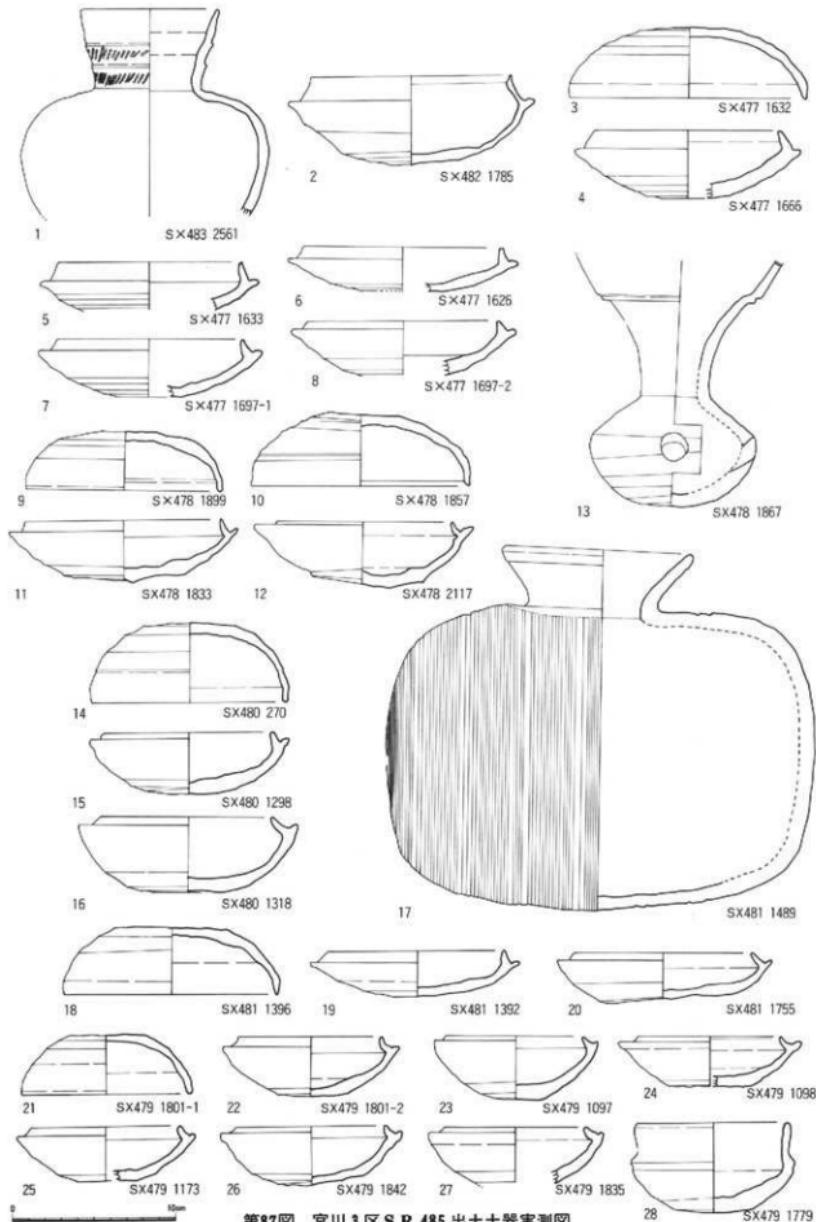
第84図 宮川3区S X 478遺物分布図



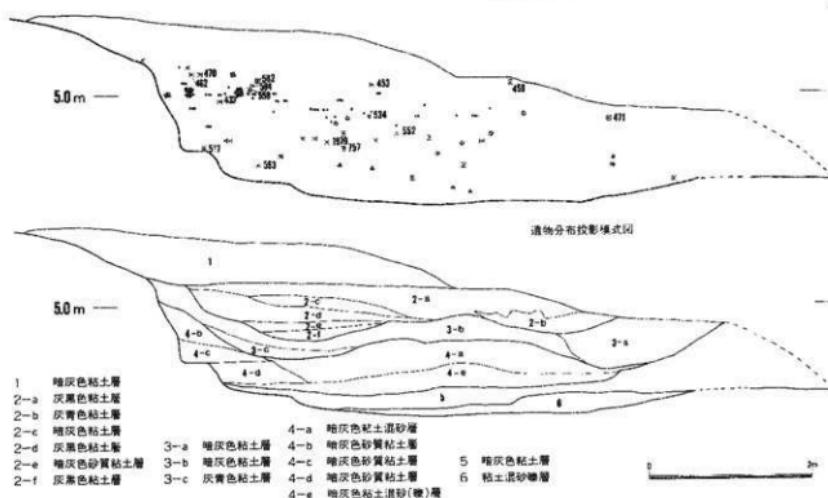
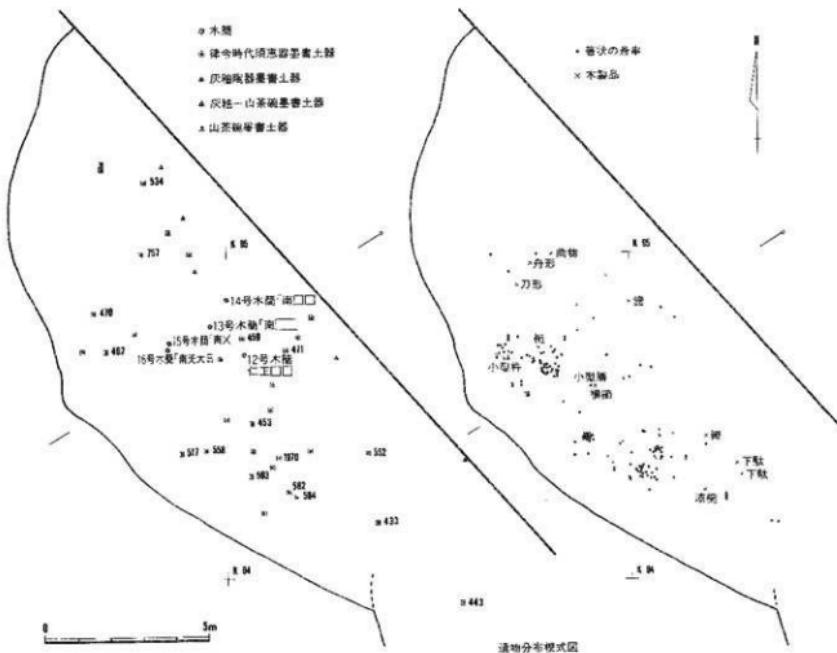
第85図 宮川3区S X 481 遺物分布図



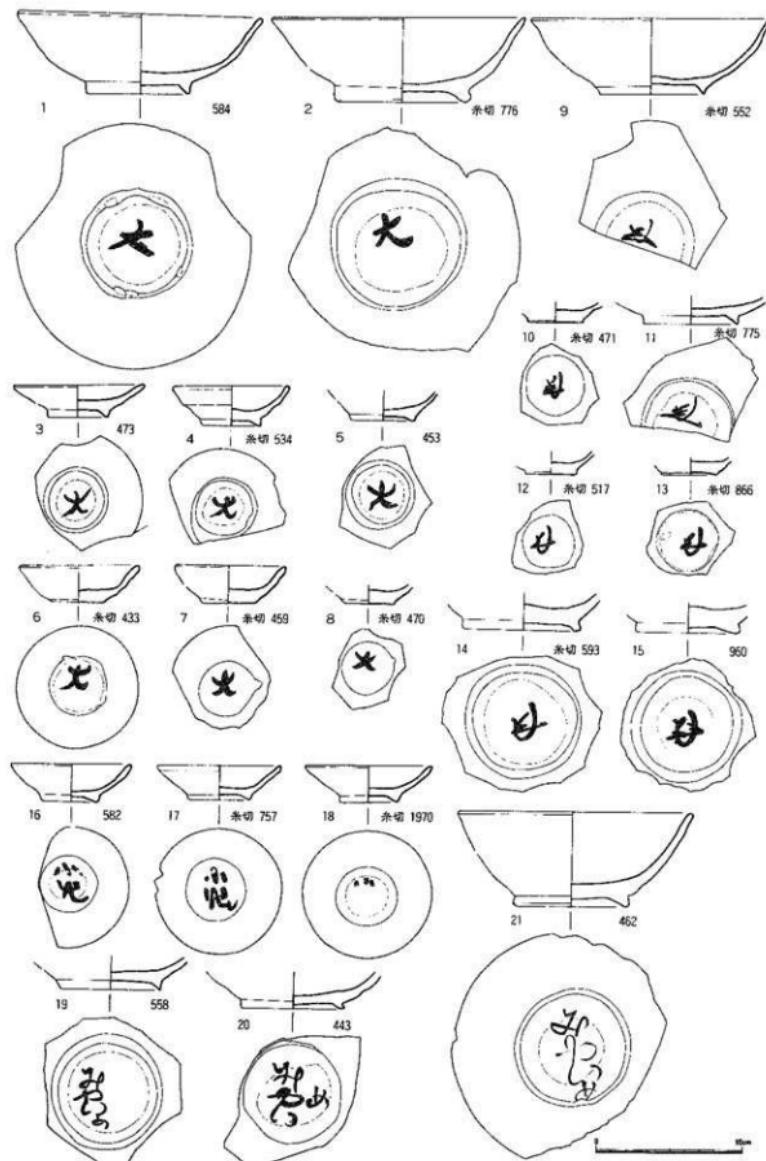
第86図 宮川3区S X 479 遺物分布図



第87図 宮川3区S.R.485出土土器実測図



第88図 宮川3区S R 466 遺物分布模式図・土層断面図



第89図 宮川3区S R 486出土墨書き土器実測図

第30表 宮川3区S R 486 主要遺物一覧表

古墳時代 須恵器	14	刀形木製品	1	木製鏡	1
律令時代 須恵器	10	舟形木製品	1	曲物	3
灰釉陶器	6	斎串(板状)	8	木製梳	1
綠釉陶器	1	棒状木製品(斎串)	4	下駄	2
山茶碗	60	箸状木製品(斎串)	481	籠状木製品	2
青・白磁	9	平塔婆状木製品	1	動物形土製品(上馬)	2
墨書き土器	39	ミニチュア膳	1	瓦	2
ヘラ書き土器	1	ミニチュア杵	1	鐵鑄	1
木簡	5	糸巻	1	砥石	2
		横櫛	1	動物遺存体	25

第31表 宮川3区小穴一覧表

造構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比 (長径=1)	造構面標高	特記事項
S P 101	G97	1.00	0.90	0.37	0.90	5.93	
S P 102	G97	0.65	0.65	0.09	1.00	5.93	
S P 104	G97	0.84	(0.64)	0.17	(0.76)	5.93	
S P 105	G97	(0.23)	(0.22)	0.12	(0.96)	5.93	
S P 106	G97	(0.43)	(0.43)	0.02	(1.00)	5.93	
S P 107	G97	—	—	—	—	5.93	
S P 108	G98	0.75	0.65	0.40	0.87	5.74	
S P 109	G98	0.40	0.35	0.26	0.88	5.66	
S P 110	G98	0.34	0.32	0.30	0.94	5.40	
S P 111	G98	0.66	0.51	0.15	0.77	5.51	
S P 112	I 94	0.28	0.27	0.18	0.96	6.37	平安時代
S P 113	I 94	0.23	0.22	0.17	0.96	6.40	
S P 114	I 94	0.40	0.29	0.39	0.73	6.42	
S P 115	I 94	0.47	0.46	0.15	0.98	6.41	
S P 116	I 94	0.28	0.25	0.16	0.89	6.37	
S P 117	I 94	0.36	0.32	0.44	0.89	6.40	
S P 118	J 94	0.28	0.25	0.16	0.89	6.37	
S P 119	I 94	0.24	0.20	0.05	0.83	6.38	
S P 120	I 94	0.50	0.40	0.13	0.80	6.41	
S P 121	I 94	0.18	0.18	—	1.00	6.41	
S P 122	I 94	0.28	0.25	0.24	0.89	6.42	
S P 123	I 94	0.67	0.45	0.33	0.67	6.42	
S P 124	I 94	0.53	0.49	0.25	0.92	6.40	
S P 127	I 94	0.36	0.26	0.09	0.72	6.38	
S P 128	I 94	0.52	0.45	0.12	0.87	6.38	
S P 129	I 94	0.37	0.34	0.19	0.92	6.35	
S P 130	I 94	0.49	0.45	0.21	0.92	6.31	

造構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比 (長径=1)	造構面 標　高	特記事項
S P 131	I 94	0.28	0.27	0.31	0.96	6.31	
S P 132	I 94	(0.50)	0.43	0.24	0.86	6.31	
S P 133	I 94	0.30	0.29	0.24	0.97	6.34	
S P 134	I 94	0.51	0.49	0.27	0.96	6.34	
S P 135	I 94	0.35	—	—	—	6.38	
S P 136	I 94	0.29	0.25	0.18	0.86	6.31	
S P 137	I 94	0.33	(0.30)	0.16	(0.91)	6.31	
S P 138	I 94	0.34	0.31	0.23	0.91	6.37	
S P 139	I 94	0.52	(0.44)	0.21	(0.85)	6.36	
S P 140	J 94	0.34	0.32	0.18	0.94	6.33	
S P 141	J 94	0.28	0.26	0.24	0.93	6.34	古墳時代
S P 142	J 94	0.26	0.25	0.21	0.96	6.32	
S P 143	I 94	0.59	0.57	0.23	0.97	6.33	
S P 144	J 94	0.29	0.27	0.18	0.93	6.30	
S P 148	J 94	0.24	0.23	0.21	0.96	6.30	
S P 149	J 94	0.18	0.16	0.11	0.89	6.28	
S P 150	J 94	0.33	0.28	0.10	0.85	6.20	
S P 151	J 94	0.33	0.32	0.16	0.97	6.21	
S P 152	J 94	0.38	0.22	0.20	0.58	6.20	
S P 153	J 94	0.26	0.25	0.15	0.96	6.21	
S P 154	J 94	0.22	0.21	0.11	0.95	6.15	
S P 155	J 94	0.30	0.30	0.18	1.00	6.15	
S P 156	J 94	0.34	0.22	0.18	0.65	6.21	
S P 157	J 94	0.31	0.30	0.25	0.97	6.17	
S P 158	I 94	0.48	0.45	0.30	0.94	6.40	平安時代
S P 159	J 94	0.19	0.15	0.07	0.79	6.13	
S P 160	J 94	0.42	0.41	0.17	0.98	6.34	
S P 163	J 94	0.24	0.21	0.10	0.88	6.31	
S P 164	J 94	0.27	0.26	0.15	0.96	6.11	
S P 165	J 94	0.31	0.26	0.36	0.84	6.18	
S P 166	J 94	0.27	0.20	0.05	0.74	6.13	
S P 167	J 94	0.24	0.21	0.09	0.88	6.14	
S P 168	J 94	0.27	0.24	0.17	0.89	6.09	
S P 169	J 94	0.26	0.24	0.12	0.92	6.35	
S P 171	I 94	0.62	0.59	0.19	0.95	6.33	
S P 172	J 94	0.28	0.25	0.11	0.89	6.02	
S P 173	J 94	0.25	(0.24)	0.28	(0.96)	6.28	
S P 178	J 94	0.27	0.21	0.14	0.78	6.12	
S P 179	J 94	0.18	0.17	0.07	0.94	6.10	
S P 180	J 94	0.39	0.30	0.26	0.77	6.35	
S P 184	J 94	0.71	0.45	0.19	0.63	6.27	

遺構番号	グリッド	長 さ	短 径	深 さ	長短比 (長径-1)	遺構面 標高	特記事項
S P 185	I 94	0.28	0.27	0.09	0.96	6.38	
S P 186	J 94	0.35	0.32	0.12	0.91	6.24	
S P 190	J 94	0.45	0.30	0.30	0.67	6.18	古墳時代(後期)
S P 191	J 94	0.25	0.24	0.08	0.96	6.26	
S P 195	J 93	0.26	0.24	0.19	0.92	6.28	
S P 196	J 93	0.20	0.19	0.10	0.95	6.27	
S P 197	J 93	0.29	0.27	0.19	0.93	6.26	
S P 198	J 93	0.33	0.28	0.14	0.85	6.21	
S P 199	J 94	0.35	0.32	0.15	0.91	6.21	
S P 200	J 94	0.30	0.27	0.70	0.90	6.47	
S P 401	J 93	0.32	0.25	0.16	0.78	6.17	
S P 402	J 93	0.38	0.30	0.17	0.79	6.21	
S P 403	J 93	0.30	0.28	0.06	0.93	6.21	
S P 404	J 93	0.28	0.26	0.23	0.93	6.20	
S P 405	J 93	0.28	0.24	0.07	0.86	6.21	
S P 406	J 93	0.23	0.21	0.10	0.91	6.21	
S P 407	J 93	0.17	0.16	0.05	0.94	6.19	
S P 408	J 93	0.20	0.17	0.08	0.85	6.19	
S P 409	J 93	0.24	0.22	0.10	0.92	6.15	
S P 410	J 93	0.20	0.19	0.04	0.95	6.21	
S P 411	J 93	0.23	0.19	—	0.83	6.22	
S P 412	J 93	0.30	0.25	0.08	0.83	6.17	
S P 413	J 93	0.33	0.32	0.06	0.97	6.18	
S P 414	J 93	—	0.80	0.21	—	6.21	
S P 415	K 93	0.32	0.28	0.12	0.88	6.25	
S P 416	K 93	0.34	0.24	—	0.71	6.17	
S P 417	K 93	0.49	0.30	0.20	0.61	6.14	
S P 418	K 93	0.82	0.48	0.62	0.59	5.92	
S P 419	K 93	0.47	0.27	0.18	0.57	6.17	
S P 420	K 93	0.50	0.28	0.11	0.56	6.20	
S P 421	K 93	0.34	0.30	0.13	0.88	6.22	
S P 422	K 92	0.32	0.28	0.20	0.88	6.16	
S P 423	K 92	0.38	0.34	0.12	0.89	6.17	
S P 425	K 92	0.33	0.29	0.06	0.88	6.37	
S P 426	K 92	0.66	0.52	0.40	0.79	6.40	
S P 427	K 92	0.78	0.59	0.26	0.76	6.39	
S P 430	K 91	0.35	0.28	0.09	0.80	6.40	
S P 431	L 91	0.63	0.48	0.26	0.76	6.37	
S P 432	L 91	0.76	0.69	0.08	0.91	6.26	
S P 433	L 91	0.24	0.18	0.04	0.75	6.35	
S P 436	M 91	0.96	0.90	0.30	0.94	6.09	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比 (長径=1)	遺構面 標高	特記事項
S P 438	M91	0.69	0.63	0.40	0.91	5.82	
S P 439	L90	0.28	0.21	0.04	0.75	6.21	
S P 440	M90	0.52	0.38	0.08	0.73	6.20	
S P 441	M91	0.76	0.59	0.27	0.78	5.91	
S P 442	M90	0.32	0.25	0.19	0.78	6.18	
S P 443	M90	1.12	0.76	0.31	0.68	6.20	古墳時代
S P 444	M90	1.12	(0.78)	0.32	(0.70)	6.18	
S P 445	M89	0.62	0.54	0.26	0.87	5.87	
S P 447	N89	0.51	0.40	0.12	0.78	5.91	
S P 448	N89	0.44	0.36	0.06	0.82	5.90	
S P 449	O89	0.56	0.45	0.14	0.80	5.94	
S P 451	N89	0.43	0.38	0.06	0.88	5.93	
S P 452	N89	0.24	0.22	0.14	0.92	5.91	
S P 453	O89	0.82	0.69	0.12	0.84	5.82	
S P 454	O89	1.34	0.92	0.14	0.69	5.82	
S P 455	O89	0.29	0.28	0.34	0.97	5.84	
S P 456	O89	0.41	0.32	0.11	0.78	5.82	古墳時代
S P 457	H96	1.34	1.12	0.23	0.84	5.65	古墳時代
S P 459	I 95	0.74	0.70	0.53	0.95	4.94	
S P 461	I 94	0.20	—	—	—	5.93	
S P 462	I 94	0.19	0.17	0.06	0.89	6.07	
S P 464	I 94	0.22	0.21	0.12	0.95	6.15	
S P 465	I 94	(0.18)	(0.17)	0.05	0.94	6.15	
S P 466	I 94	0.37	—	0.08	—	6.15	
S P 467	I 94	0.46	0.44	0.24	0.96	6.23	
S P 468	J 94	0.44	0.42	0.12	0.95	6.14	
S P 470	J 94	0.34	(0.32)	0.18	(0.94)	6.14	
S P 471	J 94	0.35	(0.34)	0.21	(0.97)	6.15	
S P 472	J 94	0.23	0.18	0.14	0.78	6.14	
S P 473	J 94	0.37	0.21	0.18	0.57	6.19	
S P 474	J 94	(0.80)	0.70	0.39	(0.88)	6.26	
S P 475	H 97						

宮川4区（第74図）

1. 概 要

宮川4区は現大谷川の左岸で河口起点より1,250m上流に位置する。南半部では旧大谷川が自由蛇行の過程で順次河道を南側に移動した痕跡が7本の明瞭な旧河道跡（S R 58・56・55・64・53・52・51）となって検出された。その結果、覆土中や河床に遺存する遺物も年代ごとの区分が可能となった。これに対し北半部は各時代の河道が同一地点に重複していたため遺物の伴出関係については今後の検討を待ちたい。

南半部で検出されたS R 58は旧大谷川の成立時期について考えるにあたり重要な地点でもあった。大谷川成立以前は各所に低湿地が広がっていたが、その痕跡がS R 56・58の基盤となっている茶褐色の腐植質粘土層によっても確認できる。S R 56・58周辺は宮川3区の低湿地S R 485における岸線の延長上にあたり、帯状の低湿地地形の存在が明らかとなる。つまり、S R 485の岸が帯状低湿地の右岸を形成し、宮川4区のM95・96グリッドの微高地が左岸となっているのである。初期の大谷川は水位の下降にともない、この低湿地が帯状の窪地となり、降雨時には水路となり、やがて1本の河川に成長した状況がうかがえる。この初期の大谷川がS R 58である。

2. 遺構各説

旧河道跡

S R 58 L95・M95・N95グリッドをほぼ西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は2m前後と狭い。延長は15m、河床最深部の標高は5.2mである。L95グリッドの北東部分で屈曲の痕跡がみられるがS R 51と連続する近世から昭和17年の旧河道によって攪乱をうけ、屈曲の方向は不明である。M95・N95グリッド内ではS R 56との交差もなく、左岸の一部に杭と横板による土止めも施されていた。河道内からは須恵器の坏身のほか、土師器坏・壺・壺形土器などが検出された。土器の特徴から古墳時代中期から後期初め頃と推定する。

S R 56 M94・N94グリッドを中心西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は5.3m、延長23mを測る。河床は平坦で標高は4.7mである。覆土は小豆大の小礫を主体とする粘土混りの砂礫層である。出土した遺物は土器・木製品・石製品・土製品など膨大な量であったが、以下主要な遺物について簡単にふれる。

古墳時代土師器 第33表に示したとおり点数では圧倒的多数を占める。総数302点は現地作成の実測図に記録され、しかも準完形品以上の点数である。またS R 55に流出した25点も本来S R 56に帰属すべきものと考えられる。総数302点のうち92%（278点）を坏・壺類が占めている。出土地点は第94図に示した。分布上の特色は、①坏・壺形土器は広範に分布するがM94グリッドの北東部分に濃密傾向がある。②坏・壺形土器以外の器種はN94グリッドに多くみられる。③河道中心軸より北側（左岸側）に集中して出土するなどである。

古墳時代須恵器（第95図） 24点が出土しているが須恵器と土師器との数量比は1対12.6となり量的には少ない。器種は坏が主体であり約80%（19点）を占める。つぎに罐が続く。壺は表では1点となっているが各所に破片が散乱しており個体数が増す可能性もある。須恵器の分布の中心はN94グリッドにある。須恵器は編年上、6世紀から7世紀第3四半期に位置づけられ、これをもってS R 56の年代とする。

人形木製品（第96図）10点が出土した。このうち出土地点の確実な7点を分布図（第94図）に示した。形態は短冊状の薄板の一端を削って圭頭に頭部をつくり、頭・肩部は三角形に切り欠き撫で肩とする。共通して手の表現はみられない。腰部は三角形に切り欠くものと表現されないものとがある。脚部は三

角形に切り欠くがその深さは一様ではない。全長は30cm前後が土体をなすが10cm代後半のものも3点含まれる。小型の人形は大型のそれと比較して形態がやや異なる。1点は頭頂部を水平につくり、他1点は脚を三角形に尖らせている。出土地点は、河道の中央付近と東側の2個所に分かれている。

馬形木製品（第96図）6点出土している。すべて鞍などの表現のない櫛馬である。横長の薄板を菱形または等脚台形につくり、上辺は三角形または弧状に切り欠き背を表現する。下辺は1個所を三角形に切り欠き頭部のみを表現する例と2個所を切り欠き頭と尾を表現するものがある。長さは13cm～18cmの範囲におさまる。出土地点は河道の中央付近と西側に分かれている。

刀形木製品（第96図）4点出土している。このうち3点が完形品であり分布図に示した。柄頭の形状は山形に削り出すものと長方形に削り出すものとがある。長さは22cm、29cm、57cmと不揃いである。出土地点は西側部、中央部、東側部にそれぞれ1点がみられた。

牽串（第96図）10点が出土している。大きさも形態もバラエティーがあるが、共通して切り込みや切り欠きをもたない。出土地点は河道の西側部分と中央部分にみられた。

そのほか木製品では横櫛5点、鎌の柄2点、横櫛1点、曲物5点、有頭棒2点、編錐2点が出土している。

動物形土製品 一般的に上馬と呼称されるものであるが、出土した土製品には特異な形態のものも含まれるためここでは動物形土製品とした。破片を含めて9点出土している。このうち8点は河道西側部分に集中していた。

石製丸玉 8点が出土しておりM94グリッドで4点、N94グリッドで4点と2個所に分かれている。

耳環 1点が東端部で出土した。

筋轡車 N94グリッドで4点出土している。

文字資料 木簡2点（5号木簡「相星五十戸」・「□□」、11号木簡「□□」）と墨書土器1点（「多麻呂」）が出土した。「相星五十戸」木簡は長さ13.5cm、幅2.2cm、厚さ0.35cmを測り、下部に1辺0.5cmの方形の穴があけられている。出土地点は河道中央部であり、しかも河床に密着した状態であった。S R 56がS R 55と交差するのは東端の基準杭Q94周辺だけであることから「相星五十戸」木簡が後代の混入品とはしがたい。「多麻呂」墨書の土器は奈良時代の須恵器であること、出土地点が河道の東端部でS R 55と交錯する部分であることから本来はS R 55に伴出すべきものであろう。

動物遺存体 獣骨および歯であるが馬が多い。獣骨・歯は祭祀遺物として広く認められるところである。
植物遺存体 桃の種が出土している。S R 56は特に多く2,044点が出土した。

石材 こぶし大の礫398個と人頭大以上の礫153個が検出された。これらの礫は、①河道内の覆土を構成する礫よりも著しく大きく自然流出の礫とは考えにくい、②大型の礫は割石がほとんどで人頭大程度に割り揃えた状況がうかがえる。③大型の砥石が混入しているなどの点から何らかの目的で収集・加工し、使用後に河川内に投棄したことは確実とみてよい。

S R 56内から出土した遺物は祭祀に用いた祭料と考えて大過はないが、遺物の出土位置を重ねてみると呪術性をもつ遺物が各種混在していることがわかる。これに対し水上7区のS X 801では馬形土製品と土師器、宮川3区S X 479でも馬形土製品と土師器、宮川6区S R 313内にみられたS X 335の土器と木製形代類というように形式化された整然さをもっている。出土須恵器は編年上100年余りの年代幅をもつことから祭祀遺物の性格については他調査のあり方をもふまえて後述することにする。

S R 55 基準杭94列に沿って西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は西側で9m、東側で3mと先細りの形態をみせる。西側での河床最深部標高は3.6m、東側では4.4mを測り、0.8mの比高差が認められる。つまり、わずか15mほどの河道で上流側が下流側よりも0.8m低いということになる。これは上流部の河床が安倍川の氾濫によって形成された砂礫層で、浸食しやすい地質条件であったこと

による。S R 55からは古墳時代後期の須恵器・土師器のはか奈良時代の須恵器が出土している。古墳時代の土器は S R 56からの混入と考えられることから S R 55は奈良時代の河道跡とする。

S R 55は遺物の量が少ない河道であったが東側の砂礫層より完全な形で鍬が1点検出された。重要な遺物であるので報告しておきたい。鍬はナスピ形着柄鍬と呼ばれている形式である。鉄製U字形鍬先を装着するものである。柄と身は蔓状植物により2個所で結束されている。柄部は78cmで握部分の直径は3.5 cmを測る。柄と着身部は一本で幹と枝を利用しておらず、身との合せ部分をやや削り落して装着を容易にしている。身は長さ37.5 cm、幅13.5 cm（残存長）を測る。結束部は2個所であるが1本の蔓によって結束している。

河道の年代から奈良時代の鍬とすべきかもしれないが、付近からは古墳時代後期の上師器も出土している。また水上7区および宮川4・5・6区の古墳時代後期の河道からは同形式の鍬を含めて多くの農具が出土している点も考えれば年代がさかのぼる可能性もある。

S R 54 N93・Q93グリッドを西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は5.5 mで延長13mを測る。河床最深部の標高は3.5 mである。覆土は暗灰色の砂質粘土であるが最下層に厚さ10cmほどの砂礫層をもち遺物の大半を包含している。出土遺物には灰釉陶器11点、墨書き土器10点、緑釉陶器1点、馬形土製品2点、斎串7点などがある。斎串の形態はS R 56と類似するものほか、切り欠きや切り込みをもつものがみられる。灰釉陶器は猿投窯で生産された製品が多く黒窯90号窯式から折戸53号窯式のものである。このことから10世紀代を中心とした時期の旧河道跡であると考える。またS R 54は宮川3区S R 486の下層と連続する。

S R 53 基準杭93列を中心に西から東に流れる旧河道である。確認面で幅8.1 m、延長13mを測る。河床最深部の標高は3.5 mである。暗灰色の砂質粘土を覆上にもつが最下層にわずかな砂礫層があり河床の遺物を被覆している。河床からは49個体以上の山茶碗が出土した。この中には9点の墨書き土器が含まれ、「大」・「丸」・「丸」といった宮川3区のS R 486と同一文字が書かれたものも4点ある。木製品では箸状木製品が17点出土している。これもS R 486と共に共通する。このようにS R 53は宮川3区のS R 486と連続する河道としてまちがいない。年代は平安時代末から鎌倉時代とした。

S R 52 Q92・P92グリッドを西から東に流れる旧河道跡である。確認面で幅8.4 m、延長12mを測る。河床最深部の標高は3.6 mである。暗青灰色の粘土によって厚く覆われている。動物遺存体が出土したが遺物の総量はきわめて少ない。S R 53とS R 51との関連から中世の河道と推定した。

S R 52は宮川3区のS R 487と連続するが、S R 487の河床最深部標高は2.4 mでありS R 52よりも1.2 mあまり低い。これはS R 487が蛇行の攻撃斜面側の頂点で淵に相当し、S R 52が漸にあたるためにあり河川の一般的特徴にも合致する。

S R 51 調査区の南端部を西から東に流れる旧河道跡である。確認面で幅11.5 m、延長11m、深さ1.6 mを測る。河床最深部標高は4.2 mである。赤褐色の砂礫が覆土となっている。覆土中からは下駄、桶材などの木製品のはか近世陶磁器片も出土している。S R 51は昭和59年の地籍図にあらわれる大谷川河道と一致する。したがって近世から昭和17年の改修にいたるまでの河道である。

3. まとめ

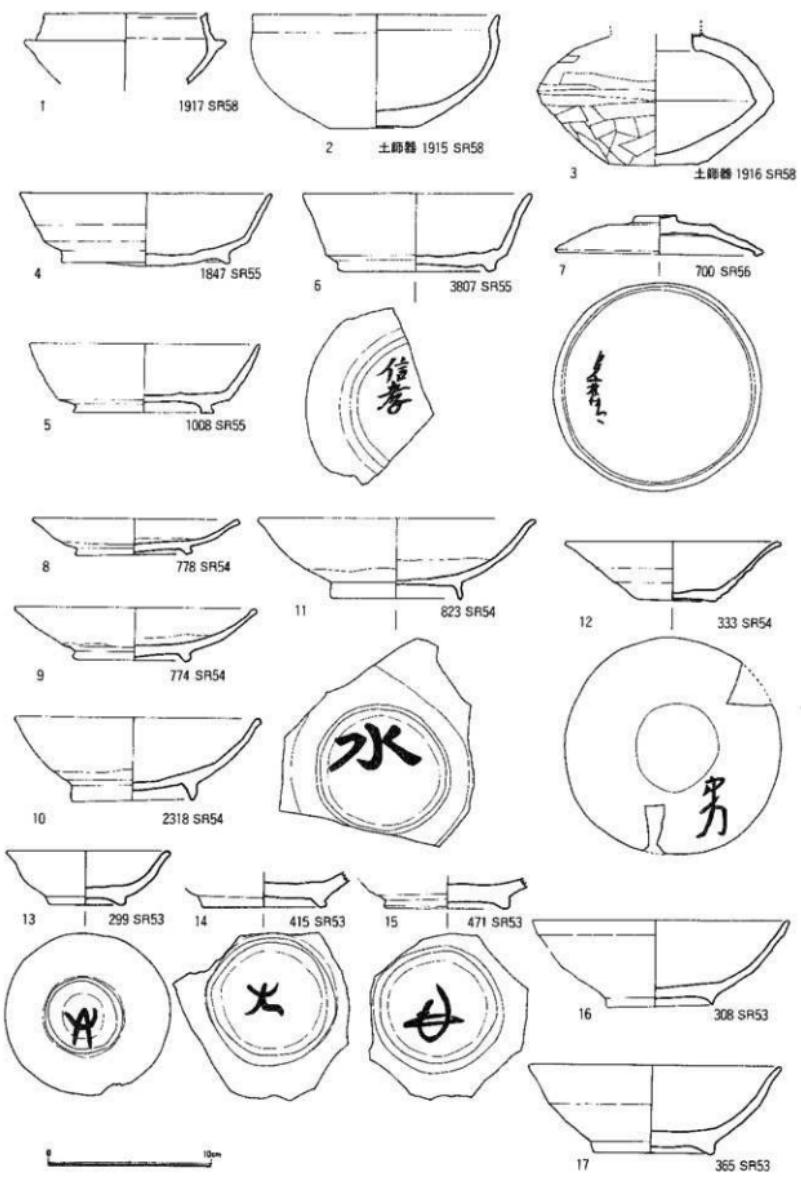
宮川4区の最大の成果は古墳時代中期から昭和17年までの旧河道の変遷を確かめることができたことがある。7本の旧河道はそれぞれ特徴に富む遺物を包含しているが、本遺跡を含めて一般に旧河道の調査は新旧の遺物が混在することが多く編年観の確立されたもの以外は年代的位置づけが困難である場合がほとんどである。河道内の遺物は祭祀と密接なかかわりをもつため、伴出関係がきわめて重要な課題となるが、この観点から宮川4区での遺物をみると以下のことを指摘することができる。

① 古墳時代中期において河川に投棄された遺物は土器のみであり、しかも器種の偏重は少ない。

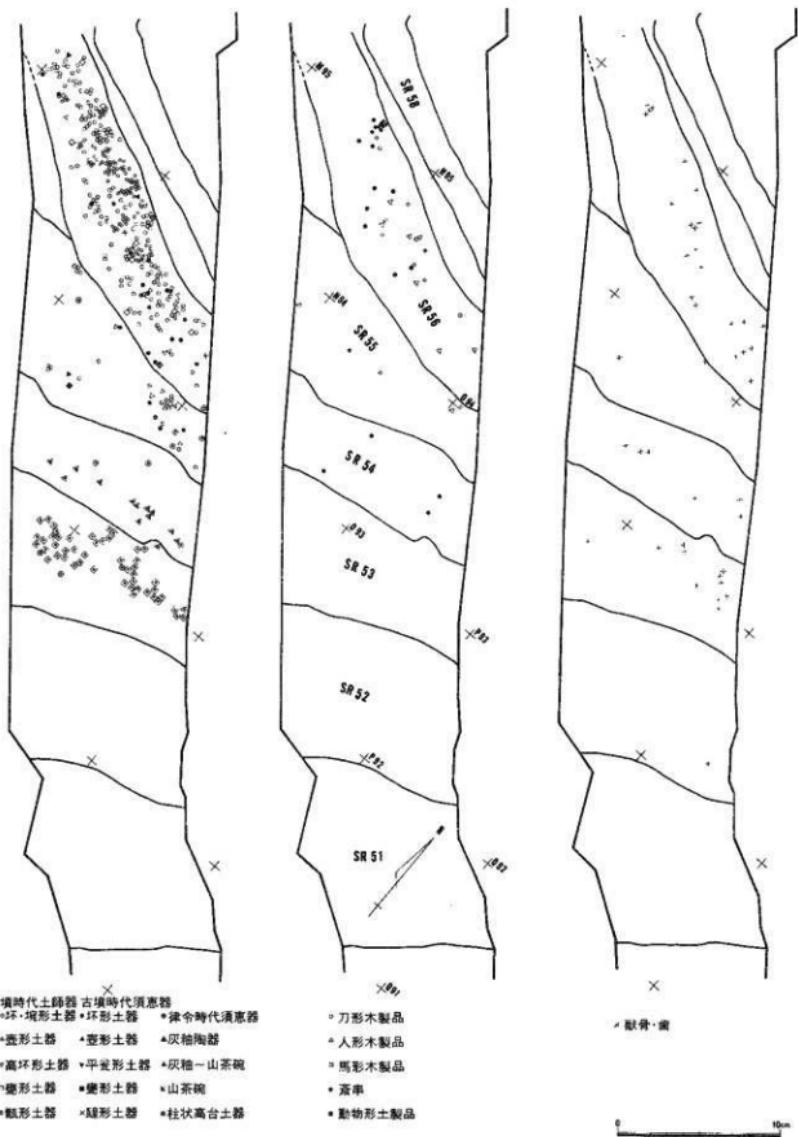
- ② 古墳時代後期における祭祀遺物は土製形代と木製形式および土器を主体とするが、獸骨・玉類・農工具・容器・紡織具などが渾然一体となって投棄される。
- ③ 7世紀末から8世紀前半代の遺物はきわめて少なく祭祀の色彩が消滅傾向を示す。
- ④ 奈良時代後半になると須恵器の投棄が若干みられ人名が墨書きされる場合がある。
- ⑤ 平安時代になると猿投窓の灰釉陶器が検出されると同時に墨書き土器・土製形代（馬形土製品）・斎串なども投棄され、形態的にみても古墳時代後期のものとは差異が認められる。
- ⑥ 平安時代末から鎌倉時代になると墨書き土器の内容が記号的なものへと変化する。また斎串も棒状、箸状と変化をみせる。伴出遺物に武器類がみられる点が注目される。
- ⑦ 中世になると居住域が河道から離れたためか、河川内への投棄はほとんど行なわれていない。
これらの点は宮川4区でのあり方であるが他調査と共通する内容も多い。

第32表 宮川3・4区溝状遺構一覧表

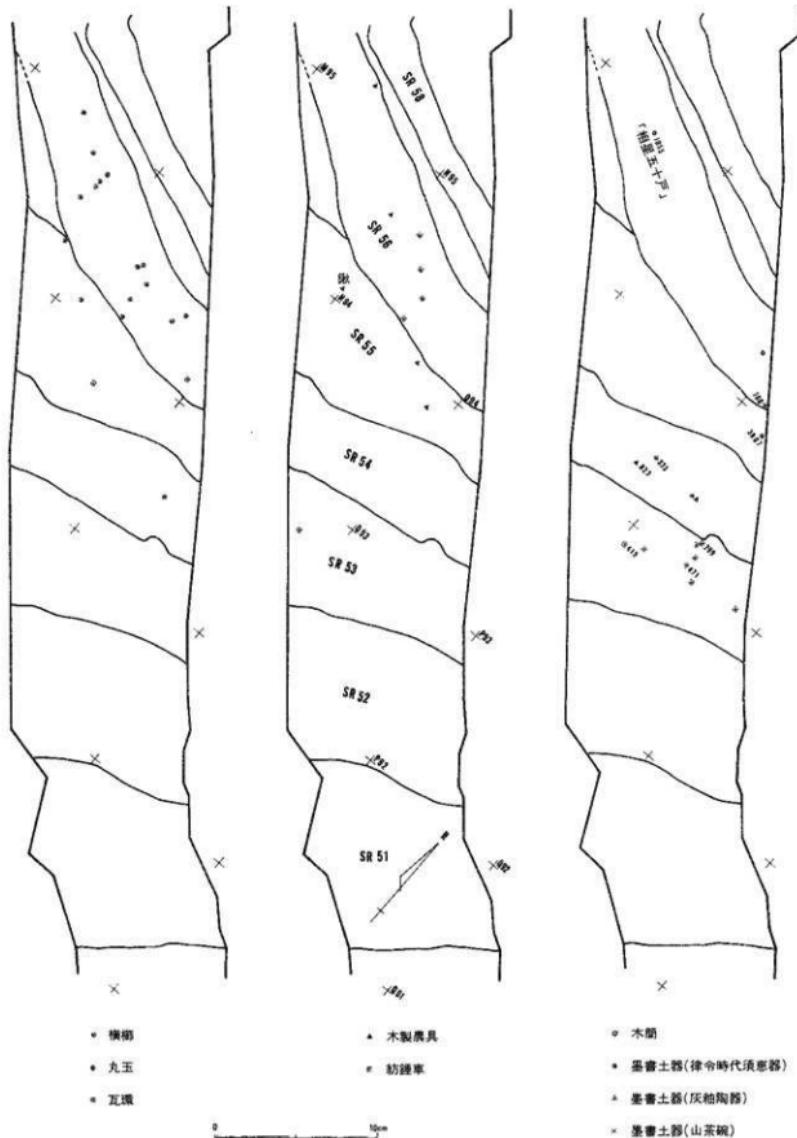
遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面高	特記事項
<宮川3区>						
S D 145	I 95	16.00	1.90	1.00	5.93	平安時代末
S D 146	I 95	10.20	1.90	0.17	5.85	
S D 162	J 94	2.01	0.30	0.05	6.26	
S D 175	J 94	2.40	0.39	0.15	6.37	平安時代
S D 176	I 94	5.42	0.41	0.13	6.37	
S D 181	N . Y 89	12.30	1.95	0.90	5.91	古墳時代(中～後期)
S D 182	M 90	21.00	2.25	1.08	5.83	平安時代末～鎌倉時代
S D 187	J 94	1.50	0.47	0.14	6.34	
S D 188	J 94	2.17	0.63	0.53	6.29	奈良時代
S D 192	J 94	2.56	0.52	0.11	6.31	
S D 194	L 90	5.02	1.40	0.28	6.04	
S D 428	K 92	5.76	0.52	0.10	6.32	
S D 450	N . O 89	8.42	0.35	0.03	5.90	
S D 458	H 96	(5.00)	1.00	0.25	5.87	
S D 476	G 97	9.82	0.42	0.12	5.88	
<宮川4区>						
S D 93	M 96	(5.48)	0.96	0.17	5.78	
S D 94	M 95		1.10	0.03	5.66	
S D 95	M 95	1.62	0.32	0.11	5.86	



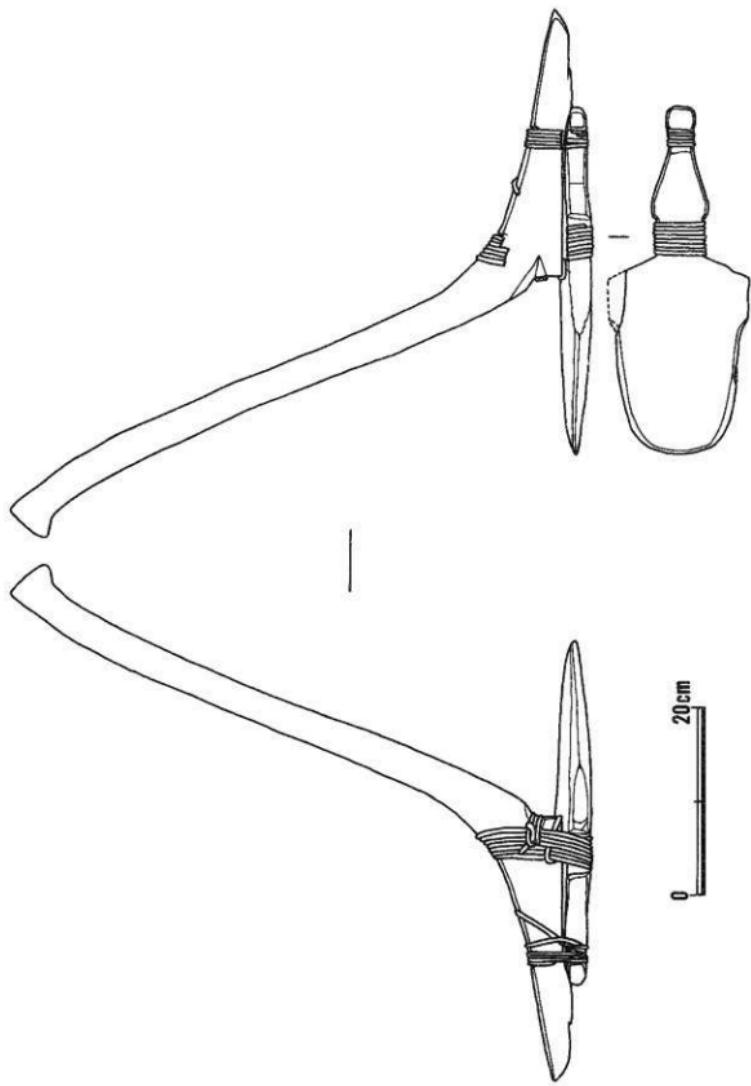
第90図 宮川4区 S R58・55・54・53出土土器実測図



第91図 宮川4区旧河道内遺物分布模式図

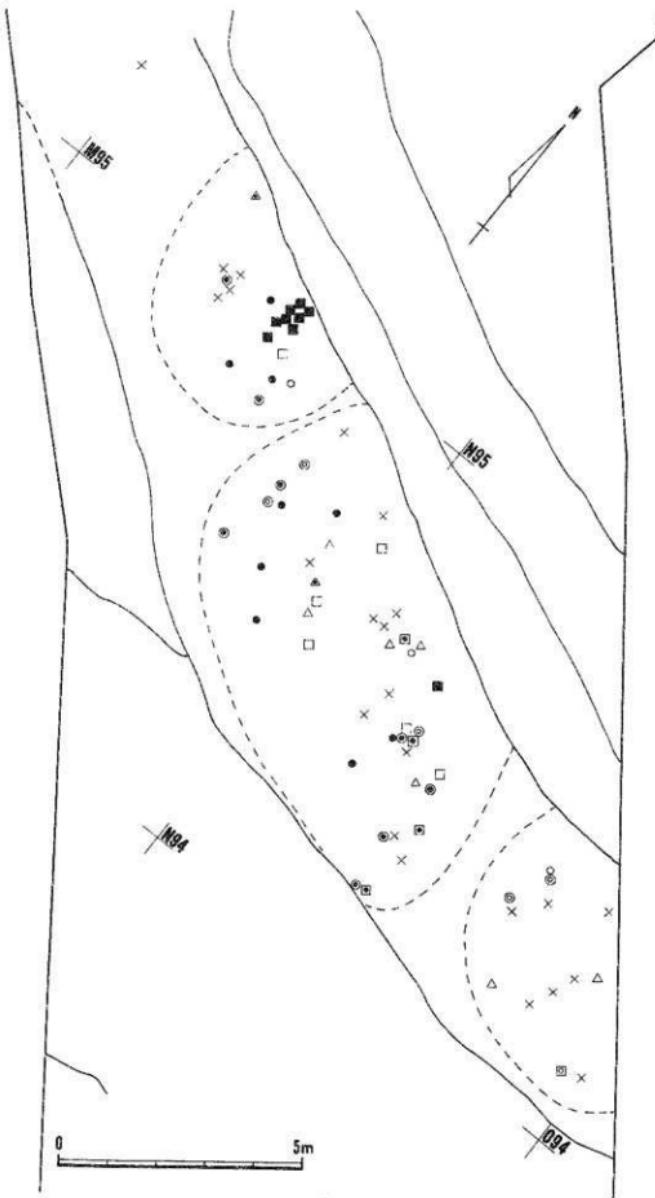


第92図 宮川4区旧河道内遺物分布模式図

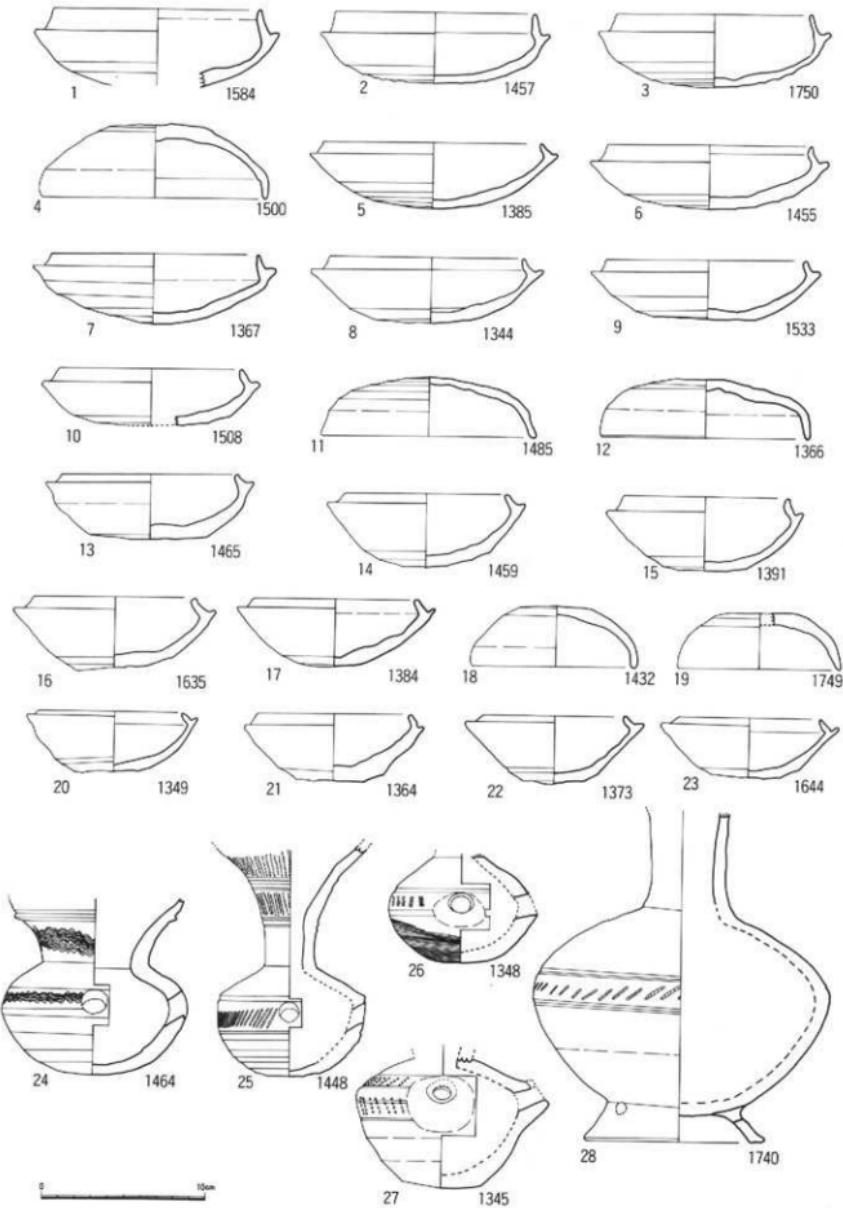


第93図 宮川4区8R55出土鉢実測図

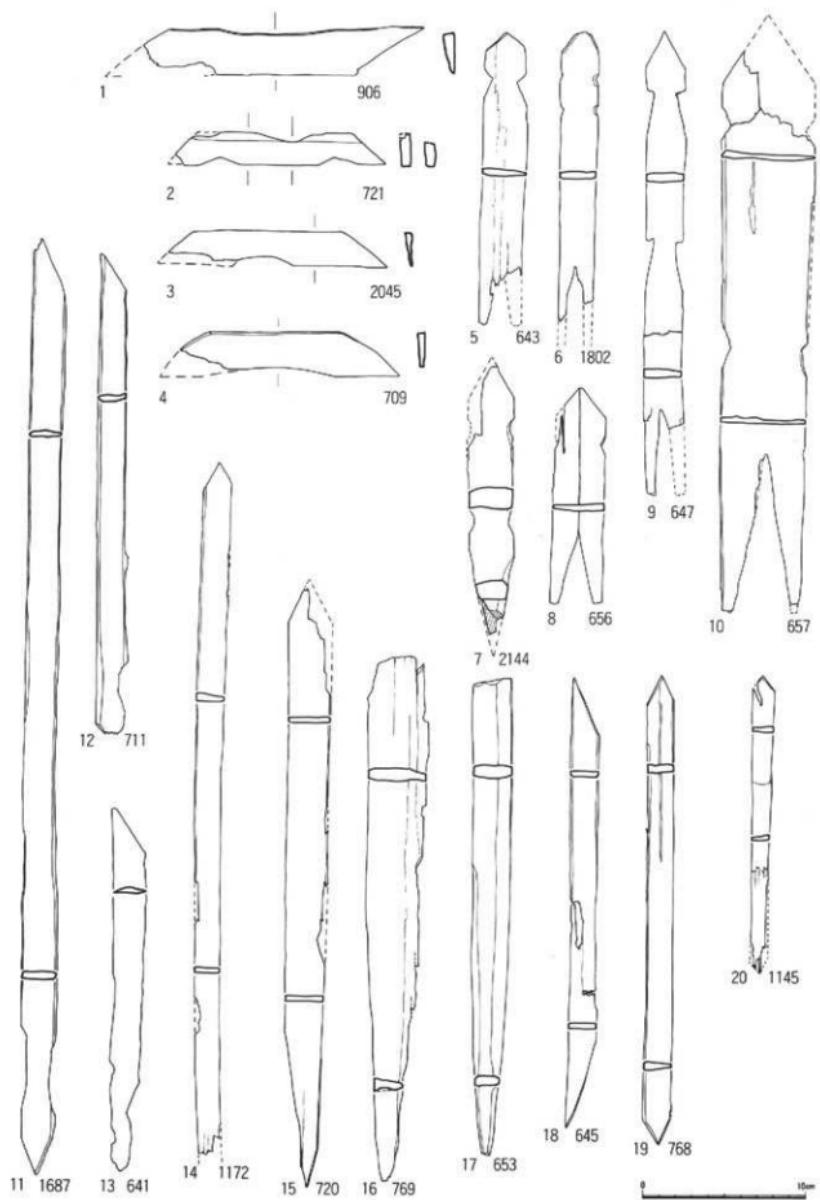
- 刀形木製品
- △ 人形木製品
- 馬形木製品
- 茄斗
- 動物形土製品
- × 紋符・文
- ◎ 横桙
- ◎ 丸玉
- 回 耳環
- A 銀片
- 紗錠



第94図 宮川4区S R56遺物分布模式図



第95図 宮川4区S R56出土須恵器実測図



第96図 宮川4区S R56出土木製品実測図

第33表 宮川4区(南部)主要遺物一覧表

遺物	遺構					合計
	S R 56	S R 55	S R 54	S R 53	S R 52	
古土師器時代	环・塊	278	18			296
	壺	10	2			12
	甌	9	1			10
	高环	3	4			7
	瓶	2				2
古須恵器時代	环	19	5			24
	壺	1				1
	甌		1			1
	平瓶	1	1			2
	瓶	3	1			4
律令時代須恵器	1	4	3			8
灰釉陶器			11	1		12
灰釉~山茶碗			1	1		2
山茶碗				49		49
その他				3		3
木製品	人形	10	2		2	14
	刀形	4				4
	馬形	6	3			9
	斎串	10		7	1	18
	箸状(斎串)				17	17
品	櫛	5	1			6
	農工具	3	5			8
	その他	16	8	7	1	32
動物形土製品	9	1	2			12
手捏土器	11	4	1			16
丸玉	8		1			9
耳環	1	1				2
紡錘車	4			1		5
短刀				1		1
鉄鎌				1		1
墨書き土器	1	4	10	9		24
木簡	2		1			3
動物遺存体	48	12	22	19	12	113
植物遺存体(桃の種)	2,044	81	202		6	2,333

第34表 宮川4区小穴一覧表

造構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長短比 (長径-1)	造構面 標 高	特記事項
S P 61	N94	0.80	0.68	0.39	0.85	4.73	
S P 62	M96	0.95	0.59	0.42	0.62	5.79	
S P 63	M96	(1.16)	0.81	0.09	(0.70)	5.71	
S P 64	M96	0.80	0.62	0.14	0.78	5.77	
S P 65	M96	0.70	0.55	0.19	0.79	5.76	
S P 66	M95	0.74	0.65	0.21	0.88	5.76	
S P 67	M95	0.69	0.64	0.13	0.93	5.86	
S P 68	M95	0.68	0.57	0.32	0.84	5.81	
S P 69	M96	0.39	0.33	0.30	0.85	5.75	
S P 70	M95	0.54	0.45	0.17	0.83	5.78	
S P 71	M95	(0.68)	0.45	0.19	(0.66)	5.81	
S P 72	M96	0.70	0.57	0.10	0.81	5.79	
S P 73	M96	0.49	0.43	0.35	0.88	5.77	
S P 74	M96	0.34	0.31	0.11	0.91	5.84	
S P 75	M95	0.44	0.42	0.07	0.95	5.75	
S P 76	M95	0.24	0.21	0.06	0.88	5.81	
S P 77	M95	0.77	0.73	0.32	0.95	5.85	
S P 78	M95	0.30	0.22	0.13	0.73	5.88	
S P 79	M95	0.23	0.21	0.40	0.91	5.74	
S P 80	M95	0.30	0.27	0.14	0.90	5.76	
S P 81	M96	0.61	0.42	0.12	0.69	5.75	
S P 82	M96	0.59	0.44	0.29	0.75	5.71	
S P 83	M96	0.44	0.38	0.25	0.86	5.77	
S P 84	L96	0.33	0.30	0.29	0.91	5.80	
S P 85	L96	0.53	0.49	0.35	0.92	5.84	
S P 86	L96	0.72	0.52	0.36	0.72	5.83	
S P 87	L96	0.48	0.45	0.21	0.94	5.87	
S P 88	L96	0.24	0.22	0.28	0.92	5.88	
S P 89	L96	0.58	0.53	0.22	0.91	5.87	
S P 90	L96	0.55	0.44	0.25	0.80	5.88	
S P 91	M96	0.33	0.19	0.30	0.58	5.78	
S P 92	L97	--	--	0.2	--	5.85	

宮川 5 区 (第97図)

1. 概 要

宮川 5 区は、河口起点より 1,407m 上流に位置し、現大谷川右岸部にあたる。107列以北と調査区東側に旧河跡が 3 本検出され、その他の部分は微高地になっていた。微高地部分では奈良時代～平安時代の遺構面が一面確認され、溝状遺構、堀立柱建物跡、井戸状遺構、小穴群が検出された。旧河道部分では、水辺の祭祀に関連すると考えられる遺構が 2 個所検出された。

2. 遺構各説

北部溝状遺構群

S D 207 B 105 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 6.88m、幅は最大で 2.60m、深さは 0.21m を測る。年代は遺物から平安時代とする。

S D 220 B 104・105 グリッドで検出された西から東へ流れる、東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 7.32m、幅は最大で 1.07m、深さは 0.42m を測る。年代は遺物から平安時代とする。S D 207・S D 220 はともに S D 209・S D 210 を破壊して開削されている。

S D 209 B 104 グリッドから A 106 グリッドまで南から北へ流れる南北方向の溝状遺構である。確認面での延長は 25.1m、幅は最大で 0.92m、深さは 0.59m を測る。年代は遺物から平安時代とする。

S D 210 B 104・B 105 グリッドで検出された南から北へ流れる南北方向の溝状遺構である。確認面での延長は 14.36m、幅は最大で 1.21m、深さは 0.36m を測る。年代は不明である。

S D 291 C 103・104 グリッドで検出された南から北へ流れる南北方向の溝状遺構である。確認面での延長は 14.1m、幅は最大で 0.62m、深さは 0.38m を測る。年代は不明である。

南部溝状遺構群 (岡版84-1)

S D 270 C 101・D 101 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 12.45m、幅は最大で 0.38m、深さは 0.23m を測る。覆土は暗茶褐色粘土である。S D 242 によって一部破壊されている。年代は遺物から奈良時代とする。

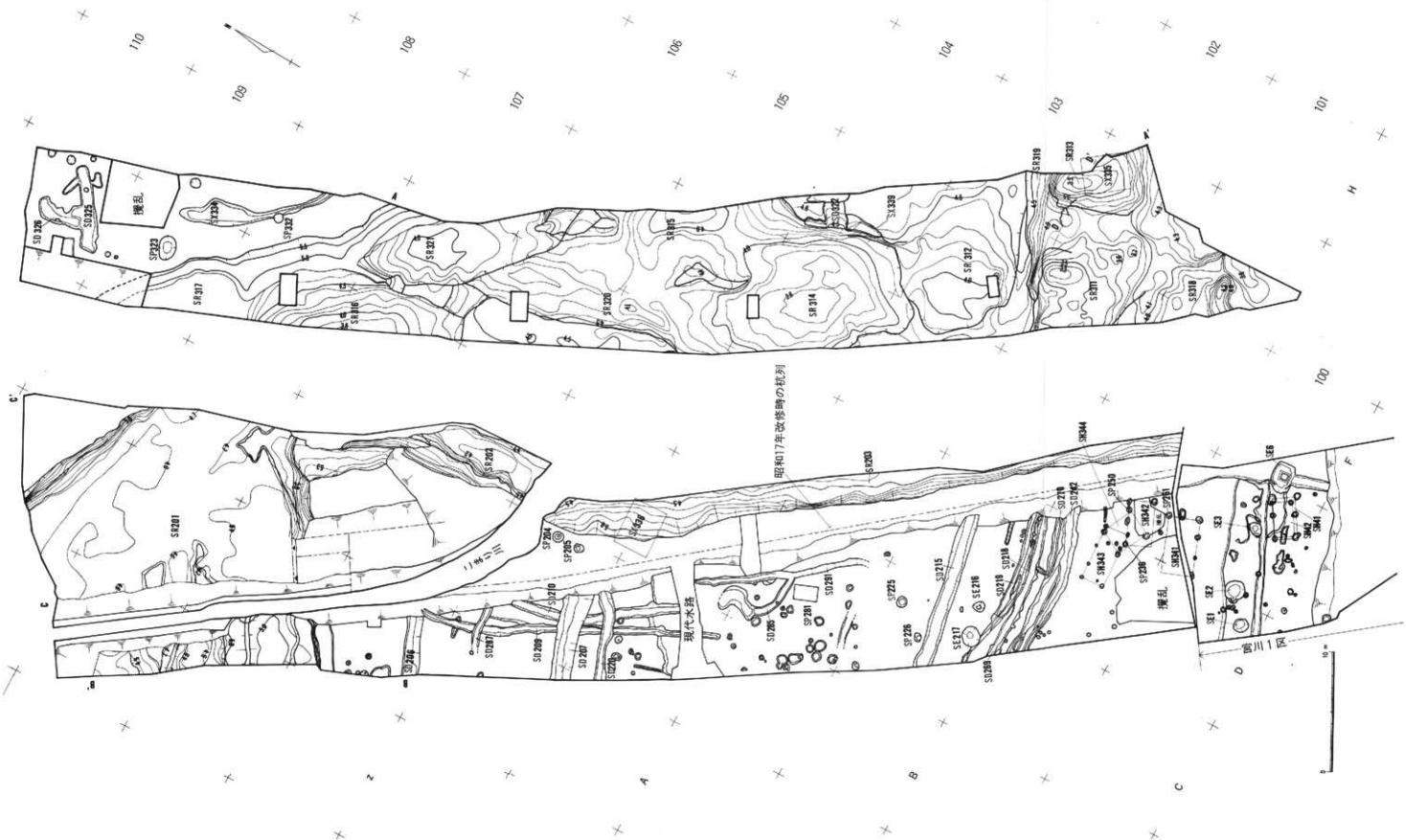
S D 269 C 101・D 101 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 12.42m、幅は最大で 0.82m、深さは 0.18m を測る。覆土は赤褐色粘土である。断面観察により赤褐色粘土は S D 270 の覆土を覆っており、さらに奈良時代の遺物を判出した S D 242 の覆土の褐灰色粘土によって覆われているので、S D 269 の年代は奈良時代とする。

S D 242 C 101 グリッドから E 101 グリッドまで西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 13.12m、幅は最大で 1.28m、深さは 0.46m を測る。覆土は褐灰色粘土である。覆土中から須恵器片が多数出土し、これらの特徴から年代は奈良時代とする。なお S D 242 は S D 270 を一部破壊して開削されている。

S D 219 C 102・D 102 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 9.48m、幅は最大で 0.54m、深さは 0.18m を測る。覆土は褐灰色粘土である。覆土中から手握土器 2 個と須恵器を検出した。これらにより、年代は奈良時代とする。また S D 219 の一部は S E 217 によって破壊されている。

S D 218 D 101 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は 13.64m、幅は最大で 0.52m、深さは 0.44m を測る。覆土は褐灰色粘土である。年代は遺物から奈良時代とする。

以上の 5 本の溝状遺構はいずれも並行して検出された。断面での覆土の切り合い関係の観察によってまず S D 270、次に S D 269 が、最後に S D 242・S D 219・S D 218 が開削されるという順序であつ



第97図 宮川5・6区 全体図

たと考えられる。

S D 215 C 102・D 102 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状造構である。確認面での延長は、12.82m、上端の幅は1.25m、底面の幅は0.90m、深さは0.45mを測る。掘り方は逆台形の断面形をもち、底面は平坦である。覆土は下から黒灰色粘土、灰緑色粘土、灰黒色粘土が自然堆積された状態で検出された。覆土中の遺物の検出はなかったが、上面を奈良時代の包含層である褐灰色粘土が覆っているため年代は奈良時代以前と考えられる。

前記のS D 270・S D 269・S D 242・S D 219・S D 218の溝底は流水の影響により浸食を受けているのに対して、S D 215はそれが見られなかった。

井戸状造構（図版84）

S E 217 (第121図) D 102 グリッドで検出された井戸状造構である。確認面で長径は1.55m、短径は1.29mを測る円形プランを持つ素掘りの井戸である。掘り方は上面プランの中心よりやや北側にずらして0.90mほどの深さで擂鉢状に掘り込まれている。底面は直径0.38mの円形で平坦面となっている。確認面から0.5mほどから下にある透水層にまで掘り込まれており、井戸状造構とした。井戸廃棄は断面の確認により、自然堆積により埋積されたと考えられる。覆土の茶褐色粘土層(1層)から、多数の須恵器片が検出され、これらにより年代は奈良時代とする。なお、S E 217はS D 219の一部を破壊して掘削されている。

S E 216 (第121図) D 102 グリッドで検出された木組の枠をもつ井戸状造構である。確認面で長径は0.91m、短径0.81mを測る不整円形のプランを持ち、深さは0.82mで透水層に掘り込まれており、井戸状造構とした。掘り方は、上段を0.32mの深さまで擂鉢状に掘り下げ、さらに下段を一辺0.40mの正方形プランから垂直に0.40m掘り込み、その中に縦約40cm、幅約29cmの割り板4枚を井戸枠としてはめ込み、井戸枠の外側は粘土で裏ごめされていた。さらに井戸枠の下端から一辺0.30mの正方形プランで垂直に0.11m掘り下げられていた。覆土から手捏土器1点をはじめ、須恵器片、土師器片が検出され、これらにより年代は奈良時代とする。

掘立柱建物群（第98図）

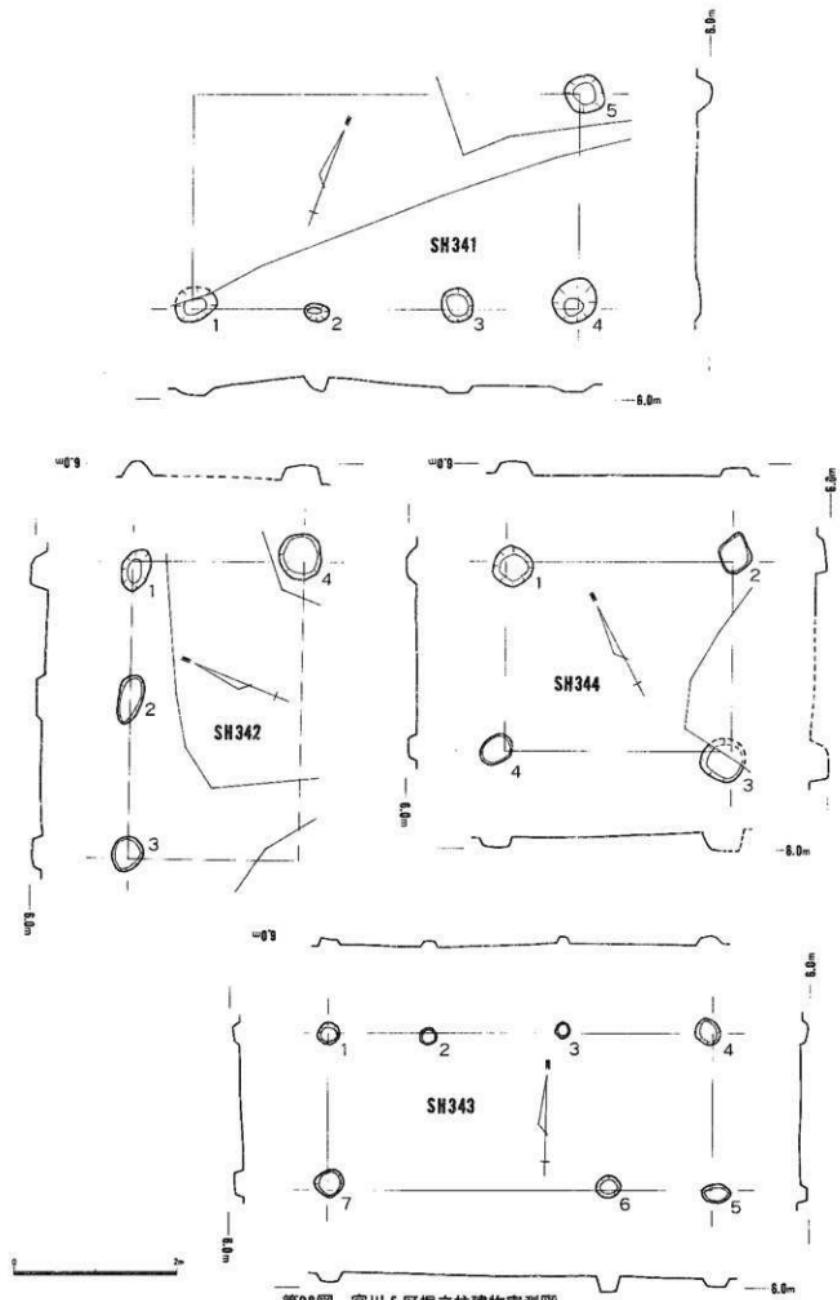
S H 341 D 100・E 100・E 101 グリッドで検出された桁行3間、梁間1間の掘立柱建物である。桁行4.76m、梁間2.64mを測る。平側の柱間寸法は等間隔とならず柱穴1と2、3と4の間がともに1.54m、柱穴2と3の間が1.70mを測る。柱穴の掘り方は確認面でプランがほぼ円形、径24~56cm、深さ10~20cmであった。覆土は褐灰色粘土であり、年代は奈良時代とする。なおS H 341の柱穴1、2、3、4は昭和58年度に調査の行なわれた宮川1区で検出されたS P38、S P39、S P45、S P40である。またS H 341の北西部は搅乱により破壊されていた。

S H 342 E 101 グリッドで検出された桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。桁行3.66m、梁間2.10mを測る。平側の柱間寸法は、等間隔とはならず柱穴1と2の間が1.68m、柱穴2と3の間が1.98mを測る。柱穴の掘り方は確認面でプランがほぼ円形(柱穴2は長円形)、径30~56cm、深さ10~22cmであった。覆土は赤褐色粘土であり、年代は奈良時代とする。なお南西部が搅乱により破壊されていた。

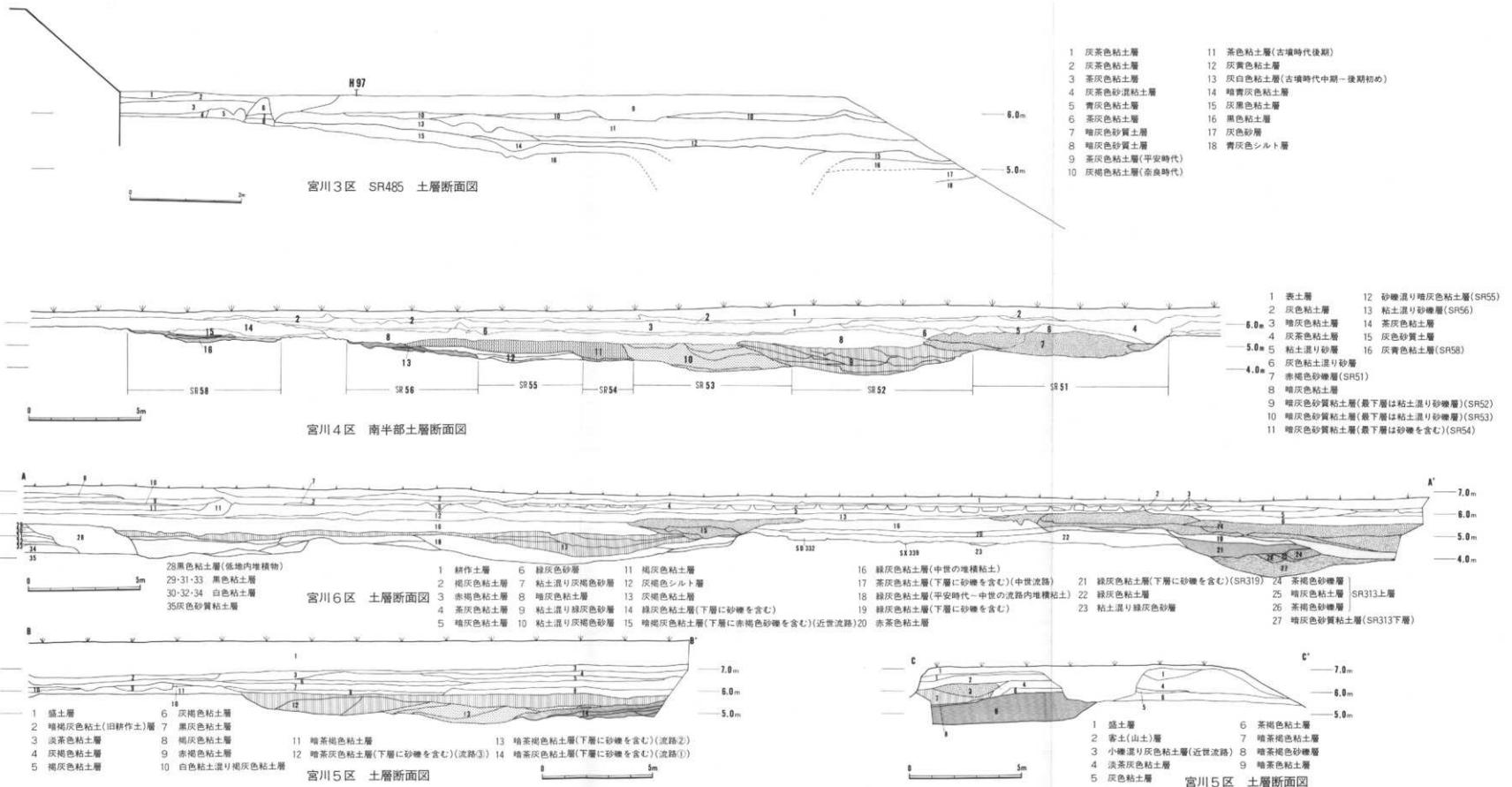
S H 343 D 101・E 101 グリッドで検出された桁行3間、梁間1間の掘立柱建物である。桁行4.74m、梁間19.4mを測る。平側の柱間寸法は、等間隔とはならない。柱穴の掘り方は、確認面でプランがほぼ円形、径20~36cm、深さ10~20cmであった。覆土は赤褐色粘土であり、年代は奈良時代とする。

S H 344 D 101・E 101 グリッドで検出された桁行1間、梁間1間の掘立柱建物である。桁行2.80m、梁間2.32mを測る。柱穴の掘り方は確認面ではほぼ円形プラン、径33~53cm、深さ10~22cmであった。覆土は黄褐色粘土であり、柱穴2から出土した灰釉陶器片から年代は平安時代とする。

以上の4棟の掘立柱建物のうち奈良時代のS H 341とS H 342は、1.15mの間隔を置きほぼ並行してい



第98図 宮川5区据立柱建物実測図



第99図 宮川地区土層図

る。また同じく奈良時代のSH342とSH343は一部が重複しており、長軸も21.5°のずれをみせている。

旧河道跡（図版85）

S R 201（第99図、第100図、第101図、第102図）Z 109・Z 108・Z 107・A 106 グリッドからB 108 グリッド方向に検出された旧河道跡である。確認面での幅は最大で28.6m、延長は24.4mである。河床は平坦で標高は4.60mを測る。

調査区の西壁と東壁の土層断面を検討するとZ 109・Z 108 グリッド方面からB 108 グリッド方向へ流れたと推定される流路①。流路①の右岸を切ってZ 107 グリッドからB 108 グリッド方向へ流れたと推定される流路②。流路②の右岸を切ってZ 107・A 106 グリッド方面からB 108 グリッド方向へ流れたと推定される流路③。以上の3本の流路がS R 201を形成していたことが確認できる。

覆土中からの遺物の出土状況はA 108 グリッド北東部分とB 108 グリッド北西部分に集中していた。人頭大の罐群もこの場所に集中して検出された。また52本の杭が検出され、そのうち16本ほどは、間隔と方向に規則性をもち、杭の太さも25cmほどで一定して、あるいは橋桁かといえる状況が確認できた。これをS X 337とする。

土器類では、古墳時代後期・奈良時代の須恵器、平安時代の灰釉陶器が大量の土師器片とともに混在して確認された。その中で注目すべきは、墨書き土器5点の出土である。「河カ」の墨書きのある手付小瓶（129）（図版86-2）は猿投窯黒笛14号窯の産であり「正」の墨書きのある灰釉皿（29）は折戸53号窯式のものに比定され、「仁」の墨書きのある灰釉碗（184）は東山72号窯式のものに比定される。

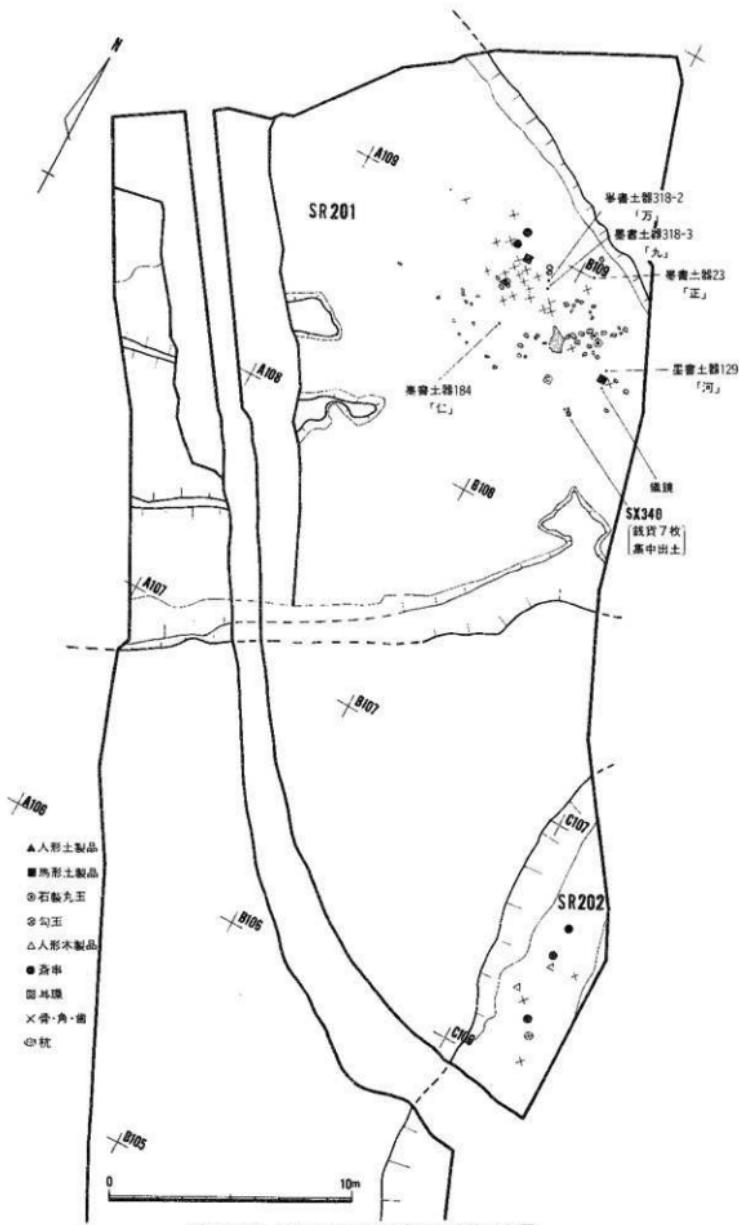
その他の主要遺物としては、馬形土製品が2点、人形土製品1点、獸骨22点、斎串2点、石製丸玉2点、耳環1点、素文鏡1点他が出土している。さらにB 108 グリッドの南西部では鉄貨が疊の間から集中出土した。これをS X 340とした（図版86-3）。開元通宝・至道元宝・景德元宝・祥符元宝・元豐通宝・元符通宝・政和通宝の7枚である。初鑄年代は開元通宝の612年または845年から政和通宝の1111年までのものであり、出土状況から一括投棄されたものと考えられ、年代は12世紀以降と考えられる。

S R 201は、年代幅の大きい旧河道跡であり、同一面での検出状況ではあるが、A 108・B 108 グリッドの出土状況をみると、北部より南部に年代の新しい遺物が多く検出されており、大むね流路が北から南へ変遷したことが推定される。

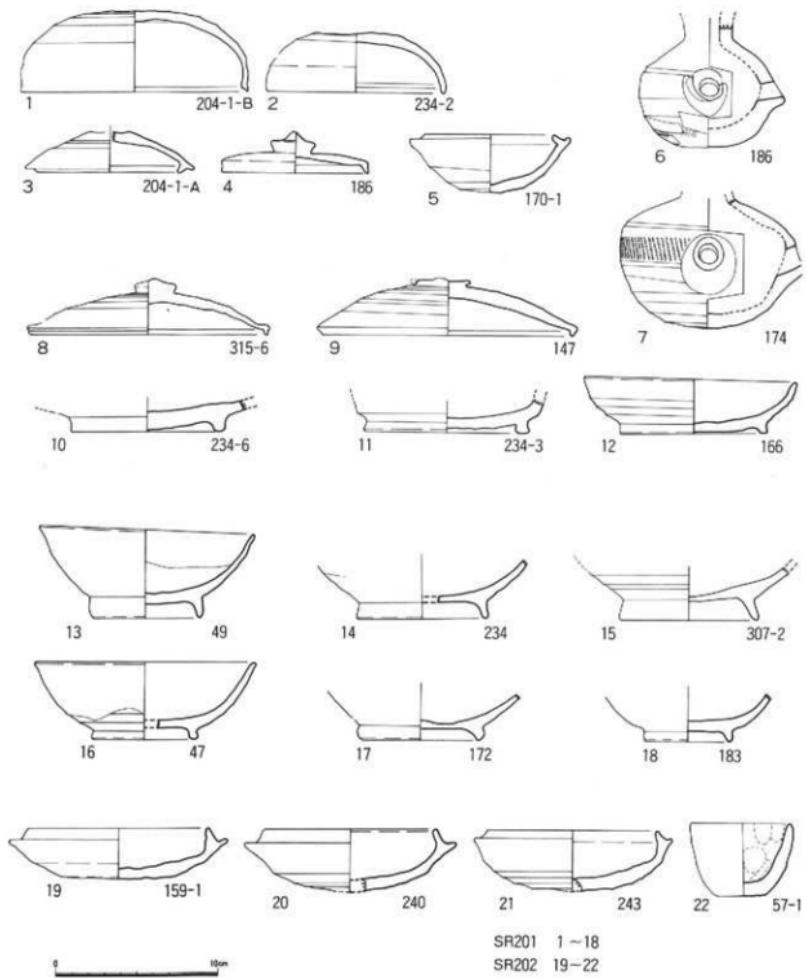
土層断面から確認された流路①は、宮川5区北端に接する稻妻1区の調査結果からも、古墳時代後期の流路とすることができます。また流路③は、A 107 グリッドから青磁片が出土しており、中世の流路と考えられる。なお、近世流路は、宮川6区北壁断面図の疊混り灰色粘土層（3層）であることは1876（明治9）年の地籍図との照応でも確認できた。

S R 202（第97図、第101図、図版86-3・4）C 108 グリッドからC 104 グリッドにかけて西側に湾曲しながら、北から南へ流れる旧河道跡である。確認面での幅は最大で4.48m、延長は28.65m、河床は平坦で最深部標高4.12mを測る。検出された須恵器（第102図）から年代は、7世紀前半と推定できる。これらと共伴する主要遺物として獸骨3点、斎串3点、人形木製品2点、石製勾玉1点他と大量の桃の種が検出された。

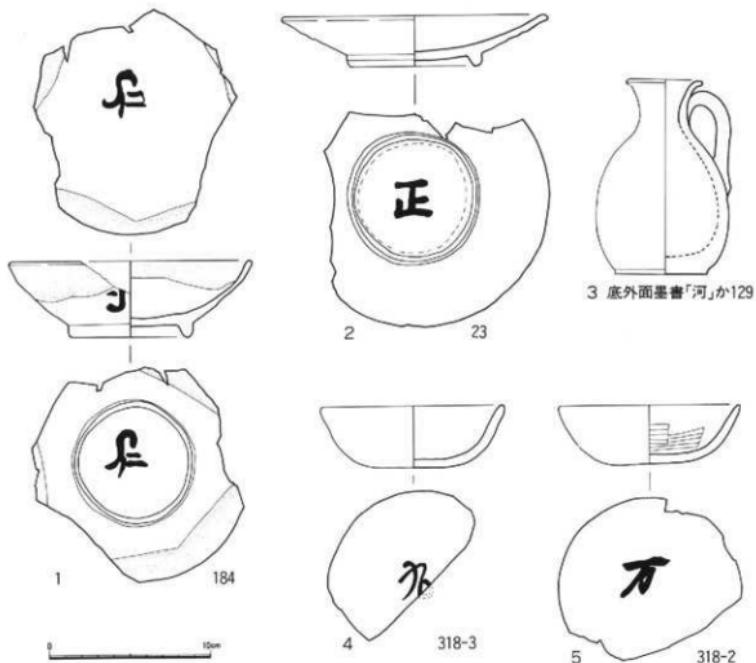
S X 336（第103図、第104図、図版87）C 105・C 104で検出された遺物集中部である。検出面は、S R 202の右岸部にあたり標高4.70～5.20mを測る緩斜面であった。基準杭C 105より東3.15mの地点付近を中心とした1.8m×1.5mほどの範囲から木製釘1点ほか加工木片・土師器の壺形土器2点、壺形土器の完形品16点（第104図9～24）、須恵器の壺形土器の完形品8点（第104図1～8）が一括出土した。出土状況をみると、長さ35cm、幅16cmの疊の北側に隣接して5個の壺形土器が円弧状に並んでおり、その延長線上に10～20cm間隔で4点の壺形土器が検出され、全体として9点の壺形土器が直径65



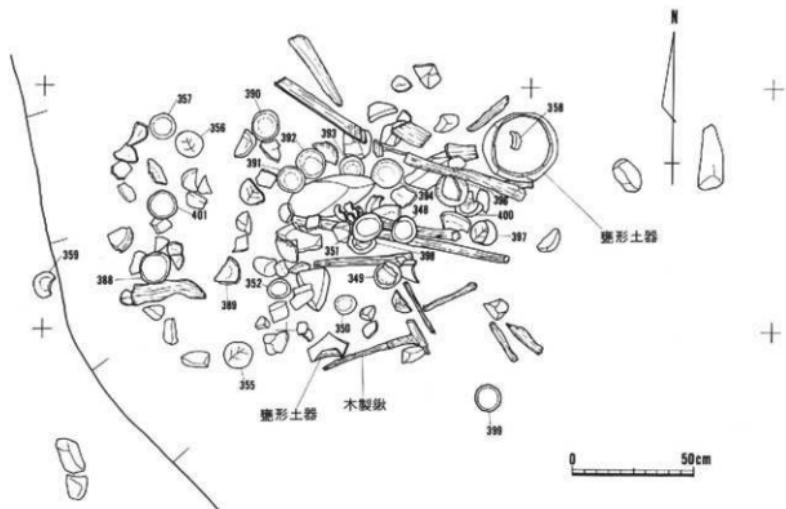
第100図 宮川5区旧河道内主要遺物分布図



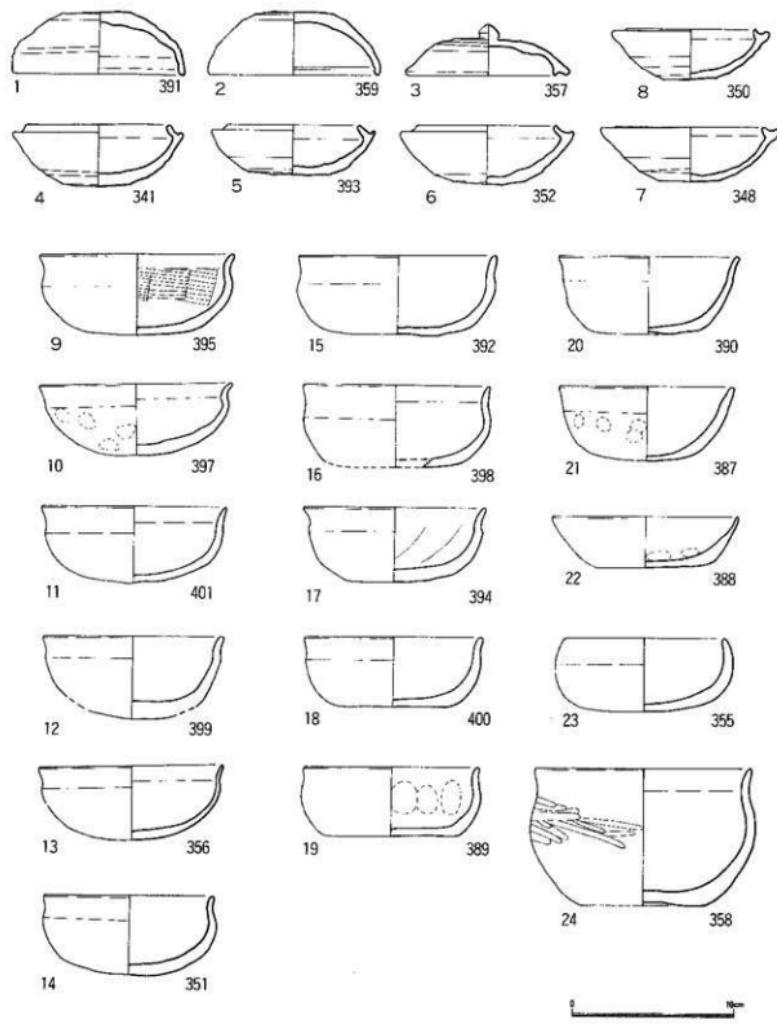
第101図 宮川5区SR201・202出土土器実測図



第102図 宮川5区S R 201出土墨書土器実測図



第103図 宮川5区S X 336実測図



第104図 宮川5区S X 336出土土器実測図

cmの円周上に位置していた。しかもその内7点が底を下に向かた状態で検出された。この円弧の外側には北東32cmほど離れて壺形土器1点、南15cmほど離れて鉢1点が検出された。S X 335の立地するS R 202の右岸斜面で流れが常時あるのは4.50m付近までであり、常に流れの及ばない川岸にあたる。しかも土圧で真上から押しつぶされた壺形土器の検出や、ほぼ完形品のまま安定した状態で出土している壺形土器群は、原位置をほとんど動いていないと考えて良いと思われる。さらに壺形土器の円弧状の検出はある種の配置性をうかがわせるものである。木製鉢も共存していることも考えると、S X 336の出土状況は何らかの意味で祭祀に関わるものとできよう。年代は出土遺物から7世紀後半とする。

S R 203 C 104からE 101まで延長約38mにわたって検出された昭和17年改修時の流路である。右岸斜面部分から西に1.5～2mほどの地点に杭列が岸に沿って南北方向に検出された。

3. 小 結

本調査区の成果は奈良時代・平安時代の居住域を考える上で関連する遺構を多く検出したことと、古墳時代後期の時代を限定できる流路と祭祀遺構を確認したことである。以下にそれらの特徴を指摘したい。
①宮川5区北部の微高地から平安時代の溝状遺構群が検出されたことは、S R 201で灰釉陶器を多数検出し、平安時代中・後期の墨書き土器の検出、平安時代末期の錢貨集中出土とあわせて、同地域に平安時代の居住域があったことを想定させるものである。

②宮川5区南部の微高地から奈良時代の遺構が多く検出された。3棟の掘立柱建物の中で南側の2棟は宮川1区のS H41・S H42とほぼ長軸が並行し、同時代の建物となる可能性がある。またS D 219・S D 218・S D 265・S D 270・S D 242の溝状遺構群は、宮川1区のS D 4とともに掘立柱建物群に付属する排水路として機能していた可能性がある。S E 217・S E 216も宮川1区の井戸状遺構群と同じように溝状遺構に隣接しており、井戸状遺構にあってもこれらの溝状遺構は排水路としての役割をもったと考えられる。井戸状遺構は掘立柱建物に付属するものといえよう。S D 215は流水の跡はとぼしく、居住区を区画していた溝状遺構とも考えられる。掘立柱建物群の性格は、検討資料が乏しく不明ではあるが、東側の宮川6区で旧河道路跡から奈良時代の大量の須恵器とともに祭祀跡が検出され、かつ銅製の銘帯金具が出土していることから地方官人との関連も考慮する必要があろう。

③古墳時代後期の水辺の祭祀として7世紀後半と考えられるS X 336の遺物のうち、壺形土器と壺形土器のセット出土は、同時代の祭祀と考える水上7区S X 801の壺形土器と壺形土器のセット出土との関連も注目される。

第35表 宮川5区小穴・柱穴一覧表

遺構番号	グリッド	長 種	短 種	深 さ	長短比 (長径=1)	遺構面 標 高	特 記 事 項
S P 204	B 105	8.70	7.10	0.27	0.82	5.17	
S P 205	B 105	0.78	0.66	0.17	0.84	5.23	
S P 208	A 106	0.47	0.45	0.22	0.96	6.18	
S P 211	A 106	0.66	0.65	0.16	0.98	6.21	
S P 212	A 106	0.33	0.30	0.19	0.91	6.19	
S P 213	A 106	0.68	0.55	0.23	0.81	6.18	
S P 214	A 106	0.36	0.35	0.15	0.97	6.18	
S P 221	C 103	0.75	0.59	0.34	0.79	6.08	
S P 222	C 103	0.42	0.37	0.11	0.88	6.10	
S P 223	B 104	0.79	0.57	0.17	0.72	6.12	

造構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比 (長径=1)	造構面 標　高	特　記　事　項
S P 224	B 104	0.31	0.28	0.11	0.90	6.13	
S P 225	C 102	0.86	0.83	0.78	0.97	6.54	
S P 226	C 102	0.71	0.42	0.75	0.59	6.04	
S P 227	C 102	0.25	0.19	5.19	0.76	6.09	
S P 228	C 102	0.72	0.46	0.31	0.64	6.09	
S P 230	C 103	0.57	0.51	0.11	0.89	5.99	
S P 231	D 101	0.25	0.22	0.11	0.88	6.15	
S P 232	D 101	0.24	0.22	0.24	0.92	6.14	
S P 233	C101+D101	0.25	0.21	0.12	0.84	6.14	
S P 234	D 101	0.24	0.18	0.17	0.75	6.14	
S P 235	E 101	0.36	0.23	0.09	0.64	6.13	
S P 236	D101+E101	0.45	0.34	0.17	0.76	6.14	
S P 237	D 101	0.31	0.26	0.22	0.84	6.15	
S P 238	D 101	0.29	0.23	0.12	0.79	6.13	
S P 239	D 101	0.30	0.24	0.22	0.83	6.12	
S P 240	D101+E101	0.49	0.47	0.15	0.96	6.11	
S P 241	E 101	0.34	0.27	0.08	0.79	6.09	
S P 243	B 103	1.24	0.81	0.23	0.65	6.06	
S P 244	B 103	0.85	0.79	0.22	0.93	6.06	
S P 245	C 103	0.58	0.49	0.15	0.84	6.05	
S P 246	C 103	0.51	0.35	0.11	0.69	6.04	
S P 247	C 103	0.34	0.26	0.15	0.76	6.02	
S P 248	B 103	0.43	0.37	0.09	0.86	6.07	
S P 249	B 103	0.04	0.04	0.04	1.00	5.97	
S P 250	E 101	0.05	0.42	0.04	0.84	6.10	平安時代
S P 251	C 103	0.02	0.17	0.02	0.85	5.91	
S P 252	C 103	0.97	0.88	0.15	0.91	6.01	
S P 253	D 103	0.31	0.31	0.05	1.00	6.15	
S P 254	D 101	0.32	0.32	0.06	1.00	6.12	
S P 255	D 101	0.27	0.25	0.08	0.93	6.09	
S P 256	E 101	0.67	0.31	0.05	0.46	6.09	
S P 258	E 101	0.52	0.35	0.09	0.67	6.05	
S P 259	D 101	0.41	0.23	0.06	0.56	6.08	
S P 260	E 101	0.51	0.51	0.11	1.00	6.13	
S P 261	E 101	0.47	0.43	0.10	0.91	6.07	
S P 262	E 101	0.31	0.30	0.10	0.97	6.01	
S P 263	E 101	0.53	0.49	0.24	0.92	6.23	
S P 264	D 101	0.20	0.18	0.04	0.90	6.05	
S P 265	D 101	0.20	0.20	0.04	1.00	6.10	
S P 266	D 101	0.27	0.25	0.03	0.93	6.08	
S P 267	D 101	0.19	0.17	0.02	0.89	6.12	

造構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長短比 (長径=1)	造構面 標 高	特 記 事 項
S P 268	D 101	0.30	0.30	0.12	1.00	6.07	
S P 272	D 102	0.51	0.43	0.05	0.84	6.14	
S P 273	D 102	0.23	0.18	0.06	0.78	6.09	
S P 274	D 102	0.40	0.36	0.09	0.90	6.15	
S P 276	D 102	0.17	0.15	0.07	0.88	6.12	
S P 277	C 102	0.38	0.17	0.03	0.45	6.11	
S P 278	C 103	0.70	0.42	0.05	0.60	6.01	
S P 279	C 103	0.22	0.22	0.06	1.00	6.02	
S P 280	B 103	0.73	0.73	0.06	1.00	5.97	
S P 281	C 103	0.70	0.65	0.04	0.93	6.01	
S P 282	B 103	0.53	0.42	0.17	0.79	6.00	
S P 283	B 103	0.49	0.36	0.18	0.73	6.07	
S P 284	C 103	0.79	0.64	0.13	0.81	6.01	
S P 289	C 103	0.70	0.49	0.08	0.88	6.07	
S P 290	C 103	0.42	0.33	0.01	0.79	6.05	
S P 292	C 103	0.39	0.35	0.12	0.90	5.99	
S P 293	B 103	0.36	0.33	0.10	0.92	6.00	
S P 294	B 103	0.40	0.11	0.07	0.28	5.99	
S P 295	B 104	0.60	0.46	0.09	0.77	6.04	
S P 296	B 104	0.65	0.56	0.21	0.86	6.11	
S P 297	B 104	0.53	0.29	0.11	0.55	6.14	
S P 298	A 105	0.61	0.37	0.18	0.61	6.15	
S P 299	A 106	1.66	0.76	0.11	0.46	6.21	
S P 300	A 105	0.30	0.25	0.24	0.83	6.15	
S P 301	D 100	0.21	0.18	0.07	0.86	6.18	
S P 302	D 101	0.32	0.28	0.07	0.88	6.01	
S P 303	D 101	0.47	0.35	0.10	0.74	6.03	
S P 304	D 101	0.34	0.32	0.19	0.94	6.03	
S P 305	D 101	0.49	0.28	0.15	0.57	6.06	
S P 306	D 101	0.37	0.29	0.14	0.78	6.07	
S P 307	D 101	0.24	0.21	0.14	0.88	6.06	
S P 308	C 102	0.23	0.17	0.06	0.74	5.98	
S P 309	C 103	0.29	0.25	0.06	0.86	5.90	
S P 310	A 105	0.42	0.28	0.01	0.67	5.92	
S P 338	B 104	0.53	0.47	0.09	0.89	6.14	

第36表 宮川5区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅 最大	深さ	遺構面 標高	特記事項
S D 206	A 106	4.75	1.35	0.19	6.15	
S D 207	B 105	6.88	0.86	0.09	5.94	平安時代
S D 209	B 105	25.10	0.92	0.59	6.10	平安時代
S D 210	B 105	14.36	1.21	0.36	6.00	
S D 215	C102, D102	12.82	1.44	0.47	6.05	
S D 218	C ^{101, 102} D ^{101, 102}	13.64	0.52	0.44	6.09	奈良時代
S D 219	D 102	9.48	0.54	0.05	6.10	奈良時代、手捏2個
S D 220	B104, 105	7.32	1.07	0.42	6.09	平安時代
S D 229	C 103	2.16	0.66	0.05	6.08	
S D 242	C ^{101, D101} E101	13.12	1.28	0.46	6.13	奈良時代
S D 269	D 101	12.42	0.82	0.17	6.05	
S D 270	D 101	4.03	0.56	0.15	6.03	
S D 271	D 101	1.06	0.42	0.10	6.03	
S D 275	D 102	1.82	0.33	0.06	6.17	
S D 285	C 103	4.42	0.68	0.16	6.01	
S D 287	A 105	3.30	0.71	0.05	6.07	
S D 288	B 104	3.24	0.21	0.06	6.14	
S D 291	C 103	14.10	0.62	0.38	5.75	

宮川6区(第97図)

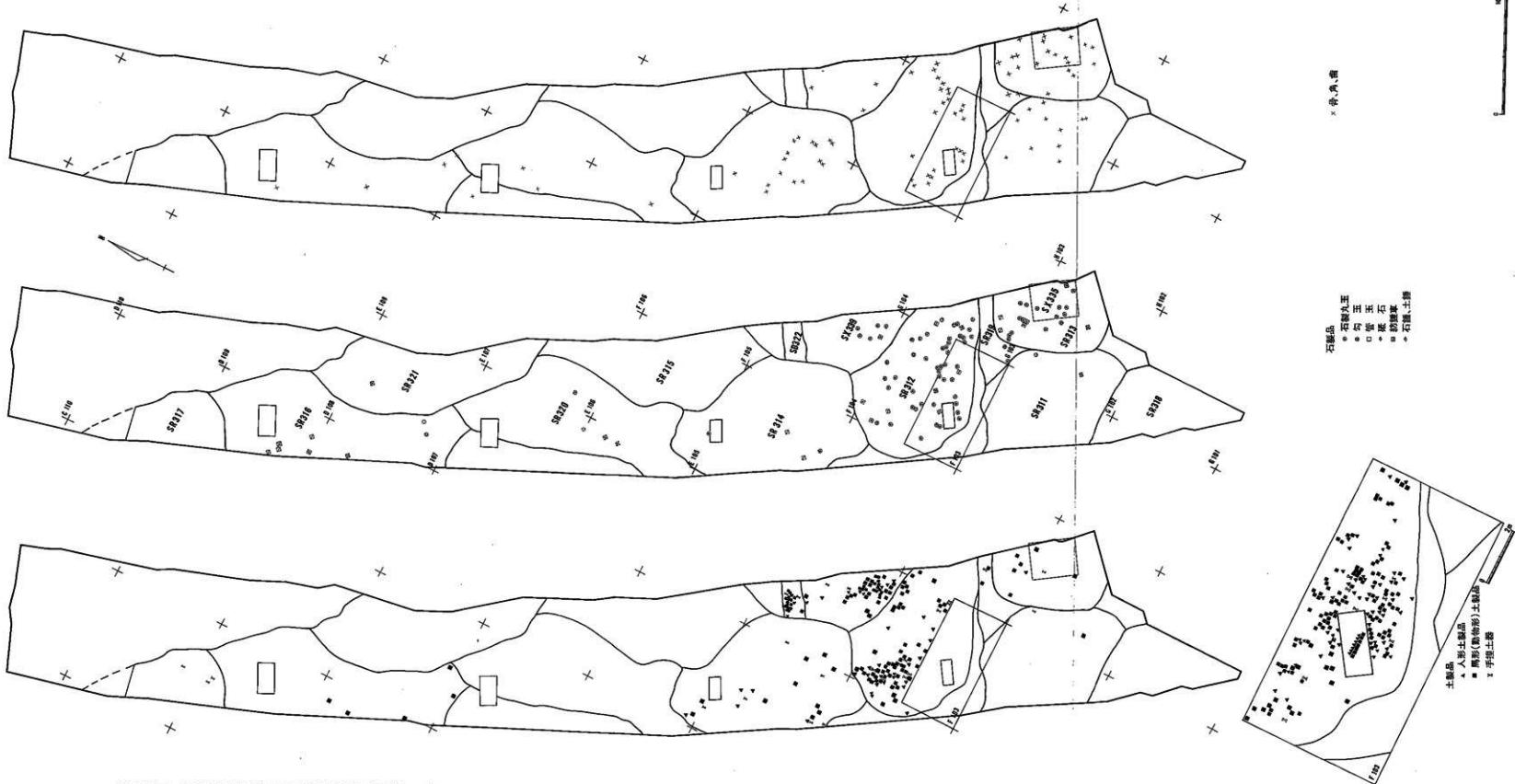
1. 概要

宮川6区は河口起点より1,400m上流に位置し、現大谷川左岸部にあたる。108例より北側に微高地が検出された他はすべて旧河道跡となっていた。微高地部分での古墳時代後期の遺構面から溝状遺構、小穴が検出された。旧河道部分の検出状況は複数の旧河道が複雑に切りあい、窪地状を呈する部分が大半を占め、それらを含めて河道跡として11個所に遺構番号を付した。したがって流路・年代ともに明瞭に確認ができたものはS R 317・S R 313の2本のみであった。さらに宮川6区はほぼ中央を近世流路(明治9年地図で確認)がD 106グリッドからG 102グリッドにかけて縦断しており、平均すると河床直上10cmから上はほとんど近世流路の赤褐色砂礫に覆われていたといえる。遺物検出面は多くの場合、河床覆土1面のみであり、複数の年代の遺物が混在して検出された。

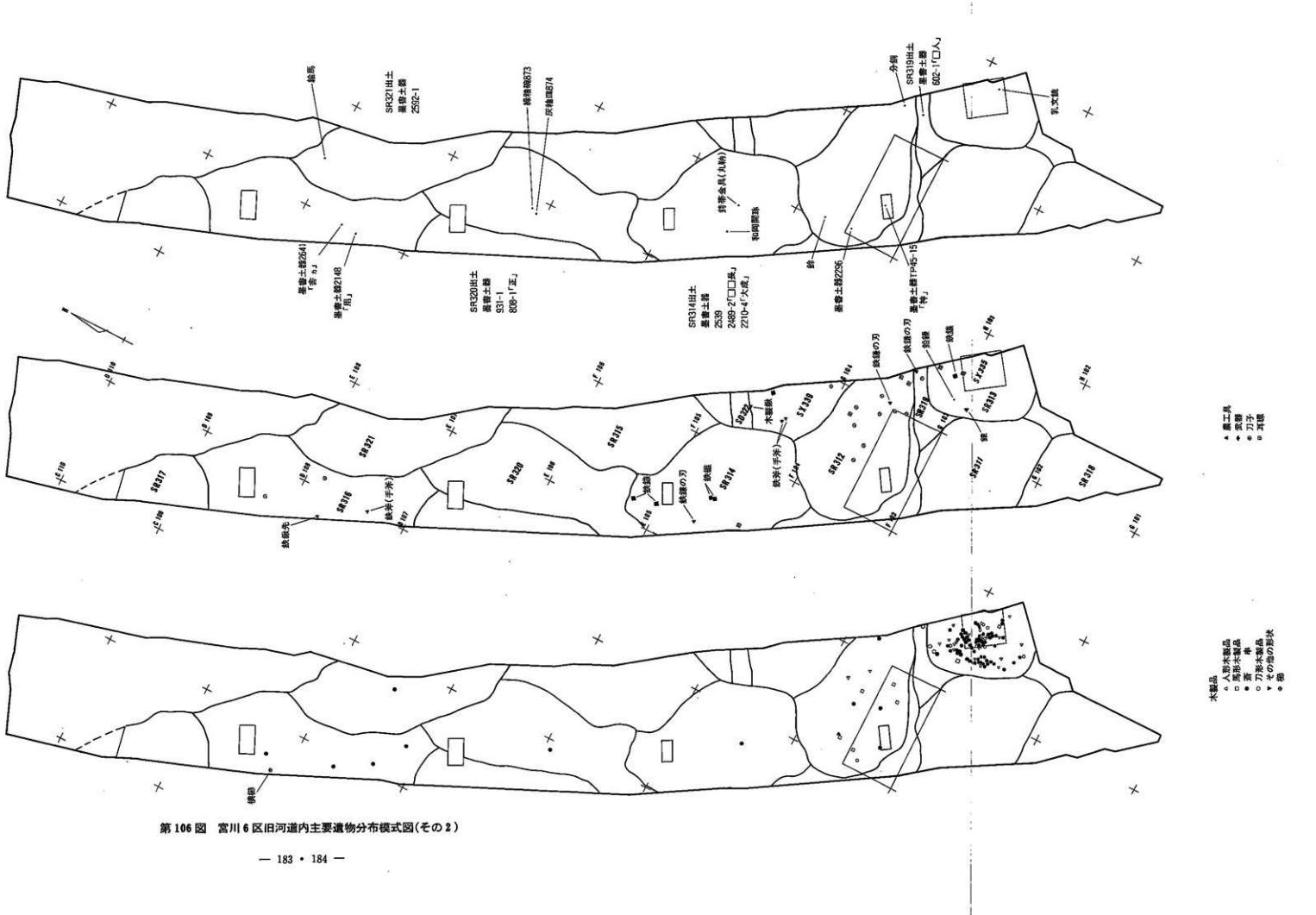
しかし宮川6区は本遺跡の中では祭祀遺物の出土量においては最大規模を有し、水辺の祭祀と関連が深いと考えられる遺構として、S R 312・S D 322・S X 339・S X 313の4個所を検出できた。

第37表 宮川6区旧河道内主要出土遺物一覧表

遺構	S R 316 の 南側 微高 地	S R S R S R S R S R S D S X S R S R S R S R												合 計
		317	316	321	320	315	314	312	322	339	311	318	319	
遺物														1 100
人形土製品▲									5 82	4 8				
馬形土製品(動物形)■			5						10 181	15 36	1	2 6		256
手捏土器☒		3							6 15	2 4	1	1 1		33
石丸玉◎									2 34	4		1 12		53
土丸玉◎		2			1				4		1			8
勾玉◎					1				6	1		1 2		11
管玉□									2					2
砥石◆		2	1	2					3				2	10
紡錘車●		1							2		1 1		3	8
石錘・土錘△		3							2				2	7
人形木製品△									2				18	20
馬形木製品□									5				2	7
箸状木製品(斎串)●		4	1	2	(1)	(1)			1 4				60	72
刀形木製品○										1		1 14		16
その他の木製形代▼									1					1
櫛◎		1												1
農工具△	鍛造先 鉄手斧 1:								鉄錐の錐保の 月 1 月 1		木製錐 鉄手斧 2		鉄錐 刀 1 基 1	9
武器◆									鉄錐 4		鉄錐 1		鉄錐 1	6
刀子○		2							8	1		1		12
耳環◎									1 3				2	6
動物遺存体 (骨・角・歯)×		4	1	3					16 26	2	11	2	20	85
植物遺存体 (桃の種)		218		5					2497 250			1 320 901 4192		
墨書き土器		2			1	鰐馬 1 次輪 2			鰐帶金 は 1 分鏡 1 和同開金 珠 1			1 丸文鏡 1 船鏡 1		13
その他														



第105図 宮川6区旧河道内主要遺物分布模式図(その1)



2 遺構各説

S R 317 (第 107 図、図版 89-1) C 109・C 108 グリッドで検出された旧河遺跡である。北西方向から微高地を抉って蛇行し南西へ流れる。確認面での河床は平坦で最深部は標高 4.80m を測る。覆土中から手握土器 3 点他と土師器片・須恵器片を多數検出し、これらから古墳時代後期の河道跡とした。S R 317 は、その後の河道によって破壊されることがなく遺物がそのまま遺存したと考えられる。

S R 316 (第 107 図、図版 89-2・3) C 108・C 107・D 108・D 107 グリッドで検出された旧河道である。S R 317 の攻撃斜面である C 108 グリッド北部が突破され、流路が南側に移り北西方向から入り D 108 グリッド杭の付近で南北方向に蛇行して流れる。確認面での河床はゆるやかに階級状に傾斜し、最深部の標高は 3.74m を測る。覆土は暗灰色砂質粘土で標高 4.60m までを被覆していた。覆土中から多數の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した (第 109 図)。これらから年代は古墳時代後期から平安時代までとする。主要出土遺物には馬形土製品 5 点、土製丸玉 2 点、砥石 2 点、紡錘車 1 点、鍾 3 点、斎串 4 点、横櫛 1 点、鐵製鍊先 1 点、鐵製手斧 1 点、刀子 2 点、獸骨 4 点、桃の種 218 点他が確認されている。さらに墨書き器 2 点が検出された。

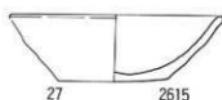
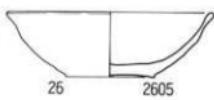
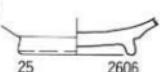
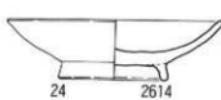
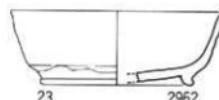
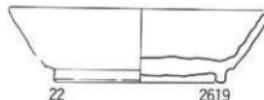
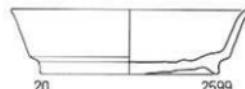
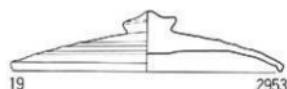
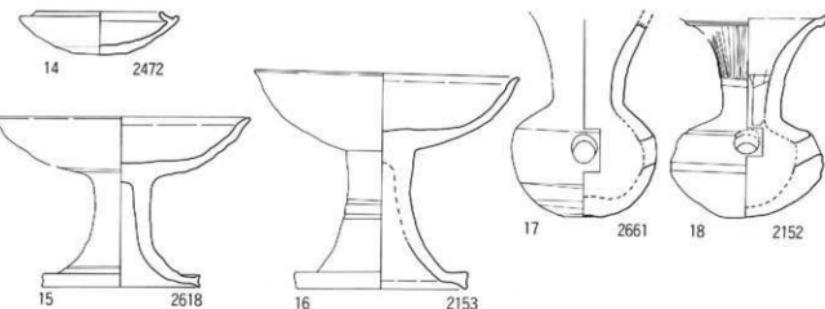
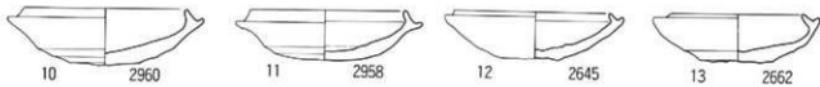
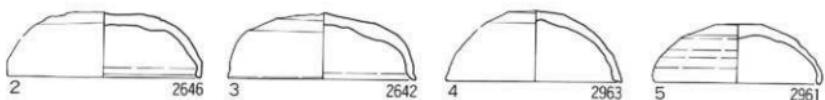
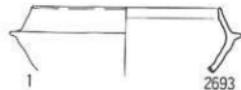
S R 321・S R 320・S R 315 (第 108 図、図版 89-1、90-1・2) D 108・D 107・E 107・D 106・E 106・D 105・E 105・F 105 で検出された旧河道である。出土遺物から 1 本の流路と考えられるが、D 107 グリッドの河道の瀬の部分を S R 321、D 106・D 105 グリッドの河道の直線的な流れがのる瀬の部分を S R 320、E 106・E 105 グリッドの分流して瀬をつくる部分を S R 315 とした。

確認面での幅は S R 320 部分で 7.50m、延長は 31.5m、河床は S R 321 と S R 315 の瀬の部分では階級状を呈し、最深部の標高がそれぞれ 3.92m、3.79m を測り、S R 320 の瀬の部分では平坦で最深部の標高が 4.10m を測る。本河道は S R 316 の攻撃斜面部分が突破され新しく開かれた流路である。

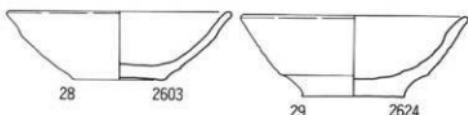
出土遺物は須恵器片・土師器片とともに多くの灰釉陶器・山茶碗を検出している。その他、主要遺物として玉類では勾玉 1 点、土製丸玉 1 点、砥石 3 点、斎串 3 点(その内署木製品 2 点)、獸骨 3 点、桃の種 5 点、絵馬 1 点、灰釉皿・綠釉碗各 1 点が確認された。署木製品の出土は本遺跡では宮川 3 区 S R 486・水上 6 区 S D 228 からの大量出土があり、平安時代末から鎌倉・中世と考えられる。絵馬は馬と馬を曳く人物の描写の特色から奈良県当麻寺の絵馬と同類型であり、平安末から鎌倉時代と考えられる。灰釉皿 (874) は猿投窯笛 14 号の産であり、綠釉碗 (873) は黒瓶 14 号窯式の新か黒瓶 90 号窯式の古に併行する時期のものと考えられる。以上から、本河道の年代は平安時代中期から鎌倉時代と考えられる。また墨書き器 3 点が出土している。

S R 314 (第 108 図、図版 90-3) E 105・E 104・F 104・E 103 グリッドで検出された旧河遺跡である。河床は E 104 グリッドを中心に階級状を呈しており最深部で標高 3.60m を測る。出土遺物は土器類では土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗などで、これらから年代は古墳時代後期から奈良時代・平安時代とされる。

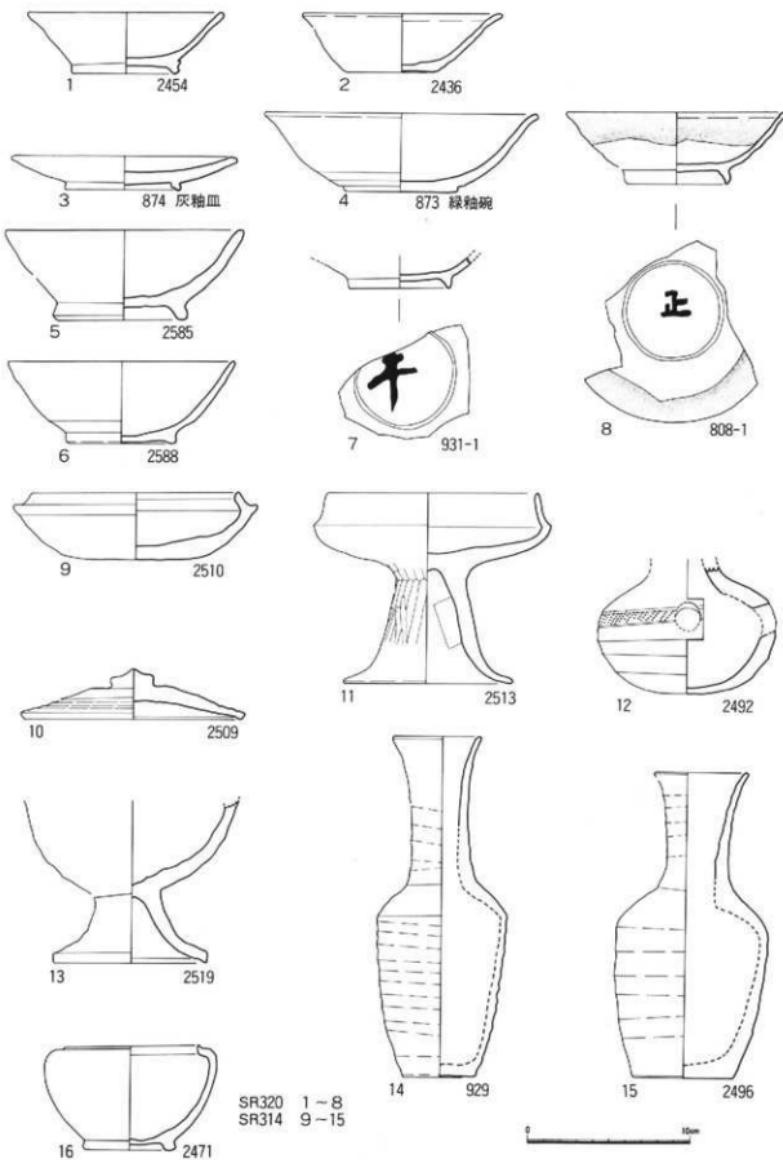
古墳時代後期から奈良時代にかけての流路は宮川 6 区北部から宮川 5 区北部へと蛇行し、一部は宮川 5 区 S R 202 として検出されている。その延長上の流路が再び西から宮川 6 区へ入り S R 314 の瀬をつくったと考えられる。その後、この瀬に平安時代の流路が流れ込んできたと推定できる。S R 321・S R 320・S R 315 では、確認されなかった上製形代頸が、S R 314 では出土している。人形土製品 5 点、馬形土製品 10 点他の検出である。その他の主要遺物としては、手握土器 6 点、石製丸玉 1 点、鍾 2 点、斎串 1 点、鉄鎌の刃 1 点、鉄鎌 4 点、耳環 1 点、獸骨 16 点他が出土し、複数の時代の祭祀遺物の混在が認められる。墨書き器 3 点、銅製の跨帶(丸柄) 1 点、和同開珎 1 点も検出されている。



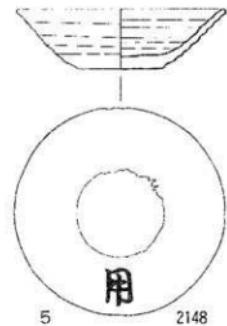
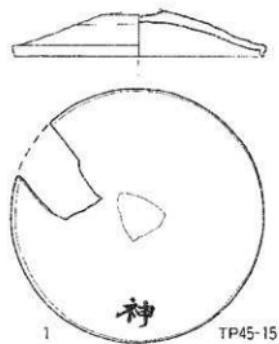
— 10cm —



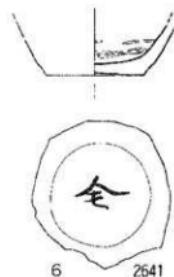
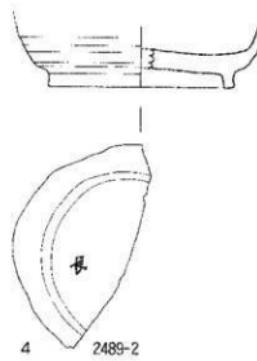
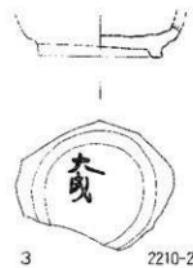
第107図 宮川6区SR317・SR316出土土器実測図



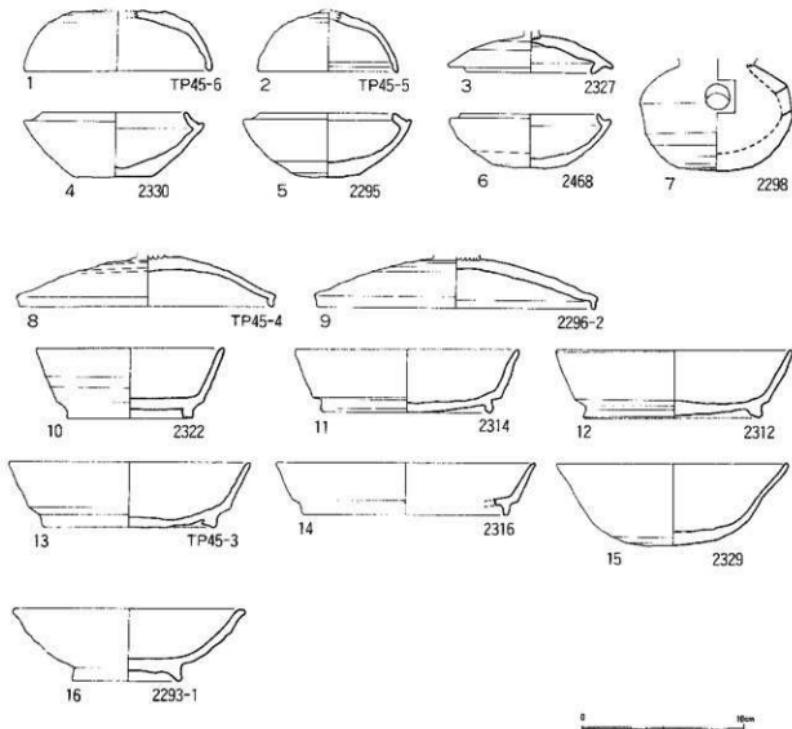
第108図 宮川6区SR320・SR314出土土器実測図



SR312 1·2
SR314 3·4
SR315 5·6



第109図 墨書き器実測図



第110図 宮川6区SR 312出土土器実測図

SR 312(第110図、図版91-1・2・3) E 104・F 103・G 103で検出された旧河道跡である。河床はF 103グリッドを中心にしており最深部で標高3.93mを測る。出土遺物の土師器・須恵器・灰釉陶器などから、年代は古墳時代後期から奈良時代・平安時代にまでおよぶと考えられる。

SR 312の出土遺物で注目すべきは祭祀関連の遺物である。主要遺物として人形土製品82点、馬形土製品181点、手握土器15点、石製丸玉34点、土製丸玉4点、勾玉6点、管玉2点、磁石3点、紡錘車2点、人形木製品2点、馬形木製品5点、斎串4点、刀形木製品1点、鉄鎌の刃1点、刀子8点、耳環3点、獸骨26点、桃の種2,497個、分銅1点、鈴1点、墨書き土器2点(そのうち1点に「神」の墨書き)他が検出されている。

土製模造品・玉類の検出密度・量はSR 312が本遺跡の中で卓越している。遺物の分布を見ると、玉類が比較的全体から一様に出土しているのに対して土製模造品は南東側に偏在し、獸骨は南東側から南側にかけて偏在している。今後、遺物の年代を確定させ、祭祀の時代ごとの形態を明らかにすることが課題となる。また土製人形・土製馬形の最密集部分から検出された奈良時代の須恵器の环蓋に「神」と

墨書きされた土器は、环身セットで出土している（湖西市早稲川窓産とみられる）。

S D 322 (図版91-1・3) F 104 グリッドで検出された東西方向の溝状遺構である。S R 314 の東側の微高地状部分に位置し、確認面での延長は 2.90m、幅は 1.75m、深さは 0.22m を測る。出土遺物としては人形土製品 4 点、馬形土製品 15 点、手握土器 2 点であった。年代は不明であるが上製模造品の形態が S R 312 出土のものと類似している。

S X 339 104 グリッド検出された南北方向の溝状地形を含む微高地部分である。主要出土遺物は人形土製品 8 点、馬形土製品 36 点、手握土器 2 点、木製歯 1 点、鉄製手斧 2 点、鐵鎌 1 点、石製丸玉 4 点、勾玉 1 点、紡錘車 1 点、刀子 1 点、獸骨 2 点他である。とりわけ馬形土製品 10 点が並んで検出された点と農工具・武器類の出土が注目される。この馬形土製品も S R 312 出土のものと類似している。

なお S D 322・S X 339 の両者から桃の種 250 個が検出された。これらの二地域とも祭祀にかかわる場所であったと考えられる。

S R 311 F 102・G 102 グリッドで検出された旧河道である。河床は F 102 グリッド北東部を中心とする鉢状を呈しており最深部で標高 3.30m を測る。基盤層は砂層である。出土遺物は土師器・須恵器片のほかに主要遺物として土製馬形 1 点、手握土器 1 点、上製丸玉 1 点、紡錘車 1 点、獸骨 11 点であった。年代は不明である。

S R 318 G 102 グリッドで検出された旧河道跡である。河床は砂層で、最深部の標高 3.60 m を測る。なお S R 311・S R 318 とともに上層の緑灰色砂層から灰釉陶器片を出土している。

S R 319 (図版92-1) F 103・G 103 で検出された東から西へ流れる旧河道跡である。確認面での延長は 6.45 m、幅は 4.10 m、深さは 0.63 m である。覆土は緑灰色粘土である。覆土中から主要遺物として馬形土製品 2 点、手握土器 1 点、石丸玉 1 点、勾玉 1 点、刀形木製品 1 点、鐵鎌の刃 1 点、刀子 1 点、獸骨 2 点、桃の種 320 個他を検出した。また土師器・須恵器片とともに墨書き土器 1 点を検出した。年代は遺物により古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

S R 313 (第 111・112・113 図、図版92-3・93・94-1) G 103・G 102 グリッドで検出された旧河道跡である。河床は G 103 グリッド杭の東 5.30m 付近を中心に鉢状を呈しており、最深部で標高 3.20m を測る。覆土は上層が茶褐色砂層、下層が暗灰色砂層である。上層は大半が S R 319 によって削られているのに対し、下層の遺存状態は良好であった。S R 313 は出土した土器から古墳時代後期の旧河道である。

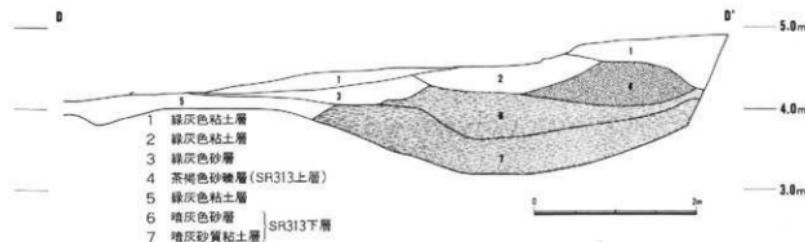
上下両層からの主要出土遺物は以下のとおりである。人形土製品 1 点、馬形土製品 6 点、手握土器 1 点、石製丸玉 12 点、勾玉 2 点、磁石 2 点、紡錘車 3 点、鎌 3 点、人形木製品 18 点、馬形木製品 2 点、斎串 60 点、刀形木製品 14 点、錐 1 点、鐵鎌 1 点、耳環 2 点、獸骨 20 点、桃の種 901 点、乳文鏡 1 点他であった。この流路の特徴は斎串・木製模造品の大量出土である。

これらのうち出土状態が良好な下層の一括出土部分を図示したのが第 116 図である。S R 313 の中央部の網かけ部分からは大量の礫とともに土師器・須恵器が多数出土した。この部分は土層断面図(第 117 図)からもわかるように河床最深部でもあり、常時流れのあった場所と考えられる。第 116 図から木製品が網かけ部分の流路の外側と内側に分かれて分布していることがわかる。外側のものは流水により岸辺に打ち上げられたような状況を呈しており、岸辺に沿って線状に集積して検出された。それに対し、内側のものは標高 3.60m を中心としたほぼ同一平面からの出土を示し、遺物が同じ方向性をもって砂層の上に並べられたような検出状況を呈していた。しかも臺形土器の中に、刀形木製品 1 本が入ったまま出土していることから、流路の外側に集積した木製品と比べて、流路の内側の木製品は流水の影響がより少なかったものかと考えられる。

S X 335 (第 114・115 図、図版94・95-1・2) G 103・G 102 グリッドで検出された遺物集中部



第111図 宮川6区SR 313下層木製品出土状況実測図



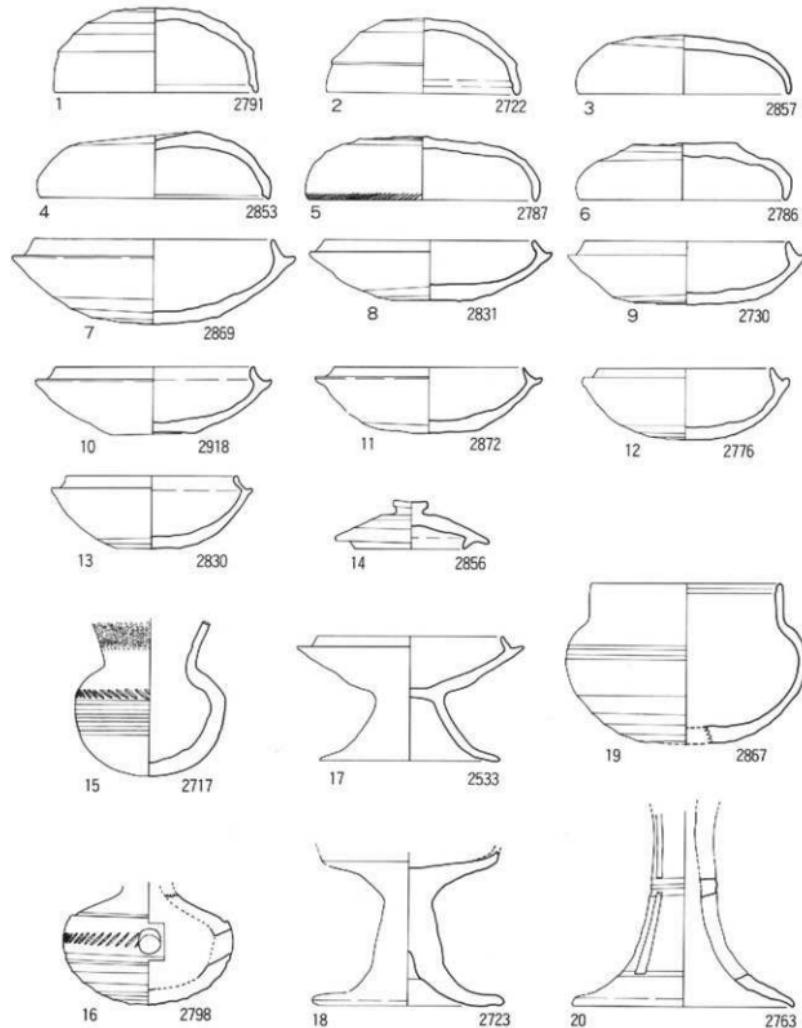
第112図 宮川6区SR 313断面図

である。SR 313の下層部の礫が大量に検出された流路部分より内側の砂層の上に、同一面に並べられたような状態で検出された主要遺物は木製品群（斎串19点・人形4点・刀形7点）とそれに伴出した土師器壺形土器1点、須恵器環形土器2点他からなる。

基準杭H 102より西3.50mの地点付近を中心とした $3.4\text{ m} \times 2.2\text{ m}$ ほどの範囲から検出され、検出面の標高はほぼ3.60mである。ただし、東部の刀形木製品2点と斎串3点が並んで検出された部分付近の標高は3.80mを測り、東が高く西が低い緩やかな斜面となっている。

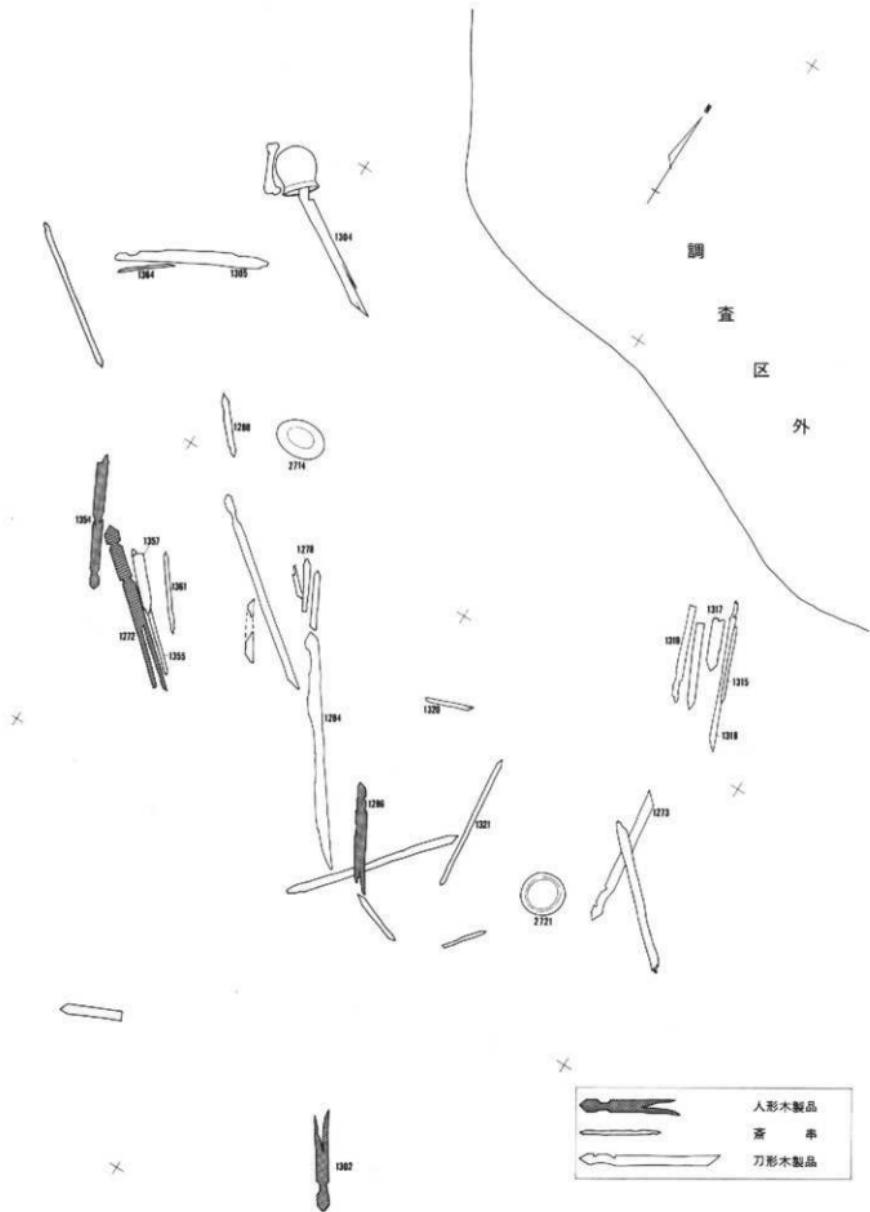
SX 335の北部に位置する土師器壺形土器の中に刀形木製品の把部が入ったままの出土や斎串(1361)付近の木製品や刀形木製品(1319)付近の木製品が同一方向性をもち平面的に並んだ状態で検出されたことは、蛇行洲として形成されつつあった流路内側の砂層の上に投棄された木製模造品と斎串が、その後攪乱を受けずに砂の中に埋積していくと推定できる。とりわけ壺形土器に刀形が入ったまま出土したことは、壺に入れて運ばれた人形・刀形の木製模造品・斎串等を投棄した場所であったと推定することも可能となる。

出土遺物のうち人形木製品はいずれも短冊状の薄板の一端を削って主頭状の頭部をつくり、撫で肩である。腰部は三角形に切り欠くものと表現されないものがある。脚部は三角形に切り欠くものと、平行切り込みのあるものがある。刀形木製品には飾大刀を模し、刀身と把部を削り出したものがみられる。斎串は短冊状の薄板を用いたものと角棒を用いたものがみられた。上端、下端ともに主頭状のつくりをしたものと斜め切り落としのものがみられた。SX 335の年代は伴出した須恵器から7世紀前半代とする。



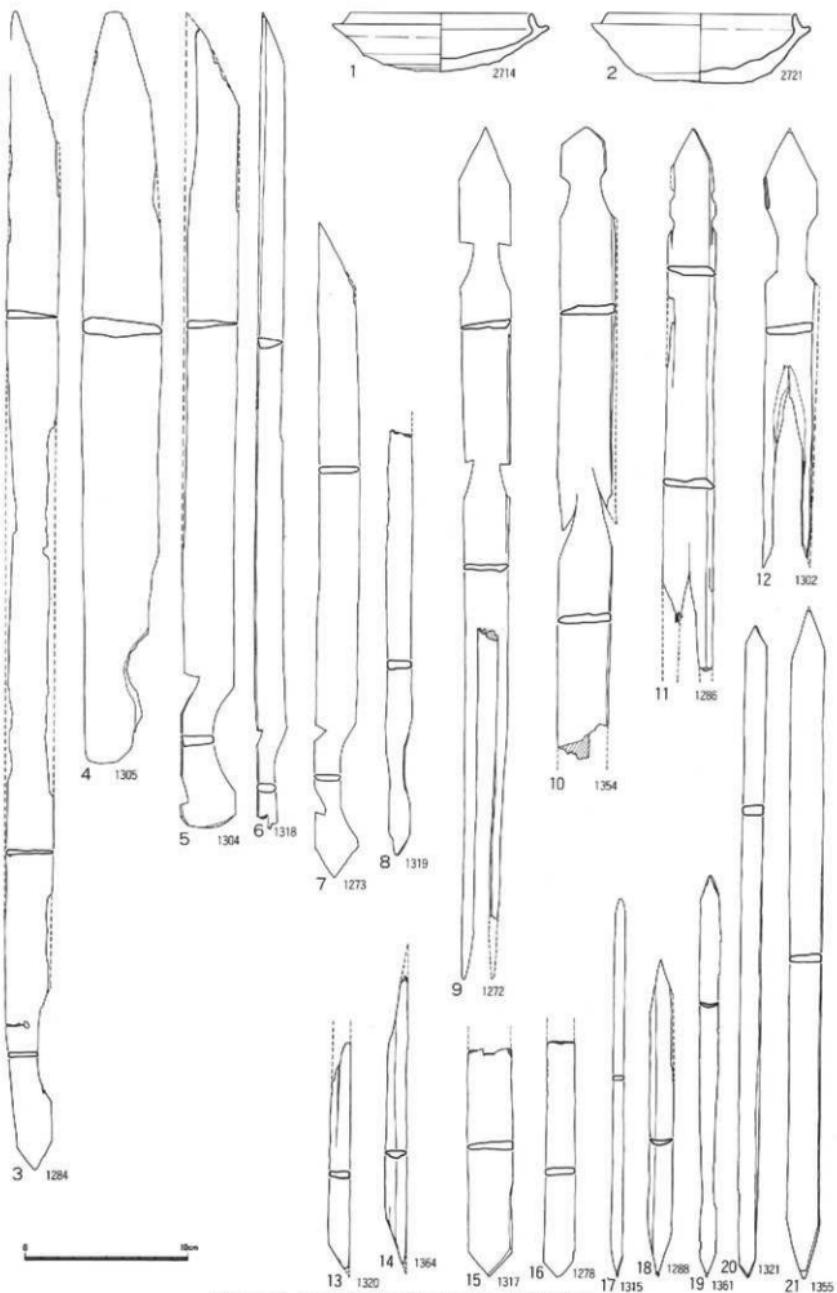
— 10mm —

第113図 宮川6区S R 313下層出土土器実測図



第114図 宮川6区SX335実測図

0 50 cm



第115図 宮川6区S X 335主要出土遺物実測図

3. 小 結

- 宮川6区は祭祀遺構としての側面からいくつかの特徴を指摘できる。
- 古墳時代後期の旧河道S R 313で検出されたS X 335を中心とする木製模造品・斎串等を主体とした水辺の祭祀で刀形・人形・馬形・斎中がセットで使用され、かつ壺形土器の用法の一端を確認できた点で重要である。しかもS R 313下層は他の時代の流路による搅乱がほとんどなく、S X 335の年代を7世紀前半と限定できた点でも貴重な検出例といえる。7世紀後半代の宮川4区S R 56の祭祀と比べても、木製模造品・斎串を主体とした整然とした祭祀形態の特色がうかがえる。
 - S R 312・S D 322・S X 339で検出された祭祀関連遺物はS X 313と共に土製形代類の圧倒的数量と複数の時代の祭料の混在が指摘できる。そのため祭祀遺物の時代別分離が今後の重要な課題である。

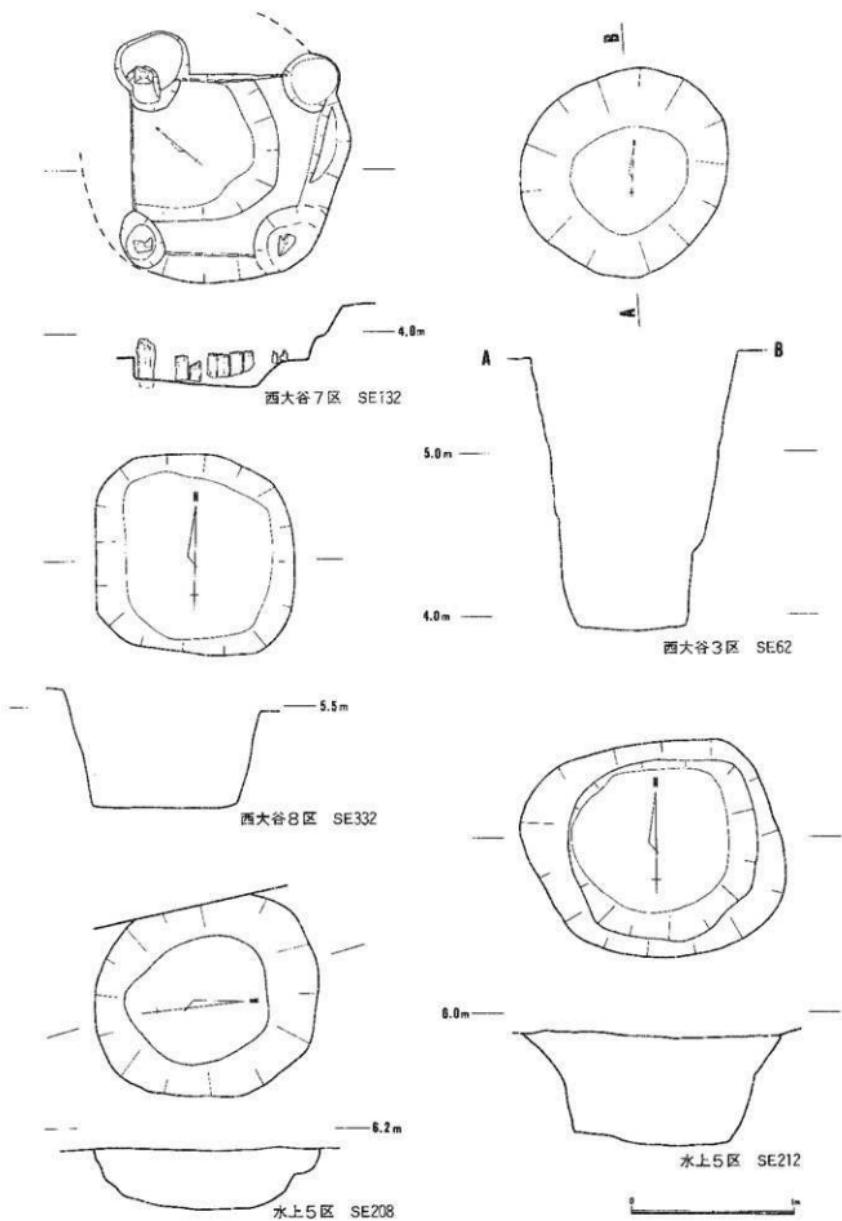
以上の祭祀関連での特徴の他に墨書き土器11点の出土も重要である。奈良時代の須恵器に墨書きされたS R 312の「神」、S R 319の「□人」、S R 314の「□□長」、「大成」さらに平安時代前期の上器に墨書きされたS R 321の「倉カ」、「用」のうち「□□長」、「倉カ」は、鉢形（丸瓶）の検山、縁軸陶器・猿投窯黒瓦14号産の灰釉皿の出土とあわせて考えると、奈良時代から平安時代にかけて地方官人層との関連をもつ可能性も指摘できよう。宮川1区・5区で検出された奈良時代の掘立柱建物群の存在もそれと何らかの関係があると考えられる。

第38表 宮川6区小穴一覧表

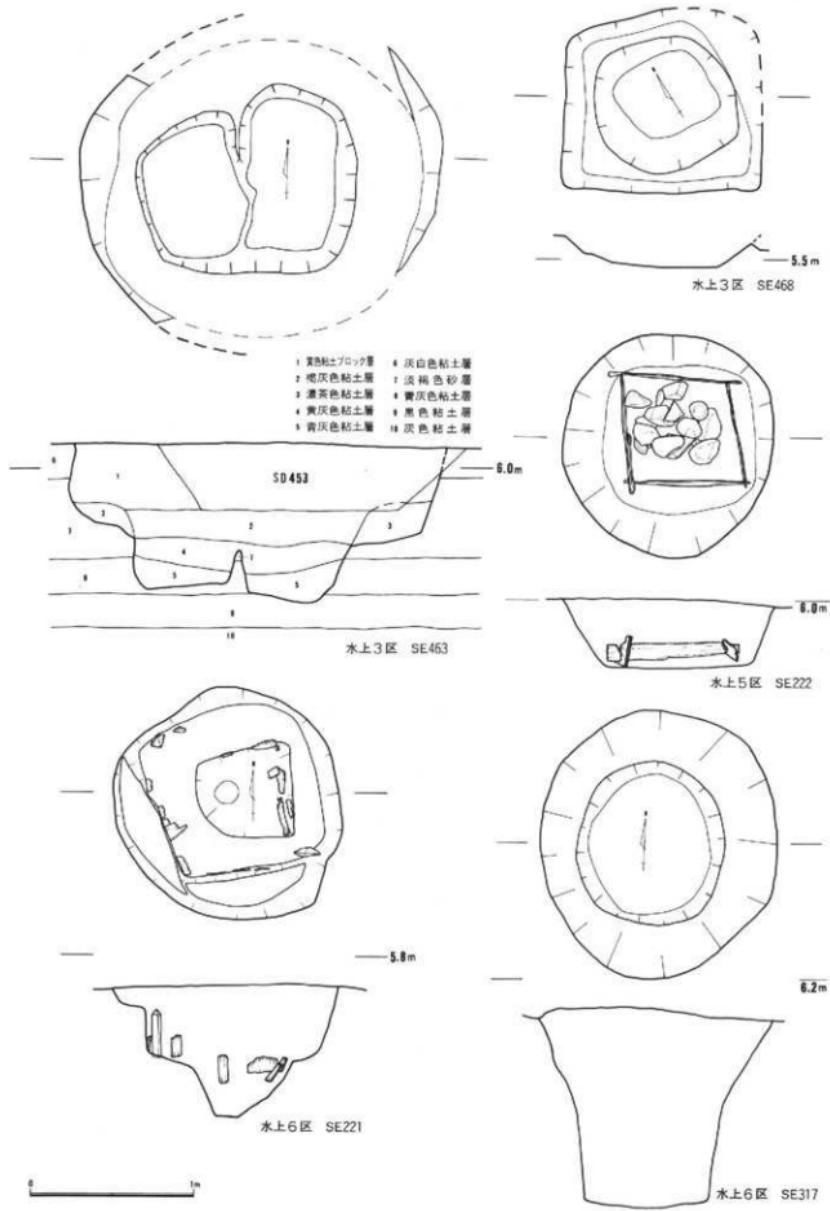
遺構番号	グリッド	長 径	短 径	深 さ	長短比 (長径=1)	遺構面 標 高	特記事項
S P 323	C 109	1.91	1.66	0.21	0.87	5.76	
S P 324	D 109	0.89	0.79	0.37	0.89	5.95	
S P 327	C 109	0.43	0.36	0.15	0.84	5.73	
S P 328	C 109	0.23	0.21	0.06	0.91	5.73	
S P 329	C 110	0.43	0.32	0.13	0.74	5.88	
S P 330	C 110	0.66	0.51	0.11	0.77	5.82	
S P 331	C 110	0.69	0.46	0.12	0.67	5.83	
S P 332	D 108	0.78	0.72	0.33	0.92	5.92	

第39表 宮川6区溝状遺構一覧表

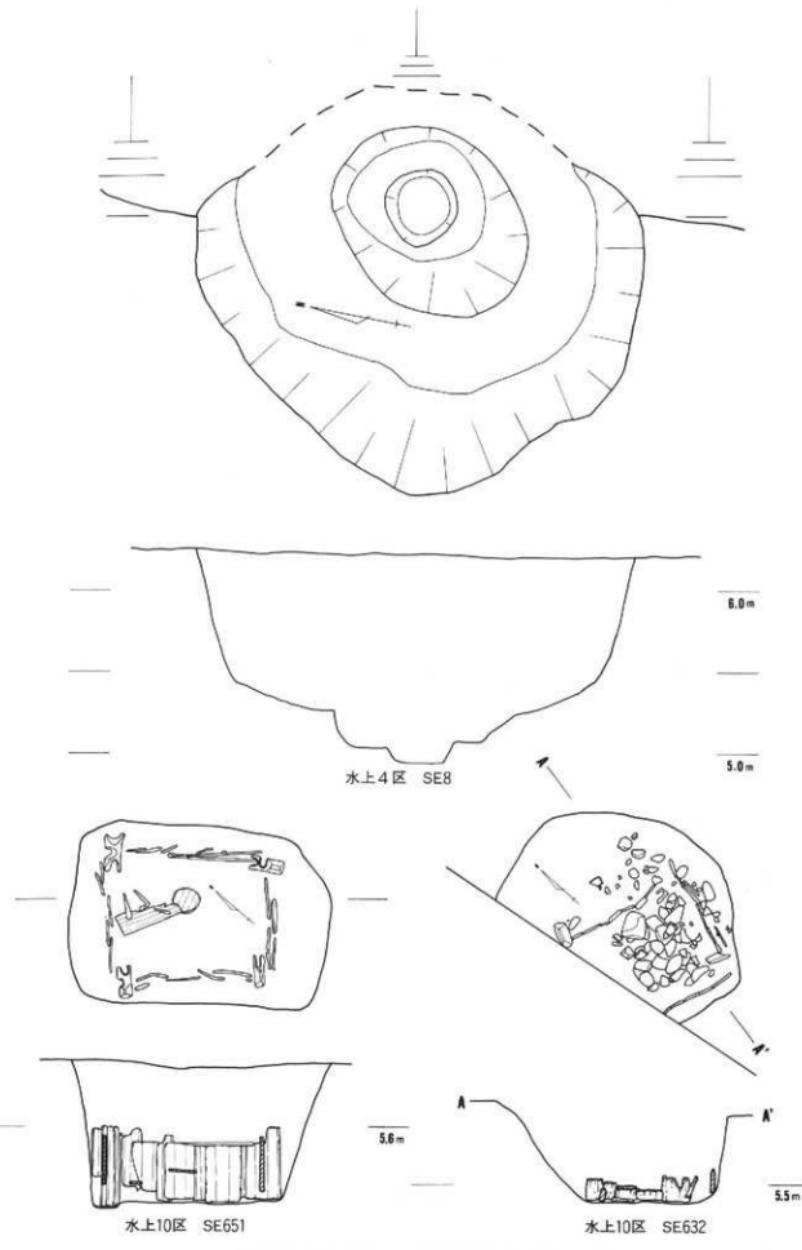
遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面 標 高	特記事項
S D 322	F 104	2.14	1.69	0.31	4.78	馬形・人形土器・手捏土器
S D 325	C 110	7.06	1.20	0.08	5.89	
S D 326	C 110	4.20	1.27	0.19	5.84	



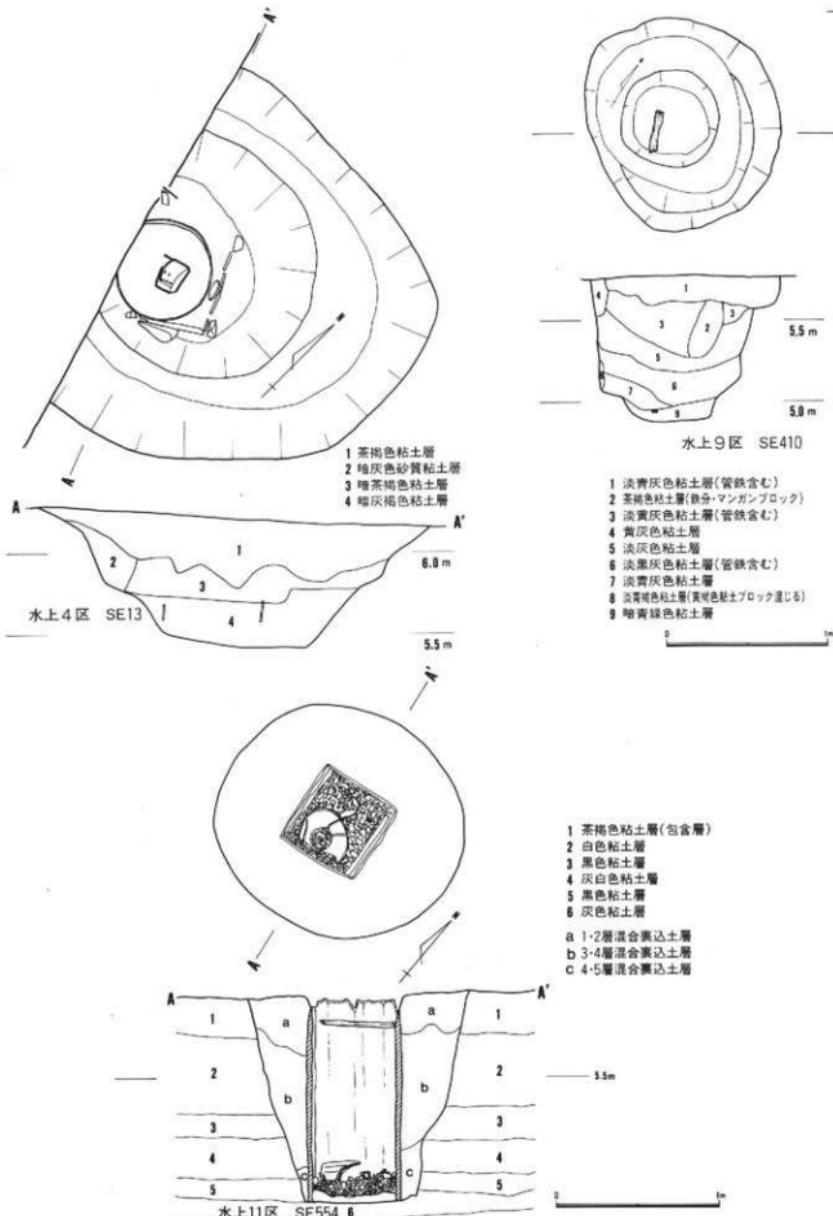
第116図 西大谷地区・水上5区井戸状遺構実測図



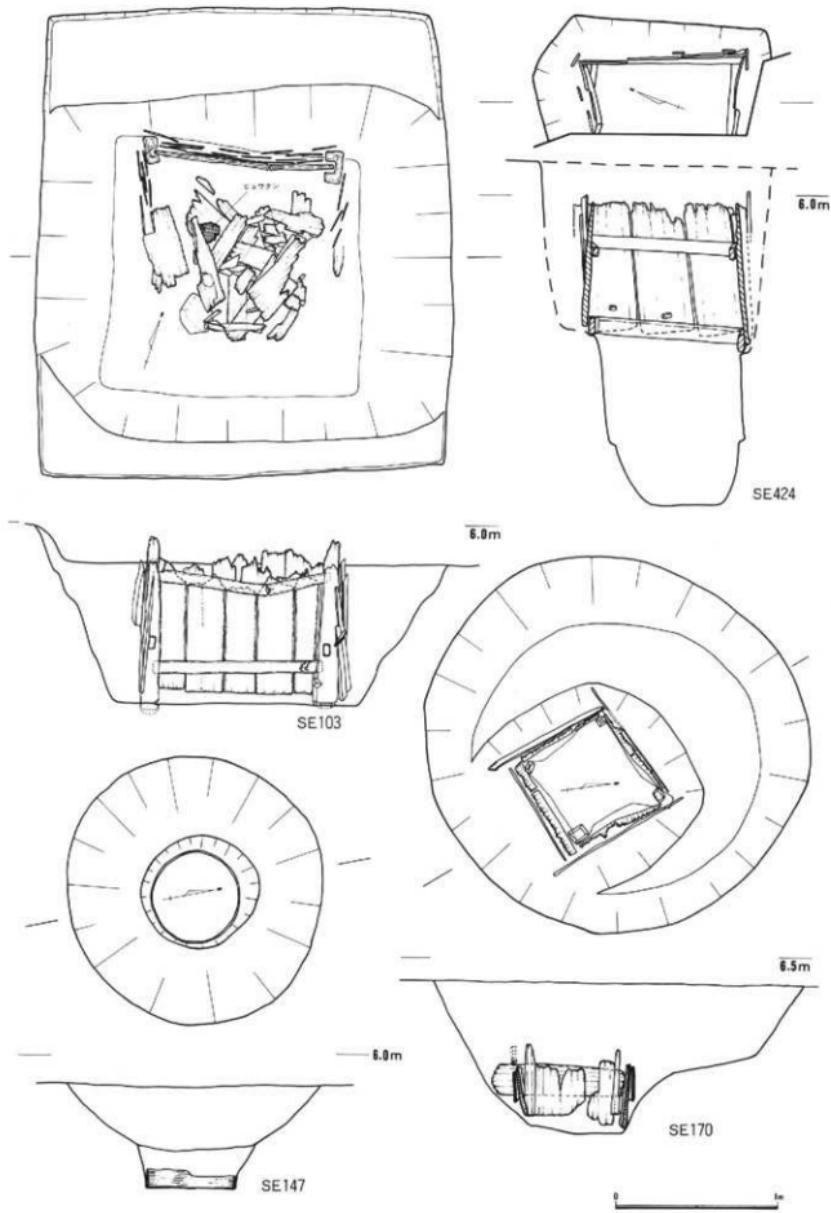
第117図 水上地区 井戸状遺構実測図 1



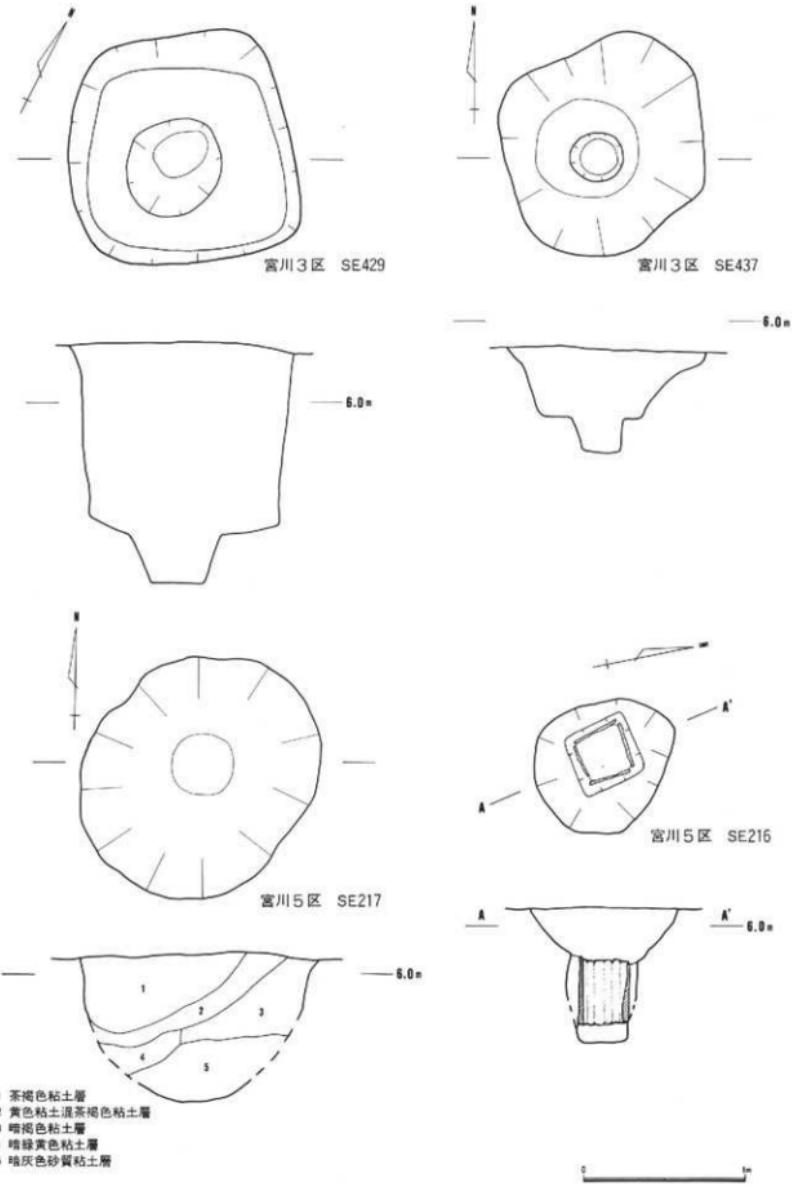
第118図 水上地区 井戸状遺構実測図2



第119図 水上地区 井戸状遺構実測図3



第120図 宮川3区 井戸状遺構実測図



第121図 宮川3・5区 井戸状遺構実測図

第Ⅳ章 まとめ

静岡平野の南東部を流れる大谷川流域に位置する本遺跡は、南北約1km、東西約500mの広がりをもつている。調査は河川改修工事に伴って破壊をうける範囲に限定されたことにより、遺跡の中央部を縦断する長いトレンチ状となざるを得ない状況であった。地形的には低湿地地形と古墳時代中期に初現をもつ旧河道路が各調査区で断片的に検出され多くの祭祀遺物を包含していた。また微高地上には集落の一部と考えられる掘立柱建物跡・井戸状遺構・溝状遺構なども検出されている。本遺跡の年代は層位および遺物の編年から、縄文時代後期から近世にまでわたっていることが明らかとなった。前章までと重複する内容も含まれるが以下で、1. 低湿地地形、2. 旧河道路、3. 居住域（集落）、4. 祭祀、について、その特徴を年代をおってまとめてみることにする。

1. 低湿地地形

低湿地地形が検出されているのは南から、大谷2区、大谷1区、西大谷1・4・5・6・7区、水上7・8・9・10区、宮川2・3・4・6区である。

低湿地地形の広がりは現大谷川の左岸に広くおよんでいるが、その形状は数個所の池沼部分とそれらをつなぐ帯状の部分からなると考えられる。帯状の低湿地地形は水上7区と10区、宮川3区と4区で明らかとなっている。埋積土中からの出土遺物は縄文時代後期以降のもので、とくに大谷2区では石皿、木製ヤス、丸木弓、丸木舟、櫂などまとまりをみせている。なお、埋積土中には富士火山を起源とする大沢スコリア（B、P、2700年）の堆積がみられ年代決定の根拠のひとつにもなった。この大沢スコリアは旧河道等の二次的な浸食をうけない低湿地部分には層をなして遺存している。静岡平野の諸遺跡でもカワガ平バミス（B、P、2900年）とともに検出されることが多く今後の低湿地遺跡で注目する必要があろう。

2. 旧河道路

低湿地地形の埋積は、縄文時代からすみ古墳時代後期には帯状の低湿地がほぼ完全に埋没した。宮川3区S R 485の土層断面はその状況を如実に示している。初期の旧河道の出現はこの低湿地地形の埋没が最終段階をむかえる古墳時代中期にもとめることができる。この時期には帯状低湿地に微高地を浸食するほどの水流をもたない水路的な流れが認められる。水上7区S R 807、水上10区S R 673、宮川4区S R 58などはその例である。

古墳時代中期後半から後期初めごになると、海退現象にともない海水面と池沼部との相対的落差が拡大する。そして大量の砂礫の押し出しにより低湿地内埋積土を激しく浸食しながら池沼間を連結し、しだいに河川としての形状を整えるにいたる。水上7区S R 808、水上8区S R 778、西大谷4区S 21グリッド最下層などがこの段階の旧河道路である。

古墳時代後期は安定した河川となり1986（明治9）年の地籍図にみられる大谷川の旧河道とおおむね同一地点を曲流するようになる。埋積土は砂礫が主体をなすが粒子の大きさは古墳時代中期にくらべてやや小さい。この時代の旧河道路は水上7区S R 809・810・811・812、宮川4区S R 56、宮川5区S R 202、宮川6区S R 313などが認められた。

奈良時代の旧河道路が独立して検出されたのは宮川4区S R 55が唯一であるが平安時代の旧河道路内に奈良時代の遺物が混入している地点もある。宮川4区では古墳時代後期のS R 56が自由蛇行によって地点を変化させた様相がうかがわれる。

平安時代になると、海進現象にともなって海水面との相対的落差が縮小され水量は豊富で静穏な河川に変化する。埋積土も前代までの砂礫主体から粘土およびシルトが主体となる。静穏な水流は蛇行を強め

微高地が浸食されている地点が目につく。宮川3区のS R 486（下層）はその例である。

平安時代末ごろから鎌倉時代・中世になつても、海進傾向は継続し高い水位を維持した河川が微高地を浸食している。宮川4区では、この時期の旧河道跡としてS R 53とS R 52が検出された。S R 53は宮川3区 S R 486と連続し、S R 52は宮川3区 S R 487とつながる。中世後半期には河川の幅が著しく拡大し、広範囲にわたって沼沢地化したと思われる。中世居館跡の一部とみられる遺構が検出された水上3区を中心とする地区（旧地籍では構井ノ坪とその周辺）は旧河道や沼沢地によって島状あるいは島状に孤立した微高地部分であったと考えられる。

近世になると、ふたたび様相が一変する。大量の砂礫が押し出され河道内はこの砂礫によって完全に埋積されている。急激な寒冷化とともにあって海水面が下降したことなどが原因と思われる。宮川4区 S R 51をはじめとして旧地籍図（1877年）にみられる河道部分はすべて同様な状況であった。

3. 居住域（集落）

縄文時代後・晩期の遺物は低湿地内埋積土からのみ出土している。微高地上にはこの時期の遺構は検出されていない。また遺物は石器・弓・ヤス・丸木舟・櫂などの狩猟採集具が主体であることから居住域は丘陵部分あるいは丘陵裾部にあったと推定される。

弥生時代中期の遺物も低湿地内埋積土またはこれを浸食した旧河道内埋積土中より出土しているだけであり、微高地上に遺構はみられない。本遺跡の北西約0.7kmの位置には同時代の遺構・遺物が出土した集落遺跡（有東遺跡）が存在することから本遺跡は弥生時代中期の集落からはずれているといえよう。

弥生時代後期から古墳時代前期になると西大谷8区および高松地区（昭和55・56年度静岡市教育委員会調査地区）に集落が形成される。西大谷8区では掘立柱建物（S H 378）や大型柱穴列が検出されている。高松地区でも同様な建物群が数回の建てかえの状況をみせながら密集して検出されている。掘立柱建物は大型化する傾向をみせ、しかも柱間寸法が最大で3.5mにおよぶ建物が南北約330mという広範囲にわたって確認されていることから、倉庫群をもつ大規模な集落が存在することはあきらかである。

古墳時代中期の遺構はきわめて少ない。土器の集中部を除外すれば、宮川3区の溝状遺構（S D 181）と水上3区 S E 468・S D 456および水上10区 S D 690だけである。したがって居住域の推定は困難な状況であった。

古墳時代後期になると、河川内に膨大な量の遺物が投棄されるが、出土地点は調査区全域にわたり偏重はみられない。河川内への投棄は左右両岸から行なわれている。遺構も高松地区に竪穴式住居跡が1基みられることが注目される程度である。このことからは居住域の設定は困難であるが縁辺の微高地上に大規模な集落を予想しても大過ないであろう。

奈良時代から平安時代前半期は宮川地区を中心にして旧河道の右岸に遺構・遺物が集中する傾向がみられた。遺構では宮川1区 S E 6、宮川3区 S E 103、宮川5区 S E 216、S E 217などの井戸状遺構のほか掘立柱建物 S H 341・342・343・344（宮川5区）などが検出されている。遺物では宮川3・4・5・6区で奈良前代の墨書き土器7点（「多麻呂」・「信孝」・「神」・「大成」・「□□長」・「万」・「□人」）のほか銘帯金具・皇朝十二錢3枚（和銅開珎・万年通宝・長年大宝）などがみられる。遺構・遺物のあり方から、宮川地区が奈良時代から平安時代前半にかけての中心地域であった可能性は強い。また「他田里戸主刀マ真酒」と墨書きされた1号木簡や、7世纪後半と推定される「相星五十戸」と書かれた5号木簡をも考え合わせれば、官衛または官衛関連施設が存在した可能性も考慮しなければならない。

平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物の集中は宮川3区で顕著にみられる。S D 145とS D 182および旧河道跡 S R 486によって三方区画された範囲は居住域と考えられる。しかし、この時代の遺構は宮川3区のみならず遺跡全般にわたって散見される。水上6区の溝状遺構（S D 228）と井戸状遺構のセ

ット関係は宮川3区の状況と類似していた。このことから宮川3区で発見された居住域は小単位のものと考えられ、同様な居住域が複数存在した可能性が強い。

中世になると、造構はほとんどみられなくなる。これは、この時代の環境が水位の上昇にともなって川輪の拡大と沼沢地化した部分（宮川3区における奈良時代生活面等）が広がったため微高地のなかでもっとも高い地区にしか居住できない状況に変化したためと思われる。

4 祭 祀

本遺跡における祭祀遺物の出土地点は

- ① 低湿地の岸部、または河川の岸部あるいは河道内
- ② 溝状造構内
- ③ 土坑状造構内
- ④ 井戸状造構内

のいずれかである。造構・遺物の年代から古墳時代前期にはすでに水辺のまつりが行なわれ、13世紀から14世紀まで確実に継続されている。この千年余りの間に祭祀の方法や祭料は徐々に変容していく。

古墳時代前期の祭祀的性格を示す造構は、西入谷7区（北区）の8・9層、水上1区の井戸状造構S E 261、水上10区の土坑状造構S P 727に代表されるように、低湿地の岸部、井戸状造構内、土坑状造構内と様々であり祭祀遺物も玉類、鏡、壺、木製舟形と変化をみせている。祭祀の性格はかならずしも明らかではないが、S E 261の腰掛状木製品・壺は埋井祭祀の祭料として納置された可能性がある。

古墳時代中期になると滑石製模造品を用いる祭祀とともに手捏土器を用いる祭祀、土師器を主体しながらも手捏土器を加える祭祀がさかんに行なわれるようになる。祭祀が行なわれる場所は低湿地の岸部がもっとも多いが水上1区S X 323のように井戸状造構廃絶後の窪地部分に手捏土器を主体とした土師器群が器種ごとに一括投棄される例もある。低湿地の岸部での祭祀はまず滑石製模造品が中心的位置を占める段階があり、土師器高杯が圧倒的優位を占め滑石製模造品を伴わない段階へと変化する傾向をみせる。この過程のなかで小型の埴形土器は消滅していく（水上10区S X 624 a・d群、宮川3区S X 484などから水上8区S X 775、宮川3区S X 483への変遷）。一方宮川3区S D 181や水上10区S R 673などの溝状造構や溝状地形内では須恵器罐が単独で出土している。罐が祭祀性をもつ土器であったかの断定はむずかしいが完形品が単独で出土すること、水辺であること、古墳時代後期の河道内には大量の祭祀遺物に伴出して須恵器罐が相当量出土していることなどから、祭祀性をもった投棄であると考えたい。

古墳時代後期、とくに6世紀代には土師器および須恵器の壺を一括投棄する造構が出現する。宮川3区S X 482が初現の位置を占め、以降7世紀後半まで続くが、壺を主体にしながらも埴形土器がセットとして加わる例（水上7区S X 803・S X 804）や、瓶・甕・横糞なども加わる例（宮川3区S X 478・481）もある。これらは古墳時代中期にみられた高杯を中心におく祭祀の伝統を受け継いでいると考えられる。この場合に土器は祭料そのものであるか、または祭料をのせる補助的用具であるかが問題となるが、食品が中心となるであろう供物は遺存しにくく、本遺跡では数千個にのぼる桃の種と馬・牛・鹿・犬・イルカ・鯨・鮎等の動物遺存体が検出されたのみであるため判然としない。いずれにしても土器は奉獻する祭料の中心をなすものであり、もっとも普遍的な構成要素でもある。本遺跡において祭祀的な意味を持つと思われる墨書き土器も本来の器としての機能をふまえたうえでの墨書き後投棄であろう。この意味で、祭祀造構における上器の器種構成は馬形土製品や人形など特殊な形態をもつ典型的な祭祀遺物と同様に祭祀の祈願内容や背景を究明する重要な手掛りとなろう。

7世紀になると土器を中心に投棄する祭祀が行なわれている一方で大きな変革もみられる。人形土製品・馬形土製品（土馬）・人形木製品・馬形木製品等の祭祀具が大量に出土し、これには大陸系（道教

系)の影響があったとも考えられる。土製模造品と木製模造品が併存する場合もあるが河道内の出土が大半であり、時間的差をもって投棄された可能性が強い。基本的には目的の相異を反映して別々に検出されている。水上7区S X 801では中心部に土師器壺形土器30点が上向きにならべられ、その周囲に土馬4点が配置されていた。また同区S X 802では土馬4点と土製人形3点が土器の伴出をみずに検出されている。このような土製模造品の出土状況に対して木製模造品は宮川6区S X 335でみると、刀形・人形・馬形・斎串などがセットで用いられていた。S R 335は模造品のうち刀形1本が土師器壺形土器に入ったままの状態であった。このことから壺に入れて運ばれた木製模造品を投棄した場所であったと推定される。以上みてきたように古墳時代後期の祭祀は①器を中心とした祭祀、②土製模造品を中心とした祭祀、③木製模造品を中心とした祭祀の3つにまとめることができる。しかし、このような整然とした状況をもった遺構ばかりではなく、7世紀後半頃から装身具や農具などを加えて行なう祭祀形態があつたことをうかがわせる遺構も検出されている。宮川4区S R 56がその例である。S R 56では土製模造品や木製模造品のはか石製丸玉、耳環、紡錘車、横櫛、鎌の柄、横櫛、曲物、編錘、有頭棒、桃の種、動物遺存体、大型の割石などが渾然一体となって出土している。前段階までの祭祀遺構は耳環、紡錘車、横櫛などは併存しないことから、これらの遺物はS R 56のもつ年代幅のなかで最終の段階(7世紀後半)に一括投棄された可能性が強く、それまでの整然とした祭祀から別形態の祭祀への移行ともいえよう。このS R 56の状況から、何らかの実相を明らかにしようとすれば『日本書紀』巻二十四、皇極天皇三年七日条にみられる常世の神を祭った記事が参考になるかもしれない。記事によれば東国不盡河のほとりで大生部多が「常世の神」を祭ったことが記録されている。この祭は「常世の虫」を神体として富と不老長生を祈願したもので、巫馳も神語を託して里人に勧めたという。民衆は①財寶・珍財を捨てる、②酒・菜・六蓄を路側にならべて「新富入来れり」と呼ぶ、③常世の虫を清座に置いて歌い舞いて福をいのる、という3つのことを行なったと記録されている。S R 56の状況をこの記述に則して解釈すれば①財寶・珍財が農具、紡錘具、耳環、玉類、横櫛などにあたり、②路側にならべた六蓄が動物遺存体となる。さらに③河道内にみられた大・小551個の砾群は割り揃えていることから清座として利用した仮説祭壇の石材であった可能性もある。以上のような点も含めて、7世紀後半の祭祀について今後さらに検討していかたい。

奈良時代から平安時代を概観すると古墳時代後期に始まる土製模造品や木製模造品が継続して用いられるに加えて墨書き土器や、井戸状遺構内に投棄されたひょうたんや手捏の小皿、また皇朝十二銭などが新しい要素として登場する。宮川6区S R 312では「神」と墨書きされた8世紀中葉の須恵器壺身・蓋のセットが出土した。S R 312からはこのほか、土製模造品263点、斎串を含む木製模造品13点、玉類46点などがみられ、古墳時代後期の祭祀遺物が大量に混在している可能性が強い。形態分類などを通して作付関係を明らかにすることが遺物編での課題となろう。

奈良時代の溝状遺構では宮川5区S D 219で手捏土器が出土している。手捏土器は古墳時代前期から出土例があるが、奈良時代後半以降の井戸状遺構には新たに小皿形の手捏土器が投棄されるようになる(宮川3区S E 170・水上11区S E 554)。また井戸状遺構での祭祀に着目すると埋井時あるいは廃棄時の祭祀と考えられる遺構が2例が発見された。宮川3区S E 103と水上11区S E 554がその例である。S E 103では廃棄と同時に井戸枠の2分の1を取り壊し、その廃材の上にひょうたんをのせていた。S E 554は井戸枠中位まで埋没して井戸としての機能を果さなくなった段階で、須恵器壺形土器1点、手捏土器1点、手捏小皿形土器4点、そしてひょうたんが投棄されていた。

奈良時代の祭祀遺構は後半期に集中しており、7世紀末~8世紀前半が希薄となる。気候的には寒冷期にあたり地盤が安定し居住する地理的条件は整っているにもかかわらず、遺構・遺物が希薄となるのは注目に値する。

平安時代は河道内への墨書き土器の投棄が増加するとともに水上1区SE192から出土した3点の墨書き土器にみられるように合成文字とも思える内容のものが祭祀に用いられるようになる。SE192ではこの3点の墨書き土器とともに縞釉陶器皿と木製品が覆上中層から一括して検出されている。さらに儀式終了後は人頭人の磔で埋めている。この一連の行為をもって埋井の祭祀としてよいと考える。

平安時代末から鎌倉時代・中世になると仏教的性格をもつ祭祀が宮川3区SR486で行なわれている。塔婆形の木簡には「大日」・「仁王」という文字が墨書きされている。伴出する墨書き土器には4種類の文字または詩句が呪語として記されていた。またこの段階で出現する祭祀遺物に箸状を呈する斎串がある。15cm～26cmほどの長さで両端をとがらせたもので、直径は0.5cm～0.8cmで稍く削って仕上げている。山上した481点の大半が先端から2cmほどの位置で折れている。これは地面などに立てて用いた際に折れたと考えられる。この箸状の斎串は河道ばかりではなく水上6区の溝状造構SD228（43点）、宮川3区の溝状造構SD145（3点）、同区井戸状造構SE424（6点）および429（2点）などからも出土しており祭祀において一般的な用具であったと思われる。

仏教的祭祀以外には、鞍馬祭祀、人形木製品・呪符木簡の祭祀、錢貨を投棄する祭祀、絵馬の祭祀、種入り壺の祭祀などがみられ多様化する傾向を示している。

鞍馬の祭祀は馬の骨や歯を河道や溝内に投棄するもので、前代までの動物遺存体が上腕骨・大腿骨や歯などの部位が散在する様相を示すことに対して、下頸骨を土体として上腕骨・大腿骨・肋骨などが伴出する傾向が顕著となる。大谷1区SX1、水上6区SD228、宮川3区SR53などがこの例である。

人形木製品や呪符木簡が出土したのは西大谷4区の中世河道跡（SR2）である。ここでは、短刀・鉄鎌なども伴出し、祭祀の形態に変化を認めることができる。

水辺での錢貨の投棄は奈良・平安時代の皇朝十二錢の投棄に始まり、鎌倉・中世になると宋錢が一括投棄される。大谷1区SX1では92枚、宮川5区SX340では7枚が出土した。

絵馬は宮川6区SR321で1点出土している。出土状況からは祭祀の状況を推定することは困難であった。

種入り壺は西大谷2区の旧河道内から出土したもので、円筒形の小形壺にソバやイネなど数種類の種子を入れたのち円形の木蓋で密封して投棄されていた。壺が体部の中位まで上底という特殊な構造をもっていることから祭祀に用いたものと判断した。

以上みてきたように、本遺跡の調査では水辺での祭祀遺構が多く発見され、当地域での古代祭祀の一端をうかがい知ることができた。本書が「遺構編」として刊行されながらも、多くの遺物について言及しているのは遺物の集合をもって遺構と認識しようとする概念からであるが、資料整理が不十分のため認識に誤りがあったかもしれない。今後さらに資料の検討を深め「遺物編」および「遺物・考察編」を通して検討していきたいと思う。

第40表 祭祀遺構分類表

種類	主 要 素	類型	主要素										
			4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀
I 天 無	a		邊止製造玉・ガラス小玉										
	b		勾玉・管玉・丸玉										
II 手 墓 上 盆	a		手 墓 土 墓 が 土 体										
	b		手 墓 上 盆 は 付 合 の 領 地 墓 素										
III 石 製 模 品			上部器型・高木等と便用										
IV 土 墓 容	a		上 部 器 各 部										
	b		上 部 器 高 木										
	c		上 部 器 小										
	d		土 墓 器 体 と 墓										
	e		土 墓 器 体 と 墓										
	f		埴 器 器 物										
V 土 製 模 品	a		馬 形 土 製 品										
	b		馬 形 人 形										
VI 木 製 模 品	a		舟 形 (甲 体)										
	b		舟 形 (甲 体)										
	c		刀 形 人 形 馬 形 盒 中										
VII 竹 筒	a		複 数 種 の 動 物 が 混 在										
	b		馬 下 竹 筒 人 形 遺 存										
VIII 文 字 資 料	a		墨 書 上 器										
	b		木										
	c		筆 古 上 器 と 木 間										
IX 銀 貨	a		金 朝 十 二 銀 貨										
	b		宋										
X 絹 馬													
XI ト 骨													
XII りょうたん	a		井 戸 内 (真)										
	b		河 道 内 (真)										

参 考 文 献

1. 静岡県河川課 1982 : 『大谷川史』
2. 静岡県 1930 : 『静岡県史』第1巻
3. " 1931 : 『静岡県史』第2巻
4. 静岡市 1931 : 『静岡市史』第1巻
5. 静岡郷土研究協会 1935 : 『静岡郷土研究』第5輯
6. 静岡県教育委員会 1979 : 『静岡県遺跡地図』・『静岡県遺跡地名表』
7. 静岡県教育委員会 1983 : 『有東遺跡1』
8. 静岡県教育委員会 1963 : 『静岡県の古代文化』静岡県文化財調査報告書第2集
9. 静岡市教育委員会 1966 : 『片山発寺跡第3次発掘調査報告書』
10. " 1966 : 『片山発寺跡調査略報 東名高速道路建設に伴う発掘調査』
11. 静岡市登昌博物館 1975 : 『駿河宮川遺跡(第1次概報)』
12. 浜松市教育委員会 1971 : 『伊場第四次調査月報』4・6
13. " 1977 : 『伊場遺跡調査報告』
14. " 1978 : 『伊場遺跡遺物編1』
15. " 1980 : 『伊場遺跡遺物編2』
16. " 1982 : 『伊場遺跡遺物編3』
17. 静岡県教育委員会 1981 : 『静岡県の中世城館跡』
18. 静岡県消防防災課 1966 : 第2章「静清地域の地震と防災上の問題点」「1965年静岡県防災地学調査報告書静清地域およびその周辺地域の防災上の諸問題」

19. 袋井市教育委員会 1981：加藤芳朗「大畠遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」『袋井大畠遺跡—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査』
20. 土隆一・高橋豊 1972：「東海地方の沖積海岸平野とその形成過程」『地質学論集』第7号
21. 山本武夫 1974：「日本の気候変動と沖積世の寒冷気候」『第四紀研究』12巻5号
22. 望月董弘 1973：「神明原遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編』3
23. 望月董弘 1961：「駿河の条里制について」『駿台史学』11
24. 金子裕之 1980：「古代の木製模造品」研究論集VI『奈良國立文化財研究所学報』38 杂良國立文化財研究所
25. 黒崎直 1976：「斎中考」「古代研究』10
26. 新東晃一 1978：「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」『古代文化』第30巻 第2号 古代学協会
27. 小笠原好彦 1975：「土馬考」『物質文化』25
28. 上肥季 1983：「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』
29. 水野正好 1983：「馬・馬・馬—その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2集
30. 向坂鶴二 1985：「考古資料にみる水辺のまつり」『生活文化史』生活文化史学会
31. 龜井正道 1983：「河神信仰の考古学的考察」『坂本太郎博士頌寿記念日本史論集』上巻
32. 龜井正道 1971：「祭祀遺物—模造品の変遷ー」『古代の日本2—風土と生活』
33. 比嘉政夫 1971：「常世神と他界觀」『古代の日本2—風土と生活』
34. 泉 武 1982：「人形祭祀の基礎的考察」『櫛原考古学研究所紀要考古学論叢 第8冊』奈良県立櫛原考古学研究所
35. 中口裕 1978：「麻の用途」『考古学研究』第25巻第3号 考古学研究会
36. 宇野隆夫 1986：「井戸」『弥生文化の研究7 弥生集落』
37. " 1982：「井戸考」『史林』第65巻第5号
38. 山本博 1970：「井戸の研究」
39. 奈良県立櫛原考古学研究所 1976：「櫛向」奈良県桜井市櫛向遺跡の調査』
40. 大谷誌編集委員会 1974：『大谷誌』

大 谷 川 II

遺構編

昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宵川遺跡)

昭和62年3月30日

編集発行 財團法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 二 創
静岡市中村町166番地の1
TEL (0542)82-4031